

ラブライブ! —9人の女神と禁断の果実—

直田幸村

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヘルヘイムと呼ばれる別の次元の世界が存在することが確認されて数年。

ユグドラシルコーポレーション有するアーマードライダーによって、ヘルヘイムから現れるインベスとの共存の道が開かれた。

そして現在、廃坑の危機を迎えた音の木坂学院高校を守るため、少女たちが立ち上がる。

学校の存続、そして自らの命を懸けて、少女たちは戦う。

絶望と希望の果て、何を望むのか

ラブライブ!! と仮面ライダー鎧武のクロスオーバーです

目次

登場人物紹介	1
第一話 上 『見つけた！ 本気になれること』	6
第一章 中 『三人でやりたいこと』	20
第一話 下 『それはきつと、奇跡だったんだ』	52
第二話 『変身！ オレンジのドレス!!』	87
第三話 『戒斗、襲来!!』	117
第四話 『スクールアイドルになるには?』	153
第五話 『スクールアイドルとロックシード』	200
第六話 『友達のためにできること』	227
第七話 『理想と現実』	255
第八話 『わたしにとってのあなた』	281
第九話 『戦う理由』	310
第十話 『私の願いとあなたの願い』	349
第十一話 『3人そろって』	414
第十二話 『追いていかないで』	430
第十三話 『必要ないよね』	441
第十四話 『過去の亡霊』	458
第十五話 『違う自分に』	474
第十六話 『目指すべき姿』	492
第十七話 『いつか、必ず』	507
第十八話 『私の夢の中の怪物』	538

登場人物紹介

高坂穂乃果

音の木坂学院高校 二年

茶髪をサイドテールにまとめた元気で明るい女の子

音の木坂が廃坑の危機に瀕したことで、学校を救おうと行動し始めたとき、偶然スクールアイドルのことを知る。

人気のスクールアイドルがいる学校は学校自体の人気も高いことから、親友の海未とことりとともにスクールアイドルになることを決意する。

今までにないほどのやる気を見せている。

何事にも興味を持ち、面白いと思つたことには諸突猛進する。しかし、飽きつぱいところもあり、今まで長く続いた趣味を持つたことがない。

また、自分が正しいと思つたことは突き通し、間違つていることには間違つているといえるまっすぐな性格である。そのため、スクールアイドルの争いの解決手段として用いられているインベスゲームには難色を示している。

ヘルヘイムの森に迷い込んだ際、突如現れた謎の少女によって変化させられたユグドラを用いて変身する力を手に入れた。

その際用いたロックシードは、もとは彼女が持つていたヒマワリのロックシードだった。それが、彼女のインベスである「ほむまん」の死とともに変化。オレンジロックシードとなった。

変身後は、オレンジを基調としたワンピースのようなアイドルドレスを身に着ける。

武器は、オレンジアームズと同じ『大橙丸』。

彼女の実家は和菓子屋『穂むら』で、出前などを任せられることがあり、ロックビークルの運転免許を取得している。運転したことがあるのは、教習用のものと出前用のものだけであまり高速で走つたことはない。しかし、戒斗から渡されたアーマードライダー用ロックビー

クルも運転することはできる。

所持ロックシード

・オレンジロックシード

園田海未

音の木坂学院高校 二年

黒髪のロングヘアがきれいな、和の雰囲気をもとう少女。

穂乃果とことりの幼馴染。

冷静沈着で、物事を客観的に見ることが出来る。穂乃果が無茶をしようとした際は、ストッパーとして活躍することもしばしば。しかし物事を深く考えすぎるせいかあまり自分から積極的に動くことができない。また、人とのコミュニケーションが苦手。特に男性恐怖症で、男性には、つい警戒心をむき出しにしてしまう。

現在、スクールアイドルとしての活動とともに弓道部の活動も行っている。

実力は、弓道部の中ではトップクラス。邪念さえ入らなければ絶対にはずさない。

穂乃果が、インベスに苦戦しているとき、ミツチから渡されたぶどうロックシードで変身する。

姿は、紫の生地に金色の竜があしらわれたチャイナドレス。

武器は『ぶどう龍砲』。

所持ロックシード

・ぶどうロックシード

南ことり

音の木坂学院高校 二年

穂乃果と海未の幼馴染

ベージュがかった長髪と、ちょこんとはねた前髪が特徴の女の子
天然で、鋭いときもあればどこか間の抜けたところもある。

趣味は、服のデザインを考えたり、実際につくること。

穂乃果には他人を引っ張る力があり、海末には冷静に物事を判断する力がある。そんな彼女たちと比べて自分にはなにもないと思い、それをコンプレックスとして抱えている。

謎の少女の力によってユグドラが変化したものの、最初は起動せず変身できなかった。

穂乃果や海末が変身してインベスと戦う中、自分には何もないというコンプレックスから力を求めるようになり、違法錠前デューラーのロックシードに手を出してしまう。

戒斗と憐次に力と強さ、変わるこのの意味を諭され、自分の目指すべき姿を見つける。

憐次とともにインベスに襲われた際、自分を守るために傷ついた憐次を守るため、変身する。

使用ロックシードは、そのインベスと対峙しているときに助けに入ってきた戒斗から渡された『マスカットロックシード』。

ドレスは、エメラルドグリーンを基調としたメイド服と白いエプロンドレス。

武器は『マスカロット』

両端にマスカットの房を象った玉が付いた白い棒。出現時は1メートルほどの長さだが、両端を伸ばすことで倍近くの長さになる。

所持ロックシード

・マスカットロックシード

西木野真姫

音の木坂学院高校 一年

ウエーブの掛かった赤毛の女の子

人付き合いが苦手なところがあり、普段はひとり本を読んでいたり、放課後に音楽室でピアノを弾いていたりする。

所持ロックシード
なし

星空凜

音の木坂学院高校 一年

明るく活発な少女。花陽の幼馴染。

話す際には『にゃ』という特徴的な語尾をつけて話す。

フルールパーラーである「ドルーパーズ」の常連であるが、注文するのはほとんどラーメン。

隣次とはその店で知り合い、彼のことを『レン兄』と呼ぶ

所持ロックシード

・???

小泉花陽

音の木坂学院高校 一年

内気でおとなしい少女。凜の幼馴染

フルールパーラーである「ドルーパーズ」の常連であるが、注文するのはほとんど白米。

隣次とはその店で知り合い、彼のことを『レンジさん』と呼ぶ

所持ロックシード

・???

絢瀬絵里

音の木坂学院高校 三年

音の木坂高校の生徒会会長

音の木坂の廃坑の可能性が浮上した時から、廃坑を阻止するために独自に動いている。

その活動の一つとして、錠前ディーラーのシドと関係している様子。

スクールアイドルを毛嫌いしているようで、それになろうとしている穂乃果たちの前に立ちふさがる

所持ロックシード

・
???

東條希

音の木坂学院高校 三年

音の木坂高校の生徒会副会長

音の木坂の廃坑の可能性が浮上した時から、廃坑を阻止するために絵里とともに活動している。

絵里とは生徒会という関係だけでなく大親友であり、彼女を助けるために動く。

所持ロックシード

・
???

第一話 上 『見つけた！ 本気になれること——』

これは、きつと奇跡だったんだ。

なんの取り柄も、なんの力もなかった私が、誰かの助けになれる。誰かのために戦える。

誰かの笑顔のために戦える力がこの手に入れることができるなら、これ以上に望むことはない。

私は、その力を手に入れたとき、その手に持った錠前を見て思ったんだ。

これはきつと、奇跡なんだって。

「なに、これ……」

高坂穂乃果は、掲示板に張られた紙に書いてあるものの意味を、すぐに理解することができなかった。

「廃、校？」

「そのよう、ですね……」

「は……、は、いこう……」

親友である海未とことりのつぶやきを聞いて意味を理解してしまうと、視界がぐらりとぐらついた。立っていられなくなり、重力で引かれるまま、後ろにゆらりと倒れた。

「ちよつと、穂乃果」

「穂乃果ちゃん!？」

「私の、輝く、高校生活が……」

とつさに彼女を受けとめた海未とことりの声が遠くに聞こえていた。

彼女たちの通う音の木坂学院高校の掲示板に張られた廃校の文字を見て、高坂穂乃果は、信じられない現実を目の当たりにし、残酷な現実を拒否して意識を手放した。

それが、高坂穂乃果の輝ける高校生活は、終わった瞬間だった。

その日、校長から朝礼で唐突に告げられた音の木坂学院高校の廃校の知らせ。

理由は、少子化の影響だとかいろいろ理由は言っていたけれど、最大の理由はほかにあった。

現在、ロックシードと呼ばれる錠前状のアイテムが普及している。これはユグドラシル・コーポレーションという企業が販売している商品だ。

このロックシードは、開錠すると異世界からインベスと呼ばれる生物を召還できる。

インベスは、人々にとってペットのような存在。大きさはまちまちであるが、だいたい30センチほど。堅い殻に覆われた虫のような見た目で、お世辞にもかわいい見た目とは言えない。しかし、力持ちだし頼めば大体何でも手伝ってくれる。そのため今では、インベスは一人一匹は必ず持っているほど生活には欠かせないものであり、そのインベスを召還できるロックシードは必需品となっていた。しかし最近、そんな社会の一部と化したインベスが、人を襲うという事件が起こっている。

人を襲うインベスというのは、ロックシードによって呼び出されたものではない、野良のインベスであるということが既に発表されている。

しかし、ロックシードひいてはインベスを管理しているユグドラシル・コーポレーションとしては見逃せない事態。

そのためユグドラシルは、各企業や施設と連携してロックシードとインベスの管理体制の強化を行ってきた。

とはいえ、一企業が都市すべての企業や学校などの施設を管理、保護する事は難しい。

ユグドラシルは、警備として対インベス用の装備に身を包んだ黒陰部隊を有しているが、完全な量産化を行えていない対インベス装備は数が限られている。派遣できる範囲、同時に派遣できる人数も限ら

れ、広範囲に多数のインベスが出現した際には、対処が間に合わないおそれがある。

そこで最近、生徒数が減ってきている学校を併合することで、施設自体を減らし、管理体制を徹底しようとしているのだ。

そして今回、彼女たちの音の木坂学院にも、番が回ってきたというわけだった。

「どうしたら、廃校を阻止できるのかな」

今日は土曜日。突然突きつけられた残酷な現実が堪えていたため、次の日が休みでよかったと穂乃果は一人ごちる。

せっかくの休みだというのに、そんなショックな出来事をきれいさっぱり忘れてリフレッシュできるわけもない。

気付けば、家を出て宛もなくさまよいながら、朝礼で廃校について告げられた日の放課後のことを思い出していた。

最初は、現実を受け止められなかった穂乃果も、今はある程度事実を受け止めていた。でも、それをただ受け入れることはどうしても受け入れる事ができなかった。

特に何かやりたいことがあるとか、達成したい目標があったわけではない。

でも、友達と何気ない話に花を咲かせた教室やときどき遅刻しそうになって走るなって怒られた廊下。ほかにもたくさんのかげがえのない思いでに満ち、これからもそんな思い出が増えていくんだろうなと考えていた学校がなくなってしまうというのは悲しい。

いつか、自分がどこの高校に通っていたかかって話になったとき、もうなくなってしまうことを思い出さなければならぬのは悔しい。そう思ったのだ。

だから帰り道、親友の二人に相談していたのだった。

「穂乃果。廃校は残念ですが、私たちにはどうしようも……」

でも、反応はある意味穂乃果の予想通り。艶やかな黒髪の大和撫子、園田海未は、悔しそうにつぶやいた。

「でも、何か方法が……」

「穂乃果ちゃん。新入生が減ってきてるのはちよつと前から問題になつてたことなんだよ」

「ことりちゃん？」

ちよこんとはねた癖毛がチャームポイントの南ことりが、ためらいがちに言った。

「実は、お母さんから聞いてたの。新入生が減ってきて、前から廃校の話は持ち上がってたんだって。お母さんも、どうにか新入生を増やそうと前から頑張ってた。でも、だめだったの。残念だけど……仕方がないよ」

ことりのお母さんは、音の木坂の理事長をやっている。

理事長を一番近いところから見ていることりは、誰よりも母親が頑張っていたこと、そして頑張ってもだめだったことを知っていたのだろう。

廃校になんてさせたくない。

それはみんなが願っていること。でも、理事長でもどうにもできなかった事態に、一般生徒である自分たちに何ができようか。

結局、穂乃果もこたりの一言に対し、反論することができなかった。

帰り道を一人である来ながら、ああでもなこうでもないと考える。もちろん、廃校を阻止するための方法についてだ。理事長にもできなかった。

それは確かに、穂乃果たちが何をやっても変わらないと突きつけられているようなもの。それでも、やっぱり諦めきれないと穂乃果は思った。

せめて、何かやってからじゃないと諦めが着かない。

「うん。やっぱり諦めきれないよ」

「諦めきれないって、どうしたんだ？」

「……へ？」

不意に掛けられた声に、穂乃果は背後の気配から距離をとるように振り返った。

距離を取ったからか、振り返った先には、面食らった表情をした少年が立っていた。

その顔を見て、穂乃果は胸をなで下ろした。

その少年は、よく見知った人だったからだ。

「……………なんだ、レンくんか」

「何だとは何だよ」

「ううん。なんでもないの」

穂乃果にレンと呼ばれた少年は、彼女の態度に首を傾げたが、優しげに笑った。

彼は、穂乃果の幼なじみだ。友達になったのは、きつかけすら思い出せないほど幼い頃。たぶん幼稚園児くらいの時だろうか。

いつ頃からか公園で出会い、いつの間にか一緒に遊ぶようになっていた。

年を重ねるうちに学校などで会う機会は減ったものの、メールや電話、最近ではスマートフォンアプリなどを使ってときどき話したりしている。

今回のように偶然出会うこともあり、今もレンと穂乃果は昔とほぼ変わらない関係を築いていた。

「で、どうしたんだ？　なんか悩み事か？」

「え？　何で悩んでるなんて分かったの？」

まるで、見透かしたかのように、心の内の悩みを言い当てるレン。

どうして分かったのと言わんばかりに穂乃果の表情に、レンは、呆れた顔で答えた。

「本気で言ってるのか、それ？　そりゃ、しかめっ面してたら誰だって気付くって。そんな深刻な顔してたら心配になるって」

「ええ？　そんなにわかりやすい顔してる？」

「もう、この世の終わりかかってくらい暗い顔してたぞ」

「そっか……………。そんなに」

「ああ。どうせ、悩んでもいい考えなんて出ないくせに、一人で抱え込んでたんだろ？　バレバレだったの」

「な。もう、ひどいよ。穂乃果だって一人で解決するくらい……………」

「……話してみろよ。らしくないんだよ。一人で悩んでるところなんてな」

「……」

自分はいったいどんな表情をしていたんだろう。今日はろくに鏡を見てこなかった穂乃果には、今の表情など分からない。

でも、簡単に悩んで居ることがばれてしまうほどにはひどい顔をしていたみたいだと、レンに気付かされた。

レンの言った言葉が胸に響く。

らしくない……か。

「そうだよ。実はね……」

穂乃果は観念して廃校について説明をする。レンは当然穂乃果とは違う学校に通っている。廃校なんて重大な事は、普通人には、しかもほかの学校の人には教えられない。

それでも穂乃果が話したのは、彼は他の人に言いふらしたりなんてしないと買ったからだ。

穂乃果が、深刻な問題を相談できるとすれば、家族と海未、ことりをのぞいては、レンだけなのだ。

「廃校、か」

「そうなんだ。……どうにかして阻止したいんだけど、ぜんぜんいい考えが浮かばないし、海未ちゃんやことりちゃんも諦めムードだし、どうしたらいいか分からなくて」

穂乃果が打ち明けると、レンは少し考えていたがすぐに顔を上げた。

「そっか。じゃあ、ちよつと秋葉原でも行くか」

「秋葉原って、何で？ そんな余裕……、アイタツ」

穂乃花の反論を遮ったのは、レンのデコピンだった。

額を押さえながら文句を言おうとする穂乃果だったが、

「煮詰まってるよ、浮かぶものも浮かばないからよ。ゲーゼンでも

行って、リフレッシュしようぜ。それに、もしかしたら違う景色とかものとか見たら、そこからアイデアが浮かぶかも知れないだろ?」

「とかいいながら、久しぶりに遊びたいだけだったりして」

「そ、そそそんなわけ無いだろ。本当にいいアイデアが浮かぶようについて……………」

「もう、冗談だよ。そうだね。……………うん、そうしよう」

穂乃果は、レンの腕をつかんで駅へ向かって走り出す。

「お、おい。ちよつと待ってって」

今日は、ろくに鏡を見てこなかった穂乃果。さっきまでどんな表情をしていたかは分からない。でも、今は何となく自分がどんな表情をしているか分かった。

「善は急げだよ。それに、早く行かないと遊ぶ時間なくなっちゃうよ」
「そうだな。よっし、じゃあ行くぞ」

レンは、そんな彼女の表情を見てほつとしたように笑った。

秋葉原に着いた二人は駅から出るや否や、近くのゲームセンターへと駆け込んだ。

クレインゲームから始まり、ガンシューティングでゾンビをさんざんいじめた後、ダンスゲームで思う存分汗を流した。

穂乃果は、一時はまってやっていた時期があり、そこそこ高いスコアを出すこともできていた。なのにレンは、あまりダンスゲームはしたことがないと言っていたのにも関わらず、互角の戦いになってしまい少し悔しかった。

「時々しか来ないから、毎回圧倒されちゃうね」

時は夕方。ゲームセンターをいくつか回った後も、いくら秋葉原の町並みを歩きながら気になった店を見たりしていたから、気が付いたときには

すでにそんな時間になっていた。

楽しい時間と言うものは早くすぎるものだ。

さつきまで世界の終わりのような暗い顔をしていた穂乃果も、遊んでいるうちは、なにも考えずリフレッシュすることができた。

でも同時に、廃校の打開策についても何一つ考えつけていなかった。

もうそろそろ帰らなければならない。

帰りの時間が近づくほどに、穂乃果は、焦りをぶり返していた。

レンは、横目で穂乃果の様子を見て、辺りを見渡した。

せめて、不安はあっても今日は楽しくいてほしいと、探しているところ一つ目に付く。

「お、何だあの人だから」

「すごい、人がいっぱい!!」

レンが指指さす方向をみた穂乃果は、彼が指さしたものを見て、思わず声を上げた。

そこは、よくイベントが行われる建物の下だ。近くにはアニメやゲーム関係の店が集まっているため、その関係のイベントであることも考えられたが、その割には老若男女、いろんな見物人が集まっていた。

よほど、人気のイベントがあるのだろう。

イベントらしき音がしないためステージはまだ始まっていないようだが、見物人はステージの奥が見えないほど集まっていた。

「なんだろう、あれ。行ってみよ」

「お、おい。・・・勝手に走んなって」

穂乃果は、人だけを見ると目をきらきら輝かせて、レンが気付く頃にはすでに走り出していた。

穂乃果が人だけの最後列に立ち止まったところで、ようやくレンが追いつく。

穂乃果は、おもしろそうな事には目がない。直感でおもしろそうと感じると、後先考えずに飛び込む癖があるのだ。

レンとしては、穂乃果が楽しそうに笑っている分にはいいのだが、

いつ危ないことに首を突っ込まないかと肝を冷やす時がある。

「まったく。これ、何やるか知ってんのか？」

「ん？ 知らない」

「知らないのに、あんな全力ダツシユだったのかよ」

「えー。知らないけど、分からないからこそわくわくするでしょ」

「そうかもだけどき……」

ため息をもらすレンをよそに、穂乃果は待ちきれないのかその場で少しでもステージが見えるポイントを探して飛び跳ねていた。

こうなつたらもう止められない。レンは、今までの経験から直感した。

この熱が冷めるまでここから動かない、と。

だからかレンは、穂乃花と行動するときには目がはなせない。彼女のお目付役のような気分だった。

本当なら、そんな彼女は放って置いて、近くの店で時間をつぶすなり帰るなり、いくらでもできたはず。それでも、レンはその場を離れるとをしなかつたのは、その姿は、まるで本当に熱中できることを探し回っているように見えたからだ。

私の本当にすべき事はなに？ って叫んでいるように見えたからだ。

今回の廃校騒ぎもそうなのだ。別に、彼女が何かしなくちやいけな訳じゃない。それなのに、まるで使命で背負っているかのように一人で悩んでいたのだ。

彼女が止まらない限り、レンの気は休まらない。そして、このままでは彼女自身を傷つける。レンは、そんな事態を危惧していたのだ。

願わくば、熱中できるなにかを。

そして願わくば、そのなにかが、彼女にとって幸せな何かであることを……

そう願わずにはいられないのだ。

「ねえねえ。レンくんはこれからなにが始まると思う?」

「なになって、近っ!!」

いつの間にか接近していた穂乃果の顔に、レンは仰け反った。

「どうしたの? もしかして、目開けたまま寝てた?」

「いや。そんな器用なことできねえよ」

「立ったまま寝るくらい退屈だったって事?」

「いや、だから退屈とかじゃないし、寝た訳じゃないっての」

穂乃果の冗談に返事を返しながら、いよいよ穂乃果だけでなく自分で心配になってきた。

これはいよいよ、穂乃果には何か一つ見つけてもらわなければと危機を感じ始めた。

「本当? ならいいけど、それならさっきの質問答えてよ」

「分かったよ。ええと、そうだな……」

寝てないことは本人も分かっていることだろうが、自分の話を惚けて無視されたことに腹を立てている様子の穂乃果。

口を尖らせ、頬を膨らませて怒っていることをアピールしている。

仕方なくレンは、辺りを見回した。

振り返るとすでに、レンの後ろにも何層かの人の列ができていた。

見ると、子供からお年寄りまで多様な年代の方が集まっているようだが、男性の人数が多い気がした。男性に人気のあるイベントなのか。

そこで男性に注目して見てみると、イベント開始が近づいてきたのか、光る棒を取り出す男性がちらほら見えだした。

「たぶんだけど。アイドル、かな」

「アイドル?」

「ああ、最近はやってるみたいだし。そういうばここって、あの学校の下じゃ……」

レンがそう思った経緯を説明しようとしたとき、

音楽だ。音楽が流れ出したのだ。

その瞬間、どっと上がった歓声に遮られた。

さつきまで、周りは落ち着いた様子だったのだが、あれは嵐の前の静けさというものかと思うほどの空気の変わりよう。

一瞬何事かと思うほどの騒ぎに、レンは面食らってしまった。

さつきまではいやいでいた穂乃果も、さすがに驚いたようで、とっさにレンの腕にしがみついていた。

「な、なに？」

「始まったんだ。……ライブが」

レンの口からその騒ぎの原因が告げられる。

その言葉で、穂乃果はようやく辺りに流れるメロディーの正体に気付いた。

「ちよつと、じつとしていて」

「おい、おまつ。ちよつと待て」

レンの制止も聞かず、穂乃果はレンの両肩に手を置いて飛び乗った。

穂乃果はいつの間にか登場していた者達の存在に気付いた。しかし、人だかりのせいで、三つの頭しか見えなかったのだ。

いったい誰が居るんだろう？

そう思った瞬間には、思考より早く体が動いていたのだ。

「動かないですよ。わあ——」

「おい、急に飛びつく奴があるか。早く降り——」

「——揺らさないで、きやつ」

「お、おま——」

レンの肩においた手だけで体を支えている穂乃果は、レンの背中にのしかかった。それだけならよかったのだが、なるべく高いところみたいとそれだけを考えている穂乃果は、ピンと腕を伸ばしていたため、レンの頭に二つのほむまんが乗っかる形となった。

「——っ!!」

瞬間、レンは電撃が走った気がした。

頭の上の圧力から、彼は見た目や数字などあまり役に立たないなど思った。

大きかろうと小さかろうとそこには確かに夢があり、その存在感は彼の平常心を狂わせるのだから。

「ちよつと、支えて。——きゃ」

「——たく、仕方ねえな」

ぐらつく穂乃果が、レンの背中から離れた。

穂乃果の体が後ろに傾き始めていることを感じたレンは、彼女の膝辺りをつかんで持ち上げ、前の方へ反動をつけて彼女を担ぎ上げた。

レンが手を台のように固定したことで、穂乃果はそこに膝立ちになることができた。

そのおかげで穂乃果は何とか立て直した。

しかし、穂乃果の体は再びレンに密着する形となった。

「なあ。そろそろ退いてくれないか？　・・・・・・・・そろそろやばいんだが、精神的にも」

「・・・・・・・・すいい」

「穂乃果さん？」

幼なじみとはいえ、レンは男で穂乃果は女だ。

密着する自分のものとは違う体温に、どぎまぎを隠せないレン。

しかし、いつもとは違う返事に、レンは彼女を見上げて様子をうかがった。

普段、楽しいことを見つけた彼女は、これでもかと言うほどはしゃぎ回る。見ているだけで、ほかの人まで暖かくするような笑顔で笑う。しかしそれは一過性であり、すぐに飽きて長続きしない事の予兆でもあった。

いままで、彼女がはしゃげばはしゃぐほど、早く熱が冷めてしまうのだ。

それを今まで間近で見ていたレンは、穂乃果の今までにない反応を目の当たりにしていた。

「・・・・・・・・」

曲が一旦終わり、ステージに立つアイドルが観客に向かって語りかける。

一般人の中に紛れていた熱狂的ファンが沸き立つ中、穂乃果は一言も発せずに見ていたのだ。

いつも一旦話したら止まらない彼女が、一言も発しないのだ。

MCが終わり二曲目が流れ初める。

それでも、いつも檻から放たれた獣のように走り回る彼女が、動かない。

まるで、彼女だけ時間が止まってしまったかのように微動だにせず、ただ目の前で繰り広げられるパフォーマンスに見入っていたのだ。

あつという間にステージは終了した。

二曲だけの短いライブが終わり、観客達がそろそろと各々の方向へと散っていく。

そんな中、穂乃果はまだレンの肩の上で動かずにいた。そして、レンは穂乃果のせいで動けずにいた。

「おい、穂乃果。大丈夫か？」

「へ？ っつて、わぁ」

レンが下から揺らすと、穂乃果はやつと正気を取り戻した。が、それと同時に前方へ倒れ込んだ。

いままでほとんど腕の力だけで体を支えていたせいで、一気に力が抜け、手が肩から滑り落ちたのだ。

レンの頭と穂乃果の顎が激突する。そのせいで、レンまでバランスを崩すと二人そろって地面に倒れ込んだ。

「痛てえ。大丈夫か、穂乃果？」

「う、うん。私は大丈夫」

幸いレンの体をクッションにした穂乃果は地面との接触は回避し

だが、クッションにされたレンは、全身にしびれるような痛みを感じていた。

いつもと雰囲気違ったものの、いつもと同じように災難に見舞われたレンは、文句の一つでも言ってみようかと仰向けに穂乃果と向き合う。

「だから、危ないって言ったんだ」

「そんなことより——」

そんなこと呼ばわりされたことに、さらなる文句がのどからでかかったが、鼻が触れ合うほどの距離まで接近した穂乃果の顔におもわずのみこんでしまった。

「——見つけたよ。廃校から学校を救う方法」

「それって、いったい……」

「さ、早く帰ろう。明日早く海未ちゃんことりちゃんに説明しなきゃ」

そういつて立ち上がった穂乃果は、レンの返事も聞かずに彼の手をつかむと、駅の方へと掛けだした。

その誰をも振り回す台風のような様子は、いつもの彼女のようにも見えた。

でも、さつき感じたいいつもとは違う雰囲気に、レンは息を漏らす。

「なんか、夢中になれるものが見つかったのか？」

「うーん、分からない。……でも、やってみたいと思った」

「そっか。なら……」

一瞬、彼の願いが叶ったのかと思った。

「やりたいことが見つかったんなら、それは大事にしないと」

「うん!!」

そして、それは新たな願いへと変わる。

願わくば、彼女に決して冷めることのない夢を。

願わくば、決して覚めない夢を。

第一章 中 『三人でやりたいこと』

「穂乃果、それはいったいなんですか？」

「知らないの、海未ちゃん？ スクールアイドルだよ。アイドル」

「いいえ、そうではなくて……」

今朝はいつもよりも早く出て話したい。

そんな穂乃果の要求に応じて学校につくところの状況だった。

「穂乃果ちゃん。そういうことを聞きたいんじゃないと思うよ？」

でかでかと『スクールアイドル』と書かれたノートを海未の眼前に突きつけるようにして見せる穂乃果を見て、ことりは苦笑いした。

見れば、本来教科書が入っているべき鞆の中には、何かの雑誌がぎゅうぎゅう積めにされていた。

いつもより登校時間を早くしたいなどと聞いたときには驚いた。登校中も、どこか浮ついたような穂乃果の様子を見て何かいいことでもあったのかと薄々気付いていたが、まさかスクールアイドルなんて単語が出て来るとはさすがの二人にも想像できなかった。

「スクールアイドルのことでしたら、私も当然知ってます。穂乃果の知っている常識で、私が知らないわけじゃないじゃないですか」

「あー。もしかして、穂乃果のことバカにしてる？」

「そんなことより、そのスクールアイドルがどうしたのですか？ ま

さかとは思いますが、スクールアイドルって知ってる？ つて聞きたいがためにわざわざ登校時間を早めさせた訳では無いでしょうね」

海未が目を細めると、穂乃果は心外だと頬を膨らませた。

「そ、そんなことないよ！ 穂乃果、見つけちゃったんだ。音の木坂を廃校から救う方法」

「ほ、本当？」

「うん。やっぱりことりちゃんは理解が早くて助かるよ」

「いえ、ことり？ あまり期待しない方がいいと思うのですが」

今ある証拠を統合した海未は、穂乃花が言いたいことを理解していた。そのため心なしが表情がげんなりしていた。

「もう、そんなこと言うなら穂乃果がスクールアイドルになるってこと教えてあげないからね」

「……………穂乃果ちゃん。言っちゃってるよ？」

「しまった!!」

「……………」

つい口を滑らせた穂乃果が頭を抱えているのを見ながら、海未はやっぱりかのため息をついた。

長年つきあってきた中で海未は、穂乃果が唐突に突拍子のないことを言うのには慣れたと思っていた。が、どうやら勘違いだったらしい

と肩を落とす。

「ぼれたからには仕方がない。そう、なにを隠そう高坂穂乃果。スクールアイドルになって音の木坂を廃校の危機から救っちゃうんだよ」

「そうですか。がんばってください。では、私たちは行きますね。ことり、行きますよ?」

「ちよつと海未ちゃん!! 少しは驚いてくれたりしてくれてもいいじゃない」

「穂乃果。私は十分驚いています。人は、驚きがある程度までに達すると無心になるんです」

「うう。海未ちゃんがいつになく冷たい」

「穂乃果が突拍子のないことを言い出すのはいつものことですが、そもそも、スクールアイドルになったからって、どうやって廃校の阻止につながるんですか?」

「ふふふ……」

「な、何なんですか。その不適な笑みは?」

「……不勉強だね、海未ちゃん。」

「なっー」

海未の問いに、いつもならばあたふたするはずの穂乃果。しかし今回は、予想していたと言わんばかりの余裕の表情を浮かべていた。自

信満々な顔でエアめがねをクイツと持ち上げると、さつき海未達に見せたスクールアイドルノートのページをめくって読み上げ始めた。

「少子高齢化に伴い、いくつもの学校で入学者人数の減少が問題視される中、一部の学校は周りに反して年々入学者数を伸ばしているんだよ。その中で特にすごい伸び率の学校の例としてあげたいのがUTX学院。この学校がなぜ入学者数を年々伸ばしているのか。それはこの学校にはスクールアイドルがいるから。この学校に在籍するスクールアイドル、A—RISEが人気を集めた結果、彼女たちにあこがれた中学生達が続々と入学しているのです」

穂乃果は、鞆から雑誌を一冊取り出すと、あるページを開いて海未に突きつけた。

「これがA—RISEだよ。すごくかわいくて、かつこよくてね。でも、かわいいだけじゃないんだよダンスも歌もすごくて……」

「ああ、そのA—RISEのライブを見て私もやってみたいーって思ったわけですね」

「……と、とにかくね。音の木坂にもスクールアイドルがいれば、アイドルにあこがれた子達がいっぱい入学してきてくれて、そして廃校だって取り消されるよ。3人でがんばれば、きつと廃校をくい止められるよ」

「いつの間にか、私たちまで勘定に含まれてるのですか……」

本当に信じて疑っていないんだろう。

話す穂乃果の目がいつになく輝いているのに海未は気づいていた。

でも、

「確かにそうですね。廃校は、入学希望者が定員を下回った場合の処置ですので定員を下回らなければ、つまり入学者数を増やすことができれば回避することができるとは思いますよ」

「そうですね、そうですね？　だから」

「だから、スクールアイドル？」

「そうですね。そうだよ、海未ちゃん。だから——」

「——確かに廃校はくい止められるでしょう。人気が出ればですが」

「うぐっ」

だからこそ海未は、穂乃果の見落としている部分を指摘せずにはいられなかった。

「仮に、スクールアイドルになったとしても、人気が出なければ何の意味もありません。スクールアイドル。学校で活動しているアイドルといえど、それなりに人気を集めているからには、血のにじむような努力と厳しい訓練をこなし、必死にがんばってきたのでしよう。そんな中に、思いつきだけで始めたところで、到底かなうはずありません」

「そうだね。確かに思いつきだよ」

「そうですね。何か行動を起こすにももつと考え……」

うつむいてしまう穂乃花を見て、海未は罪悪感に胸を痛めた。

彼女も、頭ごなしに否定したくない。でも、穂乃果の手放しで応援することはできなかった。

うつむいたままの穂乃果を見て、海未は諦めてくれるとほつとしていた。

なにも、この件でなくてもいい。

やりたいことも本気になれることも、きつとほかの何かで見つけられるだろう。そのときは、今度こそ全力で応援したい。

海未は、そう考えていた。が……。

「……………でも」

「穂乃果……………?」

「音の木坂が好きだつて気持ちちはポツと出たようなものじゃないよ。だから穂乃果は、なにもしないまま諦めたくない。」

「穂乃果!」

もういいと言い残して、穂乃果は教室を出てしまった。

いつも海未の本気の制止には、渋々ではあるが反論してこなかった穂乃果。そんな彼女が初めて自分の意見を曲げなかったのだ。

「穂乃果……………。私だって、諦めたくはありません。でも……………」

教室に残された海未は、すでに姿のない親友に向かって思いをこぼ

す。

「でも、アイドルなんて……………」

「海未ちゃんの言いたいことは分かるよ?」

「ことり……………」

ことりだって知っている。一番近くで見えてきたのだからだから。

穂乃果のことも、そして海未のことも。

「でも、穂乃果ちゃん。本気だったよ。それは海未ちゃんもわかてるんでしょ?」

「でも、それと同時に、それがただの思いつきだってことも分かりました」

「海未ちゃんって、過保護だよね」

「たいがいあなたもそうですよ。ことり」

穂乃果にきついことを言ってしまう落ち込んでいた海未は、自分を慰めようとすることりに向かってつぶやいた。

「はあ、確かに思いつきだけど、あんなに言われるなんてな」

穂乃果は、親友の海未に廃校阻止の案を否定され、彼女が思った以上で落ち込んでいた。

何かやらなくちやと言う思いはあったのだが、なにを始めればいいのか分からず、それでも帰る気分にはならなくてぼーつとしていたのだ。

何か言われることは覚悟していた。何しろ海未は、親友三人のなかで一番現実思考なのだ。

思いつきでできるわけがない。

言われると分かった。でも、言われると分かっているても堪えるものは堪える。

自分になんか廃校を止める事なんてできるはずがないと言われていたように感じて、予想以上に悲しくなってしまった。

蛍光灯が切れているのか、暗い階段に腰掛ける。

穂乃果は、座り込んだまま動けなかった。

そんな穂乃果の元に小さな手が伸びて、彼女の手を突っついた。

「えっ？」

驚いて手を引っ込めたが、自分の手を突っついたものの正体に気づくと、今度は自分から手を差し出した。

現れたのは手のひらサイズのインベス。穂乃果がもつとも親しんだ、彼女のロックシードから召還されたインベスだった。

「どうして、ほむまんが？」

穂乃果は、自分のインベスをそう呼ぶとポケットの中に入れていたロックシードを取り出した。

シルバーの一般的なタイプのロックシードは、穂乃果によってシールでデコレーションされている。そのままの形では可愛くないと、ことりと海未と一緒に張り付けたものだった。

錠前の形をしたアイテムであるロックシードは、掛け金部分を引き上げることで解錠し、インベス呼び出すことができる。

インベス呼び出すことは、本来持ち主が自ら行わなければならない。い。

しかし、稀に勝手にロックシードを解錠して出てくるインベスもある。

穂乃果のロックシードは、彼女があけたわけではないにも関わらず解錠されていた。

穂乃果は、勝手に出てきてなにをしているのかと問おうとした。するとほむまは、横に移動して背中に隠していたものを差し出した。

それは、缶ジュースだった。

穂乃果に限らず多くの人が自動販売機で飲み物を買うなど簡単な作業をインベスに頼むことがある。そのため、インベスに小銭を事前に持たしておくことがある。

穂乃果のインベスも、彼女が事前に持たせていた小銭を使って買ってきたのだろう。

「もしかして励ましてくれるの?」

穂乃果が手を差し出すと、インベスは彼女の手のひらに乗ると何かをすり合わせたような音で鳴いた。

見た目は決してかわいいとはいえないインベスだが、長年一緒にいれば愛着もわいてくる。ほむまんと呼ばれたインベスの腕には、穂乃果がプレゼントしたオレンジ色のリボンが輝いている。

穂乃果には、黒くて丸い瞳で見つめてくるそのインベスが諦めないでと言っているように感じられた。

「そうだよね。諦めないって決めたんだもんね」

勢いよく立ち上がって、気合いを入れる。

そんなに何度もよくよしていられない。海未が言っていたように思いつきで始めるのだから、いろんな困難が待っていることは当たり前前だ。

その困難に当たる度にくよくよしていたらきりが無い。

穂乃果は、ほむまんが持ってきたオレンジジュースの缶を開け一気に飲み干した。

そして、穂乃果は誰にともなく笑顔を作る。

「よし、行こう。ちゃんと、手伝ってもらおうからね」

穂乃果は、手のひらのインベスに語りかけた。すると、インベスは

キユイツと小さく鳴いた。任せてと言ってくれたように感じた穂乃果は、小走りで暗い階段のから明るい外へと飛び出した。

「キツく言い過ぎたでしょうか……」

弓道部の部員である海未は、袴姿で一つの的と対峙していた。

弓の弦に矢を掛け、弦を引き絞る。

無心になっていたからだろうか。

空いた部分に、一番気がかりな事が入り込んできたのだろう。

そのとき海未は、今朝の穂乃果とのやりとりを思いしていた。

海未も、廃校はなんとしてもくい止めたいと思っている一人だ。できることがあるなら、手伝いたいとも思っている。それでも、

「私には、あなたのようにただ突っ走ることなんてできません」

そもそも、小さいころほど引っ込み思案とは言わないものの、海未は人の前に立つことがいまだに得意ではないのだ。仮に自分がアイドルをやったとしても、人前で上がってしまい足を引っ張ることにしかならない。

自分には無理だ。このことに関して、自分にできることは

なにもない。

——このアイドル戦国時代、いまこそ名乗りを上げましょう。あなたのハートを打ち抜きます!!

「ぶふっ」

突然視界に挟み込まれた映像に、海未は指を滑らせた。

その映像に登場したのは、海未本人。しかし、本人のはずなのだが、本人ではあり得ない格好であり得ない文言を口走っていた。

衣装は、戦国時代と言うだけあって着物のようなドレス。裾は、短く切り詰められたスカートのようになっている。対照的に長い袖は二の腕のところで分離しており、肩が大きく露出するようになっていた。

「ま、まさか……。この私が、こんな破廉恥な格好を？」

望んでいるのだろうか？ そう思っただけ顔が左右に振る。いや、自分に限ってそんなことはない。そう言い聞かせて2射目を放とうとするも、

——ラブアローシユート!!

「かはっ」

またしても彼女曰く破廉恥な格好をした自分の映像が流れて手が滑った。

これで、射た矢の数2本に対し、はずした矢も2本。

いつもど真ん中とまではいかないまでも、的にかすりもしなかったことなど無かった海未は、さすがに自覚せざるを得なくなっていました。

そんなはずはないと、海未は矢を放つ、放つ、放つ。

が、はずれて、はずれて、はずれ続ける。

「まさか、私はアイドルなどに興味が……」

つぶやいてしまったから、はっと我に返るととたんに恥ずかしくなってその場に倒れ込んだ。

「まさか、まさかそんなことあるはずが……」

いや、海未だって女の子だ。輝くアイドルに夢見る時期もあったのだ。

それどころか、今でも時々夢想することがある。

ひらひらのかわいい服に身を包み、歌って踊るアイドル。

たくさんの人たちから賞賛を受ける中、

——海未、かわいくなつたな

成長した幼なじみが海未の元にやってきて、そう呟いた。

——海未ちゃん。やっぱり、海未ちゃんを誘った穂乃果の目に狂い

はなかつたよ。

——そうだよ。ことりたちのなかで一番似合ってるよ。

続いて、穂乃果とことりも海未の姿を見て賞賛の声を上げる。

降り注ぐスポットライトは、自分を中心に三人を照らし、お客さんでひしめき合う客席が一斉にわく。

海未はそんなフアンの人たちに向かって……………。

「ふふ、ふふふ……………」

「海未ちゃん、大丈夫？」

「きゃあああああ!!」

倒れたまま、顔をゆがませて笑っていた海未は、自分と呼ぶ声が聞こえた瞬間に飛び跳ねるようにたった。

「ことりですか。いつから見ていたのですか？」

「ん？ さっき来て倒れてるところを見つけたんだけど」

「そうですか。それはよかった……………」

端から見れば、彼女が倒れた理由など分からないだろう。

が、そんなことは関係なく、海未は自分の夢の中に幼なじみが出てきたことが恥ずかしかったのだ。そして、つきあいの長いことりならもしかしたら分かかってしまうかもしれないという根拠のない恐怖に

駆られての行動だった。

「で、部活中だというの何のために呼ばれたのですか？」

「ちよつと見せたいものがあるの」

「また適当なことだったら怒りますよ」

「それにしても海未ちゃん。海未ちゃんって、やっぱりアイドルに興味があったんだね」

「ぶふっ。」

まるでさつきまでの妄想を全て知っているような発言に、ボディブローでも受けたかのように息を吐き出した。

海未は、危惧していたことが現実になったことに観念した。

親友に隠し事などできない、とため息をついた。

「どうして、そんなことを……」

「あ、やっぱり当たってたんだ」

「まさか、かま掛けられるなんて……。でも、どうして……」

「だって。いつもは的にはかならずとっていいほどなのに、あんなに外してるの滅多に見ないもん。それに、そういう時って決まってる考え事してるときだしね」

「さつきは、倒れていたところからだと……まあいいます。それでなにが言いたいんですか？」

「……………穂乃果ちゃんのこと、気になってるんでしょ？」

「まあ……………少し言い過ぎたかなとは思っていました」

海未はぼつが悪そうに顔を背けた。

海未には、穂乃果がいつになく本気であることは分かっていた。

海未も、穂乃花が一つのこと熱中できる何かを見つけられていないことを心配していた一人だ。

だから、本来なら応援したい。手伝える事があるなら手伝いたい。

もし失敗してしまったとしてもそれが次の糧となることは、体育会系部活に所属している海未は経験してすでに知っていることだ。

でも、今回だけは無責任に勧めることはできない。

穂乃果が本気で臨もうとしているのは、廃校の阻止。理事長ですらどうすることもできなかった、きわめて望みの薄い案件だ。

せっかく本気になったのだ。できれば、大成功とはいかなくてもなにかしらの成果を残させてあげたい。

ついつい出てしまったキツイ言葉は、とても無理だと分かっていることさせる事はできないという海未の穂乃果への思いから出たものだった。

「気持ち、分かるよ。でも、ことりは応援したいって思ってる」

「ことり。もし、今回のことで穂乃果が何かに挑戦する事を恐れるようになっててもですか？」

「違うよ」

「なにが違うのですか」

「それは、これを見れば分かるんじゃないかな」

海未は、ことりの要領を得ない答えにだんだんと苛立ち始めていた。

そのせいもあつたのだろうか。

ことりに促されて曲がった先。

そこには、照りつける日をスポットライトのように一身に浴びて輝く、一人のアイドルがいた。

「ああ、もう動かないで」

パートナーのインベスにスマートフォンを支えてもらっていたが、どうも落ち着きのないインベスなのか、画面が揺れてしまっていた。

そんな状態で文句を言いながらも、目を凝らして画面の中で舞うアイドル達の動きをまねる少女は、海未達のよく知る人物。

「見えにくいってっ、——痛ったい」

つたないステップを踏み、ターンをしようとするが、回りきれずに尻餅とつくその少女は、穂乃果だった。

「覚えてる？ 穂乃果ちゃんは、いつも私たちを引つ張ってくれていた。たまに、無謀なこともするけど……」

ことりの言葉に思い出す。

引つ込み思案の海未を強引に連れ出してくれたのは、いつも穂乃果だった。突然木登りをし出したり、知らない場所まで冒険に連れて行かれたりもした。

でも、

「後悔した事なんて、一度もなかった。海未ちゃんもそうでしょ？」

穂乃果ならなんとかしてしまえるのではないか、と思ってしまうのだ。

「痛たた。やっぱり難しいな……よし、もう一回」

「穂乃果！」

「……え、海未ちゃん」

よほど集中していたのだろう。穂乃果は、いつの間にかすぐそばまで来ていた海未に声を掛けられて初めて気がついた。

一瞬、今朝海未に言われた言葉が脳裏によぎった。無駄なことはやめなさい、などと言われると思った穂乃果は、顔を背けようとした。

背けようとして、

「海未ちゃん？」

差し出された手を見て、海未を見上げた。

「まったく、一人でなにをやってるんですか？ 闇雲にやったって、成果は出ませんよ」

「分かってるよ。……でも、どうやったらいいか分からないし」

うつむく穂乃果をみて、思わず笑ってしまう。突っ走るのはい早いが、後先をまるで考えてない。昔とにも変わっていない。

「まったく、仕方ないですね。……私も一緒にやります」

「……え、本当？」

「はい。……本気でかなえたい夢だと言うことは伝わってきましたから」

「うん。いつもなにをやるにも三人だったんだもん。穂乃果ちゃんの本気の夢。三人でなら、きつとかなえられるよ」

「う、海未ちゃん……。ことりちゃん……」

「放っておいては、一人でどんな無茶をしでかすか分かりませんから。誰かがしっかり手綱をつかんでいないと……」

「……ちよつと、誰が暴れ馬？」

「そうだね。じゃあ、ことりはリードを握ってるね？」

「今度は、犬呼ばわりされたあ」

膨れっ面を見せる穂乃果だったが、最後は3人そろって笑っていた。

海未は、穂乃果を見て思う。

彼女は昔からちつとも変わっていない。

でも、

「いいですか。やるからには本気。妥協など許しません」

「は、はい。鬼教官！」

「誰が鬼ですか！」

彼女なら、何でも成し遂げてしまうのではないかと思わせるところも、昔から変わってはいなかった。

「それでは、早速作戦会議をしたいのですが」

「えー。それなら、スクールアイドルの動画見て研究しようよ」

「やるなら……?」

「……本気。もちろんでございます」

帰り道。

とことん考えることが苦手な穂乃果が安易な方向へ逃げようとするのを、海未がしたためる。

心境は、遊びに逃げようとする子供に、勉強しなさいとしかる親のそれだ。

「たしかに他のアイドルの研究も必要かもしれませんが、それは今後の活動方針を決めた後です。方針も決めずに闇雲にやったって、成功などしません」

「仰る通りでございます」

「穂乃果ちゃん……」

ことりは、しかられてシユンとなる穂乃果を見て苦笑いした。

たしかに、スクールアイドルをやると決めたからには、決めることがたくさんある。そもそも知っていたとはいっても、今までニュースなどで知識として記憶していただけだ。

スクールアイドルについていろんな事を知らなすぎた。

「でも、スクールアイドルっていつでも、なにが必要なんだろう?」

「え、何だろう?」

「そこも考えてなかったのですか……」

海未は、穂乃果のあっけらかんとした表情にため息をもらした

案の定そこまで考えていなかった穂乃果に落胆するも、当の海未も余りよく知らない。だからこそ提案した作戦会議だ。

「思いつくのは、歌と振り。あとは……」

「衣装だよね!!」

「そ、そうですね」

海未は、突然声を大きくすることりに驚いた。

普段、ことりが自分から話すことは少ない。ましてや、突然声を大にすることはごくまれだ。

衣装に食いついたところは、実にかわいい洋服に目がないことりらしい。

かわいい服がきたい。そんな小さな事だが、ことりのように、いつもと違う自分に変わるきっかけになる。

やりたいと思ったことを大切にしたい。そのためにも、今からがんばらなければならない。

「では、早速穂乃果の家で作戦会議をしましょう」

「うん。もうね、いい衣装のアイデアがあるんだ。見てもらってもい

いっ？」

「もちろんです。歌やダンスのこともありますし、みんなで意見を出し合いましょう」

「歌に、ダンス………。どうやって作るんだろう」

「それは、すでにいるスクールアイドルの歌を参考にして作っていくしかありませんね。何しろ、私たちは素人ですから」

「え。歌聴いてもいいの？ どれにしよっかな。海未ちゃんたちに紹介したい歌、たくさんあるんだよね。……あれでしょ。あれもいいな」

「聞くばかりではなく、考えてくださいよ」

「わ、わかってるよ。……あれ？」

ふと、穂乃果が立ち止まり、それに海未とことりも足を止めた。

「……どうしましたか？」

「あ、あれって……」

立ち尽くす穂乃果は、空《くう》を指さした。

気になって海未達は、彼女の指す方向を見る。

「べつに、なにもありませんが……」

海未達には、特段珍しいものも面白そうなものも見あたらなかつ

た。

そこに広がっているのは、いつもと変わらない帰路だ。唯一、新しい建物を建てるため、振るい建物が半壊した状態で残された工事現場があつたが、後は何の変哲のないいつもの帰り道だった。

いつもなら、なにもないじゃないですかと海未が問い、見間違いかなと穂乃果が笑い、しょうがないなあとことりが微笑む。

そんな何気ない日常的一幕になるはずだった。

だが、そのときは海未もことりも、簡単に流すことができなかった。

元気がトレードマークの穂乃果が、まるで幽霊でも見たように顔を真っ青にしていたからだ。心なしか、指し示す指先も小刻みに震えているように見える。

ただ事ではないと思つた海未は、もう一度目をこらす。

「あそこ……誰かが……」

穂乃果がいまいちよく分からないことをつぶやく。

誰かと言われて人の姿を探すが、誰も見つからない。だれもいないのだ。

「……もしかして、あれですか？ 何でこんなところに……」

穂乃果が指しているであろうものを発見した。

それは、ちょうど海未達が持っているスクールバックにもついてい

るチャックを開いた時のようなぽっかりと空いた穴。

世間で「クラック」と呼ばれている、異世界へとつながる穴だ。

クラックの先に続く世界は、現在解明がほとんどされていない未知の世界だ。

「ヘルヘイム」と呼ばれるこの世界は、現在、ユグドラシルが解明に力を入れているものの一つだ。

世に言う神隠しや、UFOによる誘拐などの失踪事件は、ほとんどがこのクラックから異世界に迷い込んだ結果というのが現在の通説とされており、普段から注意が呼びかけられているのだ。

「とりあえず、まずはユグドラを付けましょう」

海未は、鞆から黒い湾曲したプレートのようなものを取り出した。

これは、通称「ユグドラ」と呼ばれている毒素中和用携帯端末だ。これは、沢芽市という企業都市で開発され、現在対インベス部隊「黒陰部隊」が使用している戦極ドライバーという機器を元に開発されたものだ。

戦闘用装備は排除し、毒素中和と防護服としての機能を持たせたもので、戦極ドライバーよりコンパクトになっている。

また、ユグドラにも戦極ドライバーのドライブベイが存在しており、ロックシードによる食事もする事ができる。

ロックシードを装着するだけで必要な栄養をとることができ、味などは感じないものの、忙しい大人には、重宝されている。

本当は、英語表記の長つたらしい正式名称があるのだが、ユグドラシルが配布しているドライバーということから「ユグドラ」と呼ばれている。

海未は、取り出したユグドラを自分の二の腕辺りに当てる。穂乃果とことりも海未にならって自分のユグドラの腕に当てた。とすると、本体からベルトが伸び、自然に腕に固定された。

戦極ドライバーからの大幅な小型化と軽量化から、腰にしか装着できない戦極ドライバーに比べ、腕や足など

「離れましょう。近くにいたらなにがあるかわからな——」

「——っ」

「ちよつと穂乃果!!」

その場から離れようと穂乃果の手を引こうとした海未の手は、しかし空を切った。

あろう事か、穂乃果はまっすぐクラックの方へと掛けだしていたのだ。

すぐさま海未は、穂乃果を追いかけ彼女の手を取った。

「なにをやっているのですか、穂乃果!! さっきの話、聞いていたのですか?」

「待って。……だつてあそこに、誰かが」

「誰のことを言っているのですか？ そんなことより、あのクラックが見えないのですか？」

「え。．．．．．本当にクラックだ」

穂乃果はきよとんとした顔でクラックを見て、何かに納得したように頷いた。

「じゃあ、早く離れなきゃ．．．．．」

「今気付いて．．．．．っていったいなにを見ていたのですか」

「ええと、何だろう。見間違いかな．．．．．」

「いまさら．．．．．。本当に人騒がせなのですから」

穂乃果が落ち着いたことで、海未も安心したのだろう。

だから、海未達は、穂乃果の異変に気付かない。

穂乃果も、いまだ見つめる先に見える者について言うのをやめる。

冷静になり、海未達の態度を見て、自分に見えている者が二人には見えていないことを悟ったからだ。

穂乃果は、無言で未だ見つめる先。そこにいたのは、おそらく少女だ。

背丈は、彼女と同じくらいか少し大きい程度。

おそらくなどと曖昧な表現なのは、彼女の顔がまるでノイズのよう

なべールで覆われ、はつきりとその表情を読みとることができなかつたからだ。

肩の高さまで延びるオレンジ色の髪で、女性であると考えた。

そんな表情の読めない彼女は、じつと穂乃果の方を見て、指さしているのだ。

なにを言うでもなく、ただじつと何かを伝えたいができないでいるみたいに。

「ごめんね。行こっか」

穂乃果は、彼女がなにを伝えようとしているのか確かめたかったが、見えていない海未やことりを心配させるわけにも行かない。

海未の手を握り返すと、不思議な少女に背を向けた。

「……………ちよつと待つて。あれって、生徒会長じゃ……………？」

戻ろうとした穂乃果達に、ことりが制止する。

振り返ると、確かに音の木坂学院生徒会長である絢瀬絵理の姿が見受けられた。

辺りを確認しているのか、左右をきよろきよろと見回しどうも共同不振な様子だ。

「……………本当に。いったいなにをしているのでしょうか。クラック

が近くにあるというのに」

「何か捜し物かな？」

そんなことを言っていると、意を決した表情になった絵理は、クラックの中へと飛び込んだ。

「え？ いったいなにを」

「そんな、どうして……」

突然の出来事に声を掛けることもできず、絵理の姿はそのままクラックの奥へと消えてしまった。

「いったいどうして、生徒会長である彼女が、クラックが危ないことを知らないわけがないのに」

「飼ってるペットが迷い込んで、追いかけていったとか……」

海未は、すぐさまスマートフォンを取り出した。

ユグドラシルは、クラックを見つけた際に逃げるよう呼びかけると同時に、ユグドラシルに知らせるよう専用回線を用意している。

その回線の番号を入力すれば、直接ユグドラシルにつながることで、早ければものの10分で対策部隊が到着するのだ。

「とにかく、ここはユグドラシルに連絡しましょう」

「……行こう」

海未がユグドラシルへ連絡しようとしていると、穂乃果は、クラツクへ踵を返そうとしていた。

「穂乃果。なにを言っているのですか。行っても私たちも迷ってしまうだけです」

「でも、今から呼べば聞こえるかもしれないし、連れ戻せるかも。それに、ユグドラシルの人がどのくらいで来るか分からないけど、待っている間に分からないくらい奥に行っちゃうかもしれないよ」

「確かにそうかもしれませんが……」

「海未ちゃん達は、連絡しておいて。穂乃果、少し様子を見てくるよ」

「待って、穂乃果!!」

海未は、手を伸ばしたが彼女の手は空を切る。

「まったく、穂乃果はいつもいつも!!」

文句を言う前に穂乃果はクラツクの中へ消えてしまう、残された海未は、憤りをぶつける相手を失い空に向かって叫ぶ。

「海未ちゃん。早く連絡して追いかけないと」

「分かっています。ことりは、見失わないように見ていてください」

海未は、すぐさまユグドラシルへの専用緊急回線へつながぎ、出てきたオペレーターに今の現状を伝えた。

「分かりました。すぐに救助部隊を派遣しますので、そこを動かない

ようにお願ひします」

「はい、分かりました」

通話を切ると、

「あれ、さつき電話の人にここを動かないって行つてなかつた？」

「救助がくる前に穂乃果をつれてくれば何の問題もありません。早く行きますよ」

「そう、……だね。早く追いつかないと見失っちゃう」

ことりは思う。

絵理を追いかけていった穂乃果も、穂乃果を追いかけようとする海未。どちらも危険なことをしようとしているのは分かっているはずだ。

なのに、彼女らは走り出してしまふ。

海未は、穂乃果のことを糾弾しておいてだ。

二人とも、たいがい似たもの同士なのだ。

困っている人がいたら手伝うし、危険な目に会っている人がいたら助けずに入られない。

そんな彼女たちだから、自分について行ってしまうのだと。あこがれてしまうのだと思うのだ。

たとえそれが間違っただ道だったとしても・・・。

第一話 下 『それはきつと、奇跡だったんだ——』

「絵理先輩!! どこに行っただんですか? 早く外に戻りましょう!!」

穂乃果は、絵理が通ったと思われる道を進みながら呼びかけていた。

さすがの穂乃果でも、考えなしに走って帰れなくなつては意味がないことは分かっていた。

絵理を見つけられたところで、帰り道が分からなくなつて連れて帰ることはできないのでは遭難者が二人に増えるだけ。

海未やことりを悲しませる事態にだけはしちやいけない。

穂乃果はそう言い聞かせることで、絵理を見つけれず焦る気持ちをどうにか押さえていた。

何度目か、穂乃果は後ろを確認した。

まだ、目を細めればクラツク存在を確認できた。でも、これ以上離れたら危ないと感じていた。

「……………あの人はいったい」

帰れるかどうかという心配とは別に、もう一つ懸念があった。

クラツクの近くに佇んでいた少女だ。

絵理を追いかけたのは、単純に助けに行かなくちやと言う思いがほとんどだった。

ただ、それに加え別の理由が穂乃果をここまで走らせた。

穂乃果をじつと指さしていた少女。彼女に何かを言われた訳ではない。

ただ、絵理がクラックをくぐってヘルヘイムへと入ってしまったとき、彼女は穂乃果を見つめながら、穂乃果を指していた指をクラックの方へと向けたのだ。

そのとき、はつきりと見えていたわけでもないのに、彼女の瞳が何かを訴えているように感じたのだ。

あえて言葉にするなら、そこに穂乃果の運命があるとしても言うような何かを。

直接聞こえたわけではない。そもそも、海未達が確認できていなかった彼女が実在していたという証拠はどこにもない。穂乃果が見た幻覚かもしれないし、もしかしたらヘルヘイムが見せる幻かもしれない。

それでも、穂乃果は妙に少女のことを考えてしまっていた。

ガサガサツ

「——ツ。………絵理、先輩？」

考え込んでいたところ、突然近くの茂みの中から音がした。

驚いて身構えた穂乃果立ったが、もしかしたら絵理が戻ってきたのかもしれないと思っておそろのおそろ声をかけた。

ガサガサガサツ

すると、近づく音はさつきよりも大きくなった。しかも茂みの枝が大きく揺れ、音の正体がすぐ近くまで来ていることが見て分かった。

おそらくそれは絵理じゃない。

絵理であれば、呼びかけたときになにか返事を返すはずだ。

絵理でなければなんなのか。

未だ姿を見せない何かを思い、穂乃果は唾を飲み込む。

ガサガサガサガサツ

穂乃果の不安に呼応するかのように、何かは今までで一番大きな反応を見せた。思わず穂乃果は一步後ずさった。

「.....きゃ」

穂乃果があげた悲鳴。それが引き金となったのか、ついに何かが飛び出した。

穂乃果は、正体不明の何かの出現にしりもちをついてしまった。

目の前にいるだろう何か。しりもちをつくと同時に目を閉じてしまったために、不安だけが増殖していく。

「……………、ううっ」

それでも、いつまでも確認しないわけには行かない。

お尻に走る痺れるような痛み顔に顔を歪めながら、恐る恐る目を開いた。

それによって、謎の正体を確認できた。

目に飛び込んできたのは、灰色の虫のような生き物だった。

蟬の幼虫のように丸いか殻で覆われた背中に短い手。そして、粘土に穴をあけて作ったように、ぽっかりと空いた口と目。

決してかわいいとは言えないどころか、怪物と表現する方がしっくりくるそれは、

「なんだ、インベスか」

すでに見慣れたそれを見て、穂乃果は、驚いて損したと肩の力を抜いた。

インベスは、そんな穂乃果を見下ろしていた。

いつも穂乃果が慣れ親しんでいるインベスは、手に乗るほどの大きさで、大きくても三十センチを越えるものは見たことがなかった。

「もう、驚かさないですよ。まったく」

巷で犬と並んでよく見かける生物であるインベスに驚いていた事に気がついた穂乃果は、恥ずかしさに顔を赤くする。

それは、犬にほえられて驚き、後になって恥ずかしくなってくる事と同じ事だ。

なぜならインベスは、犬や猫と並んでポピュラーな生き物なのだから。

穂乃果は、自分にそう言い訳をしながら立ち上がった。

「何でこんなところにいる？ 君も迷子……。つて、もしかして絵理先輩、この子を追いかけたのかな？」

「……………」

インベスは話さない。当然話しかけても返事が返ってくるわけがない。

それでも気持ちを絵理探しに切り替えることで、さっきの恥ずかしさを紛らわすのには役に立っていた。

「絵理先輩、どこに行っちゃったんだろう。もしこの子を捜してたなら、すぐに帰れるのに……………ね？」

インベスは話さない。

分かってはいるものの、よく自分のインベスに向かって話しかける穂乃果は、癖で話しかけてしまっていた。

きつと不安もあったのだ。

絵理を探しにきたものの、完全に見失ってしまった。それどころか、そろそろ自分まで迷子になる危険まで出てきた。

そもそも、一人でもんもんと考えることが得意ではない穂乃果は、よく口に出すことで考えを整理する。

答えてくれなくても、話しかける相手がいるだけでどこか救われた気がしていた。

「うーんと。君は、ひとり? ……なんてね」

不安を拭えたのはいいが、そろそろちゃんと考えなければと、穂乃果は一人ごちた。

そろそろ真剣に、絵理を追うのを諦めるかどうかを考えようとしていた。

そんなとき、

キュイイイ

考えるためにうつむき加減になっていた穂乃果は、何かをこすりあわせたような鳴き声に顔を上げた。

キュイイイ

キュイイイイ

キュイ、キュイ

いつの間にか重なっていた鳴き声。

うつむいていたほんの一瞬のうちに、一匹だけだったインベスが五、六匹に増えていたのだ。

「うっ。いつのまに……多いなあ」

気がつくのと、十匹くらいになっていたインベスが、穂乃果の前方から覆うように迫っていた。

いくら見慣れているとはいえ、決してかわいくないインベスに囲まれ、戸惑いを隠せなくなっていた。

群で迫ってきたことも相まって、インベスの不気味さが強調されてしまっていた。気付くと、目の前のインベスに対する穂乃果の感情は、戸惑いなどで収まらず、恐怖に変わっていた。

「いったいどうしちゃったんだろう。……インベスが怖いだなんて」

きつと、仕方のないことだ。穂乃果は、自分をごまかすように言い聞かせる。

——それは、暗い曲がれ角を曲がったら野良猫達の群に出くわし、睨まれて怖かったとかそういうことに違いない。

「・・・・・・・・」

言い聞かせても体が勝手に震えて後ずさる。

——それは、

「え？」

インベスの一匹が、小さな腕を目一杯持ち上げた。

小さいとは言ってもインベスの体の大きさと比べたらと言う話だ。
振り上げられた腕が穂乃果の顔に陰を落とす。

「・・・・・・・・うそ」

今まで町でも見かけないことなど無いくらい、日常の一部になっていたインベスが、彼女に牙を剥いたのだ。

「危ない、穂乃果!!」

不意に走る、誰かが飛びついてくる感覚と背中痛み。

「大丈夫ですか、穂乃果！」

痛みに閉じてしまった目を開くと、覆い被さるような体勢の海未の顔がすぐそばに見えた。

「う、うう海未ちゃん。いったいなにを？」

「なつ。そんなことを言っている場合ではありません。これはいったい、どう言うことですか」

海未と穂乃果は、今し方穂乃果がいた場所に視線を移した。

二人は、ほぼ同時に息をのむ。

インベスの一匹の腕が、さつき穂乃果のいた場所に突き刺さっていたのだ。

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん。いったいどうなってるの」

「穂乃果。ことりも、逃げますよ」

「で、でも……………」

「いいから早く!!」

未だ状況が理解できず呆然とする穂乃果と立ち尽くすことり。

海未に手を引かれ、やっと動き出すことができた。

「海未ちゃん。いったい、どうなってるのこれ？ 穂乃果、なにがなんだか……………」

「分かりませんが、様子がおかしいのは確かです。ですが、逃げなければ

ば……………」

「海未ちゃん」

海未は、その言葉を口にすることを拒んだ。しかし、隣を走る二人には、分かってしまった。

海未のさつき続けようとして言わなかった言葉。認めたくなくて、現実にしたくなくて口に出さなかった現実。

逃げなければ、『殺される』と。

三人は来た道を戻ろうとして、逆に森の中をさまよっていた。

「クラックはどこ？　ことり、もう……………」

「しっかりしてください。……………なんで、ここにあったはずなのに」

ことりが膝に手つき、息も絶え絶えの状態で涙を浮かべている。

海未に至っては、地面にひざを突き、地面に握った手を叩きつけた。

インバスが出てくるまではしっかり確認していたが、インバスに襲われて目を離してしまったのだ。

彼女たちが進んだのは一本道。しかも、海未とことりは枝を折って目印を付けながら穂乃花のもとまで駆けつけたのだ。3人は、その目印をたどりながら逃げていた。しかし、目印がとぎれた場所、つまりついさつきまでクラックが存在していた場所には、クラックの陰も形

もなくなっていたのだ。

クラックは、いつどこに発生するか分からない次元の裂け目だ。

発生場所もタイミングも全くのランダムで、ユグドラシルでさえ、その出現を発生後にしか確認することができないのだ。

いつ開くかわからない。

ということは当然、開いているクラックがいつ閉じるか分からないという事に、気付いてしかるべきだった。

気付かなかったのは、一人は謎の少女について思考を割いていたため、後二人は、親友を助けなければと気が焦っていたからだだった。

ことりは、なぜ穂乃果がクラックを潜ろうとしたときに止めなかったのかと後悔した。

海未は、なぜそんな簡単なことにも気付かず、ことりだけでも残してこなかったのかと唇を噛む。

そして、穂乃果は、二人を巻き込んでしまった自分の軽率の呪った。

後悔は、人に絶望を植え付ける。

そして、そういった絶望はさらなる絶望へ連鎖する。

「きゃっ」

全力で走り、一番ふらついていたことりが、木の根に足を引っかけて転んでしまった。

「ことり。大丈夫ですか」

「ことりちゃん。きやあつ」

「穂乃果!!」

転んだことりに気を取られ、穂乃果は横から忍び寄るインベスに気づかなかつた。虫でも払うような軽い動作だったが、女の子一人を吹っ飛ばすには十分すぎる力を秘めていた。

インベスの腕が当たった。そう穂乃果が理解したときには、すでに背中に激痛が走っていた。木にたたきつけられ、肺の空気が全て吐き出してしまい、地面にたたきつけられたとともに、ゴホゴホとせき込んだ。

「痛い。………海未ちゃん、ことりちゃん。大丈夫!？」

そういうしながら、目を向ける穂乃果は、大丈夫でないことをすぐに理解した。

海未達を襲おうとしているインベスは、彼女を飛ばしたインベスだけではなかつた。

もう追いついてきたのか、他のインベスがきたのか。最初に遭遇したときより、遙かに多数のインベスが迫っていた。しかも、そのインベスの中には、狼のような獣の姿をしたインベスまでいたのだ。

俗に「上級インベス」と呼ばれる、周りの「初級インベス」より力も素早さも段違いの上位個体だ。

「助けに行かなくちや。ー痛い」

穂乃果は、海未とことりのもとへ駆けつけようと立ち上がろうとする。が、手に力を込めて上体を起こそうとしたとき、腕に激痛が走りその場にうずくまってしまう。

先ほどインベスに叩き飛ばされたとき、インベスの腕が当たった方の腕だ。

「……………なんで、これ」

木に叩きつけられたとき、持っていたスクールバックの中身がぶちまけてしまっていた。

筆記用具や、持ってきていたスクールアイドルの雑誌が散乱してしまっている。

そんな彼女の飛び散ってしまった持ち物の中、倒れていた穂乃果の指先に、堅くて分厚いものがぶつかつた。

それは穂乃果のロックシードだった。

いつも一緒に生活してきた相棒を呼ぶための鍵。

錠前という形のそれをなんとか可愛くしようとした穂乃果のデコレーションが施されたものだった。

そのロックシードを見て穂乃果が驚いたのは、それが誰にあげられたわけでもないにもかかわらず、解錠されていたからだ。

ロックシードが錠前の形をしているのは単なるデザインでは無い。

インベスは、頼めばほとんどのことはやってくれるし、愛情を持って接すれば絆を結ぶこともできる。

しかし、便利な車が人をはねて殺してしまうことがあるように、料理には欠かせない包丁が凶器として使われてしまうことがあるように、インベスも強大な力を持っていることは間違いなかった。

大いなる力に、責任が伴う。

そんなに便利なものでも使い方を誤れば危険だ。

だからこそ、ロックシードは錠前の形をしている。

ちよつとやさつとのトラブルでは、勝手に開かないようにロックされ制御されているのだ。

もちろん叩きつけられても、簡単には解錠されない。穂乃果自信が間違つて偶然開いてしまったならともかく、今放り出されたロックシードがすでに開いていることは通常ならおかしいことだった。

しかし、この現象を穂乃果は何度か経験していた。

倒れ込んでいる穂乃果の背後に丸い陰が刺す。

「うそ。後ろにも……」

体を陰の主の方へ向けると、一匹のインベスが穂乃果を見下ろしていた。

反射的に、穂乃果は腕で自分を庇う。襲われると思って目を閉じていた。が、一向に衝撃が襲ってこないため目をあけると、さっきのインベスが穂乃果を襲うことなく海未達を取り囲むインベスの群に向かっていったのだ。

「あのインベスは、いったい……………」

穂乃果は警戒しながらもそのインベスを目で追っていると、

「あれは……………」

ひらひらと、そのインベスから何かが舞い落ちた。

いつも見るときより体は段違いに大きくなっていた。そのせいで千切れてしまったのだろう。

それは、一見ただオレンジ色の薄い布切れ。が、穂乃果には大切な意味を持ったリボンだった。

「ほむまん!!」

それは、穂乃果が自分のインベスであるほむまんにプレゼントとしたものだ。

穂乃果が叫ぶと、インベスは一瞬彼女の方へ振り向いたが、すぐさま走り出すと今まさにことりに凶刃を振り下ろそうとしたインベスに向かって体当たりした。

ほむまんは、他のインベスから海未達を守ったのだ。

インベスに絶望し掛かっていた穂乃果は、涙を流した。自分とほむまんは通じあえていたのだと、身をもつて示してくれているようであれしかったのだ

。

「ありがとう。ほむまー」

キュイイイ

が、ほむまんの悲鳴とともに、穂乃果の顔は再び絶望に染まった。

動けない海未達を抱えて逃げようとしたほむまんの背中に容赦な他のインベスの爪が突き刺さったのだ。

「ほむまん!!」

海未達に覆い被さるように庇うほむまんを、周りのインベスが袋叩きにする。堅い甲羅のような背中にはヒビが入り始め、ところどころから血が流れる。

見てられない。

穂乃果は目を堅くとじ、耳を両手でふさぐ。

「もういやあ、やめて。大切な友達をこれ以上いじめないで」

それでも聞こえてくる肉をたたくような鈍い音が頭の中に響きわたり、穂乃果は泣き叫ぶ。

「逃げてください。穂乃花!!」

「逃げて、穂乃花ちゃん」

ほむまんが庇っているため、いまのところ無傷だった海未達だが、自分たちがもう助からないと悟ってしまったみたいだった。

「いや。3人じゃなきやイヤだよ。ことりちゃん、早く立ってよ!!」

穂乃果は、ぶつけた背中をかばいながら叫ぶ。が、ことりはそんな穂乃果を見て、諦めたように首を横に振る。

「ことりの事はいいから、早く!!」

「ことりは私がつれていきますから。……穂乃果だけでも行ってください!!」

「そんな……」

この状況は、穂乃果のせいだ。

自責の念が、穂乃果の中を渦巻く。

ユグドラシルを素直に待っていれば

こんなところに入ろうとしなければ

「ああ、ああ、ああ。．．．．．イヤだイヤだイヤだ!!」

穂乃果は、頭を抱えてうずくまる。

2人を逃げる事なんてできない。かといって、2人を助けに行くこともできない。

頭が熱くなり、吐き気がする。

どこにも逃げ場のない感情が暴れだし、頭をかきむしる。地面にたたきつける。

「穂乃果。穂乃果は．．．．．」

「逃げちゃおうよ」

「え？ だれ？」

その瞬間、声とともに世界が静止した。

海未もことりも、彼女たちを取り囲むインベス達も。

木々も草花も1ミリも動かない。

そんな中にただ一人、動く陰を穂乃果は見つけた。

「誰って、分かるでしょ？」

「嘘………」

「嘘ってなに？ ……穂乃果だよ。穂乃果」

彼女は、穂乃果に瓜二つの顔をした少女だった。

自分を穂乃果と名乗る少女。

でも、彼女が自分なわけではない。

穂乃果は、自分にそっくりな別人をにらみつけた。

自分なはずがない。

もし自分ならこの状況で、友達が襲われているこの状況で、あんなに笑っているはずがないのだから。

「逃げちやいなって………そんなことできるわけ——」

「——でも、穂乃果が行ったって、二人を助ける事なんてできないよ。」

死ぬのが二人から三人になるだけ」

「そんなこと言わないですよ。二人を見捨ててなんて、諦めて逃げるなんて、そんなことできないよ」

「さつきもそうだったよね」

「さつき……」

「廃校になる。でも諦めたくない。そういつて穂乃果は、二人の手を無理矢理引つ張った。そして、その結果こうなったんだよ」

「そ、そんな……」

「穂乃果がそんなこと言わなければ、スクールアイドルになりたいなんて言わなければ、二人はここには居なかつたんだよ。それって、今二人が危ないのって穂乃果のせいだって事だよね」

「……」

穂乃果は、否定したかった。でも、できない。全て真実だったからだ。

絶望に蒼白な表情の穂乃果。

そんな彼女に穂乃果《しようじよ》は、対照的にほほえむ。

穂乃果が苦しむ姿を楽しんでいるように。

穂乃果《しようじよ》は、ほほえみながら2本の指を立てた。

「穂乃果にはね。二つの選択肢があるよ」

「選択肢？」

「そう。選択肢。優柔不断な穂乃果に代わって、状況をわかりやすく整理してあげるってわけ」

穂乃果は、穂乃果《しようじよ》をすぎるように見つめる。それが愉快だったのか穂乃果《しようじよ》の微笑みは、輝きを増した。そして穂乃果《しようじよ》は指を一本立てた。

「二つは二人を置いて逃げる。やっぱりおすすめはこれかな？ 無駄なことしないで自分が生きる事を考える。ありがたいことに穂乃果の大親友二人は先に行ってくれて言ってくれてるしね。ここで逃げたって納得してくれるよ」

「ふ、二人を見捨てる」

時間が止まった世界で、穂乃果は今まさに襲われようとしている二人の親友をみる。

四方をインベスに囲まれ、自分たちが一番危ない状況に居るというのに、彼女たちは、今も穂乃果の方を見て叫んでいる。

早く逃げと。

「無理だよ。そんなことできるわけ無いよ」

「大変美しい友情だね。でも、なにもできないくせにそういうことを言うのは、偽善だよ。がんばったけどだめでしたって自分を納得させ

るためのポーズにしか見えないよ」

「違う、違うよ。……穂乃果、そんなつもり……」

「ふう。……じゃあ、おすすめしないけど二つ目」

穂乃果《しようじよ》は、ため息をついて二本の指を立てた。

「無謀にも戻って、三人仲良く殺される。まあ、美しい友情って美談にはなるかも知れないね。語る人はいないけど」

「……死ぬ？」

「死ぬ。そりゃ死ぬよ。だってあの大群だよ？」

穂乃果《しようじよ》は、海未達を指さす。叫んだまま静止した彼女達の周りを形を持った死が取り囲んでいる。

このまま動き出したなら、振り上げられたインベス（しにがみ）の腕（かま）が確実に二人の体を、命を刈り取るだろう。

二人を助けに行くと言うことは、あの死が渦巻く中に飛び込むという事だ。

「……だ、だめ」

恐怖で震えている体が、より一層大きく震え出す。

穂乃果は、自然と自分を抱く力を強めた。

助けに行きたい。その気持ちに嘘はない。

そのはずなのに……。

「いやだ、死にたくない。……死にたくないよ」

動かない。

動けない。

時間が止まっているのなら、今が二人を助ける絶好のチャンスのはず。

それでも、動けないのだ。

心がどう思っているようと、体が全力で拒否しているのだ。

死にたくない、と。

「もう、わがままだな。死にたくないし、目の前で親友に死んでほしくもない。助けに走りだそうと思っているのに、同時に逃げようとしてる。本当に、本当にわがままだよ」

穂乃果《しようじよ》は、呆れたような声でつぶやく。が、同時に彼女は笑っていた。そんな矛盾までもが、穂乃果を苦しめる。

穂乃果《しようじよ》の言っていることは正しいのだ。

そして、穂乃果《しようじよ》は、穂乃果の中の矛盾を浮き彫りにするのだ。

見たくないものを容赦なく突きつけるのだ。

穂乃果も気付いていたのだ。

自分は、前から矛盾の塊だった。

楽しいこと、夢中になれることを探しながら、いつも巡り会えない。

やってみるものの、どうしても熱中する事ができない。

いつもどこかで、冷めてしまう。

夢から現実に戻るように、覚めてしまうのだ。

穂乃果は、気付いていた。

それは、自分が熱中することを求めているからだ。

熱中することは、探して見つけるものじゃない。

いつの間になっっているものだ。

なぜなら、熱中すると言うことはそのことが頭から離れなくて、いつのまにか自然とそのことを考えている。そういうことを言うのだから。

もう聞きたくなかった。

つらい現実も、本当の自分も、全部全部、なにもかも。

「いつそ。．．．．．全部、忘りたい」

「はは、ははは。そっかあ。．．．．．じゃあ、そんな穂乃果に三つ目の選択肢をあげちゃおう」

穂乃果のこぼしたつぶやきを、まるで待つてましたと言わんばかりのタイミングで、穂乃果《しょうじょ》は第三の選択肢を提示する。

穂乃果《しょうじょ》は、穂乃果に手の中のものを差し出した。

それは、穂乃果が今まで見たことのない色、形の実だった。

見れば、周りに生えるツタにも同じような実がなっていることが確認できた。

「三つ目の選択肢は、この実を食べて、全て忘れてしまうこと」

「全てを、忘れる．．．．．」

「怖かったよね。死ぬほど怖かったよね。木に叩きつけられて背中もすごくいたいよね？ 腕も折れちゃってるかもしれないのに、それでも二人を助けようがんばったよ。こんな事、全て忘れちゃいたいよね？」

「うん。．．．．．痛いよ、怖いよ」

甘い言葉に、穂乃果は逆らえない。

もう見たく無い。聞きたくない。

今、完全に閉ざした穂乃果の心には、穂乃果《しょうじょ》の声し

か響かない。

「……………忘れられるなら、忘れてしまいたいよ」

「その実を食べれば、全てを忘れて楽になれるよ」

「……………本当に？」

「うん。穂乃果は十分がんばったよ。大好きな学校を救おうとがんばったんだよね？」

「……………うん」

「みんな廃校はイヤだ。悲しいっていいながら誰も立ち上がろうとしなかった。そんな中、一人立ち上がった。それだけですごいよ」

「……………うん。……………うん」

「無理だって親友に言われても、穂乃果はがんばったよ。親友を説得して、いつしよに夢を叶えようとしてた」

「うんうんうん。がんばったんだ。……………穂乃果、がんばったんだよ」

「そうだね。でも、もう十分だよ」

「その実を食べれば、何でも思い通りにする事ができるようになるよ。学校は廃校にならないし、スクールアイドルとしては大人気になって引っぱりだこ。もうがんばらなくなったって、穂乃果が幸せに暮らせる世界が手に入るよ」

「幸せな、世界」

「そうだよ。早く食べて。もうこんなつらい世界、捨てちやおうよ。．．．．．その実、すごく美味しそうでしょ？」

穂乃果《しようじよ》に促され、渡された実を見る。

周りのツタになっているものもさつきまでも、感じたことなど無かった。

でも、今回見たとき、

「ああ、ああ．．．．．。すごく、美味しそう」

いままで、どんな食べ物にも感じたことのない、もはや脅迫されているように強烈な食欲に駆られる。

その実を見ていると、全てがどうでもいいと感じた。

全てを放棄してでも、食べたい。

そう、思った。

食べたい。

食べたい。

「食べたい!!」

——やりたいことが見つかったんなら、それは大事にしないとな。

「……………っ!!」

果肉を包む葉のような皮を剥き、白いジエルのような果肉にかぶりつこうとした時、どこかで聞いた言葉が頭に響いた。

いつだっただろうか。

混濁した思考に漂う記憶。それは、遠い昔の事のように感じる。

でも、それは確かに最近の記憶だった。

それは、海未とことり以外のもう一人。

大事なもう一人の親友の記憶。

——本気でかなえたい夢だと言うことは伝わってきましたから。

——穂乃果ちゃんの本気の夢。三人でなら、きつとかなえられるよ。

続いて、親友二人の声も響いてくる。

そっか。

穂乃果は思い出す。

ほんの少しの間だったけど、本気でがんばりたいって思えるものに巡り会えれ、彼に励まされ、彼女たち二人と一緒にやっと踏み出そうとしたところだったんだ。

諦められない。

こんな始まってもないのに諦められない

これじゃあ、後悔だつて出来ない。

穂乃果は、三人が自分に手をさしのべてくれるのを見た。

片方の手で体を支え、もう片方の痛む腕を伸ばし、その手を取った。

すると、三人は笑う。三人の笑顔が自分に光をくれた気がした。

「思い出した……」。

「どうしたの？ 早く食べなよ」

「やっぱりだめだよ。簡単に手に入るものなんて、努力もしないで手に入れる幸せなんて、やっぱりだめだよ」

穂乃果は、震えてがたつく足に力を込める。

「それに、やっぱり諦められない。忘れるなんてできない。忘れるって事は、穂乃果のわがままにつきあってくれた海未ちゃんところりちゃんの気持ちも踏みにじることだもん。私、すごく諦めが悪いみたい。やっぱり二人を見捨てて逃げることも、安易な道に逃げることもできないよ」

「じゃあ、死に行くって事？ それはただの無駄死にだよ」

「ううん。穂乃果も死ぬ気はないよ。自分の命も諦めない」

穂乃果が宣言すると、さつきまで、穂乃果が食べようとしていた実が姿を変える。

現れたのは、硬質なロックシード。

それは、穂乃果が持っていたロックシード。

シールなどでデコレーションされた、彼女だけのロックシード。

穂乃果の為に倒れた、彼女のインベスが遺したロックシードだった。

「本当に欲張りだね」

「うん。穂乃果欲張りなんだ。二人の命も自分の命も大事。どっちも諦めたくない。それに……」

一度目をとじ、もう一度三人の笑顔を思い描き、心に刻む。

もう、折れてしまわないように。忘れてしまわないように。

「それに、約束したんだよ。やりたいつて思ったこれだけは、なにがあっても諦めないって!!」

主であるインベスを失い色あせたロックシードを握りしめる。

今はもう色あせたそのロックシードに光が灯る。

暖かなオレンジ色の光に、絶望に冷え切っていた穂乃果の心が溶けていく。

オレンジ色の光とともに姿を変えていく。

外側の灰色の殻にひびが走り、そのひびからより強い光が漏れ出す。

さらにもう一つ。穂乃果の近くに転がっていたユグドラも、実の光の呼応するかのように光を放ち始めた。

「なに、これ……」

二つの光が収まると、それは全く別のものに姿を変えていた。その内手に握っていたそれは、穂乃果もよく慣れ親しんだもの。

「オレ、ンジ……」

が、今まで穂乃果が持っていたロックシードとは、見た目が異なり、オレンジの意匠の施されていた。

一つ目の光の結果を確認すると、穂乃果はもう一つの光の正体を確認する。

「これ、ユグドラ、なの？」

手に取ったユグドラだったそれは、見たこともない形になっていた。

ロックシードをはめ込む場所があったから何とか判別できたものの、少なくともそれはいつも使っていたユグドラではなかった。

通常のユグドラより大きく広がっており、ロックシードをはめる部分の横には刀のようなアクセサリがついていた。

ユグドラには、腕に巻くタイプや手首に付けるタイプもある。でも、大きさから考えて、腕などにはとりつかない。もし、体のどこかに付けるとするならと考えたとき、穂乃果にはそれがベルトのバックルのように見えた。

ほんの思いつきで腰にそれを当てたところ、横側からベルトが延びると穂乃果の予想通り、腰に巻き付いた。

それをじつと見ていた穂乃果《しようじよ》は、最後の確認のように問う。

「それが穂乃果の選択なんだね。なら、この先にどんなつらいことがあっても、苦しいことがあっても、諦めちゃだめだよ。……もう、諦めることは許されない。自分で決めたことなんだから」

「そうだね。私はもう諦めない。めいいっぱい欲張っていくよ!!」

穂乃果は、ロックシードのハンガー部分引き上げて解錠する。

すると、海未とことりを庇い倒れていたほむまんがオレンジ色の光を発し、光の玉となって穂乃果の頭上に飛んできた。

その光はまるでオレンジの果実を象っているようにも見える。

「……ほむまんも、力を貸してくれるんだね。ごめんね。いつも助けてもらってばかりで……」

そんなことはないと言うような、いつもの優しい鳴き声が聞こえ、穂乃果は涙を拭った。

「今度は、穂乃果も一緒に戦うよ」

ベルトのドライブベイに解錠したオレンジのロックシードをはめ込み、ハンガーを押し込み再びロックする。

「ロック、オン！」

その動作の瞬間響いた電子音に驚きながら、しかし、その目はぶれない。穂乃果は、カッティングブレードに手を掛け、力を込めた。

法螺貝の音色が穂乃果の決意を鼓舞するように鳴り響く。

「それを降ろしたら、もう戻れなくなるよ」

「うん。でも、やらずに後悔するよりはましだと思うから」

穂乃果は、穂乃果《しようじょ》に向かって微笑むと、カッティングブレードを降ろした。

「ソイヤツ!!」

刀で果物を切るように、ブレードが通るとともにキャストパットが

開いた。オレンジの切り身が現れたのを合図に、頭上に輝いていた果物を象った光球が穂乃果に被さった。

「オレンジアー……、ザザツ」

光球の中で、穂乃果の体に金属でできた果実が被さる。が、電子音の間にノイズが入り、その金属の果実がはじけた。

「オレンジドレス。花道、オンステージ!!」

「なら、進みなさい。あなたの思いのままに」

少女は微笑んだ。

光の奔流とともに姿を現した穂乃果は、少女を見て、

「うん。行ってくるよ。ありがとう」

微笑み返した。

少女の笑みは、さっきまでの含みを帯びた笑みではなかった。

どこか優しい、しかしベールが掛かったように表情の読めない少女の笑みだった。

それは、きつと奇跡だ。

なんの取り柄も、なんの力もなかった私が、誰かの助けになれる。

誰かのために戦える。

誰かの笑顔のために戦える力がこの手に入れることができるなら、これ以上に望むことはない。

穂乃果がボールを払うように手を振ると、彼女の周りを覆っていた光の玉は、果汁が飛び散るがごとくはじけた。

穂乃果は、ベルトに輝くオレンジの意匠を掲げるロックシードを見て思う。

これはきつと、奇跡なんだって。

そのとき穂乃果は、そう思ったんだ。

第二話 『変身！ オレンジのドレス!!』

「オレンジドレス!! 花道、オンステージ!!」

穂乃果が、自分を包むオレンジ色の光を振り払うとともに、白いフリルの入ったオレンジ色のスカートが揺れた。

手には、オレンジ色の手袋。足にはオレンジ色のヒール。

そして、腰のベルトがなくなった代わりに、頭にはオレンジの断面を象った髪飾りが輝いていた。

日常で着るには派手だが、華やかで人の視線を引きつける。

女の子を輝かせる為だけに存在するようなその衣装はまるで、アイドルのステージ衣装のようだった。

いつもならば、可愛い服を目の前にすれば、鏡の前で似合っているか確かめていただろう。しかし、今の穂乃果は、まっすぐ一ヶ所を見据えていた。

光の球を払ってから、止まっていた時間が動き出していた。

ビデオの再生ボタンを押したかのように、インベスが活動を再開する。

インベス達は、腕を振り上げたところで止まっていたため、動き出すとともに振り上げた腕を振り下ろそうとする。

「海未ちゃん、ことりちゃん!!」

穂乃果は、手を伸ばして全力で踏み込んだ。

スローモーションで振り下ろされるインベスの腕が、無情にもあと数センチで彼女たちの体を引き裂こうとする。

「だめえええええ!!」

穂乃果は、絶叫しながら足を踏みきる。そして次の足を前に出す。

「あれ?」

一瞬、体の感覚に合わない景色に困惑する。

穂乃果は、走ろうとしていたのだ。スローモーションで流れる時間の中、最初に踏み出した足を踏みきり、次の足を前に出したところだ。

だというのに、数メートルは離れていたはずの距離は詰まっており、目の前には海未とことりに襲いかかろうとしている虎のようなインベスの顔があった。

ちよつと待って、という間もなく、穂乃果の額がインベスの顔部分の衝突した。

「痛っつったい!! って、痛くない。どうなってるのこれ」

痛いっと思つて額を押さえようとしたが、一拍おいて痛くないことに気がついた。

額に触られることを確かめる。

額には確かに指で触れた感覚がある。別になにもかぶっているわけでない。

一瞬で距離を殺した跳躍も説明出来なかったが、数メートルを一秒にも満たない早さで詰めたということは、それほどのスピードでインベスに頭突きをしたことになる。

しかも相手は堅い殻に覆われたインベスだ。そんなスピードで頭突きをかましたのであれば、彼女の額に赤い花が咲き誇ることになるのは想像に難くない。

にもかかわらず、無傷どころか当たったぐらいにしか感じていなかった。

まるで見えないヘルメットでもかぶっているかのように。

「あ、あなたは……………、いったい……………」

「穂乃果ちゃんは……………、海未ちゃん、後ろ!!」

「海未ちゃん危ない」

穂乃果は、咄嗟に海未を後ろから襲おうとしていたインベスの前に入って止めようとした。

止めようとした、だけのはずだったのだが、

「す、すごい……………」

「あのインベスを、突き飛ばしてしまうなんて……」

彼女の思う動作にはとどまらず、インベス達が出てきた少し離れた茂みに押し戻してしまった。

「この力。この衣装のおかげ？」

先ほどの跳躍といい、頭突きをしても痛みをほとんど感じず、そしてこの怪力。

全てが、ロックシードによって呼び出されたこの衣装をまとってから起きた変化だった。

姿といい、人を超えた力といい、まさしくそれは「変身」と呼べるほどの変化だった。

穂乃果には、どうしてこのような力を得たのか理解できていなかったし、考える余裕も無かったが、やるべきことはしっかりと理解していた。

「あなたたちも、早く二人から離れて!!」

彼女は、インベスに向かって怒声を浴びせながら、二人との間に割ってはいる。そして、尚も襲いかかろうとするインベスを突き飛ばしていった。

数秒もたたぬうちに取り囲んでいたインベスを二人から離れた。

ことごとく押し飛ばされたインベス達は、そそくさと茂みへ逃げ帰って行った。

それを確認した穂乃果は胸をなで下ろした。

二人の様子を見て、つい涙が出そうになる。

まだ怯えているようだったが、奇跡的に二人ともインバスによる外傷はなし。

インバスに囲まれるという絶望的な状況から、二人を救い出すことに成功したのだ。

親友を助けられたことにほっとした穂乃果だったが、未だヘルヘイム内にいることは変わらない。

穂乃果は、座り込んでいる二人に手を差し伸べた。

「海未ちゃん、ことりちゃん。早くここから逃げよう」

「は、はい。助けただきありがとうございます。ですが……」

海未は、急速な状況の変化に気持ち追いつかないようで惚けていたが、差し伸べられた穂乃果の手を取った。

でも、

「あなたは誰ですか？」

「え？」

彼女の顔には、今まで何回か見たことのある初対面の人に向けるよ

うな表情が浮かんでいた。

「もうやだな、海未ちゃん。穂乃果だよ、穂乃果。ねえ、何とか言っ
てあげてよ」

「ええと、本当に……穂乃果ちゃん、なの？」

「もう、ことりちゃんまで」

「そうは言いますが、あなたの顔に見覚えが……。でも、確
かに口調は……」

その様子は、穂乃果を穂乃果として認識はしていないが、所々引
かかっているところがあるといったみたいだった。

少し沈黙して考えている海未をみて、穂乃果は自分の姿を確認し
た。

顔をぺたぺたさわってみるが何かついていない感じがしない。服装
は音の木坂学院の制服とは大きく異なった衣装となっていたが、それ
だけで見間違いをしてしまうとは到底思えなかった。

原因が分からず穂乃果が首を傾げていると、海未が何かに気付いた
用に顔を上げた

「穂乃果。帰ったら助けていただいたお礼に、和菓子屋の娘である穂
乃果の大好きなあんこたつぷりのお饅頭をごちそうさせてください」

その言葉に、穂乃果はバツと顔を上げた。

「ちよつと、お礼はいいけどあんこはイヤだよ。ほんとにもう飽きた

んだってば」

「はい。……どうやら、本物みたいですわね」

「ちよつと。確かめるにしても、もつと他に無かったの？ 小さい頃の思い出とか、秘密の合い言葉とか」

海未には浪漫とか言うものが無いのかと抗議する穂乃果をよそに、海未は顎に手をやって穂乃果を見つめていた。

「不思議ですね。さつきまで霽が掛かったかのように穂乃果と一致しなかったのに、いまははつきりと穂乃果だとわかります」

「うん。ことりもさつきの話聞いてて、今初めて穂乃果ちゃんだつて気づけたよ」

やっと気付いてくれたようで、二人の堅かった表情は、ほんの少し柔らかくなった。

「穂乃果、後ろ!!」

「ぎゃっ」

穂乃果は、突如死角からの衝撃に襲われた。

はねとばされた勢いで穂乃果は、体が浮いてしまう。

しかし、穂乃果は器用に普段出来るはずもない宙返りすると、華麗に着地を決めた。

「何で戻ってくるの？」

衝撃の正体は、虎のようなインベス。

どこか中国を思わせる文様を身に刻んだそれは、ビヤッコインベスとでも呼べばいいだろうか。

鋭い牙と爪。そして二つの瞳は、獲物をねらう狩人のような眼光を放っていた。

「二人とも。ここは穂乃果が何とかするから早く行って!!」

穂乃果はすぐさまビヤッコインベスに飛びかかると、先ほどの戦いと同じように突き飛ばした。

しかし、今度はビヤッコインベスの方も空中で体勢を立て直すと、着地と同時に穂乃果に飛びかかった。

再び接近した両者は、腕と腕で組み合った。

「で、ですが……………」

「お願い。早く出口を！」

「……………わかりました。ことり、行きますよ」

「うん……………穂乃果ちゃん、絶対見つけてくるから」

ことりはインベスに襲われたときに転んで足を痛めてしまっている。海未は、ことりを肩を貸すと穂乃果の無事を確認しながら一歩踏み出した。

「ねえ、何でこんなことをするの？ インベスだってほとんどの子は私たちと仲良く暮らしてるのに」

物言わぬインベスに、穂乃果は答えなど返ってこないとわかりつつも聞かずにはいられなかった。

今、世界はインベスとの共存の道を歩き始めている。今はまだ、ペットという認識から出ないが、いずれはペットが家族同然に扱われるのと同様にインベスも家族として迎えられる日がくるはずなのだ。

それを妨げているのは、一部の悪いインベス。

人を襲い、ものを壊す。そんな一部のインベスがいるが為に、どうしてもインベスは危険だという認識が抜けないのだ。

「ねえ、どうして!!」

穂乃果は、問いとともに思いを乗せて力任せに突き飛ばす。

しかし、穂乃果の思いは届かない。

初級インベスを浮かせるほどの威力の突き飛ばしであったが、上級インベスに分類されるビャッコインベスにはよろけさせる程度にしかならなかった。

ビャッコインベスは、よろけるとともに腕を高く振り上げていた。そして、体を戻すとともに腕に備えられた爪を穂乃果に向かって突き

立てた。

当たる。

そう穂乃果が覚悟したとき、頭に聞き慣れないワードとイメージが浮かび上がった。見たままを言えば、柄のついたオレンジの切り身。

「大橙丸!!」

一瞬現れたその用途がわからなかったが、次の瞬間には意識せず
に口からそのワードが出ていた。

すると、頭につけたオレンジの髪飾りが輝いた。そして言霊から現実になったかのように、イメージ通りのものが穂乃果の手に収まっていた。

オレンジの切り身部分は刃のように鋭く、それはまるでオレンジの形をした刀だった。

穂乃果が柄の握ったのと同時に間一髪、自分とインベスの腕との間に大橙丸の刃を挟み込んだ。刃と爪がぶつかり火花を散らす。

「たあ!!」

つばぜり合いの末、穂乃果は自ら後方へ飛んでビヤッコインベスから距離を取った。

「こんなことしたくない。ぜんぜん楽しくない。痛いしつらいだけなのにどうして戦おうとー」

ガウウウウウ!!

なぜそのようなことをするのか、問おうとする穂乃果をビャッコインベスは咆哮で遮った。

そして、穂乃果が空けた距離を、たった一步で詰めると両腕による連撃をあげさせた。

「おねがい、もう………。きやあ」

穂乃果は、大橙丸で応戦するも後退しながらの防戦一方となっていた。

ビャッコインベスの繰り出す凶刃は、早さもさることながら一撃一撃が相当の重さを持っており、一瞬でも気を抜けば刀をはね飛ばされてしまうほどだ。生身で受ければ、挽き肉決定。

ロックシードから生まれた衣装を着ているとはいえ、どの程度の耐久度を持つのかわからない今、一発でも受けることは彼女に死を予感させた。

穂乃果は。ビャッコインベスの攻撃を受ける度に、刀を取りこぼしそうになるほどのしびれを感じていた。

一撃を受ける度に、死の衝撃をその身に受ける。

息があがり、手足は重くなる。

死の重圧と体験したこともない戦闘によって着実の疲労がたまり、動きが鈍くなっていた。

戦闘はおろか、殴り合いの喧嘩だつてしたことがない。そんな彼女が、インベスの攻撃スピードに追いつき受け続けていられるのは、ひとえにオレンジ色のステージドレスのおかげだ。

疲労はすでにピークに達し、動いていること事態が不思議なくらいだ。

しかも、経験のない戦いがゆえに、彼女の動きを鈍らせる要因がもう一つあった。

今までの戦いで、彼女がしたことと言えば、押す、ただそれだけだった。

唯一取り出した相手を傷つけうる大橙丸ですら、ビヤツコインベスの爪を受けることにしか使っていない。

彼女は、能動的に相手を傷つける行為を極力避けていたのだ。

彼女の目的は、あくまでヘルヘイム（いせかい）からの脱出。インベス達を傷つける気が無いどころか、殺されかかったというにも関わらず、インベスをまだ共存相手として認識していた。

勝手に縄張りに入ってきたから怒っているのか、それともほかに怒らせることでもしてしまったのかなど、インベスが襲いかかってくる理由を考えてすらいた。

実はすでに、先の大橙丸のように状況の打開策はイメージとして見ているのだ。インベスの死を持って戦いを終わらせる方法を……。

穂乃果がその行動をとれば戦いを終わらせられるとわかっているから、それを実行することをためらわずにはいられなかった。

ためらいは、戦闘にとって致命的だ。一瞬の決断が求められる戦いにおいて、ためらいはその決断を妨げる要因にしかない。

「ーっきゃー」

疲労から、一瞬体がふらつく。体勢を立て直そうと踏ん張るが、意識がそがれたことで次の攻撃を受けるのが一瞬遅れた。

しっかりと身構えて受けられなかった。掬い上げるようなビヤツコインベスの攻撃に、大橙丸をはね飛ばされてしまう。武器を失ってしまった穂乃果は、続く攻撃をもろにその身で受けてしまった。

「かはっー」

穂乃果は、周りに立ち並ぶ大木に叩きつけられるが、それでも止まらずさらに後ろへ転がった。

これが欲張った結果か。

「おねがい、来ないで」

穂乃果は、よろよろと立ち上がると、髪飾りに手を伸ばした。

その髪飾りは、ドライバーが変化したものだ。

大橙丸などの武装は、どの髪飾り内のデータをもとに生成される。

この髪飾りは、武器の貯蔵庫。そして、イメージで見た戦いを終結させる方法を実行するためのスイッチでもあった。

「穂乃果にこんなことさせないで!!」

「カモン！ バナナスカッシュユ!!」

インベスが尚も動き出し、穂乃果が髪飾りにふれようとしたそのときだった。

響きわたる電子音とともに、ビヤツコインベスの動きが止まった。

痙攣するように体を振るわせるビヤツコインベスの腹部には、バナナを象った光の槍が深々と突き刺さっていた。

沈黙する穂乃果。

音にならないうなり声をあげ、穂乃果へ腕を向けるビヤツコインベス。

腹部を貫かれて尚、目の前の敵を襲おうとするビヤツコインベスだったが、腹部の槍を九十度回されるとついに沈黙した。

槍が横薙に振られ、インベスは光となって消失する。代わりに、背後に立っていた槍の持ち主が姿を現した。

「何だこれは。ほとんど片づいている。とんだ無駄足だったな」

赤いライディングウェアのようなものの上に、銀色の鎧をつけてい

た。

右手には、先ほどビヤツコインベスを貫いた白い突くことに特化した槍が握られていた。

鎧と槍。その姿は、騎士を連想させるものだった。

危ないところを助けられた形の穂乃果。しかし、穂乃果は礼もいうことなく、恩人であるはずの赤い騎士を睨んでいた。

「貴様、怪我はないか」

「どう、して……」

「ん？」

「どうして、殺したりしたんですか!!」

赤い騎士に無事かと問われた穂乃果は、その騎士にとびかかっていた。

「確かに、あの子は襲いかかってきました。でも、きつと何かわけがあったんです。ここがあの子の縄張りだったとか、入ってきてほしくない理由があったとか。何かあったかもしれないんです。話をすれば、きつとわかつてくれるはずなんです。……だってみんな、インベスと一緒に暮らして……」

自分でも、なぜ自分の命を救ってくれた人に向かってそんなことを言っているのかはつきりわからなかった。

ただ、一緒に生きることが当たり前前のインベスが、あつきり目の前

で殺されてしまったことが受け入れられなかったのだ。

インベスを殺した本人である目の前の人物が、平然としていることが信じられなかったのだ。

しかしそれよりなによりも、最後の最後で、自分自身があのインベスに手を下そうとしてしまった事実を受け入れることができなかったのだ。

「ああ?」

穂乃果に掴み掛られた赤い騎士。

インベスを殺しても落ち着き払った様子だったが、彼女につかまれた瞬間、ドスの効いた声を放った。

「襲われて尚平和ボケしていられるとはな。脳をヘルヘイム(ここ)の毒に侵されたか」

「ちよつと。質問に答え——」

「——弱者が喚くな」

騎士は、穂乃果を振り払った。

大した力ではなかったが、穂乃果はその場でしりもちをついてしま
う。

「人がどう勝手な解釈をしようも、世界は何も変わらない。弱いものは淘汰され、強いものだけが生き残る。貴様は弱いから何もできず、あのインベスも弱いから俺に殺された。貴様も、このままなら死ぬ

ぞ」

見上げる穂乃果を見下ろす騎士。仮面で目は見えないが、穂乃果は騎士から冷たく射貫くような視線を感じていた。

「一度、脳外科か精神科に行くことを勧める。もつとも、最近じゃどいつもこいつも似たようなものだがな。……来い」

「な、なんですか」

「早くここから出るぞ。ここは貴様のような弱者がいていい場所ではない」

そう言つて、騎士は、拒もうとする穂乃果の手を取ると引き上げた。

「ここから、出る？」

インベスを平然と殺す騎士に反感を持っていた穂乃果だったが、この異世界から抜け出すことができるか聞いて心が揺れる。

本当であつたら決してついていきたくなどないのだが、早く帰りたいという衝動がどうしても勝ってしまうのだ。

穂乃果は、騎士に手をひかれるまま、うつろな目で後をついていくとした。

「あれは……」

突然、騎士の動きが止まった。

前をすっかり見ていなかった穂乃果は、騎士の背中に鼻を打ち付けてしまった。

ドレスのおかげで痛みはほとんどなかったが、反射的に鼻を抑えた穂乃果は、騎士の様子をうかがった。

騎士は、ある一点を見つめている様子だった。穂乃果も、その方向へ視線を向けると、そこにはインベスに跳ね飛ばされ地面に突き刺さった大橙丸があった。

騎士は、何か驚愕している様子で、一向に動かない。

穂乃果は、自分の腕をつかむ騎士の手が緩んでいることに気が付き、無意識に距離を取った。

だが、それがいけなかったのだろう。

穂乃果の行動によって我に返った騎士は、穂乃果の方をゆっくりと向いて問う。

「それは、貴様のものか」

「え、・・・・・・・・はい。そうです、・・・・・・・・けど」

予想外の問いに、穂乃果はしどろもどろで答えた。

実際、使ったのは今日このとき一度だけだ。穂乃果のものと主張できるとそれを使っていたわけではない。

が、穂乃果のロックシードが変化したオレンジロックシードから出てきたものなので、やはり彼女のものといった方が妥当だろうと思

い、そう答えたのだ。

穂乃果の答えを聞き、騎士はまた動かなくなってしまう。何か考えているのか、ぶつぶつと何かをつぶやいていた。

だから、騎士が突然動き出したとき、穂乃果はその動きに対応することができなかった。

「貴様も、アーマードライダーなのか……。だが、それよりも」

「アーマードライダーって、いったい？ きやつ——」

「なぜ貴様が大橙丸を持っている!!」

「な、何なんですかいきなり——」

「——いいから答えろ。貴様は何者だ!!」

赤い騎士が、穂乃果に詰め寄る。

仮面に隠されて表情は見えないが、その声は怒気をはらんでおり、とてつもない迫力を持っていた。

辛うじてではあるがインベスに立ち向かうことが出来ていた穂乃果だったが、その怒声に竦んでしまった。へたり込む彼女に、騎士はあろう事かその手にもつ槍を突きつけた。

インベスは、少数ではあるが暴走して人を襲うことがニュースでも報道されている。が、インベスを殺したことはともかくとして、自分を助けてくれたであろうその人が自分に獲物を突きつけているその事実、インベスに襲われるよりもショックが大きかったのだ。

尻餅をついたまま後ろに下がる穂乃果を騎士は、槍を突きつけたままジリジリと詰め寄る。そして、ついに背中に大木が当たり、追いつめられてしまった。

「さあ、早く答えろ。貴様はいった——」

「——穂乃果!!」

槍が穂乃果の芽と鼻の先にまで近づいたそのとき、彼女を呼ぶ声が上がるとともに、騎士は槍を引いた。

原因は、騎士の仮面にこびりつく白濁の塊だった。その白濁は、穂乃果も先ほど一度見たものに似ていた。

穂乃果の予想を裏打ちするかのようには、丸い実が宙を舞った。

それは赤いナイトの顔に当たり、中のジェル状の果実を飛び散らせた。

「穂乃果!! あつちにクラックがありました。早く来てください!!」

「ちっ。逃がすか——」

「——穂乃果から、離れてください!!」

海未が投擲した実が再び赤い騎士の視界を汚した。

赤い騎士が眼前にこびりつくジェルを取り除こうとしている隙に、穂乃果は海未の元へ走った。

疑問も気になることもたくさんあったが、クラックはそんな穂乃果の気持ちなど待つてはくれない。

またいつ消えるともわからないクラックを前に悠長なことは言っ
ていられない。また、クラックが閉じてしまったなんてことになつた
ら目も当てられない。

「海未ちゃん。ことりちゃんは？」

穂乃果は、海未に追いつくと彼女と一緒に先に行つたはずの少女が
いないことに気付いた。

「ことりなら、先にクラックの先へ行かせました。ですから、私たち
も」

「うん、わかった」

「って、もう閉まり掛かって。このままじゃ間に合わ——」

「——大丈夫。ちゃんと捕まつて!!」

「いったいなにを言つて……。って、ちよつと穂乃果」

「絶対、間に合わせるよ」

徐々に靴のチャックを閉めるように、クラックが閉じ始めていた。

海未がふつうに走つたのでは、たどり着く前にしまつてしまう。

そう考えた穂乃果は、海未の背中と膝の裏に腕を回すと、いわゆる
お姫様だっこをしたのだ。

海未は顔を真っ赤にして喚いているが、かまっついては衣装によって身体能力が向上している穂乃果でも、間に合うか怪しい。

ひたすらに前を見て走り、飛び込む形でクラックをくぐり抜けた。

穂乃果のつま先が出たのとほぼ同時にクラックは閉じ、跡形もなくなっていた。

飛び込んだために、海未は投げ出され、穂乃果は勢い余って二転三転転がった。

「海未ちゃん、穂乃果ちゃん!!」

二人がおのおの打ち付けたところをさすっていると、痛めた足を引かず利ながら歩いてきたことが、二人に倒れ込むように抱きついた。

「よかった、無事で。……本当によかったよ」

「はい。本当に助かったのですね」

「うん、よかった。……あきらめなくて、本当によかった」

三人は、互いの体温を、存在を確かめ合うように抱きしめあった。

二人を、親友を守りきることが出来た。

異なる二つの体温を感じて、穂乃果はそのことを実感した。

そのせいだろうか。穂乃果の頬に、一筋の涙が伝った。

戦いが始まってからは、一回も泣くことの無かった穂乃果。泣く暇など無かったこともあるが、非日常などどこか現実味を欠いていた状況に、現実だと理解し切れていなかったことが原因だった。

それが、戦いを終え親友と互いの無事を確かめ合うことでようやく日常に帰ってきたことを実感したことで、戦いのさなかに渦巻いていた様々な勘定がこぼれ落ちたのだった。

日常に帰ってきた。

穂乃果は、泣きながらそのことをかみしめていた。

穂乃果、海未、ことりは、クラックをくぐり抜け、ついにヘルヘイムからの脱出を果たしたのだ。

「ちっ。逃がすか——」

『——待ってください』

「なっ。……くそっ」

通信機越しに届いた制止の声に動きを止めた瞬間、黒髪の少女が投

げたヘルヘイムの果実が仮面の当たったのだ。

『彼女たちは、このまま逃がしてください』

「なにを言っている。奴らは何か知っているはずだ」

赤い騎士は、視界を汚染する飛び散った果肉を拭いながらいう。しかし、視界クリアになったときにはすでに姿はなく、彼が引つかかっていた大橙丸も彼女たちが消えるとともに光の粒子と消えた。

手がかりを失った赤い騎士は、地面を踏みつけ怒りをぶつけた。

「貴様。覗き見とは、ずいぶんいい趣味だな」

『そんなまさか。仕事だから仕方なくですよ。それより僕は、まさかあなたに女の子のお尻をギラついた目つきで追いかけて回すような趣味があったことに驚きましたよ』

「ああ？」

『怒らないでくださいよ。ちよつとしたジョークですよ』

飄々とした態度の相手に、騎士は舌打ちをした。

『珍しく取り乱していましたね』

「ちつ。俺としてことが、弱者相手にムキになってしまったな」

悪態をつきながら、赤い騎士バロンは、戦極ドライバーに取り付けられたバナナの意匠を称えるロックシードのキャストパッドを閉じた。

すると、彼の身を包んでいた鎧とその下の赤いライドウェア崩れ、鎧を装着していた人物が姿を現した。

中にいたのは、スーツ姿の男だった。

ヘルヘイムの森の中でなければ、辛うじてサラリーマンにも見えな
くない姿だったが、整った顔のなかに存在感を主張する切れ長の瞳
が、ただの一般人では無いと語っていた。

彼は、ドライバーから取り外すとポケットに納めるとともに、両手
を定位置につっこんだ。

苛立ちを見せていたが、それも一瞬。彼は落ち着いた様子で通信機
越しに話す。

「だが、なぜ止めた。貴様とて、気になっていないわけでは無かろう
？」

『ええ、そうですね。あの状況……、その瞬間を目撃できたわ
けではありませんが、あの少女が戦っていたと考えることが妥当で
しょう。しかも無傷な上にどんなカメラでも、彼女の正体がわからな
い。確かに彼女は顔を隠していなかったにも関わらずです』

通信機越しの声は、彼が機材を通して観測した状況を述べた。

ヘルヘイムの管理、監視のためにユグドラシルが設置している定点
カメラを始め、自立飛行型カメラ、さらには、赤い騎士の視界に同調
するように取り付けられたカメラ。それら多様な監視システムを用
いて、穂乃果を観測していた。彼女は、バロンのように、仮面で素顔
を隠してなどいなかった。それどころか、彼女のこれから歌い踊ろう

としているかのような出で立ちはむしろ、自分のことを見てほしいと主張しているようにも思えた。

しかし、彼女を確実に捉えていたはずのカメラの映像の中に、彼女の素顔を確認できるものは一つとして残ってはいなかった。

いや、正確には、彼女の素顔は映っていた。映ってはいたのだが、その顔を個人情報を扱うデータベースと照会しても一致しない。それどころか、目で見比べようとしてもまるで靄でもかかったかのようになり、その顔を認識することが出来ず照らし合わせることも出来なかった。

いや、それも正確ではない。

そのものが同一であるという認識事態を操作されているような、世界のような絶対的で大きな力が、彼女の存在をひた隠しにしているようにも思えた。

『確かに興味深いですが、しかし、我々の目的は別にあることをお忘れ無く』

「ああ、わかっている」

『それに、カメラでは正体はわかりませんが、追う必要はありません。二時の方角です』

「何かあるなら、はっきりと言ったらどうだ？　．．．．．ふん。こういうことか」

バロンの鎧を装着していた男は、どうやら命令されるといふことが嫌いのようだ。忌々しげに舌打ちをしながら、声の示す方向をにらみ

つけた。

が、そこにあつたものを見て、男はすぐさま歩みを進めると道ばたに落ちている手帳を拾い上げた。

表紙には、小さく描かれた校章と生徒手帳の文字。どうやら、先ほど逃げた三人のうちの一人が落としたものようだ。学校のことなど興味はなかったが、男はその校章を見て近辺にある学校だったことを思い出した。

男は、中身のページをめくることなく手帳を裏返す。

皮のような手触りの表紙に対し、裏表紙はビニールの指につく感覚があつた。

すると予想通り、そこには顔写真と学校名、学年。ご丁寧な家の住所まで書かれていた。

「音の木坂学院高校二年、高坂穂乃果か」

確認すると、男は無造作に手帳をポケットへつつこみ、その場を後にした。

『え？ 行つてしまふんですか？ まだやってほしいことが……』

「黙れ。……どうも、おまえのもったえぶつた物言いは好かん」

それだけ言い残すと、男は耳についていた通信機をその場に放り捨てた。

自立カメラが捉えている彼の姿は、孤高。縛られることを嫌い、指

凶されることを嫌う彼を表す言葉として、これほどの確かな言葉はない。

弱者は強者に蹂躪される。強者であることこそが生きるためにもつとも必要なこと。その信念とともに生きる彼は、駆紋戒斗。

かつて、沢芽市にてインベスを蹂躪した騎士である。

「全く困ったものですよ」

通信機を捨てられ、話す手段を失ったディスプレイの前に座る男は、自らもマイク付きヘッドホンを投げ捨てると部屋を後にした。

「僕のことを好かないって？ ははっ。僕もですよ、戒斗さん」

ディスプレイの光のみが照らしていた暗い部屋とは対照的に、白く清潔感の有る廊下がまぶしく見える。急激な暗明の差になれない目をしばたたかせていると、スーツ姿の職員が通り過ぎる彼に頭を下げる。

「社長。お勤めお疲れさまです」

「社長。この間の件ですが……………」

「社長……………」

続けざまに声をかけてくる社員たちのため息をつきながら、呉島光実は、社員の一人が扉を開けた部屋へ躊躇無く入ると、レザーシートに腰を沈めた。

彼は現在、人とインベスの共存のために動く大企業、ユグドラシル・コーポレーションの社長。そして、かつて戒斗とともに沢芽市、ひいては世界を救ったアーマードライダーの一人だった男だ。

「まさかこんなところで見ることになるとは思いませんでした。オレンジアームズ。そして……」

通信機の先にいる満実は、ディスプレイを眺めていた。

そこに流れているのは、先ほどの戦闘を納めた映像だ。

そして、地面に突き刺さっている大橙丸がフレームに入ったところで映像を止める。

が、問題は、大橙丸ではなくその向こう。木と木の間に見えたぼやけた人型だった。

目の前に煌々と光を放つディスプレイには、映像とは別に、ソナーのような一定周期の波とアーマードライダーの反応を現すアイコンが立っていた。

今そこに反応を示しているのは、通信相手であり、赤いライドウェアと銀色の鎧の騎士、『バロン』のもののみ。

しかし、さつきまでもう一つの反応を確認していた。

それは、かつて存在していた戦極ドライバー試作機。認証設定を済ませた者にしか扱えないようロックされた6機のうちのひとつ。なぜか最初から認証済み扱いとなっており、ロストナンバー（廃番）扱いだった失われたドライバーの反応だった。

「……アーマードライダー、鎧武」

彼は、誰に言うでもなくぼそつとつぶやいた。

それは、アイコンにつけられたコードネーム。

本来、特に意味のないただの識別番号だ。が、光実は、そのアイコンをまるで亡霊でも見るかのように睨んでいた。

第三話 『戒斗、襲来!!』

ヘルヘイムの森を抜け出した穂乃花、海未、ことり。

ヘルヘイムに入る前は、始めようと意気込んでいたアイドルについて、話の花を咲かせていた。しかし、命の危機にさらされやっこの思いで脱出してきた彼女たちは、すぐに気分を入れ替えることなどかなわず、それぞれ黙って家路についた。

海未は、家族に心配をかけまいと、平静を振る舞って帰宅した。何とか家族に気付かれないように振る舞った海未だったが、自室に入った瞬間、布団の中へと潜り込んだ。自分だけしかない部屋で、緊張の糸が切れた海未は、自分で自分を抱きしめて泣いた。

唯一足を怪我してしまったことりは、音の木坂学院の理事長でもある母に怪我の理由を問われた。階段から落ちてしまったと嘘をついたことりは、すぐさま病院に連れて行かれた。幸い、軽い捻挫という診断で、すぐに帰ることができた。そのとき、咄嗟に嘘をついてしまい、その夜は罪悪感からなかなか寝付くことが出来なかった。

穂乃果は帰宅後、妹の雪穂、母、父を見つけるなり、無言で抱きついた。

いつもだらだらしているイメージで定着していた為、雪穂には呆れられ、両親には心配されるなどしたが、三人とも黙って彼女を受け止めてくれた。そのおかげで、部屋へ戻る頃にはすっかりさつきまでの恐怖を忘れていた。

そのかわりに、鞆の中からそのとき手に入れたアイテムを眺めていた。

それは、オレンジのロックシードとベルト型に変形していたユグドラだった。変身時には、ロックシードを装着するためにドライブベイ、変身トリガーであるカツティングブレードがあった。しかし、戦闘を終えて変身を解いたとき、いつの間にか元の大きさの戻っていた。

今は、スマートフォンくらいの大きさで、刀のような印がついている以外は、普段にユグドラとそう変わったところは見られなかった。

変身して、親友を救い、襲いかかってくる敵を撃退したことを思い出す。

まるで休日の早朝にやっているような、魔法少女や変身ヒロインのように変身してしまったことに興奮していた。

しかも、スクールアイドルを始めようと思っていたときに変身した姿が、アイドルのステージ衣装のようなドレスだったのだ。インベスに襲われ怖い思いをしたが、だからこそ運命だと思った。

命を掛けて手にした力がアイドルを模した姿だったのだ。それは、自分にアイドルになれば、何かがそう告げているように思えたのだ。

ふと、ユグドラを腰にあてがってみた。すると、いままでふつうのユグドラだったものが、左右に広がって戦極ドライバ―相当の大きさとなった。

穂乃果は、姿見にドライバ―をつけた自分の姿を映して、ドライバ―の位置を直したりしてみる。寝間着に硬質的はドライバ―は似合わなかったが、そんなことなど関係なしに、おもむろにロックシードを構える。

神妙な顔をしている自分を見つめながら、息を吐いて吸い、そして、

「変身!!」

彼女は、そう叫ぶとロックシールドをドライバーにセットしカッティングブレードを降ろした。

「ソイヤー！ オレンジドレス！ 花道、オンステージ!!」

頭上に現れたオレンジ色の光球が穂乃果の体を包み込んだ。

「はあ!!」

気合いとともに光のベールを払うと、あの時のステージドレスを身にまとった彼女の姿が目の前に現れた。

「おお。これ、本当に穂乃果。なんだ……………」

鏡の前で、ひらひらのスカートをつまみ上げて、右に左に体を揺らし、自分の姿を確認してみる。

今まで着たことのない服をみて、鏡に映る自分の顔がどんどん綻んでいった。

「変身！ 変身！ 変身!!」

一度ロックシールドを外すと、ポーズをとって再びドライバーにセットし、光とともにドレスを身にまとう。ポーズを変えてはロックシールドを外して付けてを繰り返し、ポーズと自分の姿を確認した。

「へへへ……………こうかな？ これも……………」

変わる変わるポーズを試し、アイドルとしてステージに立ったときの自分を想像していた。もしかしたらロックシードで、アイドルになるための問題の一つであった衣装について解決できるんじゃないかと考え、ドレス姿でポーズを決めるのに集中していた。

そのため、彼女の部屋のドアが開いたことに、すぐには気付かなかった。

「お、お姉ちゃん……………。なにしてるの？ さっきからすごい音してたけど……………」

雪穂と目があう。そのときは、ロックシードをドライバーから外しており、ちようど変身ポーズを決めているところだった。変なテンションで特に考えていなかった穂乃果は、両足をがに股に開き、両手で頭の上にロックシードを掲げると言ったヘンテコなポーズをとっている最中だった。

「……………雪穂。ええと、これは……………」

「お姉ちゃんの趣味をとにかく言うつもり無いけど、……………静かにしようね?…」

「ええと、雪穂？ 違うんだよ、これは……………」

「……………じゃあ、お休みっ」

雪穂は、それだけ言い残すと駆け足で自分の部屋へ戻ってしまった。

「雪穂、違うのー!!」

開かない扉の前、穂乃果は、羞恥に顔をしながら弁解の言葉を叫んだ。

昨日の今日でも、三人は学校を休むことはしなかった。

特の海未とことりは、うまく寝付けなかったり、泣きはらしていたりで、決していいコンディションでは無かった。それでも、無理にでも平気を装って、学校に行かなければならなかった。

休んだとなれば、いろいろ聞かれたり調べられたりされるだろう。そうなれば、ユグドラシルへ通報をしたことから、三人がヘルヘイムへ無断で入ったことがわかってしまうと考えたからだ。

「ねえ、これからどうしようか？」

「これからとは、何のことですか？」

海未は、泣きはらして赤くなった目元を化粧で隠していた。

普段はあまり化粧などは恥ずかしくてしない海未だが、今回ばかりは仕方がないと腹をくくっていた。

他人にばれないようにと一番気にしていた海未は、頭の中にはそれしかなく、穂乃果がなにを言っているのか、まるで見当もつかなかった。

それを見て穂乃果は、頬を膨らませた。

「なになって、アイドルのことだよ。廃校を何とかしなくちゃでしょ」

「ああ、そうですね」

海未は、穂乃果の言葉を上の空な状態で聞いていた。

「そうですね。……じゃないよ！　しつかりしてよ海未ちゃん。音の木坂の未来は、穂乃果たちにかかっているんだよ」

「そうは言いますが……」

どうも暗い海未は、思わずことりの足を見てしまった。

「ごめんね、ふたりとも。ことりが怪我なんかしなければ……」

ことりが、怪我した足を引きずりながら、申し訳なさそうに頭を下げた。ギブスをするほどではなく包帯で固定するだけで済んでいるため、そこまでひどいけがではない。が、医者からは絶対安静にしているようにと念を押されており、当然ダンスの練習などの体を激しく動かすことは禁止されている。

二人も合わせているため、いつもより歩みがゆっくりだ。

ことりのせいではないのだが、海未は、彼女の怪我を見るたびにヘルヘイムの森や襲い来るインベスを思い出してしまう。それが、彼女を後ろ向きな考えに導いてく。

「やっぱり、やめておいた方がいいんじゃないでしょうか？　やろうと決めたとたんにあんなことが起きて……」

「なっ。急になに言うの？ 一緒にやろうって言ったじゃん」

「ですがこれは、何かにやめろって言われているような……」

後ろ向きな海未の意見を説得しようとする穂乃果だったが、海未が言おうとしていることもわかっていた。

実際、穂乃果もヘルヘイムで、生きることをもあきらめそうになったのだ。

全てを忘れて、投げだそうとした。

今になっては、あの果実を食べていたらどうなっていたのか、知る由もない。

そのときは、三人の親友の言葉に助けられたが、もしあのとき果実を食べていたらと思うとぞっとする。

きつと、あきらめなかつたから、今がある。そう感じた穂乃果は、いま諦めそうになっている海未へ、思ったままを口にした。

「それは違う。むしろ逆だよ」

「逆？」

「そうだよ。あんな危険が目にあったのに、……ことりちゃん
は少し怪我しちゃったけど、でもみんな無事にここにいるんだよ。こ
れって奇跡だよ。むしろ困難にぶつかってもあきらめるなって、神様
も言ってるんだよ」

穂乃果は、屈託のない笑顔でそう言った。

そんな笑顔がどこから出てくるのか、海未にはわからなかった。

おそらく一番怖かったのは穂乃果だったはずだと、海未は思っていたからだ。

海未とことりは、襲われる恐怖にただ震えていることしかできなかったのだ。それに比べ穂乃果は、二人のために自分も怖いにもかかわらず、二人を助けに走ったのだ。

確かに、穂乃果は、二人にないような力を手にしていた。だからと言つて、今まで普通の生活しかしていなかった少女が立ち向かうには、その恐怖は大きすぎる。

もし自分がその力をあの時手にしていたなら。想像しただけでも、海未はすくんでしまう。

それなのに穂乃果は、海未の前で笑っている。一番大変な思いをしたはずの穂乃果が笑ってまた壁に立ち向かおうとしているのに、そこで逃げ出すなんてずるいと思った。卑怯だと思った。

今度こそ、一人で戦わせたりなんてしないと、海は思ったのだ。

だから、海未も笑った。

「そうですね。そうかもしれません。……まったく、穂乃果にはかないませぬね」

「へへへ。それに、穂乃果もさすがに懲りたし、勝手に危ないところ行ったりしないからもうあんなことは起きないよ」

「そうですね。次危ないことしようものなら、本当に首輪とリードを付けますからね」

「ちよつと、それは勘弁してよ」

「危ないことをしなければいいだけの話です」

穂乃果とくだらない話をしたおかげで、海未の後ろ向きな考えはどこかへ行ってしまった。

海未は、穂乃果に諦めるなとか偉そうなことを言っておいてなんだと自分を叱咤した。そして今度は、後ろ向きではなく、これからスクールアイドルとして活動をしていくためにどうしていくべきかを現実的に考える。

皆を引っ張っていくのは穂乃果の役目、そして、穂乃果の夢物語に現実味を持たせるのが海未の役目なのだ。

「スクールアイドルとして活動するのはいいですが、ことりの足が治らなければ、体を動かす練習は出来ませんね」

「廃校までいくら猶予があるかわからないんだから、早く何か始めないとだけど……」

ことりは、そういつて自分の足を見る。

自分の怪我のせいで練習が出来ないことに負い目を感じていることに、海未は心配するなど微笑む。

「ことり。練習をするとと言ってもまだなにも決まっていませんし、どうということはありません。それよりも、足の具合はどうなんですか

「？」

「うん。ただの捻挫だって。だから、一週間もあれば大丈夫だろうって」

「そうですか。では、ここ一週間くらいは、どのように活動していくのかというところを詰めていきましょう。結局、昨日はなにも決められませんでしたから」

「うん、意義なし。やっぱり、一緒に練習しなくちゃね」

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん。ありがとう」

「それじゃあ、早速決めよ。まずはやっぱりグループ名だよな。たとえばね……」

そうしてまずは、グループ名について会議が始まった。

三人とも、お互いに無事でよかったと心から思った。怖い目どころか、命を失うかどうかという体験までした。にも関わらず、今は三人とも笑顔だった。

どんなつらいことも、三人一緒なら乗り越えられる。そんな親友に巡り会えたことを心から感謝するのだった。

穂乃果たち三人は、未だグループ名を出しあいながら歩いていた。

みんなそれっぽい名前を思いつくものの、どれも今一つといった感じでなかなか決まらない。

そうこうしているうちに、三人は校門の前まで来ていた。

「どのようなご用件ですか？」

「なにか、お探しですか？」

頭を悩ませていると、ふと、三人の耳に黄色い声が沸いているのに気がついた。

見ると、校門の片方の柱を取り囲むように音の木坂生が人だかりを作っていた。

その人だかりの中心にいる人は、スーツを着た男性。

彼は、女子高生に囲まれながらも、うつとしそうに顔をしかめながら腕を組んで柱に寄りかかっていた。

誰を待っているのか知らないが、女子校の校門前にわざわざいるとは、よほどの目立ちたがりなのだろう。

そのくせ不機嫌そうにしている矛盾が気になるが、スクールアイドルとしてこれからどうするか決めなくてはならない海未たちにとつては関係ないことだ。

三人は、人だかりを避けて学校へ入ろうとした。

そのまま通り過ぎればよかったのだが、海未は、ちらりと男の方を見てしまった。

「……………ん」

「あ……………」

すると、ちょうどその男と目が合ってしまった。

しまった。

そう思い二人の手を引いてその場を離れようとするが、ことりは怪我をしていて急には動けない。

男は、海未と目が合うと、群がっていた人ばかりをかき分け向かってくる。

海未が再び彼を見たときにはすでに目の前にいた。

「見つけたぞ……………高坂穂乃果」

男は、そういうとおもむろに穂乃果へ手をのばした。

それを遮ったのは海未だった

「あ、あなたは誰ですか。なぜ、穂乃果の名前を？」

「しらばっくれるな。貴様の顔は、ヘルヘイムで確認した」

「——っ。もしかして、あの……………」

赤い騎士、と言いかけて口をつぐんだ。

しかし、さつきの反応は、ヘルヘイムにいたという男の考えに確信を与えるのには十分だった。

「貴様等には話がある。来てもらおうか」

男は、海未の腕をつかんだ。

人見知りの海未は、見知らぬ男性にさわられ、鳥肌が立つのをかんじた。それが引き金となり、海未は、周りに向かって叫んだ。

「みなさん助けてください。この人、ストーカーです。誰か先生を呼んでください!!」

「ああ?」

捕まれた瞬間に海未が発した言葉を、男はすぐには理解できなかつた。しかし、それを聞いて色めき立っていた生徒たちがどよめき出す。

そして、

「なに、ストーカーだって?」

教師たちも駆けつけてくれた。

駆けつけてくれたのは、体育教師の山田先生だった。

朝はいつも、門番のように校門にいて、遅刻者を罰したりしている。

そんな彼女は、レスリングをやっていたこともあり、音の木坂の男性教師陣より強く、信頼が厚いのだ。

そんな彼女は、ストーカーだと呼ばれた男を見るなり、ゴキゴキと指を鳴らしながら近づいていった。

「こんな朝っぱらの校門前でよくも堂々と出来たもんだね」

「ちよつと待て。貴様、何か勘違いをしている——」

「——問答無用。女の敵は、成敗!!」

「き、貴さつ。貴様等待て。——ええい、放せ!!」

強行しようとした男に、最初に山田先生がタツクルをかますと、通りがかりの男性たちもそれに加わって、男を羽交い締めにした。さすがの男もその人数は振り払えないようで、手足をばたつかせて喚いていた。

「今のうちに行きますよ」

「あの人、大丈夫かな？ それに、ストーカーなんて言っちゃつて……」

「いいんですよ。こんなところまで追ってきて、突然私たちに襲いかろうとしたのですよ？ とりあえずストーカーで間違いはありません」

「そ、そうだね」

まるで汚いものでも落とすように、男に捕まれたところを何度も払っていた。

穂乃果とことりは、ストーカーとして制裁を受けようとしている男を心配していたが、海未の強い口調に納得してしまった。

「二年、高坂穂乃果、園田海未、南ことり。至急理事長室まで来てください」

放課後。

海未たちは、今朝の一見で何かあるだろうと予想していた。

今朝の男は、ヘルヘイムに関わりのある人間だろうことはわかっていた。公衆の面前でヘルヘイム内にいたと公言する人間は、よほどのバカかヘルヘイムに唯一立ち入ることが出来るユグドラシルの人間だけだ。そして、

男は後者だろう。

ユグドラシルの人間は、ヘルヘイムのことに関して事情聴取することとはある意味当然であり、それをありもしない言いがかりで拒んだのだ。

それを考えれば聞かれることは、ヘルヘイムでの出来事についてだろう。

突然触れられたからと言って、なぜあのような後先考えない行動をとってしまったのか。

海未は、悔やむが時すでに遅し。

せめて聞かれることが、なぜヘルヘイムに入ったのかだけであることを祈るのみだった。

「あら。あなたたちは、さつき放送で呼ばれていたわね。いったいなにをしたのかしら?」

「えっ。絵里……、生徒会長」

三人それぞれなにを聞かれるのか考えながら歩いているときだった。

彼女たちの視界の隅を、絹のような金髪がくすぐった。

すっかり忘れていた。と言うよりは、自分たちの命だけで精一杯で、ついさつきまでヘルヘイムに入った理由をも忘れていたのだ。

目の前に現れたのは、彼女たちがヘルヘイムに入った原因であり、ついに見つけることの出来なかった絢瀬絵里だった。

命を掛けた非日常から離れ、冷静になりつつあった彼女たちは、絵里を見てあの日の出来事で抜けていたことを思い出した。

ヘルヘイムに入る絵里を見た時、真っ先に走っていった穂乃果は、飛びかかるくらいの勢いで絵里の無事を直接確かめた。

「絵里生徒会長。無事だったんですか?」

「ちよっと、いきなりなに。……. いったい何の話かしら?」

「何の話って、どうしてヘルヘイムに入っといっちゃったんですか？
穂乃果たち心配して……………」

ヘルヘイムという言葉に絵里は、はっと息を飲んだ。

それは、心配を掛けてしまったことに対する罪悪感からきたものか
と思ったが、海未には、何か別のことによるもののように感じられた。

その証拠に、絵里の口から出たのは、謝罪でもなければ感謝の言葉
でも無かった。

「ヘルヘイムに入った？ なにを言っているのかわかりませんが」

「え、だってあの時……………」

「あ、エリチ。なにしとるん？」

「ああ、希。いえ、何でもないわ」

穂乃果は追求しようとしたが、横からの声に遮られた。

その声の主は、独特なエセ関西弁で生徒会長を親しげにあだ名で呼
んでいた。そんな人は、音の木坂に一人しかいない。

「そっか。ほなら、早う生徒会室へ行こか？」

「そうね、わかったわ。ちよつと待ってて」

二つのお下げと包容力のある笑顔が特徴の彼女は、東條希。絵里と
同じ生徒会の副会長を務める少女だ。

「変なことを言っていないで、あなたたちは早く理事長室へ行きなさい。」

希に急かされた絵里は、穂乃果たちに向かってそれだけ言うと、すたすたと立ち去ってしまった

「ちよつと待ってください——」

「——穂乃果ちゃん。生徒会長のことにも気になるけど、今はお母さんのところに行かなくちゃ」

「……そうだね、ことりちゃん。行こっか」

途中で言おうとしていたことを中断され、釈然としない穂乃果だったが、

自分のせいで遅れて、二人まで余計に怒られることになったら考え、ことりたちに付いていった。

「失礼します」

「どうぞ、入ってください」

ノックをし、理事長の許しを得て部屋の中へと入った。

部屋の中には、ことりの母親である理事長と、案の定校門で会った男の姿があった。

これで間違いなくヘルヘイムに入ったことについて聞かれると、海未たちは確信する。

「まずは、あなたたち。この方に見覚えはありますか？」

おどおどして答えられない穂乃果とことりを見て、代表して海未が口を開く。

「……………はい、今朝のストーカーです」

「いいえ。あなたたちはちゃんと知っているはずです。この方は、ユグドラシルからお越し이었다、九紋戒斗さんです。あなたたちは以前、この方と会っているようですね」

「いいえ、知りませ——」

「——貴様等、俺をはめようとはいい度胸だな。」

理事長が口を開こうとしたところ、戒斗は、割って入ってきた。

眉間の当たりをひくつかせているところを見ると、相当今朝のことが気に障ったようだ。

「なにもかも、知らないで通すつもりだろうが、これで言い逃れはできんぞ」

そう言って、彼は、スーツのポケットに手をつっこんだ。

取り出したのは、薄い手帳のようなもの。よく見ると、それは穂乃果の生徒手帳だった。

「それ、穂乃果のだ！」

「ちよつと穂乃果！」

考えなしに受け取ろうと前にでる穂乃果を、海未は止めに入った。

海未は戒斗を睨んだ。

言い訳できまいとふんぞり返っている戒斗に、敵意を向けたのだ。

海未が戒斗に対して攻撃的になる理由は多々あったが、一番の理由はヘルヘイムでの邂逅時の出来事だった。

インベスに追いつめられた穂乃果を助けたと思いきや、彼女に槍を突きつけたのだ。

どう言うわけか、目の前の穂乃果をそのときの少女と認識していない様子。

でも、話が長引けばぼろが出てくるだろうし、何より穂乃果は隠し事が苦手だ。ひとたびステージドレスの少女と穂乃果が重なってしまえば、どんな行動にでるかわからない。

話を早く切り上げるため、海未は頭をフル稼働させて論理を構築し始めた。

「そ、それは………。少し前に穂乃果が落としたものです」

「少し前だと。これは昨日拾ったんだが？」

「そうですね。昨日見つけてすぐに届けに来てくださるとは。さすが、かのユグドラシルコーポレーションの方です」

「これは、クラック発生の通報を受け、ヘルヘイム探索中に発見したものだ。これがヘルヘイム内にあったことはどう説明する」

「クラックは、神出鬼没ですから。何かの拍子に入ってしまったのかもしれないね。クラックは、横穴だけではなく地面にも現れることがあると聞いたことがあります」

「ちっ」

戒斗が舌打ちをしたところで、海未はほっと胸をなでおろした。

もともと、ヘルヘイムを常時監視しているというユグドラシルなら、映像を取つていてもおかしくない。それを出されていたら、まず言い逃れは出来なかっただろう。

しかし、それを最初に出さなかったということは、それを出せない何らかの理由があるということだ。

もし出せないなら、勝機はある。海未は、早く話を切りあげるために口を開こうとした。

「いいだろう。なら、これならどうだ」

が、戒斗はそれを許さなかった。また、戒斗はポケットを探った。

次はなにを出してくるのか身構えていた。

なにが出てきても冷静に対処しようとしていた海未だったが、突き出されたものを見て言葉に詰まってしまった。

彼が海未に突きつけたものは、一枚の写真。

そこに写っていたのは、異形の果実が生る森の中、突きつけられた海未をじつと睨んでいる海未自身だった。

「確か、ヘルヘイムには入っていない。そう言ったな。だが、貴様と写るこの果実は、ヘルヘイムにしか生息していない主の植物のものだ。なぜそんなものと写る写真が存在するんだ？」

「そ、それは……………」

「そして、貴様」

「ことり、ですか？」

「貴様のその怪我、階段で転んだと親に話したようだが、ヘルヘイムで負った怪我ではないのか？」

「その……………」

さすがの海未も、自分の写った写真の前には言葉が出ず、ことりはうつむいてしまった。

戒斗も頭が切れる。

明らかに目的は穂乃果だが、彼女への追求が難しいと判断すると、三人の防衛線である海未の口を止めた後、一番気の弱そうなことりに標的を変えたのだ。

海未は、唇を噛む。

反論したかったが、反論するならばヘルヘイムについて触れなけれ

ば説明できないところまで来てしまっていた。

海未は、横目でことりの様子をうかがった。

守るべき優先順位から考えれば、明らかに一番ねらわれていて、知られたらまずいネタを持っている穂乃果だ。

ステージドレスの少女が穂乃果かもしれないと言う疑念の段階でならまだ大丈夫なようだが、戒斗のなかで同一人物であると言う確信が生まれてしまったなら、どうなってしまうかわからない。

なにせ、出会い頭に武器を突きつけてくる人間なのだ。

そんな男なら、ユグドラシルの関係者という立場を盾になにをしようとするかわからない。

海未は、たとえば自分を犠牲にしても穂乃果を守ると腹をくくっていた。しかし、ヘルヘイムに入った疑いをかけられているのは、海未だけではなくことりもだ。

海未が認めると言うことは、必然的にことりもヘルヘイムに入ったことを認めることになる。

様子を確認しようとする海未とことりの視線が重なった。

それを見て、海未は口を開いた。

「すみません。嘘をついていました。本当は、ことりと二人でヘルヘイムへ入ってしまった」

「ふん。……なに、二人だと？」

「はい。二人です」

予想とは異なった告白に、戒斗は海未を睨みつける。

戒斗と同じく予想外に驚いた穂乃果が口を開こうとするが、海未は視線でそれを制した。

ことりと視線を交わしたとき、

——ことりのことはいいから、穂乃果ちゃんを守って。

彼女の瞳は、そう語っていたのだ

穂乃果には、ヘルヘイムで命を救われているのだ。

今度は、自分たちが穂乃果を助ける番だ。

同じ思いを共有していた二人は、これから罪を告白しようと言うのに晴れやかな気分になっていた。

「そうなんです。うそ付いてごめんなさい。ヘルヘイムに入っちゃだめだってわかってました。でもことりたちのインベスがヘルヘイムに入っちゃって、追いかける暇もなくて入っちゃったんです」

「それは本当なの、ことり？」

理事長であることりの母は、ことりの告白を聞いて、少し低い声で聞き返す。それにことりは、

「うん。入っちゃだめだってわかってたから、怒られると思って、怖く

なつて……ごめんなさい」

瞳に涙を浮かばせて謝罪した。

もはや、本当なのか嘘なのか見分けが付かないほどの迫真の演技に、穂乃果を守るために彼女と競合する海未すらドキリとってしまうくらいだった。

「ちつ、もういい。もう二度とヘルヘイムに立ち入るな」

ことりの必殺の一撃が奏したのか、戒斗は舌打ちをすると一言説教をこぼすと、海未を睨みつけながらもぶつきらぼうに生徒手帳を差し出した。

「どうした。いらないのか？」

「穂乃果。ありがたく受け取っておきましょう」

「え？ ああ、うん。……そうだね。ありがとうございます」

未だ戒斗に敵意むき出しの海未にたじろぎながら、穂乃果は、戒斗から生徒手帳を受け取るために進み出た。

が、穂乃果が生徒手帳を受け取ろうと手を伸ばしたとき、逆に戒斗の方が彼女の腕をつかみ引き寄せた。

「え？」

戒斗は、動揺する穂乃果へ顔を近づけると、彼女の耳元でささやいた。

「貴様が、鎧武か？」

「え。がい、む？」

「な、ななな、なにをしているのですか。破廉恥な!!」

海未は、あわてて彼から穂乃果を離そうと二人の間に入った。

そのとき、海未と戒斗の目が交錯した。

どうやら戒斗は相当の負けず嫌いな様子。

海未へ向けた挑戦的な笑みが、全てを物語っていた。

海未への仕返しのために穂乃果を使ったのだ。

「じゃまをしたな。俺の用はもう済んだ」

仕返しをして満足したのか、はたまた本当に目的を達成したのか、戒斗はそれだけ言い残して理事長室から出ようとしていた。

「待ってください、九紋さん」

「用は済んだと言ったはずだ、弱者ども。それに、焦らずとも、何度も顔を合わせる事となる」

「そ、それはどういう……」

「言う必要はない。知りたければ、そこの学園長に聞け」

戒斗は、一度立ち止まったが室内を人にらみすると、有無を言わせ

ず扉の向こうへ消えた。

学園長を含めた四人は、そんな彼の姿を呆然と見ていた。

去り際に戒斗の口走った一言など、気になることは多々あった。

しかし、その場にいた全員が、考えていたことは全く別のことだった。

怒りで顔を真っ赤にした海未を筆頭に、穂乃果、ことりは思う。

穂乃果に行った戒斗の行動を見ては、海未が言ったストーカーと言うのも変態だという意味においては間違っていないかではないかと。

「海未ちゃん、ことりちゃん。ごめんね」

「いいんですよ。穂乃果には、こんなことでは返しきれない恩がありますから。それに、元はと言えば、私が穂乃果の手綱をつかみ損ねていたのがいけなかったのです」

「それ、ふつうに責められるより来るものがあるんだけど」

「穂乃果ちゃんが謝ることなんてないよ。それに、結果的によかつたって思うんだ」

海未に続き、ことりは頬をさすりながら言った。

その頬の赤みは、理事長室で負ったものだ。

戒斗が帰った後、ことりの母は、ことりに本当の追求した。

嘘がばれてしまった以上、ことりは、穂乃果のこと以外は全て真実を話した。

ことりが全てを話し終わると、ことりの母は、ことりの頬を張った。

いつも優しくそうで怒ることなど想像できないことりの母親が、穂乃果たちの前で手を挙げたのだ。

それを見て、穂乃果たちが衝撃を受けていると、ことりの母はことを抱きしめた。頬から伝う涙が、ことりのことを思っていることを物語っていた。

ことりは、母親の腕の中で、何度もぐめんなさいと泣き続けていた。

「今回のこと、正直に言えなくて本当は苦しかったんだ。本当のことを言えて、胸に引つかかかったものがとれたみたい。だから、穂乃果ちゃんは謝らないで。むしろ、ことりが穂乃果ちゃんに感謝してるんだから」

すっかり、胸のしこりもとれたようで、ことりはすがすがしい笑顔を見せた。

「穂乃果。これからアイドルになろうって言う人が、そんな暗そうな顔をしてはいけませんよ」

「海未ちゃん」

「まだ、なにも決まっていけないのですから、今日は、絶対何か一つは決めてしまいますよ」

「うん。ことり、いい案をたくさん出しちゃうよ」

「海未ちゃん、ことりちゃん。そうだね。……あ、そうだ」

穂乃果は、ふと思い出したように鞆の中に手をつっ込んだ。

「どうしたのですか穂乃果？」

「二人とも。スクールアイドルをする前に、一番大切なことを済ませなくちゃ」

穂乃果は、そういうと一枚の紙を取り出した。

穂乃果、海未、ことりは、生徒会室で絵里、希と対峙していた。

彼女たちの間には、一枚の紙があった。

その紙には、部新設申請書と書かれていた。

期待に胸を高鳴らせている穂乃果率いる三人に対し、生徒会側の二人は険しい顔でその紙を見つめていた。

「これは、……………何ですか？」

「はい、アイドル部新設の申請書です」

「いえ、それは見ればわかります」

即答する穂乃果に、絵里は嘆息する。

「悪いけれど、部活の新設には、初期メンバー最低でも五人は必要になるの。だから、この申請書を受け取ることとはできないわ」

「ですが現在、メンバーが五人以下の部活も多く存在していると聞いてます」

「それでも、設立当初のメンバーは五人以上だったはずや」

絵里に反論する海未だったが、希によって返されてしまう。

「わかりました。五人ですね？」

穂乃果は、生徒会長のあまり感情の見えない事務的な返答にもめげず、生徒会室を後にする。

後二人集めれば、文句も言わないだろう。

穂乃果の頭には、アイドル部を設立させることしか頭になかった。

そんな、穂乃果を引き留めたのは絵里だった。

「なぜ、こんな時期に部活を立ち上げようなんて……。あなたたちは

「2年生でしよう?」

普通、ほとんどの生徒は入学時に既存の部活に所属し、最後までそこで部活で活動する。部活を新設するにしても、1年生が申請をするのがほとんどだ。

今まで、二年次に部活を新設しようとした例を、絵里は聞いたことがなかったのだ。

ましてや今この学校は、これから廃校になろうとしているのだ。

新設したところで活動期間は長くとも二年間。こんな時期に部活を新しく始めるなど、絵里には理解ができなかったのだ。

「私たち、廃校を阻止したくって……。知ってますか? 今すぐく人氣なんですよ、スクールアイドル。スクールアイドルがいる学校は、ほかの学校よりも入学者が多くなっているんです。」

「スクール、アイドル……。それなら、たとえ五人集めて来ても認められません」

「どうしてですか?」

「あなたは、廃校を阻止するために部活を始めたいといったわ。だけど部活は、自分たちのためにやるものであって廃校を阻止するなどといった理由でやるものではないからよ。それに、校長先生をはじめとする職員の方々が前から対処しようとしてできなかったなの。あなたたち一般生徒がいまさら何かをしたところで覆るものではないわ」

「うっ」

穂乃果の脳裏に、昨日ことりから聞いた話がちらつく。

ことりの母である音の木坂理事長ですらできなかったという事実がなおも深く突き刺さる。

「そんな、無駄なことに時間を費やす余裕があるなら、進路を考えると、自分たちのための部活に打ち込むとか、もっと有意義な事の時間を使うことを考えなさい」

「行こう。海未ちゃん、ことりちゃん」

「穂乃果……」

「穂乃果ちゃん……」

踵を返す穂乃果に、海未とことりは心配そうにつぶやいた。

やはり、大人ができなかったという事実は、何度聞いても響くものがある。

しかし、あきらめないことを義務付けられた穂乃果は、その言葉を受けとめた上で前へと踏み出す。

「まずは、五人集めなきやね。……また来ます」

穂乃果は、笑顔で振り返るとあきらめないと言った絵里に対して生徒会長たちに宣言した。

それは、五人集めても認めないと言った絵里に対しての宣戦布告。

穂乃果の、あきらめないという意思表示だった

そんな穂乃果を見て、海未たちは思わず笑ってしまう。

新たなやるべきことを見つけた穂乃果は、生徒会長らに一礼すると生徒会室を飛び出して行ってしまおう。

海未たちも一礼すると穂乃果の後を追った。

穂乃果は、生徒会室のすぐ横で待っていた。ことりが追いつくと、再び歩き出す。

「海未ちゃん、ことりちゃん。やること、いくつか決まったね」

「……そうですね」

「まずはメンバーを五人に増やして、部活の申請をして。そうだ。新入生をメンバーに引き込むためにライブをしなくちゃ」

「うん。なんだかとても大変そうだけど、頑張らなくっちゃ。そのために、わたしは早く足を直さないとね」

「ええ。その間に、どのようにメンバーを増やすか、そもそもどのような曲でライブをするのかを決めないですね。本当に、やるべきことがたくさんです」

やることはたくさんある。まだ始めたばかりでほとんど何も知らない状態で、ここまで課題が出てくるのだ。

しかし、穂乃果たちは、その状況を楽しんでいると感じていた。

それは、親友と同じ目標に向かっていっているからだろうか。本当にやり

たいことだからだろうか。

「うん。今から考えただけでも大変だろうけど」

おそらく、どっちもなのだろう。

穂乃果は、窓から空を見る。そして、その場で天高く手を突き出した。

「……絶対に、廃校なんてさせないよ!!」

「おー!!」

二人もそれに倣い空に手を突き出した。

彼女たちは、今この瞬間が自分たちにとってかけがえのない宝物になっていくのを確信していた。

穂乃果たちが去った生徒会室。残された絵里と希は、ふうと息を吐いた。

「エリチ、さっきの件かと思ってハラハラしてたやろ」

「別に。そんなこと……ないわよ」

「ホンマに？ さっきも、あの時も、うちが間に入らなかつたら危なかつたと思うんやけどな」

「……それについては、ありがとう」

「ふふ。どういたしまして」

ハラハラなどしていないといっていた絵里だったが、内心焦っていた。

何度も確認したはずだったのに、ヘルヘイムへ入るところを見られてしまったのだ。しかも、よりにもよって音の木坂の生徒に。

今朝、穂乃果たちに言われた時には、突然のことで驚き、希が助け舟を出してくれなかつたらうまく逃げられなかつたかもしれない。

絵里は、希に感謝しつつ、次はもっと警戒しなければと自分を戒める。

そう、もつと気を付けなければならない。今回のことだってそうなのだ。

「絵理ち、ついにうちのら高校にも、出てきてもうたね。スクールアイドルやりたいてって子」

「そうね……」

「でも、よかつたやん。この学校にもスクールアイドルが誕生すれば、きつと廃校のことだって——」

「——駄目よ」

「でも、エリチ……」

「駄目よ。そんな方法での解決はさせない」

絵里の目が、決意に満ちた目になる。

「彼女たちをスクールアイドルにさせるわけにはいかないわ。絶対に」

絵理は、デスクの下で手を握りしめる。その手の中には、果実の意匠の施された錠前があった。

第四話 『スクールアイドルになるには?』

「穂乃果」

「なに?」

「ちよつと、聞きたいことがあるのですが……」

「穂乃果ちゃん。お菓子用意できたよ」

「うん。今、お茶を入れるね。……」

「おう、サンキュー。やっぱり、ここに来たら穂むらの和菓子だよな」

ことりは、穂乃果が持ってきたお菓子を机に並べ、穂乃花は持ってきた急須でお茶を入れていた。

その場は、さすが和菓子屋「穂むら」の娘の部屋で行われるお茶会。

お菓子は、穂むらで販売されている串に刺したお餅であり、お茶は和菓子によく合う日本茶だ。

穂乃果とことりは、そのお餅を頬張るとお茶をずずとすすむ。

そして、ほつと息を漏らす。

その姿は、これから大事なことを話し合おうとしているものの様子ではなく、なぜ、こんなくつろぐ気満々なのですか? などと聞きたかったのだが、そうは問わず、そんな二人をじとつとした目で見ていた。

「今日という今日は、しっかり何かを決めますと言ったはずですが」

「もちろんそのつもりだよ」

「決めることは、アイドルとしてなにをするか。それを実行するためにどうすればいいかと言うことですが」

「大丈夫、わかってるって」

「なら……」

海未の頬がわずかに赤らむ。

よく見れば、少し肩や腕が震えている。

そこに現れていたのは、緊張と羞恥。本来、穂乃果たちしかいない部屋であれば、緊張も恥ずかしがることも無いはずである。

にもかかわらず、なぜ体を震わせているのか。

海未は、同様に震える指をその緊張の原因へと向けた。

「なぜ、この人がここにいるんですか？」

「最近会ってなかったけど、この人とは傷つくな」

「そうだよ、海未ちゃん。幼なじみの顔を忘れちゃったの？」

「忘れたわけではありません。そうではなくて、なぜ、穂乃果の部屋に、私たちのアイドルの会議に、さも当たり前のように平然とレンジさんがいるんですか？」

海未の指した先にいた人物。それは、海未たち三人の幼なじみであり、穂乃果からはレンと呼ばれている少年。憐次《レンジ》であった。

「なんでって言われても、穂乃果に突然呼び出されてよ。バイトもなかったから来たんだけど……」

「そうだよ。穂乃果が呼んだんだよ」

「だから、何で関係のないレンジさんと呼んだんですか」

「関係なくないよ」

「いったい、何の関係が……」

いまいち穂乃果が憐次を呼んだ理由がわからない海未が聞き返す。

そんな彼女に、穂乃果はさも当たり前のように、海未へ返事を返した。

「だって、私がスクールアイドルを知ったのだって、レンくんがいたからなんだよ」

「え。そんなこと聞いていませんが……」

「言っただけじゃなかったっけ？ まあ、それは別にいいの」

「まあ、いいですけど……。それって、二人で出かけていたってことですよね」

「え、何て言ったの？」

「い、いえ。何も……」

海未のつぶやきが聞こえない穂乃果は、海未に聞き返した。

海未は、口では何もないと答えたが、納得のいつていなさそうな顔をして隣次へ説明を求めような視線を送っていた。

が、そんな海未に気付かない穂乃果は、二人のやりとりなどお構いなしに話を進めた。

「それに、アイドルっているんな人に見てもらわなきゃでしょ？ 女の人の気持ちならわかるかもだけど、男の人がどう思うかわからないじゃない？」

「まあ、それはそうですが……」

「だから、これから決めることが、男の人から見合っているかどうか教えてもらうために呼んだんだよ。穂乃果冴えてる！」

海未は、完全に納得はしていないものの、一理ある意見には同意を示した。

海未はもう一度隣次を見た。

すると、彼がすでに海未の方を見ていたことに気づいてたじろいだ。

「どうしたんですか、レンジさん」

「それにしても、海未もことりも、変わったな」

「ええ？」

予想外の言葉に、海未は思わず声が裏返ってしまった。

咳払いをして平静を装って返す。

「なっ。変わったってなになが、ですか？」

「いや、あの人見知りだった海未が、まさかアイドルをやるうだなんてな。あのころからしたら信じられないことだろ。ことりにしたって、自分が目立つところに立つの、苦手だっただろ？」

「わ、悪いですか？ 私がアイドルをやっては。どうせ、私にアイドルなんて似合いませんよ」

「おいおい。アイドルが似合わないとかそういう意味で言ったんじゃない。むしろ、アイドルするなら結構いい線行くかもって思うぜ」

「な、なぜですか？」

「だって、海未もことりも、少し見ないうちにこんな綺麗になっちゃってたからさ」

ぼんっと、同時に赤くなることりと海未。

「もう、レンジ君ったら。ありがとう」

「な、ななな、な。綺麗って、なに言っているんですか!!」

しかし、落ち着いて返すことりに対し、海未大きくうろたえていた。

そんな二人を、穂乃果は少し不機嫌そうに見つめていた。

隣次が彼女に気づくと、彼女は隣次に迫った。

それを聞いていた穂乃果は、

「ちよつと、海未ちゃんところりちゃんはつて。穂乃果は。穂乃果はどうなの?」

「ん? 穂乃果は、……ふつうっていうか、昔と変わらない感じ?」

レンジは、顔を逸らしてつぶやいた。

それをみて、穂乃果は、さらに追求しようとする。

「えー、なにそれ。どうして穂乃果だけふつうなの? 変わらないってどういうこと?」

「ふ、ふつうなものはふつうだし、変わらないものは変わらないんだよ。そそ、それよりも、アイドルの話、しなくていいのか?」

「なんか、話逸らされた。……まあ、いいけど」

一瞬ふてくされた顔を見せたものの、すぐに輝きを取り戻すと脇に置いてあつたものを机の中央においた。

「じゃじゃーん」

穂乃果が出してきたのは、ピンク色のノートPC。

「このサイト、いっぱいスクールアイドルのステージの動画とか公開されててすごいんだよ」

すでに画面が開かれ、動画サイトのページが開かれていた。

それは、スクールアイドルが自分たちのライブやPVを公開し、一般人から評価を受けるために設立された専用サイトである。

このサイトは以前、ダンスの美しき、完成度を競い合う「ビートライダーズ」と呼ばれるストリートダンスーたちの争いを取り仕切っていた「DJサガラ」によって立ち上げられたものだ。

DJサガラは、曲のビートに乗る者たち（ビートライダーズ）の間ではカリスマ的存在であり、そのダンスの美しき、完成度をネットで集計しランキング付けしていた。

近年、ビートライダーズは、いがみ合うのをやめてチームの隔てなくダンスを楽しむようになったため、ランキング自体は存続しているもののDJサガラの手を離れた。

面白いことをより面白くすることを信条とするサガラ。

そんな彼が次に目をつけたのが、アイドル戦国時代と呼ばれるほどに競争が激化しているスクールアイドルであったのだ。

穂乃果が、黒い四角い画面に浮かんだ再生ボタンをクリックする。

すると、テンションの高い男が画面に現れた。

「Hello! 全国のスクールアイドルを愛するevery ba

dy! 今日紹介するのは、現在人気No. 1のスクールアイドル。A—RISEの新曲だぜ。Hey!!」

そんな感じでテンション高く始まったその動画は、サガラのちよつとした説明の後、A—RISEのミュージックビデオに切り変わった。

すると、穂乃果とことりは、すぐに目を輝かせ、さつきまでくつろぎモードの二人を怒っていた海未ですら言葉を忘れて見入っていた。

歌声は透き通るように綺麗で、ダンスは一つ一つの動きが指先までぴしっとそろっており、いつさいの乱れもない。

が、そういった技術はさることながら、穂乃果たちには、彼女たちが輝いて見えた。

「すごいですね」

「うん。何てったってA—RISEだもん」

「でも穂乃果ちゃん。A—RISEの人たちがすごいのはわかったけど、これからどうするの?」

ことりが聞くと、穂乃果は胸を張って答えた。

「まずはやっぱり、先人から学ぶべきだと思うんだ。穂乃果たちに今、なにが足りていないのか。それがわかれば、やるべきことは自ずとわかると思うよ」

「穂乃果が、いつにもましてまともなことを言っている」

「つて、レン君が教えてくれたんだ」

「ああ、・・・・・・・・あなたでしたか」

「あ、なんかがっかりされた」

「俺もなんだか傷ついたんだけど・・・・・・・・」

「がくつと肩を落とす穂乃果と隣次を見て、海未は慌てて補足を入れた。」

「別に、悪いと言っているわけではありません。ですが・・・・・・・・」

「足りないところっていても、全部足りてない気がしちゃうよね・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・」

隣次は、ため息を付く。

穂乃果に、アイドルの動画を見ることを勧めたのは、間違いなく彼はだったが、なにもスクールアイドルのトップを参考にしろとは言っていない。

あくまで、そこまで差を感じない程度の親近感あるものを参考にしろと言ったのだ。

わりと近い場所にあるとか、そういう親近感ではないのだ。

穂乃果がA―RISEのライブなんて流したおかげで、穂乃果は天を仰ぎ、海未は床に手を突き、ことりはPCの前で足を抱えていた。

見かねた憐次は、口を開いた。

「まずは、歌とダンス、そして衣装だな」

「え？」

「足りないものだよ。アイドルやる上で絶対に必要になってくるもの」

「……………そうですね。確かに必要ではありませんね」

「このほかにもいろいろ技術だとか必要かもしれないけど、全てこの三つの後だ。この三つがなければ、後のものもまず無理だぜ」

憐次も、アイドルに関して詳しいわけではない。

しかし、そんな憐次でさえ気付くことがなかなか話に持ち上がってこないことに彼は気になっていた。

憐次から見て、三人とも早くから高いところを見過ぎている気がした。

穂乃果のスクールアイドルを目指すきっかけであり、スクールアイドルと検索をかければ真っ先に名前が挙がるA|R|I|S|E。

いやでも、目に入ってしまう彼女たちは、全スクールアイドルのあこがれだ。スクールアイドルを始めるとなれば、真っ先にA|R|I|S|Eのようにと思ってしまうのもうなずける。

高い目標を見るのはいいかもしれないが、それで大事な基礎が見え

なくなるのはだめだろう。

だから、憐次はあえて口に出したのだ。

そのかいあつてか、穂乃果は、スクールアイドルと書かれたノート
のページに「歌」「ダンス」「衣装」とうなずきながら書いていた。

「まずは歌。これは、歌詞と曲の二つに分けて作ったほうがいいだろ
うな。プロやそこそこなれた人なら同時に出来るかもしれないけど、
初心者のお前たちには無理だろう。ダンスは歌が出来てからとし
て。……衣装は、ことり」

「はい。なに？」

「お前、スケッチブックに何か書いてたよな？」

「み、見てたの？」

「いや、同じ部屋にいたんだし見えるよ」

見せろと合図する憐次を見て、ことりはためらいがちにスケッチ
ブックを開いた。

「ええと。アイドルやるって聞いたときから書いてて、今さつきちよ
うど書き終わったんだけど、どうかな？」

「え。もしかして衣装？」

「そうだよ。それなりに可愛くできたと思うんだけど、どうかな？」

「どれどれ……」

穂乃果と海未が、ことりのスケッチブックをのぞき込んだ。

スケッチブックに描かれていたのは、茶髪に大きな瞳をもつ少女と、ピンクを基調としたステージドレスだった。茶髪の少女は、穂乃果をイメージしたもののようだった。

実際の人物が目の前にいるため、スケッチブックをのぞく三人は、容易にその衣装をイメージすることができた。

ことりが描いた衣装のスケッチを映した二人の瞳は、大きく見開かれた。

「す、すごい。すっごく可愛いよ」

スケッチを見た瞬間、穂乃果はことりに急接近すると、その手を取った。

「そう？ 本当？」

「本当だよ。穂乃果には見えたよ。三人でこの衣装を着て、歌って踊って、きらきらに輝いている姿が」

「まだ、歌もダンスも出来てないけどな」

「ちよつと、レン君。そんな夢のないこと言わないでよ。レン君は、この衣装いいと思わないの？」

「それは………。まあ、いいと思うよ」

「ふふ、ありがとう。穂乃果ちゃん、レンジ君」

穂乃果は、衣装を見るなり大絶賛。憐次も頬をかきながら、称賛を送った。

それを聞いたことりは、少し恥ずかしかったのか顔が赤いが、はにかんだ笑顔を見せた。

が、ひとつ違和感があった。

穂乃果と同じく目を見開いて驚いていた海未が、未だなにも発さず黙っていたのだ。

三人が、そろって彼女の顔をのぞくと、彼女はようやく口を開いた。

「そ、そそそ、それは何ですか？」

「海未ちゃんどうしたの？　．．．．．どこか変なところでもあった？」

信じられないものを見たかのように、ふるえる海未。

そんな彼女の口から出たのは、それは何かという問い。

いつもと違う彼女の挙動に、不安を覚えることりが海未に聞き返す。

すると、海未は慌てた様子で返した。

「いえ、変というわけではありませんが．．．．．このスカートらしきものからスーッと伸びているのは、何でしょうか？」

海未が指したには、ピンク色のドレスのやや短めのスカートから伸びる肌色だった。

三人にとつて一目承前だったため、意味のわからない質問に一瞬言葉が止まった。しかし、すぐにほぼ同時に彼女の問いに答えた。

「え、それは足だよ」

「足だね」

「足だな」

「素足に、この短いスカートということですか……」

「うん。だって、アイドルだもん！」

「アイドルだもんね！」

「アイドルだからな」

口をそろえて言う三人に、海未は一拍おいて言い放った。

「ないです。あり得ません。こんなスカートが短いなんて」

「ええ、なんで？　大丈夫だよ。海未ちゃんそんなに足、太くないよ」

「そういうこと、もう少しありますが問題はそこではありません。破廉恥にも程があると言っているんです」

ただでさえ人見知りな海未だ。彼女がアイドルをやるってだけで驚くほどののに、いつもの制服よりももう一段階くらい短いスカート

はハードルが高すぎたのだろう。

男の隣次から見たら、制服のスカート丈とそう変わらないように見えるが、彼女からしたら、その数センチが大きな違いなのだろう。

短いスカートを断固拒否する海未。

そこに、声をあげたのはことりだった。

どうやら、衣装をどうしても海未に着させたい様子。自分だけでは説得できないと感じた彼女は、隣次に助けを求めた。

「でも、短いほうが可愛いと思うんだけどな。レンジくんはどう思う?」

「そうだな。短いイコール可愛いとは言わないけど、似合うと思うぜ」

「………本当、です、か?」

ことりの問いに隣次が答えると、海未は小声でつぶやいた。

「ん? なにが?」

「に、似合うっていうのは、………本当なのかと聞いているんです!」

「お、おう。本当だけど………あくまで思うだけだな」

「そ、そうですか。………そ、そこまで言うなら、着ないことも………」

「あれれ?」

「な、何ですか!？」

顔を赤らめ、うつむき加減で着ることに納得を示した海未は、いつの間にか横にあつた、穂乃果の今にも笑い出しそうな顔を見て驚きの声を上げた。

穂乃果は、笑いを押し殺すように手で口元を隠しながら不適な笑みを浮かべている。

「海未ちゃん。どうして急に乗り気になったのかな？」

「な、何ですか穂乃果」

「えー？ だって、ねえことりちゃん」

「ねー。穂乃果ちゃん」

「なにをにやにやしているんですか二人とも。私はただ、殿方の代表としての意見を聞いただけです」

「おいおい、代表だなんて大層な役目は、俺には無理だよ。さっきのは、俺の個人的意見を言っただけだ」

「な、なぜ、今そんなことを言うのですか!!」

「後で、俺の意見ぜんぜん参考にならなかつたなんて言われてもこまるからだよ」

海未は、顔を真っ赤にし、今にもビンタでもしそうな勢이었다。

隣次は、何か怒られることでも言ったかと自問し、しかし結局わか
らず首を傾げた。

「ともあれ、衣装については解決だね」

「うん。仕上げをやってくれるお店もあるみたいだし、このカーブの
部分とか難しいところもあるけど、がんばってみるよ」

「ちよつと待ってください。まだスカートの件が解決してまー」

「——はい、かいけーっ！」

海未は、まだ諦めていなかったようだが、穂乃果が問答無用でノー
トに書かれた衣装の欄に「解決！」とでかかど書いているのを見て
ついには諦めた。

「あとで、いろいろ調整《…》が必要ですが、ひとまずおいておきま
しょう。で、次は歌ですが…」

「それならもう決まってるよ」

「穂乃果、ずいぶん用意がいいですね。それも隣次さんの助言ですか
？」

「いいや。俺は何も言ってないけど」

「では、ことりが衣装と兼任を？」

「ええ？ 私は同時になんて無理だよ」

「そうですね。でしたらまさか、穂乃果が」

「もうやだな。穂乃果にそんなこと出来るわけないでしょ」

「まあ、そうですね」

「海未ちゃんが冷たい」

「では、いったい誰が？」

海未は、頭の中で整理する。

穂乃果は、無理。出来るはずがない。

ことりは、衣装と兼任は無理。

憐次が？ いや、想像も付かない。

ではいったい誰がいったい作るのか。残っているのはあと……。

「誰がって、海未ちゃんだよ」

「はい？」

「海未ちゃん、小学生くらいるとき、詩の授業でほめられてたし。そのあめにも中学生くらいるときにポエムを読ませてくれたことあったでしょ？ やっぱり歌詞を作るなら経験者の方が……。」

「忘れなさい」

「へ？」

「いますぐ忘れなさい」

「ちよつと、海未ちゃん？」

急に声を低くする海未。

羞恥が行くところまで行ってしまったのか、今の海未には、恥ずかしがるような仕草はなくなっていた。

「確かに、経験者がやることに越したことはないな。たしかに、あのポエムはなかなか……。ぷぷっ」

「……レンジさん」

隣次は、海未の態度の急激な変化に気づいたが、追撃をしてしまった。

久々の親友とのじゃれ合いを、隣次は楽しんでた。しかし、久しぶりと言うこともあり、調子に乗ったのがいけなかった。

むくりと立ち上がった海未の暗くにこった瞳を見て気づいてしまったのだ。

やりすぎたと。

「あの、海未さん。どうなされたのですか？」

「ああ、このノートPC。すこし持ちにくいですが、ちよつどいい重さで

すね」

さつきまで、A－RISEの動画を見ていたノートPCがパタンと閉じられると、海未によって持ち上げられた。

隣次たちは、机から上へ上がっていくPCを目で追っていると、急速に進む方向を変えたPCが隣次の目の前を通り過ぎた。

恐る恐る見上げると、うつろな目をした海未が、再びPCを振り上げていた。

「ええと、海未さん？ 俺の記憶が正しかったらんだけど、ノートPCはそうやって振って使うものじゃ無かった気がするんですが」

「いえいえ、大丈夫ですよ。このくらい加重があれば、記憶の一つや二つ、簡単に忘れることができますよ」

「待って。そのPCには、他人の記憶を自由にデリート出来る機能はないー！」

「問答無用です！」

さすがに、本気で身の危険を感じた隣次は、立ち上がった。

それを合図に追いかけてつこが始まった。

さほど広くはない穂乃果の部屋の中は、地獄絵図と化する。

「待ってくれ。よかった、よかったよあのポエム。感動した!!」

「忘れなさい忘れなさい忘れなさい忘れなさい忘れなさい忘れなさい忘れなさい」

い……………」

「それ、穂乃果のパソコン……………なんだけど」

「海未ちゃん。もうみんな言わないから、許して！」

うつろな目をした海未には一切の声も聞こえておらず、穂乃果の悲痛な訴えもことりの懺悔も届かない。

憐次は、追いかけてくる海未から逃げていたが、すぐに逃げるのをやめて海未と対峙した。

逃げるのみの憐次だが、なにぶん狭いので捕まるのも時間の問題だ。

それになにより、何の罪もない穂乃果のPCがスクラップの危機に晒されているのだ。

話を始めたのは穂乃果だが、PCには罪はない。

「一か八かだ!!」

意を決した憐次は、振り上げられた海未の腕をつかんだ。

一度つかんでしまえば、力で勝る憐次が有利だ。

「おい、いい加減に……………。あ……………」

完全に勝敗が決したと思った瞬間、憐次は足を滑らせた。

暴れているときに落ちた、穂乃果のノートを踏んでしまったのだ。

憐次がまず体勢を崩し、捕まれていた海未も道連れになってしまった。

「痛つてえ。海未、悪い大丈夫……か？」

「……………」

憐次は、反射で閉じた目を開くと、海未の瞳がやけに近いところにあるのを見て固まった。

憐次は、いままさに床に倒れる海未に覆い被るような体勢になっていることを理解した。

海未の瞳は、さっきまでのうつろで暗いものではなくなっていた。しかし、その代わりに顔をリングゴのように紅潮させており、目は今にも泣き出してしまうのではと思うほど潤んでいた。

憐次は、固まったまま動けなかった。いや、うごかなかったのか。

それは恐怖からか、罪悪感からか、それとも単に見惚れていただけか。

ともかく、憐次は動くことが出来なかったのだ。

「……………は」

「……………はっ」

ゆえに、先に動いたのは海未だった。

「は、ははは……」

手を振り上げ、唇を震わせる海未を憐次は黙って見ていた。

あれ、俺ってここになにに來たんだっけ？

憐次は、ただ黙って自問していた。

作戦会議と穂乃果に聞いて來たはいいものの、結局ほとんどなにも決まってるない。

俺は、いったいなにをしに來たんだ？

憐次は、自問するものの答えは返ってこない。そのかわり、

「破廉恥な!!」

海未の強烈なビンタが彼の頬に炸裂した。

「えー。では、話を再開したいと思います」

「レン君、ほっぺに紅葉が出來てるー!」

「うるさい。穂乃果は茶化すな」

穂乃果の言う通り。憐次の頬には、大きな紅葉型が赤く浮かび上がっていた。

熱を持った頬を擦る憐次へ、その紅葉を作った張本人である海未は、深々と頭を下げていた。

「申し訳ありません。つい気が動転してしまいました」

「わかってるよ、気にしてない。だから、頭を上げてくれ」

「でも、急に飛びかかってくるなんて、少しは考えてください。私が本当に他人のもので人を殴るわけがないじゃないですか」

「いや、目が結構マジだったし」

憐次がそういうと、他二人も首を大きく縦に振った。

「ほんとだよ。実際、穂乃果がダイビングキャッチしてなかったら、パソコンがどうなっていたか」

倒れたとき、海未は、持っていたPCを投げ出してしまっていたのだ。

最近のノートパソコンは頑丈に出来ているが、壊れていたら責任問題だ。

言い合っていた憐次と海未は、しゅんと小さくなってしまった。

「つと、言うことで、歌詞は海未ちゃんにおまかせします」

「そうですね、わかりま……………。それとこれとは話は別です」

「……………ちっ、ばれたか」

わざわざ口で舌打ちの音をいいながら悔しがる穂乃果。でも、実際海未以外に歌詞を作れそうな人はいない。

穂乃果は、諦めずに食い下がった。

「海未ちゃんしか、できる人がいないんだよ」

「では、穂乃果はどうなんですか？ 穂乃果だって今のところやるこ
とが決まっていなくていいでしょう」

「海未ちゃん。思い出してみて」

「ことり？」

痛いところをつく海未に対し、ことりが穂乃果を横目で見ながら言
いづらそうな顔で口を開いた。

自分の小学生のときの話が上がっていたせいか、自然にそのときの
ことが思い出された。

それは国語の授業で、自分で作った詩を発表する時間だった。海未
と同じように名前を呼ばれた穂乃果は、その場で起立し、原稿用紙を
大きく広げて読み上げたのだ。

「おまんじゅう、うぐいすだんご、もうあきた！」

海未の表情を見て、彼女が同じ結論に達したことに気づいたことり
は、苦笑しながら言った。

「ね。無理だと思わない」

「そ、そうですね」

海未は、思わず納得してしまった。

穂乃果に歌詞は無理だと。

「ほら、穂乃果には無理だつて」

「なぜ、穂乃果が自信満々にそんなことを言っているんですか」

「諦めろ。俺から見ても、もう海未が作詞するしか方法は残ってない。作詞するかしないかで、スクールアイドルになれるかどうか大きく変わってくると言ってもいい」

「そんなことを言うのであれば、レンジさんが作詞すればいいじゃないですか」

「俺は、アイドルアニメをはじめ、数々の歌の作詞を手がけるどこかの超人たちとは違って、作詞なんてこれっぽっちもできん」

「あなたもなぜ、自信満々に……」

「ともかく、頼みの綱は海未ちゃんだけなんだよ」

「お願い。海未ちゃんしかないの」

「全部が無理でも、穂乃果たちも手伝うから。せめて元になるものだけでも」

さんざん渋っていた海未だったが、さすがに心が揺れてきていた。

親友三人に絶賛されたのだ。それを快く思わない訳がない。

しかも、ことりは衣装係に決定し、穂乃果には任せられないことを自ら納得してしまったのだ。海未しか作詞できるものはいないと、状

況が示していたのだ。

「海未ちゃん……………」

後一押しというタイミング。

ことりは、さっきまでの畳みかけるような勢いとは打って変わって、静かに海未を呼んだ。

急な態度の変わりように、海未はことりの様子をうかがう。その瞬間息を呑んだ。

海未の視界に入ったことりは、苦しそうに自らの胸元をつかみ、目を潤ませていたのだ。

そして、彼女は、言った。

「お願い!!」

「うっ——」

「がはっ——」

ことりの『お願い』を真正面から受けてしまった海未は、まるで胸を打ち抜かれたように後ろへ倒れ込んだ。

絞り出すように放たれた悲痛な叫びが、海未の中でリフレインする。

お願いであったはずのその言葉だが、海未にただならぬ罪悪感を感じさせ、いつの間にか命令以上の強制力をもっていた。

「ずるいですよ。ことり……」

それにより、ついに海未は白旗を上げたのだった。

「わかりましたよ……」

「よかったあ」

「そういつてくれると思ったんだ」

海未の敗北宣言を聞き、最初からわかっていたかのように笑っていた。

それを見て、ことりの甘い声にやられた海未はため息を付いた。

もしかしたら、これから一生ことりには逆らえないのかもしれないと未来を案じていた。

それほどことりのお願いの威力はすさまじく、被害者をもう一人生んでいた。

屍となって倒れている憐次を、穂乃果がちらりと見た。

「そういえば、レン君はなんで倒れてるの？」

「あ、あれは散弾だ」

「へ？」

「ことり！」

「え、なに？ レンジ君」

「もしまたそれを使うときは、周りをよく確認して、ターゲット以外に被害が及ばないように、細心の注意を払って使うんだ。これ以上俺のよ
うな被害者を生み出さないために。ガクッ」

「う、うん。わかったよ？」

「この人、いったいなにをしているのでしょうか？」

「さあ？」

三人は呆れた表情で憐次を見ていた。

しかし、同姓である海未すら撃沈させる程の力を持った言葉だったのだ。

異性である憐次には、不可避かつ一撃必殺の威力を持っていたのは言わずもがななのである。

結局作詞は、海未が押し切られる形で担当することとなった。

海未は、せめてもの抵抗と、交換条件として練習メニュー作成の権利を要求していた。穂乃果は、考えないといけないことが減ると思っ
たのか二つ返事で承諾していたが、次に飛び出した、明日から朝練だ
という発言に穂乃果は絶叫していた。

それを見てここぞとばかりに茶化していた憐次だったが、なぜか彼も参加させられることになり、絶叫がもう一つ増えた。

そこから話したのはのだが、曲は今いるメンバーでは無理だという結論となり、友達に音楽をやっていた人がいないか聞くと言うことで保留。続いてユニット名を決めようとお互い案を出し合うも迷走し始めたところで解散となった。

ユニット名については、穂乃果になにか打開策があるようで一度彼女に任せることとなった。

「今日は、楽しかったけどなにかと散々だったな」

「そのことは、すみませんと言っているではないですか」

「いや。その後も妙に疲れたし……」

文句を言いながらも、しかし隣次は笑っていた。

「しかし、久々にあったのに、あんまり変わらなかったな」

「なにがですか？」

「いや、もしかしたらまた避けられると思ってたりもしてさ」

「そんな、避けるだなんて」

「いや、ごめん。過ぎたことだな」

「ごめんなさい」

俺が悪いんだ。

隣次は、過去を思い出して自分に言い聞かせる。

考えなしに動いて、結局海未を傷つけたのだ。

互いに思うところがあつたようで、しばしの沈黙が流れた。

「あの……」

「……」

「この話はヤメにしましょう。それより……」

「どうした？ ああ、さっきのだったら気にすんな。傷は男の勲章だからな」

「いえ、そんなものを勲章にされても困るのですが」

そう言つて、憐次は自身の頬を指した。

最初よりはだいぶ赤み引いているが、いまだくつきりとわかるほどの後が付いていた。

「そうではなくてですね。……さっきの私は、どうでしたか？」

憐次は一瞬、さっきの押し倒した形になつたときの海未の赤く染まった顔を思いだし、とっさに頭を振るとともに、振り払った。

「どうでしたかつて？」

「ええと。……変、ではありませんでしたか？」

「ん？ そうだな。いつもの海未では、無かつたな」

「そ、そうですね。変でしたよね」

「いや、べつに変とは言っただけ——」

「——ごめんなさい。突然変なことを言って。それでは、さようなら」

海未は、それだけ言い残すとそそくさと走って行ってしまった。

最後のやりとりが引つかかる憐次だったが、追うことはしなかった。

昔のことを思い出したからだろうか。追うことは出来なかった。

早朝、神田明神に集められた穂乃果と憐次は、階段の往復をさせられていた。

「もうむりー!!」

「だから、なんで俺までー!!」

ちょうど階段を上りきって穂乃果と憐次は倒れ込んだ。

そんな二人が見上げる先には、仁王立ちの海未がいた。

さすが運動部と言ったところか。

二人と同じメニューこなしていたにもかかわらず、もう息が整いつ

つある。しかも、

「なに休んでいるんですか？ まだラストが残っていますよ」

「海未ちゃんの鬼！」

「だいたい、アイドルとは関係ない俺が、なんで、こんなことさせられてるんだ！」

「なにを言っているんですか。私に作詞係を押しつけ……、その場に立ち会ったものとして、参加することは当然です」

なにげに根に持つタイプの海未。

海未が適任だと言ったの俺だけじゃない。隣次はそう訴えるも海未は、聞く耳を持たない。

「……………」

「なんですか。そんなに見てきても、これは決定事項です。メニューは、減らしませんよ」

「……………いや、なんでもない。わかったよ。体を動かすのは嫌いじゃないし、つき合うぜ」

隣次は、少しだだをこねたおかげで、少しだけ体力を回復させることが出来た。ほぼ絡むことが目的だった隣次は、むくりと起きあがるとラスト一往復を終わらせるために階段へと向かった。

「ちよっと、レン君。回復早すぎだよ」

「穂乃果、あなたも早く立ちなさい」

穂乃果は、少しだけ体を起こすと裏切り者を言及するように叫んだ。

叫んだものの、そんなことを言ったところで変わらないし、そもそもアイドルになるための特訓なのだ。

海未に催促され、彼女はよろよろと立ち上がった。

「穂乃果ちゃん、がんばってー!」

とぼとぼと足を引きずる穂乃果の背中でことりが声援を送った。

怪我をしてまだ二日しか経っていないため、ことりは見学中だ。

本当だったら衣装のこともあるため、参加しなくてもよかったのだが、ことり自身の要望により、木陰でデザインを練りながら、見学という形で参加をしているのだ。

穂乃果は、ことりに手を振ってこたえた。

穂乃果は、ふらつく足で階段を下ろうとした。

「あっ——」

あまり運動という運動を積極的に行ってきたはいなかった穂乃果には、突然の運動は堪えたのだろうか。

彼女は、急にがくりと足の力が抜け、よろけてしまった。

なす術なく倒れる穂乃果だったが、彼女の体は倒れきることはなかった。

「危ねえな。しっかりしろよ」

彼女を受けとめたのは、先に行ったはずの隣次だった。

「ごとりもああ言ってることだし、早くラスト終わらせるぞ」

「あれ、レン君。待っててくれたの？」

隣次は、穂乃果に問われると頬をかきながら彼女を立たせた。

「こんな危なっかしいのを、一人走らせられるかって」

「レン君……」

「……ほら、早くしろよ。」

「うん、ありがと。……じゃあ、お先に！」

急に顔をニヤつかせた穂乃果は、自分を助けた隣次をおいて階段を駆け下り始めた。

「おい、ぎげんな。待てー！」

そう言っつて隣次は、穂乃果の後を追いかける。

二人の姿が見えなくなった階段の下から、楽しげな笑い声が聞こえた。

海未は、そんな声を聞きながら、二人が階段から顔を現すのを待っていた。

久しぶり親友との再会、そしてこうしていつしよに笑えている今を海未は喜んでいた。

しかし、それと同時に素直に喜べていない自分がいることも感じていた。

穂乃果たちは、今日はランニングとその後の階段ダッシュを終える
と隣次と分かれた。

行ったのは、ランニングとその後の階段ダッシュ、腕立て伏せ、上
体起こしだけだった。

なぜかと言えば、急遽全校集会が行われることになったからだ。

ことりがまだ練習に参加できない上、遅刻するわけにも行かないの
で、早々に切り上げたというわけだ。

「全校集会って、いったいなにを話すんだろうね」

「さあ。私、また何も言われてなかったよ」

「よくないことではなけれどもいいのですが……」

体育館で集会が始まるのを待つ穂乃果たちは、これから話されるこ
とについて話していた。

全校集会と言えば、廃校になるかもしれないと言う報告が記憶に新

しい。

廃校と言うことには、気を失うほどショックを受けた穂乃果。今度は何を告げられるのか、恐ろしく思うのも無理はなかった。

しばらくして、カツカツとなる足音に生徒たちは静まり始めた。

理事長がステージに現れたのだ。

「みなさん。おはようございます」

理事長の挨拶に、全校生徒は声をそろえて返した。

いつもの恒例を終えると、理事長は咳払いを一つして壇上のマイクへ向かった。

「今日、急な集会にお集まりいただき、ありがとうございます。今日集会を行うことにしたのは、ロックシード及びインベスを管理しているユグドラシルコーポレーションからある通達が来たからです」

「ユグドラシル!?!」

最近凶らずも関係が出来てしまった会社の名前が出て、穂乃果たちは飛び上がりそうになるほど驚いた。

もしかしたら、自分たちがヘルヘイムに入ったことを言われるのではないかと思っただからだ。

「最近、インベスを使った犯罪が増えているそうです……」

幸い、話は、インベス犯罪に来おつけましようと言うことのようなのだ。

内容は、インベスは、頼めば手伝ってくれるし、基本おとなしい。しかし、頼めば何でもしてしまうという習性を利用して、インベスに犯罪を行わせる人が存在している。インベス生き物であつて道具ではない。だから、生き物として敬意を以て接するようにとのことだつた。

話が進んでいくうちに、穂乃果たちは徐々に安心していった。

が、話の本題はここからだつた。

「この犯罪は、インベスに犯罪を命令して行わせるものですが、本来ユグドラシルコーポレーションから販売されているロックシードは、一部の命令を無効にする機能が備わっています。そのため、正規のロックシードではこう言った犯罪は起こり得ません。問題は錠前デイルーという、違法にロックシードを売買する人たちが売っているロックシードです」

錠前デイルー。

それはニュースでもよく目にする名前だ。

かつて、ユグドラの試作機、戦極ドライバーの実験を行っていた沢芽市にはびこっていた人たちで、ロックシードが全国展開されるのを機に各地へ広がってしまったようだ。

ユグドラシルコーポレーションは、この錠前デイルーを摘発することも業務としており、たびたび地域の管理している施設や人々に注意を呼びかけているのだ。

どうやら、今回の集会は、錠前デイルーに対する注意と言うこと

のようだった。

海未は、そう思っただけと肩をなで下ろした。

「最近彼らは、学生をメインターゲットとしている傾向にあるようで、ユグドラシルコーポレーションからも注意するようになるよとの通達がありました。みなさんには、錠前ディーラーには近づかないよう気をつけていただきたいですが、ディーラーのなかには、無理矢理高額で売りつけるというより悪質なディーラーもいるらしく大変危険です。そのため、ユグドラシルコーポレーションから、錠前ディーラーの取り締まりをしてもらっしやる方が来てくださいました」

安心していたのもつかの間。ユグドラシルからに使者と聞き、海未たち三人には、一人の人物の顔が思い浮かんでいた。

「これから、教師として授業にも参加していただく予定です、自己紹介をしていただきましょう。駆紋先生、どうぞ」

「く、駆紋……」

海未は、その名字を聞いた瞬間に顔をひきつらせた。

三人の予想は的中し、思い出したとおりの仏頂面の青年が姿を現した。

「ふん。駆紋戒斗だ」

「……………」

「最初に言っておく。貴様等とよろしくするつもりはない。ディーラーから不正にロックシードを入手しようとする輩は、女だろうが容

赦なく摘発する。以上だ」

戒斗は、見事に無愛想で、それどころか敵意丸出しの自己紹介をしていた。

それを全校生徒は、押し黙って聞いていた。

海未は、そんな彼を睨みつけ、穂乃果とことりは苦笑いしていた。

初対面で、これほどひどい自己紹介を聞いたことが無かった。いや、自己紹介ですらなかった。

これで、教師をするとは、ユグドラシルと言い音の木坂と言い、どうにかしているのではないかと思うほどだった。

これならば、皆で文句の一つでも言えば追い返せるのではないかと海未は思った。

しかし、周りの反応は彼女の予想に反していた。

「きゃー!!」

戒斗が言い終わると、とたんに悲鳴が上がった。

彼を拒絶する悲鳴なら、海未も納得がいっただろう。

しかし、それは海未の期待に反し、拒絶とは正反対の黄色い歓声だった。

「い、イケメンよー!」

「しかも俺様系だわ!!」

「はあん。私、戒斗先生に厳しく指導してもらいたい!!」

あちこちから聞こえる歓迎の声。

それを聞いて、海未は正気かと周りを見回した。

きつと彼女たちは、彼の本性を知らないからそんなことを言っているのだ。

そう思わなければ、今のこの状況を到底受け入れることなどできなかった。

「まさか、音の木坂に教師としてくるなんて……。理事長たちはいったい何を考えているのでしょうか」

「まあまあ、海未ちゃん。落ち着いて!!」

「落ち着いてなどいられますか。穂乃果にあんなことをした人なのですよ? 穂乃果だって納得行かないでしょう?」

目の前で戒斗の行いを目の前で見ていた海未は、いまだ彼に行いを許せないでいた。

しかし、当の本人は、さほど感じていないかのように首を傾げた。

「え? ベつに気にしてないけど」

「まさか、穂乃果もああいう人が好みだったのですか!?!」

「まさか、違うよ。ただ……」

穂乃果は、違うと手を振った。

「どこか必死に何かを探してるみたいだったから」

「必死？」

「あの時穂乃果、「がいむか？」っていうのを聞かれたんだよ。あの人にとつて、大切な何かだったんだよ。きつと平静じゃいられないくらい大事なね」

「なんですかそれは……。まあ、本人がそういうなら私もこれ以上は何も言いませんが……」

海未自身は全く納得はしていなかった。突然女の子を強引に引き寄せるなんて、軽く立件ぐらい出来そうなものだ。が、あくまでも被害者は穂乃果だ。その本人に訴えるなどの意志が無い以上、自分が出しゃばることではないとわかっていた。

全く納得はできなかったが。

海未が、何とか怒りを抑えているとき、ことりはふと声を上げた。

「あ、ごめんね。私、今日是用事があるから、さきに帰っていいよ」

「え、そうなの？」

「あ、しまった」

ことりがそういったことで我に返った海未は、時計を確認した。

「ごめんなさい。私も今日は弓道部の練習があつたのでした。私も
う行きますね」

「ええ？ それじゃあ、穂乃果一人つてこと？ 待ってるよ」

「では穂乃果は、曲のことについて考えておいてください。……
たとえ詩が出来たとしても、曲がなかったらただのポエムですか
ら……」

「海未ちゃん、まだ根に持つてる」

とたんに海未の瞳は光を失う。暗い目で笑う海未に、穂乃果とこ
りは苦笑いするしかなかった。

「曲か……。誰かに相談できればいいんだけど」

一人廊下を歩く穂乃果は、頭を悩ませていた。

穂乃果が自分で曲を作ることは不可能だが、そもそも曲を作れる人
と言うのもまるで心当たりが無かった。

穂乃果の友達は、良くも悪くもごくごく普通の女子高生だ。作曲は
おろか、楽器にすら授業以外で触れたことが無いという子がほとんど
だ。

「曲と言ったら音楽。音楽と言ったら、まずは音楽の先生に聞いてみ
る方がいいかな？」

穂乃果は、思いつきで音楽室へと向かった。

先生は、各教科の準備室にすることが多い。音楽準備室は音楽室の隣だ。

放課後になると、音楽室からピアノの音が聞こえることがあった。

穂乃果は、直接見たことは無いが、きっと先生が弾いているんだろうと思っていた。

最初は思いつきだったが、考えてみるとなかなかいい案のような気がした。音楽室から流れてくる曲は、ほとんどどこかで聞いたことのあるような曲のコピーだったが、時々聞いたことのない曲が流れることを思い出したからだ。

穂乃果が単にその曲を知らなかっただけと言うこともあり得る。でも、もしそれが作曲されたものだとしたら、その作曲者に作曲を依頼できるかもしれない。

穂乃果は、期待に胸を高鳴らせていた。

音楽室に近づくにつれ、ピアノの音が響いてきた。

誰かが引いていることを確認すると、自然と音楽室へ向かう穂乃果の足取りは速くなっていった。

「——愛してるバンザイ。負けない勇氣……」

そして、音楽室付近まで行くと、歌声も一緒に聞こえてきた。

たまらずこっそりと扉のガラスから、音楽室の中をのぞき込んだ。

そこでピアノで弾き語っていたのは、先生ではなく生徒だった。

音の木坂の制服は、学年によって胸のリボンの色が異なっている。

二年生である穂乃果は、赤と紺のストライプ柄のリボンをしている。一方、今ピアノを弾いている生徒は、水色と紺のストライプ柄のリボンをしている。その色のリボンは、穂乃果より一学年下の一年生が付けるものだった。

「きれいな声……」

穂乃果は、すっかり聞きほれてしまっていた。

ドアを隔てて見える彼女は、肩口ほどの長さの赤毛を揺らしながら、実に気持ちよさそうに弾き語っていた。

彼女は、とても澄んだ歌声をしていた。とても整った顔立ちをしていた。しかし、穂乃果を引きつけたのは、そんな外面的なものではなかった。ピアノを弾きこと好きで、歌うことが好きだと言うことが、彼女の奏でる曲を聴くほどに伝わってきたのだ。

穂乃果は、そんな彼女が表現する「好き」に惹かれたのだ。

時間が経つのも忘れて彼女の曲を聞いていた穂乃果は、曲が終わると無意識に拍手を送っていた。

あんまり窓に顔を近づけすぎていたからだろうか。

ほぼ目をつむったまま弾いていた赤毛の少女は、弾き終えて目を開けた瞬間、後ろへのけぞった。

こっそり見ていたはずの穂乃果だったが、気づかれたことはむしろ好都合だった。

赤毛の少女が自分に気づいたことを確認すると、興奮したそのままの勢いで音楽室のドアを開いた。

「すごいね。ピアノ上手だね。歌も上手だね。……それに、アイドルみたいにかわいい」

「……いきなり、なんですか?」

赤毛の少女は、一瞬顔を赤くするが、突然現れた穂乃果へ訝しげな視線を送った。

しかし、穂乃果はそんな視線などものともせず距離を詰めていった。

「それでなんだけどね。……きみ、アイドルやってみたくない?」

「……意味わかんない!」

無言で硬直する少女を見て、これが目が点になるということだと穂乃果は思った。

目をぱちくりとしばたたかせる彼女は、動き出したかと思うと怒ったように一言だけ残すと穂乃果の横を通り過ぎて行ってしまった。

少女が音楽室の扉をがたんと閉める音を聞き、穂乃果はがくりと肩を落とした。

「だよー」

作曲を頼みに来たにもか変わらず、気が付くとアイドルに勧誘してしまっていた。当の穂乃果が驚いていたのだから、突然そんなことを言われた彼女が驚くのは当然だ。

彼女の瞳には、穂乃花はさぞかし胡散臭く写っていたことだろう。

穂乃果は、一人残された音楽室でため息をついた。

がっかりしていたが、作曲を頼めなかったことに対してとは少し違っていた。

穂乃果は、彼女の歌声を聞いた瞬間、自分の好きを素直に表現することが出来る彼女とアイドルができれば楽しいだろうと思ったのだ。

だから、作曲を頼むよりも先にアイドルに勧誘をしていたのだ。

だから、作曲を断られるよりも落胆が大きかった。

しかしだからこそ穂乃果は、また誘いにこようと意気込んだのだった。

第五話 「スクールアイドルとロックシード」

東京都千代田区。

ユグドラシルが日本支部を構えるこの場所は、以前の拠点である沢芽市がそうであったように急速に開発が行われた。

特に全国展開のために試験運用がされているロックシードによって、千代田区内の町の風景は、ほかのものとは少し異なったものとなっている。

町中には、沢芽市でも試験運用されていたバイクに変形するロックビークルを始め、新開発の四輪型などのロックビークルが区内を走っている。このロックビークルは、使用者の運転スキルに関係なく、使用者が目的地を思い浮かべるだけで自動で走行するものである。そのため、通常車両の免許を取るよりも簡単な試験で免許を取ることができ、それでいて事故も未だ発生していないため、持ち運びの利便性からも全国展開が一番見込まれているロックシード商品だ。

そのほかにも、衣服になるロックシードや、持ち運びが困難なものをロックシード化したものなど、沢芽市でも使われていなかったロックシードの試験が行われている。

これらの商品は、もちろんユグドラシル公認の販売店でのみ取り扱われるものである。未だ試験運用の段階であるため、ここで重大な問題が発生すれば計画自体がとん挫する恐れがあったからだ。

沢芽市では、ユグドラシルの内部反乱による情報流出で、計画は途中でストップしてしまった。

計画再開をもって社内の人員の見直しを行い、拠点を新たにした先

がこの千代田区だった。

沢芽市での失敗を受け、ユグドラシルはロックシードの万全の体制でこの事業に臨もうとしたのだ。

が、拠点を移した先にも、彼らは現れてしまった。

沢芽市での、計画の中止のきっかけになった存在だ。

すでに沢芽市での教訓から、ロックシードの不正販売、利用への対策は万全に行っていた。

そのため彼らは、沢芽市で行っていたような表立った行動は行わない。が、だからこそユグドラシルは、彼らに手を焼いていた。

人のいるところから少し離れた路地裏に、少年は一人、あたりを確認しながら入り込んでいった。

見た目は、高校生くらい。

白い気品あふれる制服と清潔な出で立ちは、どこかの御曹司のようだ。

そんな彼は、あまり使われていない貸ビルの一室へ入る。

そこは、かつて何かの会社のオフィスのオフィスとして使われていたのだろう一室。

玄関から入ると、奥にはいくつかのデスク、入ってすぐの手前には応接のためのソファアが目に入った。

ソファーやデスクには、男たちが腰を掛け、ゲラゲラと下品な声をあげていた。

一目で堅気の人間ではない彼らに、少年は声をかけた。

「ねえ、君たち……」

「——ッ！ ああ？ なんだよ、お前」

少年の声に、男たちは血相を変えて何かを隠しながら振り向いた。

一瞬であったが、少年には、彼らが隠したものが見えていた。

それはロックシード。

それも、どれもクラスC+もしくはBとそこそこ高いクラスのものだった。

敵意をむき出しにして少年をにらみつける男たちに、一般人なら逃げ出していたかもしれない。しかし、少年はそれに慄くことなく落ち着いた口調で返す。

「すみません。そんなに睨まないでくださいよ。ここらへんで会えるって聞いたんだけど。ディーラーがどこに行くか知らないですか？」

最初は彼を警戒していた男たちだったが、彼が細身でひ弱そうであるため、ニヤリと笑った。

「何だ。そっちの奴かよ。脅かすなっつての」

彼らの商売は、金にはなるが今や警察より危険な組織に追われている身でもある。

それは商売柄仕方のないことだ。

だが、それによって分かることもある。

大抵の人は、一睨みすれば逃げ出すが、逆に逃げないと言うことは男たちの商売について知っているということ。そして、たった一人で乗り込んでくる警察もいない。

そこから導き出されたのは、相手がお客だということだった。

男たちは、少年品定めをするように見る。

彼が着ている制服は、UTX学園の男子用制服だ。UTX学園と言えば、あたりでは最難関とされる私立高校だ。多くの専門学科を有しており、毎年難関大学へ多くの生徒を輩出している進学校だ。

が、それもその学校の側面にすぎず、併設された芸能科では、様々なアーティストが輩出されているとともに、すでに現役で活動している者までも有していた。

そこは様々な才能を持った人間が集められた学校として、おおく注目を集める学校だ。

そして、男たちの商売相手が比較的多く所属する学校でもあった。

才能ある人間が集められているとはいえ、誰しもが平等に成功できるわけではない。むしろ、自分には才能があると思っていた人間が、

自分よりも才能を持った者にその差を見せつけられるのだ。

成功できない者は、ほかの学校にいるよりもより多くの苦痛を感じ、鬱憤をためていくことになる。

そんな彼らにとって、危ない遊びというのは魅力的で、中でもロツクシードは、金持ちが多いその学校の生徒にとっては、他人には届かないが自分なら手に届くという快感を味あわせてくれるものだった。

ディーラーは、そんな世の中に不満を持った、特に金持ちをターゲットとする。力がなく、それでも今の現状を変えたいと熱望する者。そういった人間が彼らの恰好の獲物なのだ。

いつものように、カモがかかったと内心腹を抱えながら、努めて笑いを押し殺しながら少年に応える。

この商売にビジネススマイルは必要ないが、最低限の態度は必要となる。

笑い転げるのは少年が帰った後と決め、男たちは対応を始めた。

「知ってるも何も、俺たちがそのディーラーだぜ」

「ああ、そうだったんですか。ならさっそく取引だしたいんですが。どうしてもはやく力が必要なんです」

「おいおい、そう焦んな。詳しいことはもつと奥でな。商売柄、何かと危険が多いからな。分かるだろう?」

「わかりました。では、すぐに行きましょう」

「はは。そんな急がなくても、ちゃんと売ってやるよ」

先に少年を男たちは笑いながら追いかける。

「たつぷり稼がせてもらいますか」

男たちは、先を歩く少年を後ろからあざ笑った。

男たちの目に映るのは、いつもの客と変わらない

「今回も、小物かな？」

そんな男たちに背を向け、少年もぼそつとつぶやいた。

男たちは、カモの登場に浮かれており、その声を聞いていたものはいない。

そして男たち気づかない。男たちに背を向けている少年の顔が、力に飢え弱者の顔ではなくなっていることに。

ことりは用事を済ませ、海未も部活を終え、合流した穂乃花たちは帰路についていた。

穂乃果は、二人に会うなりすぐに音楽室で出会った少女について話した。

ピアノを弾くのがとても上手かったこと、歌もとっても上手かったこと。そして、アイドルのように可愛かったことを話した。

新しい仲間候補を見つけた穂乃果は、二人が喜ぶだろうと自信満々で話したのだが、二人の反応は彼女の望むものではなかった。

「で、アイドル候補が見つかったということですか？ 部員も大事ですが、曲の件はどうしたのですか？」

「それがすごいんだよ。歌もうまかったけど、ピアノもすごくうまかったんだよ。きっと作曲も出来ると思うんだ。だから、あの子に作ってほしいの」

「でも、一回断られちゃったんだよね？」

「うん、だけどあの時はちゃんと説明できなかったから、次は大丈夫だと思う」

「あまり無理に誘ってはいけませんよ？ 私たちは良いですが、穂乃果はやると決めたらそれしか見えなくなってしまうから」

「わかってるって。そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「だといいいのですが……」

穂乃果は大丈夫だと言うが、自分を強引に連れ出す張本人の言葉は、海未には疑わしかった。

自分は、長年の付き合いだから少々頭に来ることだろうと我慢できる。

でも、初めての人であれば、気分を害して協力してもらえないかもしれない。

自分が穂乃果を制御しなければ。海未は、そんなことを考えていた。

「今日こそは、ここを私たちに空け渡してもらおうわ」

「そうはいかない。このステージは私たちのよ。引っ込んでなさいよ」

公園を通り過ぎようしたときだ。

ふと、近くから女性の言い争いが聞こえてきた。

スクールアイドルを始めようと日々考えていたからだろうか。三人は、ステージという言葉が引つかかった。

「なにかあったのでしょうか」

「さつき、ステージがどうのって聞こえたよね」

「何だろう。行ってみよう」

当然二人も海未と同じく気になった。穂乃果とことりは、言った次の瞬間には走問題の公園へ足を進めていた。

その公園には、大きな野外ステージがある。

とは言っても、そこはスペースが確保されているだけで、ほかにはなにもない。

機材を自前で用意しなければならず、スクールアイドルが現れるまでは、子供の遊び場の一部としてしか使われていなかった。

幼い頃、実際に遊んでいた海未たちはそう記憶していた。

しかし、昔はスツカラカンだったステージ前の観客席はほぼ満員になっていた。

その原因は、ステージの上で言い争う二つのグループだった。

「さあ、さっさとそこを明け渡しなさい」

「なに？ あなたたちが下手なパフォーマンスをしているから、観客の時間をもっと有意義になるようにしただけじゃない」

「無理矢理ステージを奪って置いて、よくそんなこと言えるわね」

ヒートアップした両者。

このままでは、お互いにつかみ合いの喧嘩に発展しそうな状況。

そんなとき、二つのユニットのリーダーらしき人が進み出た。

ステージの中央に陣取っているユニットの方は、巻いた金髪が特徴的な高飛車そうな少女が、ステージ袖から乗り込んだユニットからは、髪を後ろでポニーテールにまとめた活発そうな少女が出てきて、両者至近距離で顔を向かい合わせた。

「スクールアイドルなら、殴り合いなんて下品なまね、いたしませんよね？」

「あたりまえでしょ？　これで決着をつけましょう」

そういうと各々、ポケットから何かを取り出した。

彼女たちが取り出したのはロックシード。フルーツのデザインが施された錠前だった。

「海未ちゃん。あの二人、これからなにをしようとしてるの？」

「スクールアイドルを目指しているのに、知らないなんて……。まあ、穂乃果らしいと言えればいいですが……」

今から行われようとしていることが何か知っている海未は、本当にスクールアイドルについて調べたのかと疑った。

彼女が興味のないことにはすぐに忘れてしまうなことは知っていたが、これはさすがに忘れられるものではない。

スクールアイドルとネットで検索すれば、予測ワードの上段に必ず挙がっているほどのものであり、スクールアイドルを調べれば間違いなく目にするほどのものなのだ。

「穂乃果。もし、スクールアイドルをするなら、覚悟をしておいた方がいいかもしれません」

「それってどういうこと？」

「今から行われるのは、ステージを奪い合うための戦いだということですよ」

海未は、百聞は一見にしかずと、穂乃果にステージの上を見るよう

促した。

穂乃果がそれに従いステージへ視線を向けると、ステージではまさにことが起ころうとしていた。

「さあ、いくよ」

「望むところよ。かかってらっしゃい」

両者の合意とともに特別な空間が展開した。

立方体のようなその空間は、格闘技のリングのように光のロープが張られている。

それぞれロックシードを解錠すると、リング内にクラックが開き、そのロックシードによって決められたインベスが登場した。

興奮した様子のインベスたちが、その興奮を表すように鳴き声を上げた。

——ready fight!

リングから響いた合図によって、インベスゲームは開始された。

「あの二人、インベスをどうしようとしてるの?」

「あれはインベスゲーム。互いのインベスを戦わせて、勝敗を決めるゲームです」

「戦わせるって、インベス同士を?」

「はい、そうです………」

信じられないと絶句する穂乃果とともに、説明した海未も齒嚙みしていた。

現在、スクールアイドルは、戦国時代と揶揄されるほどの人気を博していた。次々とスクールアイドルが誕生し、ランキングで上位に入るために日々活動している。

スクールアイドルは、ほぼ実費で活動している。そのため野外に設置されている無料で利用できるステージは、彼女たちにとって貴重な発表場所なのだ。

しかし、スクールアイドルが増え続ける一方、ステージの数はほぼ変わらなかった。

最初の頃は、使われていないステージも見受けられていたが、いまではスクールアイドルたちが代わる代わるステージを使い、授業があつて空けざるを得ない時間帯以外はほぼとぎれずに利用されているのが現状だ。

そして、たまにステージの取り合いが起きてしまう事態にまでなるのだ。

とはいえ、アイドルとしてつかみ合いの喧嘩をするわけには行かない。アイドルは、夢を与える存在だ。そんな彼女たちが暴力を振るうようになれば、すぐに人気は地の底へ落ち込んでしまう。

そんなことは、彼女たち自身が一番知っている。

ステージの使用権を巡って争わなければならない。しかし、なにを

持って優劣を決めるか。

彼女たちには、アイドルとしての品格を最低限保てる戦いの方法を必要としていたのだ。

そんなときに流行だしたのインベスゲームだった。

リング状の特別な閉鎖空間の中にインベスを召還し、そのインベス同士の戦いで勝敗を決するというものだった。

最初は賛否両論あったものの、彼女たち自身が直接戦っているわけではないため、そこまで印象は下がらなかった。むしろ、可憐なアイドルからは想像できない戦いがギャップとなり、スクールアイドルの魅力の一つにまで数えられるほどになっていた。

今では、スクールアイドルは戦わなければ活動すらできない。スクールアイドルとして活躍する為には、インベスゲームを行えるということが必須条件とかしていた。

スクールアイドルを目指している穂乃果たちも例外なくである。

「おかしいよ……」

「……穂乃果」

「だってそうでしょ？ インベスは、大切な友達なんだよ。それを戦わせるなんて、おかしいよ」

穂乃果は、そっとオレンジのロックシードを取り出した。

ヘルヘイム絶体絶命だったときに最初に助けてくれたのは、彼女が

愛情を持って接していたインベスだった。

しかし、穂乃果のインベス「ほむまん」は、その戦いでたくさんのインベスに囲まれ、倒されてしまったのだ。

インベスを見ると、特に、インベス同士が戦うインベスゲームを見ると、そのときの光景が思い出されてしまう。

穂乃果は、たまらず目の前で行われているインベスゲームから目を背けた。

「穂乃果・・・・・・・・・・」

「穂乃果ちゃん・・・・・・・・・・」

ほむまんが倒れるところを目の前で見ていた海未とことりは、いたたまれない気持ちになる。

ほむまんは、怪我をして動かなかったことりと海未を助けて犠牲になったのだ。

それを思うと、自分たちのせいでほむまんは倒されてしまったと考えずにはいられなかった。

「ねえ、君。そのロックシード、どこで手に入れたんですか？」

「えっ？」

穂乃果は、暗く沈んで閉まっていたところに突然声をかけられ振り向いた。

突然現れたのは、優しい笑顔の少年だった。

身につけている白い制服はしわ一つなく、すこし目にかかるくらい
の長さの髪も丁寧に整えられている。どこか貴族のような気品が感
じられた。

「いきなりなんですか？」

海未の人見知りアンド男嫌いは、正常稼働していた。

いぶかしげに少年を見る海未に、少年ははつとして頭を下げた。

「ああ、ごめんなさい。突然声をかけてしまって。驚かしてしまいま
したよね。普通じゃなかなかお目にかかれないレアなロックシード
を持っている人がいたから、つい声をかけてしまったんです」

海未は、彼にそこまで素直に謝られるとは思っていなかった。海未
が面食らっていると、彼は、また穂乃果へ視線を戻した。

「それ、見たところクラスAのロックシードですよ。すごいですね。
それなかなか手に入らないものなんですよ？」

少年は、そういうと穂乃果が手にするロックシードを指さした。

「どうやら、話しかけてきた原因は穂乃果の持っているロックシード
のようだよ。だ。」

「これ、そんなに特別なんですか？」

「それはもう」

戸惑っていた穂乃果だったが、特別だと言われて少し興味をもったのだろう。

穂乃果が恐る恐る質問すると、少年は、ぱつと表情を軽くして穂乃果の質問に答え始めた。

「通常巷に出回っているのは、ほとんどがクラスD、もしくはCです。クラスは、そのままそのロックシードの稀少さ、インベスゲームでの性能を表しています。クラスが高いほど入手は困難ですが、その分強いインベスを召喚出来ます。……あれを見てください」

彼は、公共ステージの方を指さした。

そこでは、今まさにインベスゲームが行われている真っ最中。二人のスクールアイドルが、ロックシードを片手にリングを隔てて向かい合っていた。

リングの中には二体の初級インベスがぶつかりあっていた。

「右の彼女が使っているのは、一番よく見られるクラスDのヒマワリ。そして、右の彼女が使っているのは、クラスCのマツボックリですね」

彼が言うように、それぞれ異なった柄の錠前を持っていた。ポニーテールの少女が持っているのは、ひまわりの種をモチーフにしたもので、金髪の少女の方は中の種がでる前の松ぼっくりだった。

穂乃花たちは、少年の説明で金髪の少女の持つロックシードの方が、ポニーテールの少女のものよりクラスが高いことが分かった。

「クラスの差は、そのまま戦力の差です。その人のロックシードの扱

いによって変わることもありますが、大抵は……」

彼は、一回言葉を切ると穂乃果たちにインベスゲームを見るように促した。

彼女たちは、促されるままに視線を向けると、彼の言うように金髪の少女が操るインベスの方が優勢だ。

インベスたちは、見た目には色以外の違いは見受けられない。しかし、その動きには明らかな違いがある。

クラスDのインベスよりもクラスCの方が、力でも早さでも若干勝っているように見えた。

そして、その差は結果に直結した。クラスCは、Dの攻撃をやすやすと避けると、強烈な一撃を放った。強烈なカウンターをもろに受けたクラスDインベスは、さらなるクラスCの追撃を受けて霧散したのだ。

「ほら、クラスCのインベスの勝利です」

「本当だ」

クラスCのロックシードを使っていた金髪のスクールアイドルは、ほかのメンバーと勝利の喜びを分かち合っている。一方負けた方は、恨めしそうに勝者を見たが、勝負のルールに従ってほかのメンバーと共にステージを降りた。

彼女らの話を聞いた上では、金髪のいるチームの方が悪いように思える。

しかし、インベスゲームでの勝敗がすべてを決める現在では、どれだけ正しかったとしても負ければ退くしかない。

それが今のスクールアイドルの掟なのだ。

勝負が終わると、勝者チームは、すぐさまライブを開始した。

インベスゲームでの興奮が冷めやらぬままライブが始まり、観客たちは、普通にライブを行うよりも楽しんでいるように見える。

「ね、見たでしょう？」

「ええ、そうですね……」

「CとDでこの差です。それがもっとクラスの離れた場合なら、偶然など起きるはずもなく高クラスのロックシードを持つていた方が勝つことは、想像に難くないでしょう？ あなたが持っているのは、クラスAのロックシードです。もはや幻とまで言われている最高クラスのSを除いては、ほぼ最強と言ってもいいほどの代物なんですよ」

「へえ、そうなんですか」

一応返事を返すも、インベスを戦わせると言う発想がそもそも無かった穂乃果は、ただの知識程度にしか聞いていなかった。

それよりも気になるのは、スクールアイドルたちが率先してインベスを使って戦っているという点だった。

穂乃果は、本当は彼女たちスクールアイドルたちがインベスを使って勝敗を決めていることは知っていた。

当然だ。ライブ動画を再生すれば、ほぼセットでインベスゲームの様子が流れる。

目に入らないはずがないのだ。

穂乃果は、スクールアイドルのきれいな部分しか見ていなかった。

華やかな部分しか見ていなかった。

見たくない部分から目をそらしていたのだ。

でも、目の前でインベスゲームを目の当たりにし、知らない振りをしているわけには行かないと悟る。

スクールアイドルになればいつか、たといやでもインベスゲームを申し込まれる状況は出てくる。

そのとき、自分はどうするのか。

考えなければならぬときが、いつかは来てしまう。

「その制服って、音の木坂のですよね。そんなクラスの高いロックシードを持っているということは、あなた方もスクールアイドル何ですか？」

「は、はい。．．．．まだ始めたばかりというか、始めようと思っ
ているって感じですけど」

「これから始めようと．．．．、そうなんですか。どうりでクラスのことなどを知らないわけだ。でも、そのロックシードは、ステージを勝ち取るために調達したんじゃないんですか？」

「そんな。インベスゲーム何てしたくありません」

「では、なぜそんなものを？」

穂乃果は、少年の話聞いて、手に持ったオレンジロックシードを見る。

どうやら、自分が持っているものは、相当強力な代物のようだということが分かった。

もともと穂乃果が持っていたロックシードは彼が言うところのクラスD。皆が持っているからと言う理由で一番安い物を買って貰ったのだ。

それが、なぜかクラスAに姿を変えた。

ふつうの人なら、クラスAのロックシードは、なんとしてでもほしくなるものだと言うことも分かった。ふつうの人だったら、クラスAを手にしたなら大喜びするであろうことも。

でも、穂乃果は、喜ぶことはできなかった。むしろ考えてしまう。もし、もつと早くロックシードがクラスAに変化していれば、彼女の友達《インベス》は死なずにすんだのではないかと。

それは、安かったからと言う理由で買ってもらえたものだ。希少価値はほぼない。さっきの実演で、戦闘能力もあまりないことも分かった。

でも、彼女がいつも連れていたインベスは。彼女が自らの和菓子屋で売られている看板商品、穂むらのほむまんの名をつけたインベス

は、後にも先にもただ一匹。ヘルヘイムで彼女の友達を体を張って守ってくれた、あのインベスしかないのだ。

だから、今持っているクラスAのロックシードも、あのクラスD（ほむまん）と比べてみれば、価値のないもののように思われた。

でも、

「これは、大切な友達が残していったものなんです。だから、争いなんかに使いません」

これは、最後にほむまんが残していった形見だ。

インベスゲームに使うつもりはないし、誰がほしがっても渡せるものではない。

今の穂乃果にとって、そのクラスAの価値は、ただそれだけだった。

「それに、インベスゲームなんて間違ってます。大切なものを戦わせるなんて、穂乃果には、あり得ないことです」

それは、単なるわがままだ。

穂乃果は、分かっているながらも今の願いを口にした。

できれば戦いたくない。

戦うにしても、スクールアイドルとして、歌とダンスで競い合いたい。

争うにしても楽しく争いたい。という願いを込めて。

それを聞いて、少年は笑った。

一瞬、理想を語る穂乃果への嘲笑かと思われた。

しかし、彼の表情をみて違うことが分かった。

「僕は、そういう考え方、好きですよ」

「え？　・・・・・・・・何か言いました？」

「いえ、別に。でもそれなら、くれぐれも注意してくださいね。世の中、本当に優しい人間なんてほんの一部だ。クラスAなんて、皆喉から手がほどのほしいと思っっているんです。だからそれは、むやみに人前に出さないのが賢明ですよ。それがとても大切なものなら、そしてそれを使って戦わないと断言するのであればなおさらです。どこからそういう目がねらっているかわからないのですから」

少年は、そういつて笑うと、一步後ろへ下がった。

そして、彼女たちへ頭を下げた。

「突然話しかけてしまってすみません。それに、一方的に話してしまつて。僕はここで失礼させてもらいますね。高坂穂乃果さん、園田海未さん、南ことりさん」

「いえ。なんかいろいろ教えてもらつちやつて、ありがとうございますました」

「期待してますよ。もしスクールアイドルになったなら、ライブをやってください。そしたらきつと、そのライブを見に行きますから」

「本当に？ だったら……」

穂乃果は、約束をしようとして、まだ名前すら聞いていないことに気づいた。

「そうだ。名前はなんていうんですか？」

「え、名前……、ですか」

少年は一瞬間を空ける。

話掛けてきたのは、彼の方だが、穂乃果は、名乗りたくない理由でもあるのかと心配になる。

しかし、そうではなかったようだ。少年はすぐに口を開いた。

「……ミッチです。みんなは僕をよくそう呼ぶんです」

彼が名乗ったのはあだ名。本名は名乗りたくない様子だが、穂乃果にはむしろ、年も離れていないことから親近感を覚えてうれしくなった。

「わかりました。じゃあ、ミッチ。待っててね。絶対、ライブに呼ぶから」

「ええ。待っていますね」

穂乃果たちに見送られた少年は、彼女たちに手を振りながら人混みに紛れた。

彼の姿が見えなくなると、穂乃果は、興奮した様子で海未とことりの方を振り向いた。

「海未ちゃんことりちゃん。こうなったら、早くスクールアイドルにならなくちゃね。ファーストライブも大々的にやらなくちゃ」

「そうだね。ことりも衣装作り、いつそう気合いが入っちゃうな」

スクールアイドルを目指して意気込む穂乃果とことり。

しかし海未は、ひとつ引つかかることがあった。

「……ちよつと待ってください。あの人、なぜ私たちの名前を知っていたのでしょうか」

「もしかして、もう人気になっちゃってたのかな？」

「それは、まだスクールアイドルにもなっていないし、ないんじゃないかな」

「それもそうだね。よし、まずはまた明日、音楽室のあの子に頼みに行ってみよう」

「ことりも、がんばって衣装つくるよ」

「もう二人とも……」

おかしな点を指摘したにもかかわらず、穂乃果たちはほかのことで頭が全く聞いていなかった。

海未は、嘆息するもあまり気にはとめず、二人の会話に加わった。

「どういう経緯で名前を知っていたのかはわからないが、そう危険なことにはならないだろうと思ったからだ。」

なにしろとても優しそうに笑う少年で、しかもロックシードについて詳しく知らなかった彼女たちの身を案じて忠告までしてくれたのだ。

だから、放っておいたところで、そんなに悪いことにはならないだろうと思ったのだ。

穂乃果たちと別れたミッチは、しばらく歩くと人の少ない路地に入ってしまった。

「どうですか？ そちらの首尾は」

すると突然、片方の耳に手をやると、虚空に向かって話し出した。

端から見れば、大きな一人を話す危ない人のように写るかもしれないが、彼が話しているのは、耳に付けたインカムの向こうの人物だ。

「……………貴様はほかよりは骨がある。——くそつ。間が悪いぞ」

「あら、まだ取り込み中でしたか？ あなたにしては時間がかかってますね」

「ああ？——しつこいぞ。そこで寝てろ。……………とづくに終わっているが何だ？」

「・・・・・・・・」

ついさつきまで、騒々しい音がインカム越しに届いていたが、指摘しては彼がしばらく不機嫌になってしまったため、ミッチは黙っておくことにした。

「・・・・・・・・なぜ俺が、貴様なんぞの尻拭いをしなければならない。どうせやるなら、俺が叩き潰せば早いだろう」

「そうですね。あなたなら、簡単に彼らをつぶすことができるでしょう。ですが、この作戦の目的は、黒幕の情報を引き出すことです。喧嘩っ早いあなたのことです。肝心な情報を聞き出すより先に潰してしまうでしょう。あなたに、手加減ができるとは思えませんか？」

「・・・・・・・・ちっ」

通信相手は、忌々しげに舌打ちするが、ミッチはいつものことなので無視する。

「それよりも、穂乃果さんたちを追ってください」

「なぜ、あんな小娘たちを？」

「いいから、指示通りをお願いします。・・・・・・・・彼女たちは、世界を救うための鍵にも、僕らの計画の障害にもなり得ます」

「・・・・・・・・ふん」

通信相手は、鼻を鳴らすとインカムの一方的に通信を切る。

通信相手は返事を返さなかったが、ミッチは彼と長年つきあってき

た故に、それが了承であると分かった。

「まあ、見極めさせて貰いますかね。あなたたちが、僕たちの敵になるのか、それとも味方になるのかを。……さあ、僕も次のカモのところへ行きますか」

ミツチは、大きく伸びをすると、つぎの目的地へと歩みを進めた。

ミツチが向かったのは、古ぼけたビルだ。

そこには、力に飢えた金持ちをねらう姑息な大人たちがいる。

そんな大人たちを、ミツチは獲物とする。

目的は、彼らが売りさばくものの出所と彼らの後ろにいるであろう黒幕を引きずり出すことだ。

さつき穂乃果たちと会っていた時は優しそうな少年だったミツチは、いつの間にか表情を変えていた。

卑怯な大人たちが好みそうな、力に飢えた世間知らずへと。

第六話 『友達のためにできること』

「ついに、書いてしまいました」

歌詞を書き上げたにもかかわらず、海未はがつくりと肩を落としていた。

小学生の頃、授業で書いた詩をほめられたことをきっかけに、趣味で詩を書くようになっていた。

そのころは自分の中で完結してきた趣味だったが、ある時期から、誰かに見てもらいたいと思うようになった。

中学生の頃、うっかり机に出したままに忘れてしまっていたポエムを見られてしまった。

それを見たのは、運の悪いことにいたずら好きの男子生徒だった。

海未が教室に帰ったとき、彼女のポエムが書かれたノートが回し読みされていた。

からかわれた。

おかしなものを書いているとバカにされた。

必死に取り返そうとした彼女だったが、面白い男子たちは、それを投げて回す。

脇には、何人かの女子たちがやめさせようと声を上げているが、男子たちに割ってはいえることはできず見ていることしかできない。

その日から海未は、詩を書くことはなかった。

それが今回、また書いてしまったのだ。

原因は、穂乃果がスクールアイドルを始めると言い出したことだ。

穂乃果は、何をどうするのかという大事なことを全て放っておいて、大それたことを何の迷いもなく言いだした。

案の定彼女は、ダンスや歌を作ることなどできない。

海未が詩を書いていたことを知っていた穂乃果に頼み込まれ、海未はしぶしぶ作詞を引き受けてしまったのだ。

そういう経緯で詩を書き始めたのだ。

中学時代のこともあったし、書き出すのに相当時間がかかった。

いろんな葛藤があつて、最後まで書くかどうか迷っていた。

でも、一度書き始めてしまうと、つぎつぎと言葉が沸いてきて一気に書き上げてしまった。

久しぶりに書いたにしては、いいできだと思った。

これが完全に自己完結でいいものなら、一人で悦に入っていたかもしれない。が、それを書いた目的は、アイドルとして世に発信するためだ。

書き上げたはいいけれど、それを穂乃果たち見せるとたとたん

に怖くなってしまった。

穂乃果たちが、自分の詩を呼んでバカにするようなことは無いとはわかっていても、過去の出来事がまわりついてくるのだ。

そもそも、結局他人に詩をきちんと評価してもらったことは一度もない。その詩を使って曲を作ったとして、それが少しでも人の胸に響くものになっているか、海未にはわからなかった。

「よお、海未」

「——っ、レンジですか」

考え事をしていた海未は、かけられた声に警戒して振り向いたが、隣次だと確認すると肩の力を抜いた。

誰かに評価をしてもらわなければならない。しかし、誰かに見せることは怖い。そんな考えを堂々巡りさせているとき、海未はなぜか隣次へ電話をかけていた。

「なあ、朝練に参加するのはいいんだけどさ。なんで俺だけいつもより早く呼び出されたんだ？俺なんかしたか？」

「いえ、別にそういうわけではありません。ありがとうございます。突然、連絡してしまって」

「どうせ、朝は暇だしいいさ。それより、話ってなんだ？」

「そ、それは……」

隣次は急な連絡に応え、昨日より30分くらい早い時間に来た。

海未が彼を呼んだのは、当然詩を評価してもらうためだ。

穂乃果やことりに見せるよりも先に、彼に評価してほしかったからだ。

しかし、彼が来た今になっても、海未はどうにも踏ん切りがつかなかった。

第三者に評価してもらわなければという気持ちは確かにあるのだが、もし悪評価を付けられてしまったらと思うと、ノートを抱く腕が振るえて動かなくなるのだ。

「何か、話したいことでもあるんだろ？」

「はい……………。それは、そうなんですけど」

自分を見る隣次を前に、深呼吸を一つする。

ここまで来たらやるしかない。

ごくりと唾を飲み込むと、ノートを胸に強く抱きしめる。

「レンジー!!」

「おう、どうした？」

「き、今日は……………」

「……………今日がどうかしたか？」

「今日は良いお天気ですね」

「ん？」

隣次は、頭にはてなマークを浮かべる。

言った本人も、自分がなにを言っているのか理解できなかった。

「そうだな。曇りだけど、これから運動するって考えたら涼しいし快適かもな」

「そ、そうですね………」

再び沈黙が訪れる。

なぜ、歌詞を見て貰おうとして、天気の話になるのか。

頭を抱たいところを必死にこらえる。

さっき、いらぬ前振りをしようとして失敗したのだ。

すぐさま修正し、前振りなしに本題に入ることを決める。

「レ、レンジ………」

「おう、どうした？」

「その………。か、かかか」

「か？」

「かし、ぱんを穂乃果にあげようと思うのですが、なにがいいでしょうか」

「菓子パン？　なんで」

「もし、穂乃果が練習をサボろうとしたら、目の前につるしてやる気を出させようかと……」

「いくら穂乃果でも、それに引つかかるほどバカじゃないと、思うけど……」

「……そうですね。ごめんなさい、なにを言っているのでしょう」

せつかく来てくれた憐次を前にしても海未は、踏ん切りを付けることができなかった。

胸に抱きしめる一冊のノート。

今回書いた歌詞の詰まったそのノートを憐次へ渡して見てもらえばいい。

たったそれだけなのに、できない。前へ進み出せない。

「すみません。実は、話したいことは忘れてしまつて……。わざわざ早く来て貰つてしまつて……。さあ、まだ時間はありますが、早めに練習に来たと言うことで――」

「――なあ、海未……」

自分が情けなくなつた海未は、明日こそはといつて、練習を開始するべく憐次の前から開けた場所へ移動しようとした。

そんな彼女の前に、憐次は立ちはだかつた。

「あの、レンジさん」

「海未……」

海未が一步後ずさると、憐次は一步詰め寄つた。

海未は、一步、また一步と追いつめられる。そして、ついに背中が神社の壁にぶつかつた。

憐次は無表情。その表情からは、なにも伺えない。

が、海未はそれに有無を言わさぬ威圧感のようなものを感じて動けなくなる。

「こんな時間に呼び出して、忘れたなんてそれはないだろ」

「すみ、ません」

「言いたことがあるなら、はっきり言えよ」

「ですが、その………。近いですよ、レンジ……」

「もう我慢の限界だ。まどろっこしいんだよ」

憐次は、突然叫ぶと海未へ手をのばした。

「へ？」

憐次の突然の行動に海未は、惚けた声を上げた。

しびれを切らした憐次の手は、まっすぐ海未の胸の方へ伸びていた。

「いやっ!!」

海未は、反射的に顔を逸らした。

憐次は、なにか勘違いしており、海未にそういった行為を求めようとしていると思ったからだ。

しかし、少し時間が経つても一向に想像した事態は起こらない。

恐る恐る瞑った瞳を開ける。

すると憐次は、一冊のノートを凝視していた。

そのノートが、さっきまで海未が抱いていたものだど彼女が気づくには少し時間がかかった。

「あの、レンジ？」

「ん？ 海未、何やってるんだ？」

「え、だって……。そ、それは」

「そこで、やっと理解する。」

憐次は、ただ彼女の腕からノートを引き抜いただけだったのだ。

すぐに状況を理解できなかった海未だが、徐々に冷静を取り戻すと共に、恥ずかしさで顔が茹で立つように熱くなっていた。

自分はいったい何をされると思っていたのだろうか、と。

「歌詞もう書けたんだろ？　なんでさっさと見せてくれないんだよ」

「ちよつと待ってください。だってまだ、心の準備が……」

「準備なら、さっきまでで十分できただろ、つと。どれどれ……」

「ああ、そんな……」

憐次は、海未の腕の中からノートを引っこ抜いたノートを有無を言わせず中身を読み進める。

決意も何もできていなかった海未は、読み始めた憐次を止めることもできず狼狽してしまっていた。

そもそも、海未が彼を呼んだ理由が歌詞を見てもらうためであったためだ。だから、この状況は海未にとって願ってもないことだった。

いきなり奪われ、もし批評されたときのための準備がなにもできていなかったり、そもそも怖かったり。さまざまな感情がこつた返しの状態だった。

での、結局海未は、真剣な顔で歌詞を読む憐次をただ神妙な面もちで見ていた。

文学作品などに比べ、歌詞は圧倒的に分量が少ない。

そのため、すぐに評価が返ってくると思っていた。

しかし思いの外、憐次は長い時間をかけて歌詞を呼んでいた。

何度も読み返しているのだろう。視線が下の方まで行くともまた上の方へ戻り、ときどき流れに反した箇所へ視線が飛ぶ

相当吟味しているように見える憐次を見て、海未はただただ不安ばかりを募らせていた。

「ふう………」

ずっと息を止めていたのだろうか。

少し経って、憐次は息を吐くと共に顔を上げた。

読んでいた時間は、長いと言っても一分や二分。

それでも、海未にとっては死刑執行の時を待っているかのように長いものだった。

「結論から言おうか………」

「だから待ってください。まだ………」

「ええい。誰もが海未のペースに合わせてくれると思うなよ」

そんなことでは、止まらないとは分かっているけど、海未は堅く目を閉じて胸に手をやった。

ふるえながら評価を待つ海未に、憐次はくすりと笑うと口を開いた。

「いいと思うぞ」

「……………え。今、なんと？」

「だから、いいと思った」

憐次は、海未へノートを返す。

海未は、差し出されたそれを、おずおずと受け取った。

「START DASH!! か。これから始める海未たちにはぴったりだな」

「……………はい。今の心境を元に書きましたので」

「始まりには、希望だけじゃない。不安や畏れもある。でも、それら全部を抱えながら進みだそうっていう気持ちも伝わってきた。すごくいい歌詞だよ」

「それは、よかったです」

「あんまり見せるのを躊躇ってるから不安だったけど、やっぱり思った通りだな。海未ならきつといい歌詞が書けると思った。……………なんでこれだけのものを書いて自信が持てないのか、不思議になるくらいだぜ」

「それは、自分ではわからないじゃないですか。自分の作品が、本当に良いものかどうかなんて」

海未は、自分の詩を誉めてくれたことはうれしく思った。しかし、同時に頭に来た。

彼女が過去の出来事など、いろんなことと戦った結果、やつとの思いでここまでできたのだ。

だというのに、それを知らない憐次が、無神経なことを言ったことに腹が立ったのだ。

「結局、良いものかどうかを決めるのは他人です。自分がどれだけいいと思っても、他人がどう思うかわかりません。自分がいいと思っていたものが否定されてしまうのではないかと思うと、怖いんです。あのときのように、バカにされるのではないかと思うと、怖いんですよ」

「そういうもんだろ、何かを生み出すのってさ」

しかし、そんな海未に対し、憐次はさも当然のことのように答える。

「他人がどう思うのかわからない。そんなの当たり前前だろ？ この世に万人が万人好きだって思ってるものなんてきつとないと思うぞ。」

「それはそうかもしれませんが、でも……………」

「そんなことを気にするより大切なのは、自分がどう思ってるかだろ？」

「自分が、どう思っているか……………」

「ああ。海未は、この詩をどう思ってる。悪い出来だと思ってるのか？」

自分に自信がなくて、憐次に歌詞を見て貰うことさえ、結局自分ではできなかった。が、その問いには、

「そんなことありません。私は、いい出来だと自負しています」

海未は、何の迷いもなくそう答えた。

それをみて憐次は、笑った。

「ならいいじゃねえか。他人がどう思うかなんてわからないけど、少なくとも、自分がいいと思わないものを人がいいと思うわけがない。いや、たとえ自分がいいと思わないものが評価されても、それってつまらないだろ？」

「レンジ……………」

「まあ、どうしても不安になることがあったら、俺に見せろよ。嘘なんかつかず、本音を聞かせてやるから。ってか、真っ先に見せろよ。今回だって、いつ書き上がるのか楽しみにしてたんだからな？」

「え、そうなのですか？」

「当たり前前だろ？俺は、おまえたちのファン第一号だぞ？」

「ファンですか？」

「ああ。駆け出しの新人アイドル三人。まだ、ユニット名すら決まっ

てない、出来立てほやほやアイドルだ。その初めてのファンだぞ？俺は、海未たちなら近いうちにスクールアイドル界で超有名なアイドルになるって期待してんだよ。海未たちのやることなら、なんだって楽しみに決まってるんだろ？」

「ははは。何なんですかもう。あなたって人は」

「だからもし、誰も見向きもしなかったとしても、俺はおまえたちのステージ楽しみにしてるし、絶対に駆けつける。まあ、万が一にも誰にも見向きもされないなんて、あり得ないとは思うけどな」

「あなたがそういうと、不思議と本当になる気がします」

「あ、そうそう」

隣次は、思い出したように声を上げた。

「あの時のこと引きずってんなら気にすんなよ。ときどきいるんだよ。気になってる子に、ついつい意地悪しちまう迷惑な輩がな」

「ちよっと待つてください。それはいったいどういう——」

「——あれ。なんで二人ともこんなに早いのか？」

「ことりたち、時間間違えちゃった？」

海未が隣次を追求しようとして使用としたそのとき、ちよつと穂乃果とことりが到着した。

彼女たちより先に隣次「たちを見て、ことりはあわてて腕時計を確認している。

「いや、俺だけちよつと前に呼び出されてな。穂乃果たちは、時間通りだよ」

「え、レン君だけ?」

穂乃果は、海未が憐次だけを早く呼び出した事実を知ると、にやけ顔で海未に迫った。

「あれ、どうしてレン君だけ早く呼んだの? もしかして、こくは――」

「――穂乃果。羨ましがいい。俺が早く呼ばれたのは、この出来立てほやほやの歌詞を、誰よりも早く読むためだ」

「……な、何だつて!」

憐次は、無理矢理穂乃果の言葉を遮るようにして、理由を話した。

穂乃果は、自分の言葉を途中でできられたわけだが、それよりも聞き逃せないことを聞き、そつちに食いついた。

「そ、そんなずるいよ。穂乃果が一番早く読ませてもらうと思ったのに。なんで、レン君が先なの。ねえ、海未ちゃん!」

穂乃果の追求は、憐次へ歌詞を見せたとされる海未へと向かう。

さすがは海未。

憐次が、わざわざ穂乃果の言葉を遮って真相を話した真意に気づくと、一瞬で話を構築した。

「そ、それは、当然です。レンジが私たちの話し合いに参加したのも、練習に参加してもらってるのも、すべては第三者として私たちを評価してもらったためですから。今回の歌詞だってもちろん、観客側にはどのように伝わるかということを知るためです。それに、どうせ穂乃果の感想では、いいか悪いか位でどのように伝わるかの検証にはならないでしょう?..」

「うう。ひどい言われようだけど、言い返せないのが悔しい……」
「安心してください。レンジに見せた後は、すぐ穂乃果たちに見せようと思っていました」

「そうだよね。じゃあ、レン君。早くそのノート貸してよ」

「おう。わかったよ……」

隣次がノートを差し出すと、穂乃果は待ちきれないとばかりに手を伸ばしてきた。一番最初に読むことができなかつたことが悔しかったのか、受け取ると言うより奪い取ろうという動きだった。

「……よつと」

「あつ。ちよつと、なにをするの?..」

素直に渡そうと思っていた隣次だったが、悔しがる穂乃果を見て思わず手に持っていたノートを引いてしまった。

「早く渡してよ」

「いや……。今つて、この歌詞を呼んだことがあるのは俺だけっ

てことだろ？　なんか優越感というか。もうちよつとこのままでもいいかなって……」

「いいわけないよ。渡しなさい！」

「おつと、危ねっ」

「もう、レン君のバカ、いじめっ子！」

憐次が逃げたことで、穂乃果との追いかけてっこが始まってしまう。

あたふたすることりともに、海未はほほえましい二人のやりとりを眺めていた。

憐次のおかげで、穂乃果の面倒くさい追求を回避することができた。

もし、あのまま穂乃果の追求を許していたら、海未は憐次に告白でしようとしていたことにされてしまっていたかもしれない。

海未は、ほっと胸をなで下ろした。

「わかった。わかったからそんなに叩くなつて」

「レン君の、バカバカバカ!!」

はずだった。はずだったのだが、

「ときどきいるんだよ。気になってる子に、ついつい意地悪しちまう迷惑な輩がな」

さつき、憐次が言った台詞が、なぜか胸に響いたのだ。

「もう、なにをやっているのですか。あなたたちは」

気がつくのと、海未は、憐次からノートを奪い取ると、穂乃果に手渡した。

「海未ちゃん。やっぱり持つべきものは海未ちゃんだよ。レン君、ベーだ！」

「ああ、俺だけしか読んだことがないと言う優越感が……」

「全くなにを言っているんですか。どうせ、スクールアイドルとしての活動を本格的に始めるときには、お客さんに聞いてもらうんですよ？」

「それでも……。ああ、わかった。あきらめるよ。はあ」

「もう、あなたって人は」

がっくりと肩を落とす憐次に、海未は呆れてため息をつく。

結果的に、穂乃果にノートを渡すことで、不毛な争いを止めることになった。

しかし、その行動が穂乃果と憐次の争いを止めるためのものだったのか、憐次の行動に呆れてのものだったのか、はたまた自分の為の行動だったのか、当の本人にも分からなかった。

一悶着あつたものの、4人は朝の練習を始めた。

ストレッチなど体の柔軟性を上げるための運動を行い、今は、穂乃果、海未、憐次のメンバーでランニングをしていた。

ことりは足を怪我していてまだ走れない。

当初は、彼女のけがが完治するまでトレーニングは激しく体を動かさないものに限定しようと思っていた。三人そろって練習しなければ意味がないと思っていたからだ。

しかしことりは、二人だけでもちゃんと練習するように促した。自分のせいで練習ができていないことを気にしていたことりが足を引っ張りたくないと考えての発言だった。穂乃果と海未は、そんな彼女の意を酌んだのだった。

商店街では、早くも店を開けるために支度をしているところがちらほら見える。世間では、シャッター商店街が目立つ中、ここはいつもにぎわっていた。

それは、昔ながらの心が残り続けているからだろう。

少し外から来た人が見れば、逆にめずらしいと感ずることだろう。

いつも見ている風景だからこそ、気づかないこともある。

それが、一番身近な自分自身だったらなおさらだろう。

規則正しい呼吸音を奏でながら、海未はなぜか穂乃果をじっと見ていた。

特に理由があるわけではない。

ただ何となく視線を向けると彼女がいるのだ。ただそれだけだ。

穂乃果に視線を向けると、自然と隣次も一緒に視界に入ること、単なる偶然だった。

「あれ、海未ちゃん。どうしたの？」

「え、いえ。別になんでもありません」

「そう？ それより、さつき見せて貰った歌詞！ すっごく良かったよ。」

早く歌として聞きたいなって思ったもん」

「聞きたいって……あなたも歌うのではなかったのですか？」

「そうだよね。ははは」

海未は、穂乃果と一緒にいることが好きだった。

穂乃果は、自分を知らないステージに引き上げてくれる。

今回の歌詞だって、半ば強引に穂乃果に任されていなければ、きっとこの先も書くことはなかっただろう。隣次や穂乃果、ことりに見せることもなかっただろう。彼女たちに、詩を誉めて貰うこともなかっただろう。

でも同時に、穂乃果と一緒にいると、まざまざと見せつけられる。

自分に足りないところ。

穂乃果より劣っているところ。

自分自身の嫌いな部分を。

憧れと妬みは、同じ言葉なのだと思う。特に今日のような日はそう思う海未だった。

「どうしたの、ぼーっとして。大丈夫だよ。穂乃果はいい悪いしか言えないけど、レンジとことりちゃんも絶賛してたんだから」

「大丈夫ですよ。別に心配なことがあるとかではありませんから。それにあなたにすてきだって言ってもらえてうれしいですよ？」

うれしいということは本当だ。

少し、心から喜べていないところも確かにあったが、これは今のこのどこか引つかかる感覚のせいだと、海未は自分に言い聞かせる。

「おい、ちょっと待て」

「痛い。ちょっとレンジ。急に止まらないでください」

「どうしたの？」

考え事をしてきたからだろう。海未は、突然立ち止まったレンジの背中に鼻をぶつけてしまった。

痛む鼻を押さええながら海未は文句を言うが、すぐに隣次の様子がおかしいことに気づく。

「なにかあったのですか」

「こっちはだめだ。あっちへ行こう」

「ええ？ そっちは遠回りになっちゃうよ。レン君そんなに練習したかったなんて……。まさか、レン君。私たちに対抗してスクールアイドルに……」

「んなわけあるか。いいから早くここから離れるんだよ」

「レンジなにを焦って、……。ってまさか」

海未はあたりを見回し、それを発見した。

それは先日、彼女たちを異世界へと誘った穴。クラックだった。

その穴とその向こうの恐ろしさを知っているのは、ほかでもない穂乃果たちだ。

3人は、誰が言わずとも、鞆からユグドラを取り出すと腕に装着した。

最初に配布されたユグドラは、試作機である戦国ドライバーと同様

にバックルの形状をしたものとなっていたが、2世代、3世代機となるにつれ、搭載機能の見直しや、軽量化、小型化が進められた。

現在では、バックル状のものを使っている者はほとんどおらず、ブレスレットやチョーカーなどアクセサリ感覚で身に着けられるものまで販売されている。

もつとも、いまだそういったアクセサリタイプのもものは高価であり、海未たちは大きさが戦極ドライバーの半分ほどの腕に取り付けるタイプを使用していた。

発見したクラックはすでに、人ひとりがくぐることのできるくらい大きさにまで広がっていた。

クラックの向こう側を知らない人からすれば不思議な穴程度にしか思えないが、向こう側の惨状を知っている海未たちには、その大きく広がったクラックが何を引き起こすのか容易に想像がついた。

「どうしよう。早くユグドラシルへ知らせなければ」

一番早く動いたのは海未だった。

すぐさまスマホを取り出して、ユグドラシルへ緊急回線を使って報告する。

この前の教訓がある。

勝手な行動をして、いやというほど怖い目にあった彼女は、今度こそ専門の人に任せることに決めたのだ。

回線がつながると、すぐに対策部隊を派遣してくれることになっ

た。

今度こそ、彼らの指示に従おう。そう意思を固め、心配な穂乃果に目を向けた。

「おお、嬢ちゃんたち。走ってるのかい？ 精がでるねえ」

そんな時、朝早くに集まっている海未たちに興味を持ったおじさんが声をかけてきた。

「どうやら、このあたりの店の人のようで、朝の準備をしていたところ、珍しい集団を見つけて声をかけたということだろう。」

クラックから、いつインバスが飛び出してくるかわからない。

建物の中に入っていたところで、どうなるというわけではない。

それでも、近づかないに越したことはない。

「おっちゃん、くるな」

近づいてくるおじさんにはまったく悪気はないのだろう。

「が、いまはタイミングが悪すぎる。隣次は、苛立ちを隠せず舌打ちをして彼の前に立った。」

彼をクラックから遠ざけようとした隣次の行動だったが、彼はどう受け取ったのかにやりと笑って余計近づいてきた。

「君はこの子たちのナイト様ってわけか？ たく、両手に花とはうらやましいねえ」

「ちよつ、そんなんじゃない。そんなことより、ここから離れてください」

「ああ、そう言うなよ。ぴりぴりするなよ」

早く遠ざけたい憐次たちの気持ちとは裏腹に、面白がるおじさんは一向に帰ろうとしない。

「レン君。あれ」

そんなやり取りをしている内に恐れていた状況が起きてしまった。

穂乃果の悲鳴を聞いて振り向くと、初級インベスの丸い頭がちょうどクラックを潜り抜けようとしているところだった。

「な、なんだそいつあ」

「早く、ユグドラをつけてください」

「ん？ 家においてきちまったよ」

「ああ、もう。落ち着いて。家に帰ってつけてから、周りの人に知らせてください」

やっとおじさんは状況を理解した。ヘルヘイムの植物の侵食を防ぐユグドラを忘れたため、慌てだしてしまった。

おじさんを冷静にさせると、被害を防ぐための指示を告げた。

今いる中で一番落ち着いている自信が彼女にはあった。ことりは

呆然とインベスを見ているし、憐次は海未が入らなければおじさんと口論になるだけだった。

ヘルヘイムに迷い込んだあの日から、海未は決意していたのだ。次同じことが起きたとしたら、あの時と同じようには決してしないと。

「穂乃果、憐次。ユグドラシルが来るまであの少しかかります。私たちは、できるだけ離れましょう」

「……ああ、わかった。穂乃果、行くぞ」

海未は、二人に呼びかける。

自然発生したクラックから出現するインベスを始めてみた憐次は、海未の声に我を取り戻すと同じく動かない穂乃果の背中に呼びかけた。

が、

「……」

穂乃果は、インベスの方を向いたまま動かない。

「穂乃果……」

海未は、足を止めて穂乃果の様子をうかがう。彼女の体が影になって見えないが、何かをしているのようだった。

なぜかはわからない。しかし、海未は穂乃果の背中を見て不安を抱かずにはいらなかった。

穂乃果の背中には、何か決意を決めたような気配がうかがえた。その気配は、例の日にも感じたものだった。

そう。穂乃果が助けに入ってきたときに見た背中と同じだったのだ。

「穂乃果。あなた今、なにを考えていますか」

「う、海未ちゃん……………」

「まさかとは思いますが……………。あなた、あのインベスト戦おうなんて思っていないせんよね」

海未の問いに、穂乃果は振り向いた。

穂乃果の表情を見て、海未は確信してしまった。

穂乃果も、海未の問いに観念したのだろう。隠し事がばれたような複雑な表情を作った。

「……………海未ちゃん。穂乃果、戦うよ」

「あなた、いいましたよね。インベストゲームを見て、自分は戦いたくないと。戦うなんて、間違っている」と

「うん、言ったよ。でも、それはインベストゲームが正しくないと思ったから。友達を戦わせるなんて、おかしいと思ったから」

「でしたら……………」

海未は、どうにか穂乃果を引き留めようとするが、穂乃果は首を

振った。

「でも、この力を手に入れたとき、誓ったんだ。友達を絶対に守るんだって。友達を守るためだったら、きつと正しいよね」

「穂乃花、だめです。行かないで。穂乃果!!」

海未は叫ぶ。しかし、彼女の声では、穂乃果は止まらない。

それが正しいと信じた穂乃果を止めることはできない。

「それ以上はさせない」

インベスの前にでた穂乃花は、腕に着けたユグドラを取り外した。そのユグドラは、以前ヘルヘイムでインベスと戦った時に使っていたものと同じバックル状に形を変えた。

そのバックルへと変化したユグドラとオレンジのロックシードを手にもって構える。

バックルを腰にあてがい、腰に巻き付いたと同時に、オレンジを解錠する。

そして叫ぶ。

「変身!!」

友達を守るといふ意思を込めて。

第七話 『理想と現実』

「ソイヤ！ オレンジドレス。花道、オンステージ!!」

光のベールを払って現れるは、橙の光を放つステージドレス。

穂乃果は、以前ヘルヘイムで見たステージドレスを身にまとっていた。

デザインはほとんど同じだったが、以前とは異なりスカート部分には草摺（くさずり）と佩盾（はいだて）が、肩の部分には鎧の袖が浮いており、戦国武者をイメージしたような格好。それはまるで、自ら戦うことを決めた穂乃果の心に呼応したかのような変化だ。

穂乃果は、突如現れたクラックを前に身構える。

すでにクラックは人の身長大にまで広がり、インベスがぐり抜けるのに十分な大きさとなっていた。

そのため、そのクラックをくぐって一匹、また一匹と、穂乃果たちの世界へと行列をなして入ってきてしまっていた。

「みんな、下がってて」

「穂乃果。あなたいったい、なにをするつもりですか？」

「……あのインベスたちを、ヘルヘイムに帰す」

「そんなの無茶です。ユグドラシルの方がくるまで待ちましょう」

「ごめん、海未ちゃん。そんなの、待つてられないよ」

穂乃果は、海未の制止を振り切って走り出した。

向かうのは、クラックをくぐって来ようとするインベスの正面。

身体能力が強化された穂乃果は、数歩で彼らの前までたどり着くと、インベスの進行を阻むと共に彼らをヘルヘイムへと押した。

特別鍛えているわけではないが、ドレスの恩恵で強化された怪力のおかげで、押し戻せないまでも彼らをくい止めていた。

「なにをしにきたのかわからないけど、お願い帰って！」

そして、インベスたちに呼びかけた。

いつも、自分のインベスに話していたように。

「ここで暴れちゃだめだよ。じゃないと、ユグドラシルの人が来て……」

穂乃果は、赤い騎士のことを思い出す。

そして、彼女が目の前で見ていた光景を思い出す。

インベスが腹部を突き刺され、苦しむ様が今もありありと浮かぶ。いた。

インベスの断末魔が、まだ耳から離れない。

そして、インベスが塵となって消えていく様を目の当たりにしたのだ。

怖かった。

海未たち親友が傷つくことは、もちろん怖かった。

でも、今はそれと同時に、目の前で友達として一緒に過ごしてきた「ほむまん」と同じインベスが目の前で息絶える光景を見るのが怖かったのだ。

穂乃果は、彼らを救うために彼らを引き返させようとする。が、長年生活を共にしたものならともかく、全く初対面の相手に彼女の気持ち伝わるはずもない。

「ちよっと、痛い。やめて」

穂乃果の説得に対し、インベスは聞く耳持たず、牙を剥いたのだ。

一番先頭にいる初級インベスは、自分を押し返そうとする穂乃果へ向かって短い、しかし強靱な腕を振り回していた。

肩あたりで浮遊している鎧の袖によって、穂乃果は、その攻撃の直撃を免れていた。が、鋭い爪は防いでも、振り下ろされる度に襲いかかる衝撃までは防ぎきれない。

その衝撃は、痛みとなって穂乃果の体を蝕んでいた。

「なんで、どうして聞いてくれないの?ただ、傷つけたくない。傷ついてほしくないだけなのに。——きや」

どうにか送り返そうとしていた穂乃果だったが、彼女に不意に横薙の一撃が襲った。

初級インベスの攻撃は上からの衝撃が主であり、それに耐えるために縦方向の衝撃に集中していたからだろう。

ほぼ身構えてなかった横からの衝撃に、軽い彼女の体は、たやすく浮き建物の壁に叩きつけられた。

無双セイバーは、穂乃果が飛ばされると共に彼女の手を離れ、穂乃果が倒れ込むと共に彼女の近くに突き刺さった。

全身に走る痛み涙ぐむ目を開くと、彼女に一撃を加えたであろう相手柄の姿が見えた。

その姿は、ヘルヘイムで見たものと同じ。

彼女の目の前で殺されたものと同種のインベス。ビヤツコインベスだった。

「なんで、なんでわかってくれないの？」

押さえつけるものがなくなったインベスたちは、一斉にクラックから飛び出した。数秒もしないうちに十数匹の初級インベスと上級インベスが、決壊したダムのようになだれ込んだ。

そして、一瞬のうちに商店街の広い道を埋め尽くした。

穂乃果が押さええていたため、騒ぎになっていなかった。

発見時に一緒にいた近所のおじさんは、結局あつけにとられて動けないでいたため、インベスが居ることが伝わっていなかったからだ。

しかし、インベスが道を埋め尽くすほど出てきてしまったため、騒ぎを聞きつけた近所の人々が出てきてしまった。

「なに、あの大きいインベスは？」

「大変だ。誰か襲われてるぞ！」

「ユグドラシルへ連絡するんだ。逃げろ」

人々は、インベスを見つけるなりパニックになっていた。

「みんな。はやく、逃げて」

逃げ惑う周囲の声に反応し、周りに人が集まりつつあることに気づいた穂乃果は、痛む体をおして彼らとインベスとの間に割って入った。

無双セイバーをとっている余裕はなかったため、素手でインベスに飛びかかった。

そのままインベスを押し倒した彼女は、両脇を進もうとする二匹のインベスを片手で抑えた。

二匹のインベスは彼女に構わず進もうとする。

最初は穂乃果に興味も示さなかったインベスたちだったが、進行を妨害されてさすがに気が付いたようだ。

進ませまいと踏ん張る穂乃果に対し、インベスたちは、腕を振り下ろした。

「い、痛い。……お願い、やめて。やめてっば」

インベスたちが振り下ろす腕を受け、彼女の上体が下がる。

「穂乃果。逃げてください」

それでも踏ん張り続け、インベスの進行を遅くする穂乃果を見て、海未は叫んだ。

自分たちの身が危険であることは重々承知だったし、今戦える人間が穂乃果しかいないこともわかっていた。

でも、そんなことは関係なく、友達を戦わせたいと思う人間なんていない。

海未は、たとえば自分が危険な目にあうことになろうとも、穂乃果が傷つくところを見たくなかったのだ。

「おねがい。……誰か、助けて……」

助けに行きたい。

海未は、そう願うも動けなかった。

助けに行きたかったが、行ったところで役に立たないことがわかっていた。それどころか、自分が無茶なことをすれば、それだけ穂乃果が危険な目に遭うことは分かり切っていた。

だから海未には、ただ祈ることしかできなかった。

穂乃果を助けられるだけの力を持った誰かの助けを……。

「海未、逃げろ！」

「え？」

レンジの声に、海未は自らにも危険が迫っていることに気づく。

いくらドレスで強化されていても穂乃果は一人なのだ。

どんなにがんばっても、一人で押さえられる数は限られている。

穂乃果を避けて進み出ていたインベスが、海未たちの方へと向かってきていたのだ。

「穂乃果!!」

「奴の言うとおりにになったことは癪だが、マークしておいて正解だったようだな」

「な、その声は……」

穂乃果に腕を振り下ろそうとしていた上級インベスが、横っ飛び飛ぶ。

そのすぐ後に、黒い陰が彼女たちの視界に飛び込んだ。

黒いジャケットをマントのようにたなびかせ、彼は悠々と立っていた。

「駆紋、戒斗……」

「やはり、俺の予想は正しかったようだな。園田海未」

「あなた。私たちの後をつけていたのですか!？」

「正確には、俺の部下が、だがな」

「あなたたちは……」

海未たちを助けてくれたはずの彼を、海未は敵でも見るような顔で睨んでいた。

彼女を助けた戒斗は、そんな彼女を一瞥した。

彼女の表情を見た戒斗は、特に表情を変えずに睨む彼女を鼻で笑った。

「何だ、その不満そうな態度は。俺も、あの姑息なやり方は気に食わんが、結果、貴様等はまだ無事に生きている。貴様等からの礼など欲しくもないが、憎まれる筋合いはない」

「……」

助けてもらったにもかかわらず理不尽な態度をとっていると自覚のある海未は、ぐうの音も出さず黙って睨む。

そんな言い返せない彼女を見て戒斗は満足したのか、視線を移した。

「さて。証拠はつかんだ。話を聞こうか、高坂穂乃果」

いつから彼がそこにいたのかは定かではなかったが、そこまで言うということは、変身の瞬間から見えていたのかもしれない。

だとすれば穂乃果が危険な時ただ見ていたのではないかと考え、非難の視線を向ける海未をよそに、戒斗は穂乃果の方を向いた。

「——くそっ」

戒斗が穂乃果に近づこうとしたとき、インベスが戒斗に襲いかかった。

回避を余儀なくされた戒斗は、とっさに後ろに下がって飛びかかってきたインベスをやり過ぐす。そのインベスを踏み台にし、さらに後ろへターンしながら続いて襲ってきたインベスを避けた。

インベスたちには穂乃果を守るような意志は毛頭なかったが、自分と穂乃果の間に立ちふさがるようになだれ込んできた初級インベスに、彼は舌打ちをした。

「群をなし、徒党を組む。人間もインベスも、弱者は同じか」

戒斗は、一般人からすれば明らかな強者であるインベスたちを弱者と断じると、懐から何かを取り出した。

「弱者は強者に淘汰されるのみ。邪魔をするなら容赦はしない」

彼は、取り出した黒い湾曲した板状のものを腰にあてがった。すると黒い物体の端から光の帯が伸び、彼の腰に巻き付いた。

それは、穂乃果が変身の際に使用したユグドラの形状と酷似していた。

いや、正確には、穂乃果のユグドラが彼のものに酷似しているという表現の方が正しい。

なぜなら、戒斗が身につけたものは、ユグドラの試作機として作られたものだからだ。

ユグドラに搭載されているヘルヘイム環境に対する適応機能とともに、

インベスに対抗するための武装を搭載したドライバー。

かつて、戒斗を含む五人が使用していた、戦極ドライバーだ。

戒斗は、ドライバーを装着すると、今度はロックシードを取り出した。

そのロックシードに描かれているのは、黄色く細長い果実の房だ。

「変身」

「バナナ!!」

彼は呟き、ロックシードを解錠する。

解錠すると、ロックシードが自らを高らかに宣言した。すると、その宣言に呼応するように頭上にクラックが開き、金属らしき塊が姿を現した。

その塊は、ロックシールドが宣言した通り、バナナの一房のような形をしていた。

彼は、持ち上がった掛け金に指を引っかけて一回転させた後、腰のドライバーのドライブベイトに押し込む。数々の戦いの中、体に染み着いた動作で掛け金をおろす。

「ロックオン!!」

ロックシールドが固定されると、戦国ドライバーはファンファアールを奏で始める。変身までの行程をほとんど完了し、装着者にゆだねていることを表す待機音。それが高らかに鳴り響く中彼は、カッティングベレードの柄を引き上げ、ロックシールドのキャストパットを展開した。

「カモン。バナナアームズ！ ナイトオブスピア!!」

彼の行った最後の行程を経て、電子音と共に頭上の塊が彼の頭に覆い被さるように飛来した。

「ば、ばなな?」

戒斗の変身を目の当たりにした海未たち。

いくつもの戦いをくぐり抜けて来た歴戦の騎士を前に、彼女たちが漏らしたのは、畏怖ではなく、素っ頓狂な驚きの声だった。

頭上から落下した金属のバナナを被った戒斗は、そのバナナを被ったまま歩き出したからだ。

その姿からは、騎士のような勇ましさも、貴族のような高貴さも感

じられない。

その姿は、バナナをそのまま頭とすげ替えたようなお化けだった。

「何ですかあれ」

「あのバナナ。ほんとに強いのか」

海未と憐次は、ついつい疑問を漏らしてしまふ。それに反応してか、バナナが彼女たちの方を向いた。

そこで、やっとバナナに変化が現れた。

三分割されたバナナは、両端部分がそれぞれの肩に、そして真ん中の部分が前後に分かれ、背中と胸を守る装甲となった。

「バナナではない。バロンだ!!」

バナナの展開が終了すると、戒斗は、海未たちがヘルヘイムで出会った騎士と同じ姿となっていた。

三人がバナナで被った彼を見てつぶやいた言葉が気に障ったようだ。いつの間にか、彼の手には、白い槍が握られていた。

槍の先は白く皮をむいた中身のようで、柄は黄色い皮のよう。

バナナアームズ専用武器である剥き身のバナナを象った槍、「バナスピア」だ。

変身した直後の彼に、インベス後ろから飛びかかった。彼の死角からの攻撃だったが、彼は一瞥もすることなく手に持った槍を振るっ

た。その一撃は、不意打ちを仕掛けたインベスを弾き飛ばした。

「貴様らは引っ込んでいろ。戦う覚悟のない奴が立ち入っている場所ではない。……貴様もだ。高坂穂乃果」

周りのインベスを一蹴したバロンこと戒斗の視線は、同じ場でインベスともみ合っている穂乃果へと向けられていた。

その穂乃果は、いまだインベスを倒そうとはせず、クラックに押し込もうとしていたのだ。

「いやです。だって、戒斗先生はまた、この子たちを……殺すんですよ」

「ふん。死ぬのはそいつが弱かったというだけのことだ」

「強い、弱いつて。そんなことで決めていいことなわけじゃないですか」

目の前で平然とインベスを殺して見せた戒斗に問う穂乃果。

その問いに戒斗は、あたかも当たり前というように平然と答えた。

その答えは、インベスをできる限り傷つけずに帰したいと願う穂乃果には許せないものだった。

「またこの子たちを話もせず傷つけようとするなら、先生こそ帰ってください」

そんな、彼女の言葉を小馬鹿にしたような表情で笑う。

「ふん。弱者の言い分だな」

「弱者弱者って、強さがそんなに大事なことですか？ いいから、帰ってください」

「ほう？ では、俺が出てきていなかったとしたら、こいつらはどうなっていた？」

戒斗は、海未たちを指した。

「そ、それは……」

それを見て、穂乃果は言いよどむ。

さつき、襲われそうになった海未たちを救ったのはほかでもない。戒斗なのだ。

穂乃果は、インベスたちの対処に追われ、助けに入れる状況ではなかった。

戒斗が割って入らなければ、海未たちはインベスたちに襲われ、ただでは済まなかっただろう。

「仲間は守りたい。同時にインベスも助けたい。そんなできもしない綺麗事を並べ、結局なにもできていないどころか仲間をも危険にさらしてきる」

「つでも、話もしないまま一方的になんて……」

「話など通じるものか。貴様は、さつきからインベスを説得しようとしていたが、どうだ。その中の一匹でも言うことに耳を傾けたものが

いるか。話すどころか、貴様を牙を剥いたのではないのか」

「そ、それは……………」

穂乃果は、戒斗の言葉にたじろいだ。

いままで彼女は、インベスに対し、家族や友達のように接してきた。

今でも自分のインベスに対してペットに持つような愛情を示す人は少なくない。それに、実際彼女のインベスは、彼女と彼女の親友を助ける為に動いた。

そんな今までの出来事が、彼女にフィルターを掛けてしまっていたのだ。

インベスでも、話を聞いてくれるものはいる。親身になって接すれば、きつとわかってくれると。

しかし、そのフィルターが解かれたとき、穂乃果の目に映った世界は今まで見てきた世界とは全く別物となっていた。

目の前にいるのは、醜い怪物。あるのは、彼女と彼女の親友たちを傷つけようとしたという事実。

「はあ……………、はあ……………、はあ……………」

息が荒くなる。

頭が痛い。

頭を押さえながら、穂乃果はうずくまる。

「しっかりしてください。穂乃果」

海未が、突然うずくまった穂乃果へ叫ぶ。

「穂乃果！——きゃっ」

「世話の焼ける。——つくそ」

再びインベスに囲まれている海未たちを見かね、助けに入ろうとしたバロンだったが、横からのインベスの不意打ちを受けて断念した。

バロンは、咄嗟にバナスピアで一撃を受けると共に後ろに飛んで衝撃を殺した。着地と同時にインベスに向き直ったバロンは、自分に不意打ちを浴びせたインベスの姿を確認した。

姿を現したのは、二匹のビヤツコインベス。上級インベスだ。

いくらバロンであっても、上級インベス二匹を正面から一撃で倒すことはできないようだ。

戒斗は、頭を抱えたままの穂乃果に檄を飛ばした。

「高坂穂乃果。友を救いたければ覚悟を決めろ」

「でも、私は……」

「さっさと選べ。戦いは貴様など待たんぞ。貴様が救いたいのは、人類に害をなす怪物か。それとも貴様の友か」

「いやあああああああああ!!」

戒斗が迫る非情な選択に、穂乃果の崩れ落ちた。

表情は垂れた髪によって隠される。

髪の間隙から、唇の動きだけが見えた。

「……………して……………、……………てくれ……………ね」

「穂乃果、大丈夫ですか？ 早くこち、らに……………」

穂乃果の絶叫が止まると、何かを呟いた。

その声を聞き逃さなかった海未は、穂乃果を連れ戻そうとする。

が、海未は言葉を切った。

垂れ下がった髪で表情が見えない。それでも、彼女の雰囲気が変わったことは容易にわかった。

「……………どうしても、聞いてくれないんだね」

飛びかかったインベスが突然はじきとばされた。

見ると、さつきまでうずくまって動けずにいた穂乃果が、腕を振り抜いていた。

そして、その手には、鋭き刃を持った刀「無双セイバー」が握られていた。

「穂乃果、がんばったんだよ。インベスたちのことも傷つけないな

「いって、がんばったんだよ。でも……………」

「ほ、のか……………」

「そつちがぜんぜん聞いてくれないなら、……………もう、むりだよ」

彼女は泣いていた。目からは滝のように涙を流し、涙の伝ったところには、赤い筋が浮かび上がっていた。

泣きながら、彼女は無双セイバーを構える。

「てやあ!!」

今まで、インベスたちの攻撃を受け止めるために使っていた刀を振り上げ、インベスに振り下ろしたのだ。

彼女の剣撃を受けたインベスは、火花を散らしながら後ろに倒れる。

切られた部分を押さえ、うめくインベスに向かって、彼女は告げる。

「逃げるなら逃げて。帰るなら帰って。……………でも、これ以上やるなら」

彼女は、無双セイバーを握る力を強める。

ギリギリと音を立てるほどに強く握られた手を見つめ、そして、振り下ろした。

「海未ちゃんやことりちゃん、レン君を。穂乃果の親友を傷つけようとするなら、……………あなたたちを、絶対に許さない」

無双セイバーを後ろ手に構え、穂乃果は走り出す。

「邪魔をしないで！」

未だ、彼女の前には、インベスたちが彼女に向かってきていた。

しかし、彼女の目に映るのは、今にも襲われそうな親友の姿のみ。

それ以外は、障害物であり邪魔者。排除する対象でしかなかった。

目の前に立ちはだかるインベスの壁を、無双セイバーを容赦なく振り下ろし、切り開いた。

相手はすべて初級インベスであり、彼らを傷つけないという制約もなくなったため、すぐに海未たちのもとへたどり着いた。

「せやー！」

海未たちとインベスたちの間に滑り込むと、穂乃は無双セイバーを横薙に振り切った。

インベスたちは、彼女の一閃を受けて倒れた。

「穂乃花、あなた……………」

「大丈夫。もう危険な目には遭わせないから」

「そういうことではありません。もういいですから。もう戦わなくていいですからー」

「――ごめん。すぐに、決着つけるから」

穂乃果は海未たちに向かって大丈夫だと告げた。

が、海未たちは誰一人、そう告げる彼女の顔を見て、安心したものはいなかった。

穂乃果は、笑いかけたつもりだったのかもしれない。

でも、海未たちの目に映った彼女の表情は、決して笑顔などではなかった。

海未たちが見たのは、赤く充血した瞳と赤く筋の走った泣き顔。今にも壊れてしまうのではないかと思わせる絶望に染まった顔だった。

海未は、そんな彼女を見て、すがりつくように懇願した。

その表情から、とうに心が限界を迎えているのにも関わらず、さらに一線を越えようとしていることがわかったからだ。

越えてしまったら、きつともう戻ってくることができないう一線。海未は、それを踏み越えさせまいと彼女の手を取ろうと手を伸ばす。

が、その手は空を切った。

もう、穂乃果には彼女の声すら届かない。

ただ、守らなければと。親友に害をなす存在を排除しなければと。そんな強迫観念にとりつかれていたのだ。

穂乃果は、今にも倒れそうな状態で、海未たちに背を向けた。

穂乃果が斬り伏せたインベスが立ち上がり始めたのだ。

「……………大橙丸」

よろよろと彼女たちの方へ向かってくるインベス。

彼女らを見据えながら、穂乃果は、オレンジロックシードの専用装備を呼び出す。

それを左手でつかむと、右手に持っていた無双セイバーの柄部分に連結する。

柄の両側に刃を備えたナギナタモードと化した無双セイバーを構えると、右手で髪飾りに触れた。

すると、オレンジの髪飾りからロックシードが出て、彼女の手に収まった。

「ロックオフ」

ロックシードのキャストパットは開いたままであり、変身を維持したままの状態だ。

そのロックシードを、無双セイバーの鍔部分に存在するくぼみに押し込み、ドライバーでしたように掛け金を降ろし固定した。

「ロックオン！」

接続が完了したことを知らせる声を聞き穂乃果は、無双セイバーを構えた。

無双セイバーにロックシードを接続したため、ドライバーを介してではなく、ロックシードから直接エナジーを引き出すことができる。

「一、十、百、……」

無双セイバーに取り付けたロックシードから、オレンジ色の光が無双セイバーに吸い出される。

ロックシードの光がやや小さくなるにつれ、無双セイバーとその柄から伸びる大橙丸の刃がオレンジ色に輝いていく。

「……千、オレンジチャージ!!」

限界値までエナジーの充填を完了したのを確認するや否や、穂乃果は大橙丸部分少し離れた位置にいるインベスたちに向かって振るった。

今の位置では、穂乃果の刃がインベスたちに当たるはずはない。

が、穂乃果は一切の迷いなく刃を振るった。

穂乃果の振るった刃の意味はすぐにわかった。

オレンジに輝く大橙丸の刃から光の刃が飛び、さらにそれはインベスたちに当たると共に光球と化し、インベスたちを拘束したのだ。

最初の大橙丸での斬撃は、インベスにダメージを与えるためのものではなかった。

それは、次の一撃の為の布石。

続く本命を確実に当てたための準備だったのだ。

「あなたたちがいけないんだよ。いくら言っても暴れるから」

それが、穂乃果がインベスたちに対しての最後の勧告だった。

拘束されて動くことのできないインベスたちを前に穂乃果は、無双セイバーを振りかぶった。

最後の一撃を与えるため、穂乃果は一步足を進めた。

「だめです。穂乃果」

が、彼女はその足を止めた。

彼女を抱きつくようにして止めたのは、彼女がかばっていた海未だった。

「離して、海未ちゃん。もうすぐ終わらせるから、もう少しだけ……」

「やめてください。それ以上してしまったら……」

穂乃果は、インベスたちに最後の一撃を加えるため海未を振りほどこうとするが、海未は頑として離さない。

今の穂乃果の力なら、普通の女子高生でしかない海未は決して振りほどけない相手ではない。しかし力づくで振りほどいてしまったなら、海未を傷つけてしまう恐れがあったために穂乃果は彼女を振り払うことができなかった。

「海未ちゃん。お願いだから、離して」

「いえ、離しません。……穂乃果ももう、やめてください」

『バナナスカッシュュ!!』

少し離れたところで、ビヤッコインベス二匹と戦っていたバロンのほうから、技名が聞こえてきた。

海未が振り向くとちやうど、黄色い光をまとった彼の槍が、二匹のビヤッコインベスの腹部を貫いているところだった。

バロンが、突き刺したバナスパアを抜き去ると、インベスたちは力なく倒れ、爆散した。

「貴様ら。戦闘の最中で、何をやっている!!」

バロンは、穂乃果と彼女を掴んで離さない海未に向かって叫ぶ。

拘束してから、数秒が経ったことで、インベスたちを止めていた力が弱まっていた。

中でインベスが暴れると共に光球にひびが入り、何匹かは光球を抜け出しつつあった。

「退いている」

穂乃果たちとインベスの間に入ったバロンは、カッティングブレードを三回降ろした。

『カモン！ バナナスパーキング!!』

アーマードライダーは、それぞれカッツティングブレードの降ろす回数によって三つの攻撃バリエーションを使うことができる。

『バナナスカッシュ』が敵単体に対する技なのに対し『バナナスパーキング』は複数の敵に対する技だ。

バナスピアには、ドライバーを介して吸い出されらエネルギーが集まる。

エネルギーを充填したバナスピアは、黄色い光の槍と化した。

バロンは、その光の槍を大量のインベスではなく、地面に突き立てた。

あらぬ方向へと突き立てられたバナスピア。

一見理解しがたい行動を取ったバロンだが、彼がそんな無意味な行動をとるはずがない。

今インベスたちが立っている地面が黄色く発光し、そして複数のバナナを象った光が地面か次々と伸びた。

光の槍に貫かれたインベスは、つぎつぎと爆発していった。

普通一匹ずつにしか攻撃を与えられないところを、複数を同時に倒して見せたのだ。

複数体が同時に爆発したことによって起きた爆風を至近距離で受けた穂乃果と海未は、反射で目をつむる。

爆風が収まって二人が目を開けると、目の前に群がっていたインベスは、一匹残らず居なくなっていた。

一気に緊張が解け、穂乃果と海未はその場に崩れ落ちた。

第八話 『わたしにとってのあなた』

「穂乃果……………」

「海未ちゃん……………。大丈夫？」

体力の限界を迎えた為か、穂乃果の変身は解けていた。

海未は、手を地面について荒れた息を整えようとしている穂乃果の背中をさすっていた。

そんな彼女たちに、革靴の音が近づく。

見上げると、駆紋戒斗が彼女たちを見下ろしていた。

「弱者どもには、つき合いきれんな。……………貴様等、本当に死にたいのか？」

「あなた、本当に人間なんですか？ けがをしている人に、もつとかける言葉はあるでしょう」

海未は、戒斗の非情な言葉を聞き、今まで以上ににらみつけた。

穂乃果は、体を張って自分たちを守ったのだ。

戒斗には確かに助けられたが、彼が来るまでの間戦っていたのは穂乃果だ。

もし、彼女が戦っていなかったなら、戒斗が到着する頃にはすでにお陀仏だっただろう。

それに、戒斗がもつと早く到着していれば、穂乃果は戦わずにすんだのだ。

すべての責任を彼に求める海未の視線を、戒斗は睨み返した。

「はっ。俺の聞き間違いか？ 自ら、戦い傷ついた者をただのけが人だと？ 戦闘に参加したのなら、傷つくのは当然だ。そこでどんな傷を負おうとも、それは自己責任。自業自得。傷つく覚悟もないくせに、誰かを守るなどと嘯いていたとは、お笑い草だな」

それだけ言うと戒斗は、きびすを返した。

「な、待ちなさい。逃げるのですか！」

「う、海未ちゃん……………」

「穂乃果！」

力なく座り込んでから、穂乃果はうつむいたままだった。

海未は、さっきの戦闘の最中に見せた彼女のいびつな笑みを思い出した。

とたんに不安にかられた海未は、うつむく穂乃果に恐る恐る声をかけた。

「穂乃果……………大丈夫ですか？」

「……………うん。なんとかね」

垂れた髪に隠れて見えなかった表情が現れる。

それを見て、海未は胸をなで下ろした。

まだ涙で顔は赤かったし、とてもつらそうな顔をしていたが、海未の知っている表情だったからだ。

「早く病院に行きましょう。」

「だ、大丈夫だよ。ドレスのおかげでけがとかは全然ないし、ちよつと疲れちゃっただけだから」

「でも………」

「大丈夫だから」

「………」

海未が見たところ、穂乃果の体に外傷は見当たらない。見た目がただの洋服なだけに防御力に不安があったが、ロックシードから生み出されたアームズのようにインベスの攻撃にもある程度耐えられるだけの強度を持っているようだ。

ただ、問題は外傷だけではない。いや、外傷よりもむしろ心の傷の方が心配された。

インベスたちに必死に呼びかけたが届かず、それどころか袋叩きにされたのだ。そして最後には、穂乃果自身がインベスへ刃を向けた。

「穂乃果、海未。立てるか？」

「……ごめん。疲れちゃって、一步も動けないや……」

「私もすみません。安心したら腰抜けてしまって……」

憐次が問うと、穂乃果と海未は、首を横に振った。

片やインベスたちと戦い、片や何の装備もなしに戦闘に介入したのだ。

二人とも立ち上がる気力も残っていないなかった。

「……つたく、仕方がないな」

憐次は、穂乃果に肩を担いだ。

びくつと体を振るわせた穂乃果に、憐次は前を向いたまま答えた。

「穂乃果、海未。聞きたいことはいろいろあるけど、とりあえずここを離れるぞ。さっきのパニックで逃げた人たちが戻ってくる」

「海未、立てるか？」

「はい。私は大丈夫です。でも、穂乃果が……」

精神的疲労から立てないでいた海未はともかく、戦闘で身も心も疲弊していた穂乃果は、憐次が肩を貸しても立ち上がることはできなかった。

「わかってる。ちよつと我慢しろよ」

「わわ。い、いいよ」

「うるさい。おとなしくしろ」

肩に回していた腕を背中まで降ろし、もう片方の腕を膝の裏から回した。

「よつと。．．．．．うっ」

「うって、なに？」

「いや、何でもないよ。．．．．．そうだ、今度からランニングはこうやって走るか？ いい運動になる」

「や、やめてよ。そ、それじゃ、穂乃果の運動にならないよ」

「そうだな。．．．よし。じゃあ、早く行くぞ」

隣次は、穂乃果を抱え上げると先頭に立った。

海未が着いてくるのを確かめながらその場から離れた。

事件現場を立ち去った隣次たちは、すこし離れた公園で座り込んだ。

「ここまで来れば、大丈夫だろう」

「そうだね。ひとまず落ち着ける場所に．．．．．」

隣次は穂乃果をベンチに座らせた。海未は穂乃果と同じベンチへ、隣次は地面に腰を下ろして息をついた。

「すみません。私は、なにもしていなかったと言うのに……」

「そんなことない。なにもできなかったって言うなら俺こそそうだろう？……で、穂乃果が戦ったことについて聞きたいんだけど。あれは何なんだ？」

「レンジ……。いまはその……」

「海未ちゃん。……ごめん、穂乃果今は話せそうにないから。……お願い」

「そうですね。……わかりました」

憐次に催促され、海未は一度穂乃果の様子を確認した。

穂乃果の疲れ切っている様子を見て、海未は、戦いの話などしない方がいいと思った。

が、穂乃果に話すように頼まれたため、憐次の頼みを了承した。

それから、全てを話した。

事の始まりであるヘルヘイムでの出来事から、駆紋戒斗の正体と因縁について。

「そうか……、あの人は今は音の木坂の教師であり、ユグドラシルの対インベス部隊と……。それと、穂乃果のあの姿については……」

「はい。結局のところわかりません。ただ、最初に穂乃果が変身したあとから穂乃果のユグドラの形状が変化していたので、これが関係しているような気がします」

「俺たちのじゃできないのか？ ユグドラシルが開発した新機能ってことも」

「いえ。私も試してみましたが、今まで通りのことしかできませんでした」

海未も、真っ先に穂乃果のように変身できないものかと考え、試してみていた。

が、当然ながら変身などできなかった。何しろユグドラには本来変身機能は搭載されていない。

穂乃果のユグドラだけが、唯一例外なのだ。

自分が返信できないと知り、憐次は悔しそうになる。

「まあ、そのおかげで穂乃果が無事だったっていうならいいけどさ。本当なら、俺が戦えたなら……」

「レンジ。物騒なことを言わないでください。あなたにこそ穂乃果を止めていただきたいというのに」

「そうか、そうだよな。悪い。……でも、今回のことでさすがに穂乃果もわかっただろ。な？」

「……え？ う、うん。」

ぼんやりとどこかを見つめていた穂乃果は、憐次に話を振られて我に返った。

「……一時はどうなるかと思ったけど。よかったよ」

「よかったって……。お前なあ」

大変な戦いだっただにもかかわらず良かったなどと口走る穂乃果に、憐次は額を押さえた。

が、対する穂乃果は、むしろ憐次の態度の方が不思議だと言いたげな顔で答えた

「え？　だって、結果的に海未ちゃんもレン君も無事だったもん。みんなが無事で本当に良かったよ。戒斗先生にはちよつと怒られちゃったけど、今度は気をつければ……」

「……そういうことか。まあ、穂乃果らしいけど——」

「——今度はって、どういうことですか？」

「え、海未ちゃん。今度って、それは……」

さつきまで戦っていたにも関わらず、穂乃果は他人が無事でよかったですという。

憐次は、あきれつつも彼女らしいと思つて納得してしまっていた。

しかし海未は、穂乃果の言葉に隠れた意思を聞き逃さなかった。

「また、戦う気なのですか？　今回のようなことがあっても、まだ懲り

ていないのですか？ そんなに、戦いたいのですか」

今回は。

穂乃果は何気なく使ったつもりかもしれないが、無意識に口から出たその言葉は、彼女の隠れた気持ちを表していると考えられた。

今回はと言うことは、次があるということだ。

たくさん傷ついたにも関わらずそんなことをいう穂乃果に海未は詰め寄った。

「う、海未ちゃん。穂乃果だって、戦いたくはないよ？ でも、またインベスたちが襲ってきたら、戦わなくちゃ」

「インベスを殺すことになってもですか」

海未の言葉に、穂乃果ははっとしてうつむいた。

「ほ、穂乃果だって殺したくはないよ。でも……」

「おいおい、海未。せっかく穂乃果のおかげで助かったんだろ？ 心配だったのは分かるけど、いまそんな責め立てるのは……」

「レンジたちは黙っていてください！」

憐次は、海未の態度を見て彼女をなだめようとした。

しかし、いつもはおとなしく滅多に声を荒らげることのない海未の怒声に、憐次は口を閉ざした。

海未は、黙る憐次を見てから、再び穂乃果へ向き直った。

「どうなんですか。はっきり答えてください」

「……………私、戦うよ。たとえば、どんなことになっても……………それで、みんなが無事でいられるなら、私はそれだけで——」

「——ッ」

穂乃果の言葉を遮り、乾いた音が響きわたった。

時間が止まったかのように音がなくなる。

憐次は、目を見開いたまま動かない。

ふたり瞳には、手を横に振り抜いた海未と、頬を押さえる穂乃果の姿があった。

「……………な、なにをするの！」

「……………」

「ねえ。なんで？」

「……………わからないのですか？」

海未は、そう言うと踵を返した。

「穂乃果、あなたのことは見損ないました。そんなに戦いたいと言うなら、好きにしてください」

彼女は、穂乃果に背を向けたままそう言い放つ。

「なんで、なんでなの？」

「……………」

なぜ叩かれたのかわからず、穂乃果は継るように問うが、海未は振り返らなかった。

答えなかった。

「う、海未ちゃん……………。海未ちゃん分からず屋!!」

海未は、穂乃果の叫びを背に、胸に突き刺さるような痛みを覚えながらも振り返らずにその場を立ち去った。

朝から大変な目に遭ったが、海未はいつも通り登校した。

インベスに襲われる事件が起きてから、まだ数日しか経っていない。

そんなときに、またもやインベスに襲われたなどと言えば、前回事ことまで蒸し返されかねない。

だから、海未は何気ない顔で登校し、自分の席に着席した。

彼女は、ここ数日で二度も死ぬような目にあってきたというのにも関わらず、音の木坂にはいつも通りの光景が広がっていた。ただ一つ違う点と言えば……………。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

穂乃果が彼女の近くに居ないことだろう。

いつも、海未の近くには穂乃果とことりがいた。

海未も穂乃果も、風邪などで休むことは小学生の頃からほとんどなく、いつものように顔を合わせていた。

今までの人生の中で、一番長い時間を過ごした人物を考えたとしても、必ず名前が挙がるだろうほどに。

だから、穂乃果が海未の近くに居ないことは、周りから見ても異常なことだった。

「園田さん。今日は穂乃果たちと一緒に来なかったんだね」

「もしかして穂乃果、風邪。お休み？」

「それとも寝坊したの？」

穂乃果の友達。海未から見れば友達の友達である

彼女たちは、海未が穂乃果といつも一緒にいるため、海未と共に登校してこなかったことを不審に思ったのだろう。

「・・・・・・・・・・風邪などでは、無いと思います」

「そうなの？　じゃあ、寝坊して先に行ってるように言われたとか？」

「まったく、穂乃果は困ったものだね？」

「学年上がって早々遅刻だなんて……」

穂乃果は、友達が多い。良くも悪くもあの性格だ。

知らない人に声をかけるのにもあまり抵抗がないようだ。

気になった人に次々と声をかけていった結果、彼女の周りにはいつも誰か友達がいた。

「すみませんが、私にはわかりませんので……」

いつも、彼女たちと話すのには気を遣うのだが、今日は穂乃果とのこともあり余計に話したくはなかった。

海未が、早々に話を切り上げようとしたとき、後ろでドアが開く音がした。

その方向を見て、穂乃果の友達たちは表情をほころばせた。

「あれ、穂乃果とことりちゃんだ」

「どしたの？　遅刻するんじゃないの。穂乃果？」

教室に入ってきた人に向かって彼女たちは、次々に問いを投げかける。

それを聞いて海未は、ドア付近へ視線を向け、入ってきた人物を確

認した。

「遅刻？ やだなあ。進級早々遅刻なんてしないよ」

「そうなの？ でも、だったらなんで……」

「そ、そうだ。今日の授業って、最初なんだっけ？」

「え？ 英語だよ」

「英語。……だめ。全然わからない。お願い教えて！」

「穂乃果は、まったくしょうがないな」

穂乃果の友達の登場とともに、穂乃果のもとへ移動し始める。

「あれ。もしかしてケンカしちゃった？」

「……」

「もう全く仕方がない……。あの子本当に馬鹿だから」

穂乃果の友達の一人が、腕を組んで仕方がないとため息をついた。

「仕方がない。私からきつく言っとききますか」

「……やめてください」

「で、でも……」

「……たいしたことはないんです。自分でどうにかできますから」

「そう？　なら、いいけど……」

彼女は、行為で海未に仲裁を提案していたのだろう。それは海未もわかっていたが、彼女はそれを拒否した。

確かに、穂乃果にも正しいところはあったのかもしれない。

あのまま穂乃果が戦っていなかったのなら、海未たちがこの世にいないだろうことは明白だった。

でも海未は、自分が間違っているとも思っていなかった。

どういう形であれ、こちらから歩み寄ったならば、自らに非があったと認めることになる。

海未は、それだけはしたくなかった。

自分は正しい。その考えは変わらなかったからだ。

異性が苦手になる前から、海未は極度の人見知りだった。

今では、同姓であればある程度は初めて会った人とも話すことができるが、幼稚園に通っている頃は、同姓にすらおどおどしてしまう調子だった。

そんな彼女が完全に気を許せていたのは、憐次とことり、そして穂乃果だけだった。

そのため、穂乃果と距離を置いている現在、海未の周りでは全く会

話がなかった。

結局、穂乃果とは一切会話をせず、放課後を迎えた。

最近放課後の時間のほとんどは、スクールアイドルになるための特訓に費やしていた。

そのため、授業が終わってすぐ帰るといのは、珍しいことだった。

穂乃果とは、結局帰る時にも顔を合わせなかった。そもそも、彼女は自分が間違っていないという自信があったし、穂乃果から謝罪に来るのならまだしも自分から謝る気は毛頭なかった。

どうせ、顔を合わせたところで気まずくなるだけだし意味がないだろう。そう考えて一人で学校から出てきてしまったのだった。

「海未！一人なのか」

「……レンジですか」

海未が一人で通学路を歩いていると、隣次が息を切らしながら走ってきた。

穂乃果との一件の時、彼にも黙って去ってしまった。そのため、彼女は気まずさに目をそらした。

「急いでもうかきましたか？今日は用事があるので、失礼します」

「ちょっと待てよ」

通り過ぎようとする海未を、隣次は、彼女の手をつかんで引き留め

た。

「穂乃果とは、どうしたんだ？」

「どうもしませんよ。……穂乃果のことなんて、知りません」

「知りませんって。お前、それでいいのかよ」

隣次も、どこか人の領域に踏み込んでくるきらいがあった。

そのおかげで仲良くなったところもあるし、それに助けられたこともあった。

でも、いまはうつとうしく感じた。かまって欲しくなかった。

「このままでいるわけにはいかないだろ。ここは、お前のほうから……」

「謝れというんですか？」

「海未……」

「私は、間違ったことなどしてません。あなたは、穂乃果が正しいと思っっているのですか？」

「違う。でも、あいつの気持ちもわかってやれって言ってるんだよ。確かに、お前の言いたいこともわかる。でも、お前だって、あいつの考えていることだってわかってるだろ？」

「ええ、わかっています」

「だったら——」

「——でも。……穂乃果はわかっていません。穂乃果には伝わっていると、思っていました。でも、それは私の傲慢。何も、伝わっていません」

確かに、友達に傷ついて欲しくないと思うのはわかる。海未だってそう思っているのは同じだ。だからこそ、また、戦おうとしている穂乃果が許せない。彼女が自分を傷つけるような行動を取るのが許せないのだ。

「お前の言いたいことはわかった。でも、だったら……」

憐次は、海未の気持ちを聞いた上で、彼女に問う。

「じゃあ、何か伝える努力をしたのかよ」

憐次の言葉に、海未は一瞬言葉を詰まらせた。

「今朝だって、何も言わずに逃げ出したんじゃないかよ」

「それは……」

正論で固めていた海未の心が揺らいだ。

確かに、ちゃんと伝えずに立ち去ってしまったからだ。

あのときは、あれ以上あの場にいるのが辛かった。

要するに、逃げたのだ。

何からかはわからない。でも、胸がズキズキと痛み、その場から立ち去るよりほかにその痛みから逃れる方法が見つからなかったのだ。

「的がしつかり見えてないと狙えない。矢が正しい方向を向いていないと当たらない。それに、迷いがあれば手元が狂う」

「……それは」

「俺たちが中学生のころ、海未が言ってくれたことだ。俺がうまく行かなくて落ち込んでたとき、弓道場に連れて行ってくれたことがあっただろう」

海未そのときの事を思い出す。何かに失敗したのかいやなことがあったのか。理由はよく覚えていなかったが、珍しく隣次が落ち込んでいたのだ。

それを見かねた海未は、彼に弓道をやってみないかと勧めたのだ。

弓道は、海未が習い事の流れで知り、熱中したものだ。

弓道は、常に自分との勝負。人見知りであり、ただひたすらに自分を高めていくことのできるそれに、海未が熱中するのは不思議なことではなかった。

彼が言った言葉は、そのときに海未が言った言葉だった。

なにかを見失っているように見えた隣次に対し、人とのつき合いが苦手な海未が、どうにか伝えようとして言ったたとえだった。

自分が言ったことだ。隣次の言わんとしていることはすぐにわかった。

「お前、本当にこのままでいいと思ってるのか？ あのととき、海未が本当にしたかったことはあんな事だったのか？」

憐次は、海未の肩に手を押く。

海未は、憐次の言葉に、穂乃果を叩いた手のひらが鈍く痛む。

「あんな事を伝えたかったのか？」

憐次の問いに、海未は自問する。

あのとときの態度は間違っていたのではないか。

穂乃果だつて苦しんでいたに違いない。

さつさと謝ってしまったほうがいいのではないかと。

しかし、その自問に対し、彼女はかぶりを振った。

自分はなにも間違っていない。

間違っていないのにも関わらず、謝ることの方がよほど間違っている。

憐次の言おうとしていることがわかるだけに、よけいに怒りがわき出す。次の瞬間には、彼を突き飛ばしていた。

「——勝手なこと言わないでください」

気づくと海未は、憐次に対して怒鳴り散らしていた。

「なにも知らないくせに、わかったようなこと言わないでください。どうせ、あなたも穂乃果の味方なのでしよう。私は、間違っていないせーん！」

「おい、待てって。海未！」

海未は、憐次に背を向けたままその場から立ち去った。

彼女は振り返らなかった。

自分は間違っていない。呪文のように自分に言い聞かせながら、海未は走った。

揺れる心を押さえつけるように。

憐次に背を向け走る間、別の言葉が胸に響く。

「海未が本当にしたかったことはあんな事だったのか？」

その言葉が、海未の胸に突き刺さる。

始まりは、穂乃果の間違いを正そうとして起こってしまったことのはずだ。

冷静に考えてみれば、あの場ですぐに、なにが間違っているか訂正すればよかっただけのことだった。それが穂乃果といざこざになり、いつの間にか憐次にまで当たっていた。

本当に、これが自分のしたかったことなのだろうか。

そもそも自分は、本当は何について怒っていたのだろう。

その自問に、海未は答えることができなかった。

隣次から逃げるように別れた海未は、当てもなくぶらついていた。

「ちよつと、あなたたち。もうとつくに約束の時間は過ぎてるんだけど」

「え？ ちよつとくらいいいじゃない。アンコール貰っちゃったんだから、応えない訳にはいかないでしょ」

言い争う声に気がつくとき、そこはステージが設置された公園だった。

言い争っていたのは、この前、ここでインベスゲームを行っていたスクールアイドルたちだった。

どうやら、最初に決めていた使用時間を今使っている方のスクールアイドルたちが無視したために、後に使う予定のスクールアイドルが乗り込んだということらしい。

「あれ、海未さん。御一人とは珍しい。穂乃果さんたちはどうしたんですか」

「——っ」

「そ、そんなに警戒しないでくださいよ。僕、傷つきますから」

「……………ああ、ミッチ子さんでしたか」

背後からの声に反応した海未は、声の主から距離をとりつつ振り返った。

そこにいたのは、以前ミッチと名乗った青年だった。

海未が最大級の警戒を見せたため、ミッチは面食らった様子で頬をかいていた。

「……………めずらしい、ですか」

「まあ、いつも一緒にいる印象だったので。穂乃果さん何か、あったんですか」

「……………」

海未がミッチの問いに答えないと、彼は顎に手を置いて推理し始めた。

「穂乃果さんは、周りに事など考えず突っ走るタイプのように見受けられました。大方、穂乃果さんが無茶をしてあなたを怒らせた、と言ったところでしょうか」

「そんな、単純なことではありませんよ」

部長との事があつた直後だったからか。海未は、また大きく振られてしまいそうな心を押さええて、静かに返した。

隣次や、友達にも相談できなかつたのだ。

それを、一度二度あつた程度の彼に、相談などできるはずもない。

海未は、その場を立ち去ろうとした。

すると、以外にもミッチは彼女を引き留めた。

「海未さん。話してみませんか？」

「……なぜですか？」

「どういった悩みかは正直わかりませんが、見知った人でないほうが話しやすいということもあるでしょうし、話すだけでもいくらか楽になるかもしてません。それに……」

「……それに、なんですか」

海未が問うと、ミッチは一瞬言葉を止めた。

彼は、何かを思い出そうとするように目を閉ると、ほどなく口を開いた。

「僕の周りにも、そんな感じの人がいた、気がするんですよ。自由で、身勝手に、人に振り回す、そんな人が」

「気がします、ですか。……あまりはつきりしない物言いですね？」

「ええ。そうなんですよね。実はあまり思い出せないんですよ。それはそんなに遠い過去の出来事ではないはずなのに、その人の顔も名前もなにも」

記憶がない。それを聞いて、海未は記憶喪失だろうかと心配した。

が、そんな彼女の表情を見て、ミツチは違うと手を振った。

「それでも、ぼんやりと覚えていることもあるんです。その人は、頭悪くて、考えなしで、すぐに行動に起こして痛み目に遭っていることも何度かあったとお思います」

「ひどい言いようですね。．．．．その人のことが、嫌いなのですか？」

「そうですね。本来なら、そうだったかもしれませんが、いや、実際あの人の嫌いなところは、簡単に出てきます。自分で言うのもなんですが、僕は結構いろいろ考えて慎重にことを進めるタイプです。綿密に練った計画を潰されたときは、怒り狂ったこともあります。自分一人じゃろくになにもできないくせに出しゃばって、余計な世話ばかり焼くんです」

「．．．．．そうなんですか」

第一印象が温厚そうな青年だけに、そんな彼からは想像もつかない辛辣な言葉の数々に、海未は苦笑いを浮かべていた。

記憶の人は、彼にとって疎ましい存在だったのか。

海未は、彼の言動から推測した。

周りのことなど考えず、自分のしたいことをするというその人。聞けば聞くほど、彼女の知っているどこかのだれかに似ている気がした。

ミッチのきつい言葉から、その人のことを嫌っている様子がうかがえる。

そのため、どういう意図でそんな話をしだしたのか、海未にはわからなかった。

そんな自分勝手な人とは付き合わないほうがいいと言いたいのか。彼の話を聞いていると、海未にはそう言いたいように聞こえていた。

彼女は、身勝手な相手を肯定することはできないと思った。

でも、それと同時に、穂乃果はそんな人ではないと思った。確かに自分勝手に身勝手だ。でも、それだけではないと彼女の心は真っ先に叫んでいたのだ。

「そしてなにより……」

そんな時だった。

昔の知り合いを責めるようなことをいうミッチだったが、ふと、接続詞には似合わず、表情がほころんだのだ。

「いざというとき、自分のことは放っておいて他人のことばかり考えているような人なんですよ。彼のそんなところが、僕は一番嫌いだった。自分の持っていないものを持っていて、いつも周りには彼を慕う人がたくさんいる。彼は、いつも太陽みたいに輝いてた。でも、その輝きは僕には強すぎた。その輝きをみる度に、自分との差を見せつけられているようでつらかったんです」

海未もそうだったと共感する。

穂乃果を見ていると、引っ込み思案な自分がひどく情けなくなる。

それでいて、そんな彼女の姿を見て、勇気をもらえるときもある。

「その時にはわからなかった。きつと、僕があの人を覚えていないのは、望んで忘れようとしたからだと思います。でも今は、もっとあの人の事をわかろうとするべきだったと思っています。その輝きに、向き合うべきだったんです。それを僕は、後悔してるんです」

ああ、一緒なんだ。

海未は、やっとミッチの話が腑に落ちた。

穂乃果は、海未にとってのあこがれであり目標、とても大切な人だ。

ミッチにとつてのその人は、海未にとつての穂乃果と同じなのだろう。

憧れや羨望は、嫉妬の裏返しだ。

穂乃果は、彼女の思う^{なれない}なり^{たい}自分^{自分}なのだ。

「ミッチさん……」

「ああ、すみません。海未さんの話を聞くって言うっておきながら僕はかり聞いてもらってしまつて。この話になると、ついつい熱くなつてしまつて……」

ミッチは、恥ずかしそうに、はにかんだ笑顔を見せた。

彼が意図を持って話していたのかは定かではないが、海未は、彼の

話をメッセージのように感じていた。

ミッチがどういう意図で話していたにせよ、彼女は、自分の中で絡まっていたものがするりと抜けていくのを感じたからだ。

穂乃果への思いも、そして、あのとき本当に許せなかったことがしっかりと分かった。そして、これからしなければならぬことも。

「どうぞ、海未さん。今度こそ、ちゃんと聞きますから。話してみてください」

「いえ。もう、大丈夫です。ミッチさんの話を聞いて、何か分かった気がします」

「そうなんですか？僕はただ、愚痴ってただけなんですけど、本当に大丈夫ですか？」

「ええ。ミッチさんのおかげで吹っ切れました」

海未は、空を見上げた。

何に腹を立てていたのかがわかったことで、自分が何をしたいのか分かった。

まずは、穂乃果とちゃんと話そう。

そう心に決めて、なんとなくミッチのほうへ顔を向けた。

すると、ちょうどミッチも彼女のほうを見ていた。

「お互い、身近に困った人がいると大変ですね」

「本当に、その通りですね」

海未とミツチは、どちらからともなく笑っていた。

第九話 『戦う理由』

曇っていた心が、ミッチの話しを聞いたことでうそのように晴れ渡った気がした。

目の前の靄が晴れたようすがすがしさに包まれながら、海未は、ミッチに対し深々と頭を下げた。

自分に大切なことを気づかせてくれた彼に対する感謝の気持ちの表れだった。

「ありがとうございます。ミッチさんのおかげで、何か見えた気がします」

「そうですね。ですが、僕は何もお礼を言われるようなことはしていませんよ。」

ミッチは、そういつて笑った。

彼は、自分の過去の話までしたというのに、さも平然と何もしていないという。

海未は、そんな彼の態度が、彼女に余計な気遣いをさせないためということをわかっていた。が、わかっただけにそれをそのままにしておけなかった

「そんなことはありません。私のために時間をとって頂きましたし、貴重なお話も聞かせていただきました」

「いいいえ、こちらが勝手にしたことですから。それに、ここに来たのも大した用事ではないので」

「そうですか？　ですが……」

ふと海未は、ミッチの用事というものが気になった。

自分のせいで時間を使わせてしまったのだ。何か埋め合わせがでないかと考えた。

「そういえば、ミッチさんはどうしてここに？」

「僕ですか？　それは……」

海未の問いに、ミッチは苦笑いで視線を逸らした。

海未は、彼が視線を逸らした先に視線を向ける。すると、以前どこかで見たことのある少女たちがにらみ合っていた。

「なに言ってるのよ。私たちだって、お客さんを待たせてるの。退屈なステージさっさと終わらせて空け渡しなさいよ」

「は、退屈ですって？　いいわよ。なら、この前みたいにインベスゲームで決着をつけましょう。もっとも、あのときは私たちの圧勝だったけど」

「舐めないでもらえる？　いつまでも、あのときの私たちだと思わないことね」

ミッチの話聞いていたため気づかなかったが、どうやら彼女たちのいざこざは、一触即発の状態にまでできあがってしまっていたみたいだった。

「確か、ミツチさんに初めて会った時にも争っていた方々でしたよね。あのスクールアイドルのファンなのですか？」

「いえ。特にファンというわけでもないのですがね。どうにもこういう催しが気になってしまう性分です。．．．．．」

「そうなのですね．．．．．」

海未は、ミツチを呆れ顔でみる。

彼と出会ったきっかけは、オレンジのロックシードを持った穂乃果を彼が見つけて話しかけてきた事だ。

そのときミツチは、スクールアイドルとロックシードの特別な関係をあまり知らない穂乃果に対し、インベスゲームについて懇切丁寧に説明していた。その時の出来事から、海未には、ミツチが相当のロックシード好きであることがわかった。

今争っている彼女たちのファンでもないにもかかわらず、ここに来ているという事はつまり、

「野次馬ですか．．．．．」

「うっ。．．．．．そう言われると痛いですね。でも、これはやめられません」

「そう言うものですか．．．．．」

海未は、何気なくミツチと共にアイドルたちの動向を伺った。

物静かそうなミツチが真剣に見つける顔を見て、どのようなものか

気になったからだ。

海未が見始めたのは、ちょうどこれからゲームを始めようとしているところだった。

前回の勝負で敗北を喫したポニーテールの彼女は、腰の後ろにつり下げたロックシードを外すと、相手に見せつけるように構えた。

彼女が前に使っていたのは、ランクDのものだ。

前回のゲームでは、ランクCを使う相手に負けていた。

ミッチの説明で、ランクは戦いの勝敗に直結すると言うことがあった。

その通りであれば、彼女がまたランクDで挑むのであれば、勝ち目はない。

それをわかってか、金髪少女の方は余裕の笑みを浮かべていた。

しかし、ポニーテールの持つロックシードを確認して、金髪表情が変わる。彼女が持っていたのはランクDではなかった。

「うそ。なんで……。どうしてあなたがランクAのロックシードをー!」

今回彼女が構えるロックシードは、世に出回るなかでの最高ランク。ランクAのイチゴロックシードだったのだ。

「あら、さっきまでの余裕はどうしたの。黙って空け渡す気になったってこと?」

「あなたこそ舐めないで。いくらランクが高いからって、勝負はやってみないと分からないわ」

金髪の彼女はそういうと、以前使っていたランクCのロックシードを構えた。

両者がロックシードを構えたことにより、インベスゲームが成立する。

にらみ合う両者の間に、立方体をしたインベスゲーム専用の空間が形成される。

ゲーム用のリングが現れたところで、二人は同時にロックシードを解錠しインベスを召還した。

「さあ、空け渡して貰うわよ」

「なにそれ、そんなの反則よ」

ランクAのロックシードを構えるスクールアイドルは、ゲームを始める前にも関わらず勝利を確信し、その対戦相手は、目の前の戦力差に嘆いた。

それもそのはず。

嘆く彼女のランクCロックシードから現れたのは、巷でもよく見られる丸っこい体と堅そうな外郭が特徴の初級インベス。しかし、余裕の笑みを浮かべるポニーテールの彼女のランクAロックシードから現れたのは、人に近い体軀をし、腕と体の横側にかけて薄い膜を持ったコウモリインベスだった。

だれでも簡単に扱うことができる初級インベスは色の違いはあれど、ほぼ同じような姿をしている。が、ランクA以上から召還されるコウモリインベスのような上級インベスは、それぞれある能力に特化しており、それぞれ特徴的な姿をしている。

上級インベスと言うだけで初級よりも力が段違いだが、それに加えてコウモリインベスは、飛行能力を持っている。

通常飛ぶことのできない初級インベスでは、空中を自在に飛行するコウモリインベスに攻撃を加えるのも難しい。それに加え、初級インベスと上級インベスでは、力がけた違いだ。上級インベスの攻撃を受ければ、初級インベスはひとたまりもないのだ。

—— r e a d y f i g h t !!

上級インベスを前にうろたえる少女に、無情にもゲーム開始が宣告される。

「いいわよ。やってやろうじゃない」

「はは、精々足掻きなさいよ」

ランクCのロックシードから呼び出された初級インベスが動き出した。ロックシードの持ち主の意志に従い、初級インベスを見るから無謀な戦いにも向かっていく。それは、ロックシードによってコントロールされている証。インベスゲームにおいて、インベスはただの道具でしかない。

金髪の少女はコウモリインベスに空中に飛ばれてしまっただけは勝ち目がないことがわかっていた。

幸い、コウモリインベスは、まだ地面に立っている状態だったこともあり、開始直後すぐに初級インベスを動かしコウモリインベスへ肉薄させることができた。

初級インベスは、コウモリインベスの周りで動き回りながら牽制し、一撃一撃を着実に当てていく。さすが使い慣れたインベスと言うところか。

完全にロックシードの持ち主の意志に合った動きをしていた。

その攻撃を受ける、コウモリインベスは動かない。しかし、動けないと言うよりは動く必要がないといった感じだ。確かに初級インベスの攻撃は当たっているのだが、避けることはおろか、攻撃の衝撃でよろめくこともない。

コウモリインベスは、初級インベスの攻撃を気にもとめていないのだ。

「ははは、すでに満身創痍って感じじゃない。……それじゃあそろそろ、行きましようか。さあ、やっちゃいなさい」

「……………」

ポニーテールの少女は、初級インベスの攻撃をもともしないコウモリインベスを見て、にやりと笑った。

たった数秒のやりとりを見ただけで、戦力差は火を見るよりも明らかだった。

彼女の目には、勝利しか映ってはいなかった。

が、

「あれ、どうしたのよ。動きなさいよ」

コウモリインベスは動かない。

ランクAのロックシードを構え直す。しかし、コウモリインベスは全く反応を示さない。

「もうどうなってるのよ。言うことを聞きなさいよ」

どういふことかコウモリインベスは、ロックシードの持ち主であるポニーテールの少女の命令を完全に無視していたのだ。

「あれは、だめですね」

「どういふことですか、ミッチさん」

海未とともにゲームを観戦していたミッチは、動かないコウモリインベスを見てつぶやいた。

海未もインベスゲームについては、スクールアイドルになると決めた時点でいくらか動画を確認していた。しかし、クラスAのロックシードも珍しくゲームに持ち出されないということもあり、インベスがロックシード所有者の命令を無視するようなことが起こることは知らなかった。

そのため何か知っているようなことを言うミッチに、海未は説明を求めた。

「あのインベス、ロックシード所有者が命令しているのに動かないのは、どうしてだと思いますか?」

「そうですね。……ロックシードの故障でしょうか」

インベスは、ロックシードを持つ者のいうことを聞く。それは周知の事実だ。

今までの動画でも、クラスAのロックシードが使われた例はあったものの、今回と同じような戦いは記録になかった。その動画に示された通り、クラスAであろうと、ロックシード保持者の命令を聞くことは同じ。

そこで海未は、ロックシードの故障を疑った。

「いいえ。故障した場合は、インベスを強制的に帰すような機能が組み込まれています。それよりも考えられる要因は、彼女とロックシードの相性が合わなかったということですよ」

「相性ですか?」

「はい。ほとんど特徴のない初級インベスであれば誰でも扱うことができます。ですが、多岐に渡る特徴を持つ上級インベスは、相性によつては扱えないことがあるんです。また、たとえ動かすことが出来たとしても、その性能を発揮させられるかはまた別問題。そこに初級と上級に分けられている理由があるわけです」

「そうなのですか。ですが、それならこのままでは勝敗が付かないの

では？」

ミツチの説明に、海未は疑問を浮かべた。

確かに、上級インベスが扱えず戦えないとしても、現在初級インベスの攻撃を受け付けているようには見えない。これでは、上級インベスは絶対に勝てないが、同様に初級インベスも相手を倒すことができず平行線になってしまう。

「はい。このままでは勝敗はつきません。なので、こういった場合は戦意を喪失したインベスの不戦敗という風に決められています。今回は、あの上級インベスを扱っている方の子が負けということになりますね」

不戦勝と聞き、海未は再び視線を戻した。

海未は、インベスゲームという勝敗の決め方には海未も納得していないが、前回の戦いでも負けたことを知っていた。

前回負けたことから、高いクラスのロックスードに対抗してさらに高いクラスのものを用意したのだろう。それを手に入れるためには、高校生にはちよつとやそつとじゃ出せないくらいの大金が必要だ。それを出して、やつと手に入れ、やつと雪辱を晴らせると思ったにもかかわらず、結果また負けてしまいそうになっている。

それを思うと、単に勝ち負けというだけでは割り切れなかった。

勝てる力が手の中にあるにもかかわらず勝てない。

そんなもどかしさに、彼女の手は震えていた。そしてついに、業を

煮やした彼女は、手を振り上げた。

手近にちょうどいいものがなかったのだろう。振り上げられた手には、以前の敗戦の際に使っていたランクDのロックシールドが握られていた。

彼女は、胸の中に渦巻くもどかしさ、苛立ちを込めてそのロックシールドを振り下ろした。

それを見たミッチは、表情を変えた。

「あれはまずい。海末さん、はやくここから離れて——」

ミッチは、海末の手を引いて立たせると、その場から離れるように促そうとする。しかし、ミッチが言い終わるよりも先に、

「きゃっ!!」

悲鳴がそれを遮り、あたりを凍り付かせた。

彼女は、振り上げたロックシールドを、コウモリインベスに投げつけてしまったのだ。

初級インベスがいくら攻撃しても、ロックシールド保持者がどれだけ命令しても微動だにしなかったコウモリインベスが、投げつけられたロックシールドだけには反応を示した。

初級インベスが攻撃をする中、コウモリインベスは、悠々と地面に転がったロックシールドを拾い上げると、額あたりに持ち上げた。

すると、額が縦に裂けて口が現れ、手に持ったロックシールドを飲み

込んだのだ。

その直後、空気をふるわせる咆哮が鳴り響く。

それがコウモリインベスから放たれたものと観客が気づくのに、数秒とかからなかった。

さつきまで、誰になにをされても反応しなかったコウモリインベスだが、ロックシードを飲み込むと同時に本性を現したのだ。

インベスゲームの際に展開される空間は、インベスゲームをただのゲームとして成立させるための防護壁だ。しかしそんな壁をいとも容易く粉碎して外に出たコウモリインベスは、集まっていた観客に向かってその鋭利な爪を向けた。

コウモリインベスを召還した少女は、必死に言うことを聞かせようとわめく。が、そんなものは何の意味もないことは、インベスゲームで彼女の命令を聞いていなかった時点ですでにわかっていたことだった。

たとえ上級インベスといえど、使える人が使えばちゃんと命令に従う。とはいえ誰しもが平等に使えると言うものではない。

そもそもロックシードは、ランクが高いほど強力ではあるが、特徴が色濃く出るため使用者との相性によっては扱えない場合がある。

それでも暴走しそうになったインベスには、先ほどコウモリインベスが何の反応も示さなかったように、その行動を抑制する安全装置が付いている。それがあるため、扱いきれなくても身に余る力だっただけですんでいたのだ。

が、今回は、暴走寸前のインベスにロックシードを与えてしまった。

彼女はただ自分の言うことを聞かないインベスに対して怒りをぶつけたつもりだったのだろう。が、彼女の行動は、そのインベスに暴走を押さえる最後の砦を破るための力を与えてしまう結果となったのだ。

「そんな、まさか………。これでは、あのとときと同じ」

海未の脳裏にヘルヘイムでの出来事がフラッシュバックする。

襲いかかるインベス。次々と人が襲われる姿が、あのとときの自分と重なって見える。

逃げなければならぬ。頭ではわかっていた海未だったが、意に反してその場に座り込んでしまう。

「海未さん、早く立って。逃げないと、僕たちも――。ぐあっ」

「み、ミッチ子さん」

海未の目の前でミッチの体が宙に浮いた。

さつきまで、自分たちと反対方向の人を襲っていたと思っていたコウモリインベスがすでに彼女のすぐ近くにまで来ていたのだ。

飛ばされたミッチは、ごろごろと転がり花壇にぶつかって止まった。

気絶してしまったのか、彼はそのまま動かない。

その姿を見ていた海未には、彼の姿があ那时的穂乃果と重なった。

インベスに弾き飛ばされ、木に叩きつけられた穂乃果。そして、インベスに襲われる海未。

同じだったのだ。あ那时的状況と。

汗吹き出し、呼吸が速くなる。その光景が、いやな予感に変わる。

今まさに、自分が襲われそうなその状況で、海未は自分の無事とは全く別のことを願う。

「穂乃果……………」

コウモリインベスが腕を振りかぶる。

海未は、腕で自分をかばうことしかできない。

「お願い、来ないで……………」

「てやあー!!」

そんな彼女の目の前で、今まさに襲いかかろうとしていたコウモリインベスが横っ飛びに飛んでいった。

続いて気合いの声と共に姿を現したのは、穂乃果だった。

穂乃果が女子にはあるまじき豪快な跳び蹴りをコウモリインベス

に食らわせたのだ。

海未は、助けられたにも関わらず喜びはしなかった。

彼女の悪い予感は的中してしまったのだ。

「大丈夫、海未ちゃん？」

「穂乃果。……なぜここに」

「そんなのこっつそり付けてきて……。ってそれどころじゃないよね」

穂乃果は、海未をかばうように自らの後ろへ下がらせると、ユグドラを腰に当てがった。

ユグドラは、戦国ドライバー大に変わると、腰に巻き付いた。

「海未ちゃんは、私が守るよ。変身！」

穂乃果は、オレンジのロックシードを構え、解錠する。

『オレンジ！』

ロックシードから、そのロックシードを示す果实の名が宣言される。

それと同時に、頭上でクラックが開く音が鳴り響いた。

そこから、オレンジの球体が顔を出す。

が、

「これ。．．．．．いつもと違う」

過去二回変身した際には、オレンジ色の光の玉が召還されていた。

しかし、ロツクシードを解錠し彼女の頭上に現れたのは、いままでの光の玉ではなく、硬質な金属の球体だった。

「．．．．．そっか。もう、あのドレスは着れないのか」

穂乃果は落胆するが分かっていた。

今の自分には。何かを守るためならば何かを犠牲にすることもいとわないと決めた自分には、そのドレスをまとう資格などないと言うことを。

それでも、彼女に後悔はない。

大切な親友を守れるなら。

そのためならばどんなものでも、たとえ自分自身でも犠牲にしよう
と決めたからだ。

「さあ、来るなら来い！」

『ソイヤ！ オレンジアームズ。花道、オンステージ!!』

彼女がカッティングブレードを降ろすと共に、穂乃果の体は黒いライドウエアに包まれる。

空中に浮かんでいたオレンジの果実が、穂乃花の顔を覆い隠す。

顔を覆い隠した球体は展開し、鎧へと変わる。

色や鎧の表面にオレンジを思わせるデザインがあるものの、それはまさしく武者の鎧。

そして、果実が展開し現れたのは、彼女の顔ではない。黒陰トルーパーと呼ばれるユグドラシル所有の対インベス部隊隊員と同じ仮面だった。

そこにあつたのは、華やかなステージドレスをまとうアイドルではない。戦い誰かの命を奪う鎧武者だった。

「もうこれ以上、誰も傷つけさせない。大橙丸！」

オレンジアームズをまとった穂乃果は、標準装備であるオレンジの切り身を模した刀を抜くと、コウモリインベスへと向かっていった。

「たあっ！」

穂乃果は、容赦なく大橙丸でコウモリインベスを切りつけた。

二回、三回と立て続けの攻撃に、さすがのコウモリインベスもよろめく。

さらに切り上げると、火花を散らしてたまらず飛び上がった。

「行ける。……これなら勝てる」

連続で攻撃が当たったことで、穂乃果は勝利を予感させる台詞を呟く。

穂乃果の攻撃は、初級インベスの攻撃をもともしなかつたコウモリインベスに確かにダメージを与えていた。

端が見れば、着実にコウモリインベスを追いつめている。……
ように見える。

が、海未には、どうしてもそんな風には見えなかった。

表情は、無機質な仮面に隠されてわからない。

しかし、海未も頭には、穂乃果の表情がありありと浮かぶ。

浮かぶのは、胸の奥からこみ上げる叫びを必死に押さえ込もうとしているような表情。

そんな表情を見て、どうしてもそんな楽観視はできない。

優勢どころかむしろ、穂乃果がインベスに攻撃を一撃、一撃と当てる度に穂乃果自身が追いつめられているようにすら見えた。

海未は、インベスたちへ向かって走る穂乃果の背をただ見ているだけの自分に歯噛みする。

また、彼女は戦おうとしている。

海未のために。海未を守るために。

自分を傷つけながら。自分の心をすり減らしながら。

にもかかわらず、自分は見ているだけで何もしていない。

海未はそんな自分の無力感に手を握りしめた。

★付箋文★

自分の中の何かを振り切ろうとするかのように、穂乃果は無心で刃をふるう。

その攻撃はすべて当たっており、コウモリインベスは徐々に後退していた。いや、そのように見えていた。が、

「……………うそ」

異変に気付いた穂乃果は、一層力を込めた横薙の一撃でコウモリインベスを切り飛ばすとともに距離を取った。

一瞬体が浮いたコウモリインベスだったが、地面に着地すると首を傾げた。

「……………効いてない」

確かに穂乃果の攻撃で後退していたが、ただそれだけ。

穂乃果の攻撃は、コウモリインベスにダメージを与えるまでには至っていないかった。

穂乃果は思わず声を漏らす。

彼女は戦うことを決めて刃をふるっていた。

今までとは違い、相手を倒すという覚悟を持つての攻撃だ。

が、コウモリインベスに効いている様子がない。

それにドレスが鎧になったからか、どうも体が重い。

今までと何かが違う。

戦うための姿に成ったにも関わらず、その一撃一撃は軽くなっていた。

「これで、……………終わり！」

『ソイヤー！』

穂乃果は、ふと浮かんだ疑問を振り払うように首を振る。

そして、早く戦いを終わらせるために、ユグドラのカツティングブレードを一回降ろす。

それを合図に、ロックシードからエナジーが吸い出される。

そして、エナジーが限界まで溜まった瞬間、刃はオレンジ色の光を放つ。

『オレンジスカッシュュ!!』

光が最高潮に達したすると同時に、ロックシードそれぞれに備えられた型が起動する。

戦闘経験のない一般人をも戦士へと仕立て上げる戦闘アシスト機能。

カッティング動作は一回のため、起動される型はスカッシュの型。敵単体へ与える必殺の一撃。

その名を「大橙一刃」

穂乃果は、大橙丸を袈裟斬りに構える。

穂乃果に切り倒され、ちようど立ち上がろうとしているところに、彼女の刃が振り下ろされる。

「はあー！」

「穂乃果!!」

「——っ」

が、穂乃果の刃はインベスとあと数ミリのところで止められた。

相手を切り裂くつもりで振り下ろしたはずの刀が、しかし意に反して動かない。

「や、やあああああ!!」

何が起きているのか、なぜ腕が止まってしまったのかわからなかった。

それでも、この一撃を与えなければ戦いは終わらない。

彼女は、再び大橙丸を振り上げ、今一度振り下ろそうとする。

「今度こそ、これで……。きやつ」

今度こそ振り下ろそうとした穂乃果は、死角から襲った衝撃に跳ね飛ばされた。

鎧のおかげで衝撃は散ったものの、穂乃果は地面を転がるった。

地面に叩きつけられた彼女は、襲った衝撃の方向へ目を向けた。

現れたのは、初級インベス。パツと見ただけでも5、6匹は確認できた。

背後にクラツクを見えなかった。すでに消えてしまったのか、町に潜んでいたのかわからない。

が、どちらにせよ、穂乃果にとって敵が増えたことに変わりはなかった。

「なんで、こんな時に！」

彼女は、地面を叩いた。

本来、一匹相手にするだけでも苦戦を強いられる上級インベスを奇的に止めを刺せるまでに追い詰めていたのだ。

普通は、一方的に追い詰めることなど熟練した戦士でなければ不可能。さつきまで上手くいっていたのは、まさに奇跡だ。

だというのに、止めを刺せなかっただけでなく、増援まで来てしまった。

彼女は、上級インベスを仕留める絶好の機会を逃したのだ。

「インベスがこんなに……」

穂乃果は、大橙丸を杖にして立ち上がる。

ゆつくりと近づいて来るインベスたちへ、刃を向ける。

インベスに牽制や警告は無意味だ。彼らは、自らに向けられた凶器にもかまわず進んでいく。左右に広がりながら距離を詰めてくるインベスたちは、次第に穂乃果を取り囲んでいった。

「……どんなに来って！」

穂乃果は、完全に囲まれてしまう前に包囲から抜け出そうとする。

まだ、前方から広がりながら近づいてきているだけだ。インベスの動きはのろく、走れば抜け出せない早さではない。

しかし、一步踏み出したところで彼女は倒れてしまう。

受けた攻撃は初級インベスの一撃のみ。生身ならいざ知らず、アームズを身にまとっている今は大した攻撃ではなかったはず。

しかし、鉛のようにひどく重い。彼女の体は動かない。

「……しまった」

重い体を引きずって逃れようとするが、少し遅かった。

彼女がもたついているうちに、インベスたちは彼女を取り囲んでしまった。

「そこを退い、——かはっ」

インベスたちの間を抜けようとする穂乃果だったが、インベスの蹴りを腹部に受けて崩れ落ちた。

穂乃果は痛みに腹部を押さえたくなくまる。

そんな動けない彼女に、周囲を囲む6匹のインベスは容赦ない追撃を始める。

6匹のインベスは、完全に彼女を取り囲むと四方から蹴りだした。

穂乃果は、腹部を抑えていた腕で頭を守り、体を丸めるしかなかった。

むろん彼女も逃げようとした。

所詮は初級インベス六体だ。多少の痛みを我慢すれば逃げられない数ではない。痛みを軽減する鎧も身に着けている。

普段の彼女ならば、余裕とは言わずとも逃げられていたはずだ。しかし、

「……なんで。力が、出ないの?」

穂乃果は動けなかった。

戦闘開始の時点から、いや、開始直後よりもまして鎧が重く動けなくなっていたのだ。

インベスたちの攻撃を受けたからか。いや、インベスに対抗するために作られたアームズが、たかが初級インベスの攻撃を受けただけで出力を低下させることはあり得ない。

問題はもつと別の要因だ。

その要因に、穂乃果は薄々気が付いていた。

なぜ力が出ないのか考えたとき、ふと頭に思い浮かんだことは、
は、

『もう、あきらめることは許されない』

ノイズがかった少女の言葉だ。おそらく、彼女に力を与えてくれた人物。その人の言葉を思い出したのだ。

「ああ、そっか………」

そして穂乃果は、腑に落ちてしまった。

自分は、もうすでにあきらめてしまったのだと。

そして、そんな自分は見放されてしまったのだと。

「そんな……」

動かない穂乃果を見て、海未は膝をつく。

穂乃果が倒れ、インベスに取り囲まれているというだけでも発狂してしまいそうなのに、穂乃果はされるがまま動かない。

「助けなきや……」

瞬間、最悪の想像が頭をよぎるがすぐに頭から払いのける。

立ち上がり駆け寄ろうとして、しかし足が止まった。

自分が行って、いったい何になる？

ただ足手まといになるだけ。それどころか余計に状況を悪くするかもしれない。

そんな思いが、海未にブレーキを掛けた。

海未はしていないが、逃げた人の中にはすでにユグドラシルへ通報しているはずだ。

自分が行くよりも、ユグドラシルの部隊に任せよう方がいいのではないかと考え直す。

自分が行ったところで、何にもなりはしない。

ユグドラは付けているが、あくまで身を守るためのユグドラは、インベスに立ち向かうことなど想定されていない。

ユグドラは、全人類に普及させるために機能を最低限に抑えている。

戦国ドライバーには存在したアームズを召喚する機能、戦うための機能は、ユグドラには存在していない。

さらにユグドラの防御機能は特殊なバリアであり、攻撃が単発であればダメージを逃がすことができるが、連続で受けることはできない。

あくまで防御機能も、逃げるための機能なのだ。

そのため、彼女がインベスのもとへ向かうのは自殺行為だ。

「でも……」

そう思う思考とは、裏腹に海未は再び動き出した。

彼女は走る。インベスに取り囲まれた穂乃果のもとへ。

「穂乃果！」

「う、海未ちゃん。……危ないから、来ちゃだめだよ。戻って！」

海未の叫びを聞き、穂乃果は彼女の方へ顔を向けた。

「穂乃果こそ早く立ってください。私にも、言いたいことが……」

あなたに伝えなければならぬことがあるんです」

「……伝えたいこと？」

穂乃果は、何のことか見当もつかない様子でつぶやく。

海未は、力も持たず、自分を守ることでも手一杯だ。

が、そんなことは、助けに行かない理由になどなりえない。

力がないからいけない？

足手まといになる？

そんなことは、ただ伝えるのが怖いだけの言い訳だ。

海未は、穂乃果を取り囲むインベスに近づくと勢いをつけて飛んだ。

どうにか穂乃果から引き離さなければならぬ。

海未は、一番近くにいるインベスに体当たりをしたのだ。

ぶつかった際、堅い表皮に激突した腕や肩が痛むが、そのようなことは気にしない。穂乃果を思えば痛くもない。

生身の人間で与えられるダメージなどたかが知れている。が、気を引くだけならば十分だった。

海未の体当たりを受けた一匹とその隣にいたインベス一匹が、海未の方を振り向いた。

「さあ、あなたたち。この私が相手です」

「海未ちゃん。．．．．．何をして」

穂乃果は、自分を襲う衝撃が減ったことで、それが海未がインベスを引きつけた結果だということに気付いた。

「私には、これくらいしかできません。ですが、少しでもインベスが減っている今のうちに逃げてください」

海未が引きつけたのは6匹中2匹。まだ4匹残っているが、それでも6匹いたときよりはいくらかましのはず。

海未は、インベス2匹を引きつけながら穂乃果へ呼びかけた。

「ごめん。でも、——くっ。動けないよ。もうだめだよ」

未だインベスたちに袋叩きにされている穂乃果は、ただ体を丸めたまま動けない。

海未は、ひきつけたインベス二匹の攻撃を避けながら、いまだインベスに囲まれている彼女に呼びかける。

「何を言っているのですか。あなたがあきらめてどうするのですか。．．．．．穂乃果。あなたは．．．．．きやつ」

最大限に注意しているつもり海未だったが、穂乃果に呼びかけながらインベスを避けるのは悪手だった。

一匹のインベスの腕を避けたものの、もう一匹の続けぎまにふるわれた腕が海未を打った。

当たった場所は、ユグドラを装着している左腕だった。

直撃を受けたユグドラは、火花を散らして彼女の腕から弾け飛んだ。

ユグドラが衝撃を全て引き受けたため腕が折れることは無かったが、彼女は強く地面に叩きつけられた。

「そんな、ユグドラが……」

海未は、地面に転がったユグドラへと手を伸ばす。

体を引きずり、動かす。

こんなところで止まっている場合ではない。穂乃果へ伝えなければならぬという思いが、彼女を動かす。

なんとかユグドラを掴み、腕に着け直そうとする。しかし、反応は無い。

見ると、斜めに抉れた跡が確認できた。

先ほどのインベスの攻撃をもろに受けてしまったからだ。

クラックの出現が確認された時に装着を義務づけられているこのユグドラ。

その役目は、クラックの向こうの世界、ヘルヘイムの侵食から身を守るためだ。ユグドラは、ヘルヘイムの果実をロックシードへと変化させることで無害な物に変換するだけでなく、インベスの攻撃を受けた際に特殊なバリアを張ることができる。

インベスは、地球に現存する生物を凌駕する力を持っている。

それを防ぐことのできるユグドラのバリアは、ちよつとのことでは破られることはまず無い。

とはいえ、弱点が存在しないわけではない。

バリアは、ユグドラから使用者の全身を覆うように展開される。が、ユグドラが起点となるため、ユグドラ周辺はどうしてもほかよりも耐久性が落ちてしまう。そして、ユグドラ自体には、インベスの攻撃に耐えうるだけの強度はない。

唯一の弱点とは、ユグドラ自体なのだ。

運悪く攻撃が当たってしまったため、海未のユグドラは、外装が割れて内部回路がむき出しになってしまっていた。

「ユグドラが、無くたって！」

ユグドラがない状態でインベスの攻撃を受ければ、それは全てが致命傷につながりかねない。

それを承知で海未は、膝に手を突きながら立ち上がる。

「今度こそ、今、伝えなければならぬのです。——きゃっ」

立ち上がるも、再びインベスの腕が海未を襲う

インベスの強烈な打撃を受け、海未は仰向けに倒れる。

「穂乃果。．．．．．今、行きます」

それでも、海未はなおも穂乃果のもとへ向かおうとする。手を伸ばす。

「海未ちゃん、どうして。．．．．．早く逃げてよ」

「逃げません。もう、あなたからも自分からも逃げたりしません」

海未は、どうにか這い進もうとする。

が、彼女と穂乃果の間をインベスが遮る。

そのインベスは、無情にも腕を振り上げ、爪を彼女めがけて振り下ろした。

瞬間、世界が動きを止めた。

海未は、走馬燈かと思ったが、すぐに違うことがわかった。

走馬燈ではありえない、自分に語り掛ける声がしたからだ。

「あなたは、選ばなければなりません」

「あなたは．．．、わたし？」

海未は、声の方へと視線を向ける。そこに人の姿を見つけると、疑問の声をこぼした。

彼女に語りかける声の主。それは、海未自身だったのだ。

ゆらゆらと、どこかつかみどころのない彼女は、海未のそばで徐々に距離を詰める。

「このままでは、あなたは確実に死ぬでしょう。あなたは何も成せず
に死に、彼女もまた後を追うことになる」

少女（海未）は、動きを止めたインベスに囲まれた穂乃果を指さす。

いまはアームズを身に纏っているおかげで助かっているが、いずれは
限界が来る。

そうなれば、彼女は助からない。そして、その限界はそう遠くはな
い。

海未は、そのことを理解した。

「あなたが取れる選択肢は、二つです。すべてを投げ出して逃げるか、
この状況にあらがうかです」

選択肢が提示される。

さすが、同じ姿をしていると思ってしまう。逃げるというのは、合理的な
選択肢だ。自分が向かったところで助けられないことはわかりきっている。
それよりは、

が、そんなことは関係ない。海未の中ではすでに答えは決定してしまっていた。

「そうですね。確かにそのその選択肢しかなさそうです」

「やはり、物わかりがいいですね。そして、合理的に考えればどの選択肢が正しいか、簡単にわかるはずですよ」

「そうですね。正しい選択肢は、『逃げる』でしょう」

その答えに、少女は笑みを浮かべる。

上手くいったといわんばかりに。そう選ぶことはわかっていたと言わんばかりに。

が、そんな彼女を見て、海未は決意を固めた強い視線で彼女をにらんだ。そして、先の言葉に続く言葉を紡ぎ出した。

「ですが……。あなたの意図とは、少し意味が違うでしょう」

「意味が違うのですか。逃げるのではないのですか？」

「ええ、逃げますよ？ 穂乃果と一緒にですが」

「あなたは、死ぬつもりなのですか？」

「もちろん、死ぬつもりなどありません。でも、私には最初から、彼女を置いていくという選択肢がないだけです。ただそれだけです」

少女の表情からは、さつきまでの笑みは消え、驚きに染まっていた。

実際、海未は自分でも驚いていた。

穂乃果とともに逃げるという選択をしたことにはない。

逃げるという選択をする際に、一切の迷いも戸惑いもなかったことにだ。

でも、そう決めた理由はわかる。迷わなかった理由もわかる。

それは、とてもシンプルな思い。難しい理由などない簡単な思いだ。

「私は幼い頃、友達がほしくて、でも怖くて、いつも一人で震えていました。あの子は、そんな私の手を取ってくれた。引っ張り出してくれました。だから、あの子が進む道を見失ったなら、私が手を引きます。あの子がもう立てないというなら、肩を貸して一緒に歩きます。今度私は私のあの子の手をとる番なのです」

だから海未は、はつきりと答える。

できるという根拠は何もない。それでも海未は少女に向かって宣言した。

海未は、穂乃果を見捨てる方向へと誘導するような言動をとる少女が反論してくると思いい構える。

「そうですね。もう、決めてしまっているのですね」

が、予想に反して彼女が発したのは優しい声音だった。

「でしたら、これを……」

「え？」

目の前にいたはずの少女は、いつの間にか背後に回っていた。

少女は、海未が握る壊れたユグドラを手を取った。それを天へと掲げる。

「これはほんのきっかけです。その先どうするかはすべて、あなた自身の決断です」

「これは、いったい……」

「今度こそ、その手を離さないくださいね……」

「それはいったい……」

少女の言葉を最後に、世界はまた動き出した。

動きを止められていたインベスは、振り上げた腕を海未にへ振り下ろした。

海未は、目をつむって顔をそらした。

少女へ啖呵を切っておいて、結局ここで終わるのかと自分の無力さを思いながらその時を待つ。

しかし、それは訪れなかった。

「……これは」

目を開けた海未は、自分がドーム状の光に包まれていることに気付いた。

彼女に襲いかかったインベスは、その光に阻まれて後ろへひっくり返った。

見ると、その光は、彼女が掲げるユグドラから出ているように見えた。

まるで、ユグドラの防御機能のように。

「まさか……。ユグドラが治ってる」

確認すると、インベスによって切り裂かれたはずのユグドラには傷一つなかった。ある一部分以外元通りになっていたのだ。

「これは、穂乃果と同じ……」

大きさも形も変わらない中、唯一変化は、刀のような装飾品がついていることだった。

試しにそれを左腕にあてがうと、いつものユグドラのように巻き付いた。

「それはまさか……」

再び動き出した世界で、彼女のユグドラの変化に最初に気づいたのは意識を取り戻した満実だった。

倒れていたミッチは、それを見るなり体を起こした。

彼は、ジャケットの内ポケットから何かを取り出し、振りかぶる。

「海未さん。これを、受け取ってください」

「え、ミッチさん？」

満実は、ほぼ直感的にそれを海未へ投げた。

何かそうしなければならぬような使命感に押され、満実には珍しく考えるより先に動いていたのだ。

対する海未は、突如変化したユグドラを確認していた。

そんなときに突然飛んできたそれを、彼女は慌てて掴んだ。

「ミッチさん。なぜ、これを私に？」

「今のあなたになら、きつとその力を使うことができはるはず。それに……あなたには今、どうしてもしなければならぬことがあるのでしよう？」

海未は、掴んだものを見てそれがなにを意味するのか、どうすればいいのかは、先人二人を見ていたため瞬時にわかった。

海未は、今し方受け取ったものをみる。

それは、いくつかの紫色の宝石のような果実に飾られたロックシードだった。

「わかりました。私のしたいことのため。この力、使わせていただきます」

海未はロックシードを顔の横で構える。そして叫ぶ。

「変身!!」

やるべきことをなすための姿へ、変わるための言葉を。

第十話 『私の願いとあなたの願い』

『ぶどうー！』

海未がロックシードを解錠すると、そのロックシードに施された果実の名が宣言されると共に、待機音が流れ出した。

その待機音は、穂乃果のものとも戒斗が使っていたものとも異なっている。

銅鑼が鳴り、どこか中華風な音だ。

頭上にはロックシードが宣言した果実を象った紫色の光の塊が、クラックから顔を出した。

戒斗の変身を見てすでに知っていた海未は、慌てることなく頭上の果実はそのまま、ユグドラのドライブベイへロックシードを押し込んだ。

『ロックオン』

ロックシードが固定されると共に、新しく現れたカッティングブレードを降ろし、キャストパットを切り開いた。

『ハイハイー！ぶどうドレス。龍、砲、ハッハッハア!!』

海未は音声と同時に走りだした。

空中で漂っていた紫の塊は、彼女の動きにあわせて動き、彼女をすっぽりと包み込んだ。

視界を紫に覆われた彼女だったが、その足を止めることはしない。

穂乃果の隣で一緒に困難に立ち向かうと決めたから。

体に満ちる力を感じながら、彼女は、さらにスピードを上げる。

決めたことを為すための力はすでにある。なら、穂乃果のとなりに行くだけだ。

海未は、目の前の紫のボール突っ切る。

そしてさらに、そのままの勢いで数歩。

「たあー！」

穂乃果を囲むインベスの一団の一角に、跳び蹴りを放った。

インベスを一匹蹴り飛ばして着地した海未は、穂乃果の手を取った。

「穂乃果、大丈夫ですか？ 行きますよ」

「海未、ちゃん。どうして……」

「どうしてって、そんなこともわからなくなってしまったのですか？ 友達だからに決まっています」

友達だから助ける。今の海未にとって当たり前と言えるその行為に、穂乃果は疑問の声を上げた。

海未が立ち上がらせようとするも、穂乃果は動かない。

海未が見たところ、穂乃果が逃げるのを拒んでいる訳ではない様子だった。何らかの理由で動けない状況になっていると考えた海未は、今度は肩に腕を回して抱え上げる。

その間に左右に迫ってきていたインベスを蹴り飛ばすと、穂乃果をつれてインベスの包囲を突破した。

インベスたちから一度距離をとると、海未は穂乃果をその場を下ろした。

悠長なことはしてられないが、インベスたちから完全に助かるためには、穂乃果が自分自身で立ち上がることが必要不可欠だと考えたのだ。

地面に座り込む穂乃果を、かばうように海未は立つ。

「友達……」

すると、うなだれていた穂乃果からぽつりとつぶやきがこぼれた。

「もう、見捨てられちゃったかと思ってた」

「なぜ、そう思うのですか？」

「だって今日、口きいてくれなかったし。叩かれちゃったし……」

「……あなたと言う人は。なぜあなたは気づかないのですか」

「なに。それはどういう……」

ついさつきまでであつたら、その言葉に対して出たのは怒りの言葉だつただろう。が、出たのは、呆れのため息だつた。

インベスたちはすでに近づいてきていたが、海未は、インベスたちの相手をしながら語りかけた。

「わかりました。……あなたは、私たちを守りたいと言いましたね。私たちに傷ついて欲しくないから」

「そうだよ」

「だから戦うのですか？　自分が傷つこうとも、他人を傷つけようとも。自分の守りたいものを守れば、ほかはどうなってもいいと、そういうわけですね？」

「……そうだよ。だから穂乃果は戦うんだよ。みんなを守れるならって——」

「——なら」

海未は、自分の胸に手を当てる。

自分の気持ちを言葉にするのが怖い。逃げたしたいと思う気持ちを必死に抑え、海未は、彼女を許せなかつた原因をぶちまける。

「私たちに傷ついて欲しくないと思っているのなら、なぜ、私たちもあなたに傷ついて欲しくないと思つていることに気づかないのですか？」

「え？」

穂乃果は、全く考えになかった思いを聞き、固まってしまった。

彼女はただ、海未たちを守るために戦っているつもりだった。

その間自分が傷つこうが仕方がない、かまわないと思っていた。

でも、もしその自分を省みない行動が海未たちを傷つけていたら。

そう考えとき初めて、自分が海未たちを守ろうとして、結局なにも守れていなかった事に気づいたのだ。

「私は、あなたが許せませんでした。私たちに傷ついてほしくないと言っているあなたが、自らを顧みず自身を傷つけようとしていることに腹が立ちました。そして私の気持ち、あなたを思う気持ちが全く届いていなかったのだと思って悲しかったのです」

「そんな……」

そう。それが海未が感情的になってしまった原因だ。

実のところ最初、なぜ自分が暴力をふるってしまうほどに感情的になってしまっていたのかわかっていなかった。

いままで、穂乃果とここまで本気の喧嘩をしたことがなかった。

大抵、お互い相手が正しければ自然と謝り、ほぼその場で決着がついていたからだ。

が、今回は違った。

いつもの喧嘩と違う点といえば、命の係わる大変な事柄だということ

ともあつたが、それでもいつものように間違っている方が謝れば、すぐに済む話だった。

だというのに、海未は穂乃果の話に耳を傾ける余裕がないほどに頭に血が上り、穂乃果も謝ろうとはしなかった。

最初海未は、圧倒的に正しいの自分であるのにもかかわらず穂乃果が謝らなかったことが原因だと思っていた。そのことに腹が立ったのかと思っていた。

が、時間がたち冷静になり、自分を見つめなおして気づいたのだ。

自分の願いはとても単純なことで、それが相手に伝わらなかったことがただ悲しかったということに。

そして、同時に自分も彼女を傷つけてしまっていたことに。

「でも、私も気づいていませんでした。穂乃果もさんざん苦しんで、そうせざるをえないところまで追い込まれていたことに気づくべきだったんです。……だから、すみませんでした」

「ううん。海未ちゃんが謝る事なんてないよ」

「いいえ。私も間違っていました。でも、あなたには知っていて欲しいのです。私たちは、あなたが私たちを思うのと同じくらい強く思っているという事を。だからどうか、自分が傷ついてもいいなんて、お願いですから、言わないで……」

インベスたちを必死で近づけまいと応戦しながら、海未は絞り出す。

どちらが正しいも間違っているもない。

自分たちは、同じくらい正しく、そして同じくらい間違っていたのだと。

「ごねんね、海未ちゃん。気付いて当然だったのに気づかなくて」

「いいえ。悪いのは私もです。本当は、わかっていたんです。でもその思いを受け入れることができないという気持ちの方が先行してしまっただんです」

海未は、インベスをさえながら穂乃果の方へ振り返る。穂乃果は、顔を上げて海未と対面する。

海未は、仮面に隠れた彼女の瞳をのぞき込む。

仮面に阻まれて穂乃果の瞳を見えてはいない。が、彼女の瞳も自分と同じように自分の瞳を見つめ返してくれている感じていた。

「私は、穂乃果やことり、レンジに傷ついて欲しくありません。だから、あのとき自ら自分を傷つけようとしている穂乃果を許せませんでした。ですが、友達に傷ついて欲しくないと思っていたのは穂乃果も同じだとわかっていました。そして、やっと気づいたんです。他人の為に何かをすることができる穂乃果だからこそ、その隣にいたいと思ったのだと言うことを。そして、私が守りたかったのは、やりたいことを精一杯やって輝いている穂乃果たちなのだと言うことを」

「海未ちゃん……」

「だから、あなたとともに戦うのも全部自分のためです。穂乃果がやりたい事をできるように。あなたたちの隣に胸を張って並び立つた

めに。私の大切なものを守るために戦います」

海未は、守るために戦う矛盾をはらんだ言葉を口にする。

その言葉は、穂乃果の先ほどまでの行動を肯定する言葉ではない。

ただ、否定もしない。

矛盾を内包していたとしても、誰かの笑顔を守りたいと思う気持ちは、確かに正しいはずだから。だからその言葉は、そばに立ち、間違いは一緒に背負うという海未の決意の現れだった。

「だからあなたは、ずっとあなたらしくいてください。私の大好きなあなたでいてください」

「………私は」

穂乃果は、海未の思いを受け、胸に手を置きもう一度自分に問いかける。

自分は何がしたかったのか。

自分は何がしたいのか。

そして、思わず自嘲気味に笑ってしまう

驚くことに答えは、すんなりと出たのだ。

本当は、簡単なことだった。

今回ずっと体が重かったのも、あと少しのところまで止めをさせなかったのも、その思いがあつたから。

「穂乃果は、戦いたくない。でも、インベスたちは話を聞いてくれない。だったら、とりあえず無理矢理にでもヘル Heimへ返す。……なるべくだれも傷つかないように、最後にはみんなが、インベスたちも笑って暮らせるようにしたい。そのために、努力したい!!」

どんなに心を偽ってもずっと、その思いが消えずに残っていたからだ。

「ソイヤ!!」

「え、なに?」

穂乃果が宣言したとき、彼女のユグドラのカツティングブレードが独りでに降りた。

「オレンジドレス! 花道、オンステージ!!」

変身の際に流れる電子音が鳴り響き、穂乃果のまっていたオレンジの鎧が発光する。

鎧の継ぎ目からオレンジ色の光が漏れだし、継ぎ目が広がるごとにその輝きは、強さを増していく。

彼女たちを取り囲んでいたインベスたちは、その目映さに後ずさっていく。

同じように近くで見えていた海末には、目を背けはしなかった。インベスにとつて眩しいだけのその光だが、海末にはそれだけじゃなかった。

優しく暖かい温もり。すべてを救うために努力すると決めた、穂乃果の心そのもののように感じていた。

彼女の纏っていた鎧が、まるでオレンジの皮を剥くように四方に飛び散った。

「穂乃果、その姿は……」

光が収まると、そこには鎧武者の姿は無かった。

代わりにあったのは、オレンジのステージドレスを身に纏ったアイドルの姿だった。

「そっか。穂乃果の思いに伝えてくれてたんだね」

穂乃果は、誰へむけてともなく呟き、纏うドレスを抱きしめた。

戦う意志をもって変身したときには鎧が現れたように、今、戦うよりも救うことを望んだ穂乃果に伝えて変化したのだ。

「私たちの願いに応えて変化するのですね。これほど、頼もしいものはありません」

「うん。ほんとだね。．．．この力があれば。海未ちゃんと一緒なら、何でもできる気がするよ」

海未は、穂乃果の言葉にうなずいた。

一緒にいること、同じ目標を目指すことは、直接的力にはなりえない。しかしそれは何にも代えがたい勇気となる。前へ踏み出すための確かな力になる。

「さあ、行きましょう。穂乃果」

海未は、一歩踏み出す。その確かな力に背中を押され――

「それはそうと．．．．．」

今まさにインベスへと向かっていこうとしていた海未は、穂乃果の言葉につんのめった。

突然腰を折る穂乃果に勢いを削がれ、穂乃果を伺う。

彼女へ視線を向けると、立ち直ったとたんに元の調子を取り戻した穂乃果が、海未の姿をまじまじと見つめた。

「もしこのドレスが穂乃果の願いからできたら、海未ちゃんのドレスも海未ちゃんが望んだ服装なんだね？」

「服装、ですか？」

「うん。それにしても、結構大胆だね。海未ちゃんもそんな衣装を着たかったってことなのかな？」

「穂乃果。何のことですか？」

「もしかして、気づいてなかったの。その格好？」

「格好と言ったって、穂乃果とそう変わりは……」

ないでしょう、と続けようとして海未は、口をつぐんだ。

今まで一切見ていなかった自分の服装を見て、徐々に顔が赤らんでいく。

海未は、今の今まで自分の服装に意識を向けていなかった。そのため、勝手に穂乃果の纏っているようなワンピースのようなドレスだと思っていた。が、彼女が纏っていたものはまったくの別物だった。

待機音からなにもで、どこか中華を意識していたのはこのためか。

編み込まれて輪っかになっている髪。肩まで露出した腕。体のラインを強調するぴったりと体にフィットしたシルクのような生地。そして何より、限界ギリギリまで切り詰められたスリット。

彼女がまとっていたのは、穂乃果のドレスとは似ても似つかない、チャイナドレスだったのだ。

「な、な、な。何なんですかこの破廉恥な衣装はああああ!!」

「あ。やっぱり今気づいたんだ」

「なんなんですかこれは。私はこんな服装を望んでなんていません」

「海未ちゃん。こんなところでしゃがまないで。インベスたちが来

「ちゃったよ」

「ああもう……………こうなったら自棄です。ぶどう龍砲!!」

無理矢理考えを切り替えた海未は、ぶどうロックシードの専用武器を呼び出した。

現れたのは、ぶどうを示す紫色の玉に飾られた銃だ。

彼女は、それを掴むと向かって来たインベスをその銃身で受け止めた。

「まずはこのインベスたちをどうにかしま、しよう!」

横に回転すると共に受け止めたインベスをいなし、同様にインベスを避けた穂乃果の横についた。

「でも、どうにかってどうするの? ここクラックないし……………これじゃ、本当に……………」

「あなたは、どうしたいんですか」

「そんなの……………。できれば倒したくなんてないよ。元の場所へ帰してあげたい。でも……………」

「なら……………」

海未は、戦いの最中に穂乃果に微笑みかける。

彼女が穂乃果の口から聞きたかった言葉が聞けたからだ。

まだ、彼女があこがれる夢物語を、穂乃果が持ち続けていることがわかったからだ。

だから、

「最後までわがママを言い続けてください」

「え？」

海未は、もう少しだけ無理を言ってみる。

散々打ちのめされた穂乃果に対して、絵空事を語れと言う。

「穂乃果のわがママは、悪いところでもありますが、同時にすごくいいところですよ。だから、あなたはそのままわがママを言い続けてください。そのわがママを現実にする方法は、私たちが考えますから。あきらめないでください」

もし、穂乃果があきらめないのなら、その絵空事を全力でかなえる。

そんな、意志とともに海未は、穂乃果に求める。

「普通の人ならとうにあきらめてしまうようなことを言うことが出来るあなただから、私はあなたの隣にいたいと思ったのですから」

いつものまぶしいくらいの彼女の望みを。

「……うん。私はあの子たちを帰してあげたい。誰が無理だつて言っても、絶対に絶対。わがママだっていい。私、この思いは変られないもん」

「それでこそ穂乃果です。では、行きましょう。あなたのその、わがままを実現するために」

「うん」

二人は二手に分かれた。

遅れて、二人がいた場所にインベスが突進してきた。

すでに6匹のインベスは、彼女たちを取り囲んでいたのだ。

二人はインベスの突進から逃れるが、それぞれの前にはすでにインベスが待ちかまえていた。

穂乃果は、インベスの腕を避けながら問う。

「でも、実際どうやってやるの?」

「安心してください。実は、方法については考えてあります」

「本当! どうすればいいの?」

インベスを倒さず返す方法があると聞いた穂乃果の表情は、ぱっと明るくなった。

海未は、インベスの爪をぶどう龍砲の銃身で受け流して背後に回ると、丸い背中を蹴り押した。勢い余ったそのインベスは、顔面から地面に倒れ込んだ。

インベスからの攻撃が途切れたところで、海未は答えた。

「穂乃果は、さつきまでと同じように、インベスたちを押さえつけてください」

「うん。それから？」

「そして、私の合図と共に力一杯押し飛ばしてください。後は私が合わせます」

「え、それだけなの？」

インベスを帰すためになにか特別なことをすると思っていた穂乃果は、さつきまでと同じ事をしていればいいと言う海未の言葉に振り向いた。

海未のしようとしていることがわからず、穂乃果は心配そうな表情をしている。

「穂乃果はなにも考えず自分のしたいことを突き通してください。私を信じてください」

「海未ちゃん。でも……」

穂乃果が不安になるのも無理もない。

海未が今からやろうと言ったことは、彼女が願い、祈り、何度語りかけても叶わなかったことだ。

それが、いままでと同じ事をしていて叶うとは到底思えなかった。

しかし、そんな彼女に海未は、自信満々な表情で言う。

穂乃果は知っている。

海未が人一倍慎重で、本当に自信のあることしか断言しないと言うことを。

そんな彼女が、考えはあると言った。

信じてくれと言ったのだ。

不安は完全には拭えない。でも、穂乃果にとって彼女のその言葉が、何より穂乃果に勇気を与えたのだ。

「わかった。海未ちゃんを信じる。……行くよ！」

「はい！」

二人は、気合いとともに動き出す。

穂乃果は、ゆっくりと向かってくるインベスに対峙する。

何かをこすり合わせたような鳴き声と共に距離を縮めてくるインベスを前に、彼女はその場で無双セイバーと大橙丸を捨てた。

それは、もうインベスたちを傷つけないという彼女の誓いの現れだ。

「さあ、ハニー！」

頬を一回叩いて気合いを入れ、身構える。

そして、向かってきたインベスを真っ向から受け止めた。

「うぐぐぐ……」

「穂乃果、準備はいいですか？」

「うん、大丈夫！」

海未は穂乃果の後方から声を飛ばした。

すでに、穂乃果が押さえているのはインベス二匹。

じりじりと足が滑るが、そのたびに一步踏み出す。

海未の指示は、インベスを合図まで押さえておくこと。

ならば、穂乃果のやるべきことはただ一つ。

「ここからは、絶対に通さない」

海未が、作戦を成功させやすいようにできる限りのことをするのみ。

彼女からは、背後にいる海未の姿は見えない。

当然、どんな準備をしているか。そもそもインベスを帰すための方法があるかも確認できない。

それでも、穂乃果は海未を信じて疑わない。

その揺るぎない信頼が、穂乃果にまた一步踏み出すための力を与えていた。

「今です。押してください！」

「うん。とりやああああ!!」

準備ができたのか、海未は穂乃果へ次の指示を送る。

気合いと共に、穂乃果は、受け止めていたインベスを渾身の力で押した。

押されたインベスは地面から浮き、後ろから続いていたインベスも巻き込んで吹っ飛んだ。

「今です！」

その瞬間を待ちかまえていた海未は、声を上げた。

その声とほぼ同時。飛ばされたインベスの後方に変化が現れる。前を見ていた穂乃果は、眼前の光景に目を丸くした。

「うそ。クラックが……」

穂乃果が押し飛ばしたインベスたちの後方に突如クラックが開いたのだ。

しかも、その中からは、インベスが顔を出していたのだ。

穂乃果は、最悪のタイミングだと思った。

インベスを送り帰すどころか、また増えてしまうと。

が、クラックから顔をのぞかせたインベスは、穂乃果の予想外の動きを見せた。

ちようと飛んできたインベスを捕まえると、クラックの向こうへと引きずり込んだのだ。

「え、なに。．．．．．ど、どうなってるの?」

考えてもみなかった展開に、穂乃果は困惑していた。

まるで、インベスが穂乃果を助けるような行動をとったのだ。

「穂乃果。うまくいきましたね」

困惑する穂乃果の元に、海未が駆け寄った。

計画通りと言わんばかりの態度に、穂乃果は何が起きたのか聞かずにはいられなかった

「海未ちゃん。今のつて、なにがどうなって．．．．．海未ちゃんがやったの?」

「はい。今のクラックは、これを使って開いたのです」

「それって、ロックシード!?」

海未の持つひまわりのロックシードを見て、穂乃果は驚きの声を挙げた。

穂乃果は、自分や戒斗が変身していたため、インベスに対抗するにはロックシードを使って変身するしかないと思いきんでいたのだ。

が、それこそが盲点であった。

ロックシードについてもっとも周知されている機能は、インベスをヘル Heim から呼び出すということ。そこにこそ可能性があると思は考えたのだ。

「さっき出てきたインベスって……、もしかして海未ちゃんの」

「はい。私のインベスに手伝ってもらいました。とは言っても、私は、クラックを開けることしか考慮していなかったの、あの子が普段より大きい姿で出てきてくれたのは、うれしい誤算でした」

普段ロックシードから召還されるインベスは、手のひらに乗る程度の大きさだ。

15センチもあればいいところの彼らに、十倍以上もあるインベスの相手をするにはできない。海未は手伝ってもらうことはできないと思っていた。

予想外ではあったものの、それは海未の作戦を有利な方へと傾けるもの。海未の中で、作戦の成功がより強固なものとなった。

さっきの行動で、ヘル Heim へ送り帰すことができたのは、初級インベス2匹。穂乃果が押したものと、その背後に居て巻き添えになったものだ。

残るは、初級インベス4匹と上級インベス1匹だ。

「まずは、初級インベスから帰してしましましょう」

「そうだね。一気に帰しちゃおう」

「そこですが、穂乃果……」

「ん、どうしたの？」

「すみませんが、ちよūdōのタイミングで開かなければならないので、後方支援くらいしかできません。穂乃果にまた戦いを任せることになつてしまいます。ですが……」

「うん、わかつてる。海未ちゃんには、これ以上ないってくらいの希望をもらったんだもん。それくらい、どうってことないよ」

「穂乃果……」

「海未ちゃん、背中は任せたよ」

「……はい！」

二人は、同時にインベスたちのいる方へ構えた。

彼女たちの前には、4匹の初級インベスが待ちかまえている。

穂乃果は、恐れることなくインベスたちへ向かっていった。

彼女を突き動かすのは、背中を預けた者への信頼と、彼女の決して消えない祈りだった。

再びインベスたちと対峙する穂乃果と海未を見て、満実はただ驚いていた。

確かにロックシードには、数秒だけクラックを開く機能がある。

そもそもロックシードについては、海未よりも長くロックシードやインベスと付き合ってきた彼の方が知っていることは遙かに多かった。

にもかかわらず彼が驚いたのは、海未が自分も思いつかないような方法で、穂乃果の願いを叶えて見せたからだ。

彼が初めてインベスと対峙した当時は、ヘルヘイムについてはユグドラシルによつて隠蔽されており、何の準備も心構えもできていない状態だった。

いまだであれば一部の暴走を除いてはほぼ安全に管理しつつあるが、当時は解明もさほど進んで居なかった。

そんな状態で無差別に襲ってきたインベスに対し、戦うという対処方法が真っ先に思い浮かんだのは当然のことだ。

少なくとも、彼らを共存しようなどと思えるほどの余裕も、助けようと考えられるほど彼らに対する思い入れも、当時の満実たちにはなかったのだ。

彼女たちの発想は、いくらか秩序の保たれた現在だからこそ生まれたものだろう。

それを思えば、満実がその方法を思いつかなかったことも無理はない。

ただ、たとえ自分が今の状況に居たとしても、同じような考えに達することはできなかつただろうと満実は思った。

自らに向けられた理不尽な暴力に対し、暴力で返す方が楽だから。憎しみを持ち、拒絶する方が簡単だからだ。

それを彼女たちは、ついに理想を貫くため方法を勝ち取り、理想を現実にしようとしている。

ほかの人間たちのように、満実のように、安易に拒絶するのではなく分かり合うために。

だからこう思ったのだ。

戒斗の言葉を借りるなら、彼女はまさしく強者であると。

「本当に強いですね、彼女たちは。あなたもそう思うでしょう、戒斗さん？」

「ちつ。気づいていたか」

「ええ。まあ、不覚にも気を失っていたので、気付いたのはさつきですけど。それにしても、律儀に見張っててくれたんですね」

満実が言ったのは、彼が言った見張るようという指令だ。

戒斗は、それを思い出すと、関係ないと言わんばかりににらみつけ

た。

「貴様がなにを言おうが関係ない。俺はただ俺の判断でここにいる」

「ほお、自分の判断で……。でも、あなたが手を出さないのは引っかけますね。どうして、割り込んで行かないのですか？」

自らの道を阻むもの、邪魔なものは何であろうとねじ伏せる。

そんな戒斗がインベスを前に、しかも素人の少女たちが戦っているというのに介入していない状況が、満実には腑に落ちなかった。

その疑問に戒斗は、さも当たり前のように答える。

「見極めるためだ」

「見極める？」

「ああ。力を手に入れたものは、それが男であろうと女であろうと、その力をどのようにか使うか決断しなければならぬ。俺の障害になるようであれば、早めにつぶしておこうと思ったまでだ」

「へえ。で、結果はどうだったんですか？」

現在、戒斗は見守るだけにとどまっている。

その状況からだけでもだいたいの察しはついたが、満実はあえて問いかけた。

すると、戒斗は舌打ちをすると視線を逸らした。

それを見て、満実は満足げに口角を上げた。

「貴様に教えてやる義理はない」

「へえ、そうですか……」

「何だ。その不適な笑みは……」

「いいえなにも。ただ、あなたはわかりにくいようで実はとてもわかりやすいなと思ひまして……」

「ふん、戯けが」

満実が明らかに自分をおちよくっているかわかった戒斗は、捨て台詞のようにこぼす。

満実に背を向けた彼は、今、穂乃果と海未がインベスと戦っている場所へ体を向けた。

「あら、戒斗さん。ようやく戦うんですか？」

「貴様には関係ない」

「はいはい、そうですか。では、どうぞ御自由に」

「ふんっ」

満実の言葉にいちいち反応してはきりがない。そう判断した戒斗は、彼を無視して歩を進めた。

「穂乃果、次です」

「いくよ。えーい！」

「はい。これで5匹目です」

穂乃果は、海未の合図とともにインベスを押し飛ばした。

5回目ということもあり、抜群のタイミングでクラックは開き、倒れ込んだインベスがその向こうへと消えた。

「後は、初級と上級1匹ずつです。このまま一気に行きましょう」

「うん。——あ、海未ちゃん後ろ！」

「——え？」

インベスが海未の開いたクラックの奥に消えていったのを確認して彼女の方を見た穂乃果は、警告を発した。

海未の背後に、インベスの陰を見たのだ。

咄嗟にぶどう龍砲を後方へ向けた海未は、トリガーを引き絞った。

ちょうどインベスの腹部に向いていた銃口から、ぶどうの実を思わせる弾丸が飛び出した。

銃弾を受けたインベスは、後ろへ後退した。

「いまだ!!」

海未の銃弾を受けて彼女の後方へよろめくインベスを見て、穂乃果が叫んだ。

飛んだインベスの進行方向にクラックが現れ、インベスは頭から飲み込まれた。

「穂乃果。ありがとうございます」

「へへへ。穂乃果もちやんと、送り返せたよ」

「はい。これで、初級インベスはすべて帰せました。後は……」

穂乃果と海未は、一匹ずつ対処する方法で、徐々にインベスを減らしていった。

インベスを帰す希望が見えたとはいえ、一匹でも帰すのに手こずる状態だった。一度に何体ものインベスを同時に相手することはできなかった。

が、海未もそのことを考えていなかったわけではない。

自分の武器を見た瞬間、後方支援に回ることを決めていたのだ。

穂乃果が初級インベスの対処に追われている間、もちろんコウモリインベスは、彼女たちの事情など関係なく襲って来た。

しかしそれを見越していた海未は、ぶどう龍砲で威嚇射撃を放ち、コウモリインベスを寄せ付けまいとしていた。そのかいあってか、二人は一匹ずつ辛抱強く耐えたことで初級インベスは6匹すべて送り帰せた。残るは上級インベスのみだ。

クラックを開くためには、タイミングを見計らわなければならぬ。そのため、一瞬目を離してしまっていた。

自分の目が向いていない瞬間に間合いに入られることを恐れた彼女は、後ろに飛びながらさつきまでコウモリインベスがいた場所へ銃口を向けた。

「な、インベスはどこへ……」

が、そこにコウモリインベスの姿はなかった。

どこへ行ったのか見回しているが、インベスらしき姿はない。

逃げてしまったのか。一瞬気を緩めかけて、しかしはっと気付く。

上級インベスにはここに特徴を持つこと。そして、さつきまで戦っていた上級インベスには、膜のようなものが腕からわき腹まで付いていたことに。

「まさか——」

海未は、すぐさま視線を上げ、周囲を見渡す。

一面の青と、ところどころにかかる白に目を凝らす。

すると、晴れ渡る空の一方所に黒い小さな点を見つけた。

それは、よく見なければごみや埃と間違えてしまいそうな小さな点だった。が、注意深く見てわかった。空中に漂う黒い塊が徐々に自分たちへ向かってきているということに。

「穂乃果、伏せて!!」

「え? ——わっと。いったい何?」

海未は、その黒い物体を見つけるや否や、穂乃果に飛びついた。

状況のわからない穂乃果は、海未とともに地面に伏せた。状況を確認しようとして顔を上げようとした穂乃果だったが、突如自分の上を吹き抜ける突風に頭を押さえた。

「穂乃果、上を見てください」

「上?」

突風がおさまると海未は、穂乃果を突風の正体へと誘導した。

穂乃果は、海未が指し示す方向へと視線を向ける。

一見、何の変哲もない青空。しかし、よく見ると人型の物体が空中に漂っていた。

それが、いままで戦っていたコウモリインベスであることに気付く
のには、そうは掛からなかった。

「.....嘘でしょ? 空を飛ぶなんて、反則だよ! あれじゃ、
全然届かないじゃん」

直立するような体勢で漂うコウモリインベスは、穂乃果と海未が見
ていることを確認すると飛び去ってしまった。

そのインベスの態度は、ここまでは来られないだろうと見下しているようにも、追いかけてこいという挑発しているようにもとれた。

海未は、インベスが飛ぶ姿を視線で追う。

飛んでいるインベス相手では、いくら後ろから追おうとも、引き離されてしまうことは目に見えていた。

せめて行き先さえわかれば、今すぐ追いつくことができなくとも対処はできると考えたのだ。

しかし、インベスの進行方向にある場所に気づき、海未は狼狽する。穂乃果も気付いたのだろう。穂乃果は、海未へ不安に染まった顔を向けた。

「そんな、あの方角は……」

「秋葉原。しかも、電気街です」

よりもよって、インベスが飛去った方角にあったのは、年中人でごった返す電気街だ。

二人の脳裏に大惨事の図が浮かび上がった。もう、一刻の猶予もないと突きつけられたのだ。

「大変だよ。早く、追わなくちゃ」

「ですが、空を飛ぶ相手をどうやって」

「とにかく止まってちゃ追いつけないよ。考えるにしても、走りながら――」

「——おい、高坂穂乃果、園田海未」

半ばパニックに陥った状態で走り出そうとした彼女たちだったが、自分たちを呼ぶ声に止められた。

海未は、一瞬で頭がさめるのを感じながら振り返り、声の主を睨んだ。

いままでに何回か聞いたことのある声で、もはや顔を見ずともわかった。

「駆紋、戒斗……。こんな時に何のようですか」

「まだ夢物語に縋っているようだな。弱者共」

「悪いですか。私たちは、大切なものを守るためなら戦います。でも、そのためにほかの大切なことも犠牲にしたくない。ただそれだけです」

戒斗の言葉に、海未は真っ向から立ち向かう。

幸か不幸か、戒斗の出現によって一気に頭が冷めるのを感じた。

「また生ぬるいことを。貴様等が進もうとしている道は、弱者には到底進むことすら叶わない道だ。貴様等程度が進もうものなら、待ちかまえる運命にいと也容易くつぶされるだろう。それでも、あえてその道を進もうというのか？」

彼の言葉に揺さぶられるが、海未は目をそらさない。決して目を逸らさず、しっかりと彼を見据えていた。

海未は目を一人であつたなら揺らいでいたかも知れない。でも、いまは一人ではない。

海未は、穂乃果と目を合わせる。

穂乃果も同じ気持ちであると確認すると、息を合わせて宣言する。

「はい。それでも………。あきらめたくない！」

自然と手は、互いの手をたぐり寄せる。

お互いの体温が、困難へ立ち向かうための力となる。

「ふんっ、そうか」

二人は、戒斗に向かって、いっさい視線を逸らさずにその決意を表した。

戒斗は、その決意を聞くと小さく鼻を鳴らした。

おもむろにジャケットの内側へ手を入れると、角張った固まりを取り出した。

「哀れを通り越して、いつそすがすがしい。いいだろう。ならば、これを見せてやる」

戒斗が取り出した普通のものに比べ一回り大きいロックシード。彼はそれを放った。

「おつとつと。これは……………」

穂乃果はそれを掴もうとして失敗。

2、3回落としそうになって何とか掴んだそれには、普通施されている果実の意匠の代わりに桜の花びらが描かれていた。

「もう一度言う。お前たちが目指すものは、弱者には到底不可能なものだ。それでも求めるものがそこにあるのなら力を示せ。貴様等の強さを示し、何者にも屈しない強者であることを証明してみせろ」

「ちよつと、いったいこれをどうしろと言うのですか。と言うか、あなたはいったいなにをしに来たんですか」

海未が狼狽した様子で戒斗に問うが、すでに背を向けて立ち去ろうとしていた。

「全くなんなんですかあの人は……………。つて、なにをしようとしているのですか穂乃果!?!」

「え? せつかくもらったから、早速開けてみようかなって」

「あの駆紋戒斗からもらったものですよ? 信用できません」

「たしかにひどい言い方したりするけど、でも間違ったことは言っていない気がするの。……………だから、これも何か意味があると思うんだ」

「ですが、やはり何かもわからないものを使うのは——」

「――、えーい！」

「ほ、穂乃果!？」

海未が開けるかどうか思案していたそんなとき、しびれを切らした穂乃果は、戒斗から渡されたロックシードを解錠してしまった。

穂乃果によって解錠されたロックシードは、海未の叫び声とともに穂乃果の手の中から飛び出した。

そのロックシードは、掛け金が上がるだけではなく、空中でその姿を変え始めた。

手のひらサイズだったそれは、どう畳まれていたのかわからない部品を展開していき、地面に着地する頃にはバイクへと変わった。

「まさか、ロックシードがバイクになるなんて……で、いたいこれをどうしろと？ 私たちは免許を持ってませんよ？」

「なにしてるの海未ちゃん。早く乗って」

「乗ってじゃありませんよ。あなたもバイクの免許持っていないでしょう？」

「あれ、海未ちゃん知らないの？ これは、ロックビークルっていうんだよ。穂乃果の家って和菓子屋だから、出前とかで使ったことあるんだ。私が乗ったのは、これとは違うタイプの出前専用のやつだったけど、免許もちやんと持ってるよ。それに、操作も思っただけでほとんどの動作をアシストしてくれるし、ふつうのバイクよりも安全なんだよ」

「そ、そうなんですか。．．．．．それにしても、まさか穂乃果に教えられるとは」

「なにぶつぶつ言ってるの？ それよりも早く。きっとこれでさっきの子を追えつてことだったんだよ」

「でも、私たち．．．．．」

「ん、海未ちゃん？」

穂乃果は、突然もじもじし出す海未に首を傾げた。

海未は、顔を真っ赤に染め、自身のドレスを見ていた。

「だって、今こんな格好なのですよ？ それで、バイクなんて」

「大丈夫だよ。アイドル活動を本格的にやるなら、ダンスとかもするんだから。それにちゃんとアンダースコート付いてるみたいだしね」

「そういう問題では．．．．．」

海未は、食い下がろうとするも、口を閉じる。

いまは、人命に関わってくる事態の最中だ。

「恥ずかしいなどとだだをこねている場合ではないことは、海未も理解していた。」

「．．．．．もう、わかりましたよ」

穂乃果に催促され海未は、苦渋の選択の末飛び乗った。

穂乃果は海未が自分に掴まったことを確認すると、猛スピードで彼女の駆るロックビークル「サクラハリケーン」を発進させた。

穂乃果の言うとおり、サクラハリケーンは、穂乃果の望む通りに空を飛びインベスを追って爆走していた。

ハンドルを握る穂乃果は、店の手伝いで乗ることがあったと言うだけあって、無難に乗りこなしていた。

が、それはただ走らせることができていると言うだけだった。

インベスを追いながら、走る自動車の間を縫って走行できているのは、ロックビークルのアシストあつてのものだった。

「わあ、ちよ、きやつ」

「ちよつと、穂乃果。しっかりしてください」

「そんなこと言ったって。いつもこんなに、いやあつ。スピード出さないもん」

「穂乃果。あなた、目を瞑ったりなんてしてないでしょうね」

なれない高速走行にあたふたしながらも、インベスとは一定距離以上離されずに付いて行っていた。

しかし、バイクでは追い続けるだけで精一杯で、追いつくことはできない。

それを感じ取った海未は、再びひまわりのロックシードを取り出した。

「そのまま走ってください。あのインベスの目の前にクラックを開きます」

「海未ちゃん、頭いい！ あの子が勝手にヘルヘムへ帰るってことだね」

「はい。なので、離されないように、お願いします」

海未は、空中を高速で飛ぶインベスの動きに併せてクラックを開こうと試みる。

片腕は、穂乃果の腰に回してしがみつきながら、もう片方の手にはさつきからクラックを開くために使用していたひまわりのロックシードを握っている。

衣装によって強化された腕力で持ちこたえているが、右に左に揺れるバイクの上で不安定な体勢を余儀なくされる。

それでも何とか体勢を安定させ、インベスの前へねらいを定めた。

「今です！」

自分のねらっているところにインベスが来たタイミングで、彼女はロックシードを解錠する。

ロックシードの解錠に伴い、クラックが音を立てて開く。

「なっ。だめですか」

しかしクラックは、開いたときにはすでにインベスの後方。

クラックが開くまでにかかる時間が長すぎたため、その間に通り過ぎられてしまったのだ。

「仕方ありません。少々痛いかもしれませんが、我慢してください」

飛んだままでは、インベスにクラックをくぐらせるのは困難。ならば、インベスの動きを止めるしかない。

海未は、ひまわりのロックシードをしまうと代わりにぶどう龍砲を取り出した。

海未は、ぶどう龍砲をインベスへ向け、引き金を引いた。

引き金を引くと、銃口から紫色の玉が、はじける果汁のように飛び出した。

一発一発ねらいを定めて引き金を引くものの、弾丸はすべてインベスの後方へ流れていく。

「これでは当たらない。なら」

単発では当てられないと悟った海未は、拳銃で言う撃鉄の部分にあるレバーを引き、今度は引き金を引き続けた。

銃を扱ったことなどない彼女は、一発では当たらない事は承知していた。そのため、今度は連続で弾丸を放ったのだ。

弾丸は、紫の線を描いて、徐々にコウモリインベスへ近づく。

下手な鉄砲も何とやらと言うことだ。

一発だけでも当たればいい。

一発でも当てれば、コウモリインベスを落とせるという確信があった。

後少しで、足に触れる。海未は、コウモリインベスへ完全に照準を合わせた。

「なぜですか。……なぜ当たらないのですか」

照準は確かに合っていた。が、当たるすんでのところでインベスは回避したのだ。

海未は、いまだ一発も当たらずに空中を舞うコウモリインベスを見て歯噛みした。

海未は、拳を握りしめた。

いままで、銃など一度もさわったことがない。

弓道では、ほとんどははずさないため、何かをねらって撃つことに関しては心得があった。

それでも、弓道では一本一本狙って射るし、何より狙うのは動かないのだ。

得物の違いや普段ねらったことのない動く的では勝手が違いすぎた。

「やはり、扱ったことのない銃では……………」

『物事は、弓道と同じだろ?』

「はっ。いまのは……………」

どこからか聞こえたそれは、海未が憐次へと言った言葉であり、憐次から言われた言葉でもあった。

弓であったなら、と海未は考える。

弓ならばはずさない。外す筈がないと自信をもって言える。

「そう、ですね」

海未は、自らが持つ武器を見て、自分のすべき事を悟った。

自分にできないことをしようとするからいけないのだと。

幸い、自分の願いを体現するものは、彼女の手の中にある。

「物事は弓道と同じ……………」

「海未ちゃん。今は追ってるけど、これからどうしよう?」

「穂乃果。あのインベスが左に見える位置で走ってください。そし

て、5秒だけでいいので、バイクを安定させておいてください」

「5秒。それでどうするの?」

「後は私がやります」

「やるって、なにを。まさか海未ちゃん」

「安心してください。殺したりなんかしません。絶対にヘルヘイムへ帰して見せます」

「.....」

「私を、信じてください」

穂乃果は、前を向いたまま沈黙する。

穂乃果の刀は論外として、遠距離に対応した海未の銃もコウモリインベスには通じなかった。

一瞬だけ、海未も自分のようにあきらめてしまったのかと思った。

しかし、すぐにそうではないとわかった。だから、穂乃果はすぐに顔を上げた。

「わかった、海未ちゃんを信じる。カウントダウン、始めるよ」

「はい、お願いします」

「行くよ.....5!」

穂乃果がカウントダウンを始めた。

それとともに、海未も動き始める。

海未はバイクの上で姿勢を正した。

今の彼女の姿は、チャイナドレスだ。羞恥から座席の横から腰をかける程度の姿勢で乗っていたが、意を決してバイクに跨がったした。

そして、馬に跨がるかのような姿勢で、ぶどう龍砲を左手で持つ。

その姿は、流鏝馬のよう。

背筋をピンと伸ばし、インベスのいる方向へ銃口を向ける。

「4!」

まっすぐインベスの方向へ銃口を向けたまま、ぶどうの果実を模した髪飾りに振れる。

『ハイハイハイ！　ぶどうスカッシュユ!!』

ぶどうロックシードにインプットされた技の一つが宣言された。

すると、ぶどう龍砲の銃口には、紫色の宝玉のようなエネルギーが集まり始めた。

「3！」

髪飾りに触れていた指を放し、代わりにぶどう龍砲のレバーに指を掛ける。

弓の弦を引き絞るがごとく、レバーを引く。

ぶどう龍砲のレバーは、弾丸の発射方法を単発から連射へと変更するスイッチにすぎないため、数センチしか引くことができない。

当然のごとくレバーは動かない。

しかし、それを無視してさらに引く。

ただ彼女は、自分の心の赴くまま、想像のままに。空中のインベスを止めるため、自分が今もつとも自信を持てるものを体現すべく、レバーを引い絞った。

そんな彼女の思いに、ぶどう龍砲は応えた。

途中で止まっていたレバーが一気に引き延ばされ、海未の思い通りの位置で止まった。

さらに同時に銃口に集まっていたエネルギーが一つに収束した。

これで準備はできた。

「2！」

全ての準備を終えた海未は、銃口をコウモリインベスへあわせる。後は、狙って撃つのみ。

海未に流鏑馬の経験はない。

が、海未には不安はほとんどなかった。

大まかな照準は、ドレスが補正してくれる。

実際に当たるかどうかは射手の技量に左右されるが、それも不安の要素にはなりえない。

目指す目標は、自分や穂乃果、みんなが笑顔で暮らす日常を取り戻すこと。

そのために、インベスを元の世界へ戻す。

それは、自分が、穂乃果が胸を張って生きるためにする事だ。

そして、すぐそばに穂乃果が居てくれる。不安やおそれなど生まれる余地はない。

目標を見据え、それにまっすぐ向かい、不安やおそれで手元が狂うこともあり得ない。

なら、

「この矢、外す要素はありません！」

「1！ 海未ちゃん!! 行けええええええ!!」

「届けええええええ!!」

二人の裂帛の気合いが重なり、ぶどう龍砲のトリガーが引かれる。

銃口から、一筋の紫の光が延びる。

それはさながら竜の息吹、と言うよりはむしろ竜そのものだった。

空気が軋み、それが咆哮のごとく響きわたる。

紫の竜が見据えるは、一点。コウモリインベスだ。

コウモリインベスは、自らへ向かってくる竜の姿を確認すると、先の弾丸の時のように回避しようとした。

が、その行動は遅すぎた。インベスが回避行動をとるより早く、竜は、一寸の狂いもなくコウモリインベスをとらえた。

殺さず帰すという誓いを立てた海未と穂乃果に応えるかのように、インベスをかみ砕くのではなく、殺すのではなく、くわえたのだ。

インベスをくわえる竜は、空間に体当たりした。

何もないはずの場所が波打ち、薄い膜のようなものにジッパーが現れる。閉じたままのクラックだ。

竜がぶつかる力を強めると、徐々にジッパーが開きだす。

竜は無理矢理クラックをこじ開けるとインベス共々その向こうへと消えていった。

しばしの静寂の中、海未は、ぶどう龍砲を構えたまま放心していた。

無言のまま、いままでインベスがいた方向をただ見つめていた。

インベスへ引き金を引いたのも、竜を打ち出したのも、インベスをヘルヘイムを帰したのも海未だったが、当の本人は、実感がわかずにいたのだ。

なにせ、どんな行動にも理由を求めるような彼女がなんの根拠もなく行動を起こし、いくつもの偶然や奇跡に助けられ、ようやく達成したのだ。

いまの海未には、実際に成功したのかすらも怪しく思えてしまっていた。

「や、やった。やったよ海未ちゃん。すごいよ」

「や、やった」

「うん。やったね、海未ちゃん」

が、穂乃果の声に現実へ引き戻される。

そして、やっとインベスをヘルヘイムへ帰すことができたと言うことが、彼女の中で現実味を帯び始めた。

歓喜と、それとともに戻ってきた疲労で、海未は穂乃果の背中へ顔を埋めた。

穂乃果は、そんな彼女を背中に感じ、誇らしげに笑った。

「すごい、すごいよ。．．．．．本当にやり遂げちゃうなんて」

「いいえ。私だけでは不可能でした。．．．．．穂乃果がそばにいてくれたから、迷い無く実行することができたんです。あなたのおかげですよ」

「そんなことないよ。海未ちゃん、本当にすごいよ」

穂乃果はそういうが、海未は、自分一人で成し遂げたとは思わない。

もし、穂乃果がこの場にいなかったら。もし、自分が穂乃果より先にこの力を手にしていたとしたら、確実にインベスたちを殺す道を選んでいた。そして、その道を選んでしまっていたならば、たぶん穂乃果たちとはそれ以降笑い合えなかっただろうと思えるからだ。

穂乃果がいたから、今こうして笑いあえる。喜びを分かちあえる。

その思いは穂乃果も同じだった。

彼女に至っては、サクラハリケーンのハンドルから手を放して万歳をしていた。

「．．．．．ちよつと穂乃果、ハンドルをしつかり掴んでください！」

「え？」

海末も、達成感で油断していたのだろう。

穂乃果の行動に気付くまでに数秒掛かってしまった。

インベスを送り帰すことができたこと、そして、それを海末と共に成し遂げられたことがよほどうれしかったのだろう。

手放しで喜ぶ穂乃果だが、スタントマンでもない彼女がバイク搭乗時にそんなことをすればどうなるかは明白だ。

サクラハリケーンは、ハンドルが解放されると、暴れ馬のように暴れ始めた。

必死にコントロールしようとする穂乃果だが、焦ってなかなか制御できない。

「しっかりしてください。穂乃果！」

「今やってるって——」

「——穂乃果、前！」

バイクの制御に悪戦苦闘している穂乃果には、前がしっかりと見えしていなかった。海末の声に気づくときには、目の前にはトラックが迫っていた。

なんとか避けようと穂乃果はハンドルを切った。

「あ……………」

「穂乃果ああああ!!」

海未の絶叫と共に、二人は加速度によって投げ出された。

空中で、彼女たちはお互いを確認すると、手を伸ばした。

手を掴むと、互いに互いの体を抱きしめた。

互いを庇い合うように。もう離れてしまわないように。

「あれ、ここは……」

穂乃果は気がつく、背中に堅くて冷たい感触を感じた。

自分が地面に寝ていることに気づいた穂乃果は、起き上がろうとして誰かに手を握られている事に気づいた。

「穂乃果、大丈夫ですか？」

「あれ、海未。おはよう。なんで隣に寝てるの？」

「おはようって……」

穂乃果が、繋がれた手の先へと視線を向けると、海未が彼女と同じ

く地面に仰向けに寝ている姿が目に入った。

記憶が朦朧としておりなにが起きたか理解していなかった穂乃果は、海未になぜと問う。

その問いを聞き、海未が呆れた顔をした理由もすぐにはわからなかった。

「なんでって、まさか覚えていないなんて言わないでしょうね」

「え？ ええと、全く覚えが……」

穂乃果は、周りを確認すべく起きあがった。

真っ先に目に入ったのは、乗り捨てられた自動車数台だった。

インベス騒ぎで人はすでに逃げていたようで、動いている自動車は無かった。

自動車の中には、大型のトラックの姿も見えた。前面には、何かがぶつかったようなくぼみがあった。

続いて自分たちの後ろを見ると、ぐにやぐにやに曲がったガードレールが見えた。

なにかが二つ、すごい勢いでぶつかったような感じに見える。

そして、二人の手元にもう一度視線を落とすと、そこにはロックビークル

のロックシードが転がっていた。

事態を察した穂乃果は、さびたロボットのよう海未の方を向いた。

「あれ、もしかして………。穂乃果、事故った？」

「……………もしかしなくてもそうですよ！」

ぼやけていた記憶がはつきりとしてきた穂乃果は、やっと自分と海未が倒れていた理由に気づいたのだった。

「海未ちゃん、ごめんなさい」

「あれだけちゃんと運転するように頼んだというのに」

「でも、だってちゃんとあの子を元の世界へ帰せたのがうれしくて」

「だからって、ハンドルから手を放す人がいますか」

「だからごめんって」

海未は、口をとがらせてそっぽを向く。

それを見て、穂乃果は上目遣いで彼女をみる。

「……………ふふっ」

「ははは」

突然こみ上げてきた笑いに二人は、再び地面に体を投げ出した。

穂乃果が何か問題を起こして、それに海未が呆れてしまう。

そんないつも通りの日常が戻ってきたような気がしたから。

いつもの二人戻ってきたように思ったからだ。

「本当に、やったんだね」

「はい。あなたがあきらめなかったから、」

「ううん。海未ちゃんが一緒にいてくれたから」

「いえ、あなたが……」

「違うよ。海未ちゃんが……」

互いに互いのおかげだという彼女たちだが、一人では成し遂げられなかったと理解していた。

穂乃果にはわかっていた。海未がいなければ、とうの昔にあきらめて一線を越えてしまっていただろうことに。

そして、海未にはわかっていた。穂乃果がいなければ、無理なものは無理だと断じ、理想を語ることにすらできなくなっていただろう。

だからこそ、いまは互いと一緒にいて、互いに思いを伝え会えたことがうれしかった。

「二人だったから。……二人だったからできたんだね」

「そうですね。どちらが欠けても、きつとできませんでした」

「これからも、……迷惑はいっぱい掛けちゃいと思うけど、よろしくね。海未ちゃん」

「はい。こちらこそよろしくお願いします。穂乃果」

二人は、どちらともなく笑い合っていた。

握っていた手をさらに強く握った。

「さあ、今日もスクールアイドル目指してがんばるぞ」

「はい。まずはストレッチからです」

翌日、穂乃果と海未は、いつも以上に意気込んで朝練に臨んでいた。

昨日になにがあったのか、しつかりとは知らないことりと隣次は、そんな彼女たちを遠めに見つめていた。

「なあ、昨日喧嘩してたかと思ったらもう仲直りしてるぞ。何かあったのか?」

「うーん。実はことりにもわからないの。仲直りしてるのはいいことだけど、なにがあったのか気になるよね」

「ちよつとことりちゃん、レン君。そんな離れたところでなにしてるの？ つぎは柔軟だよ」

「そうです。時間は待つてくれません。私たちの目標のため、一秒も無駄にはできないのですよ」

「そうだな。穂乃果はともかく海未も妙にテンションが高い気がする」

「とりあえず、戻ろっか」

ことりと憐次が言うように、穂乃果と海未の様子は少しおかしかった。

もつとも、穂乃果だけであれば気にならない程度。今日は特別いいことでもあったのかと思う程度だ。

しかし、そんな穂乃果と並んで海未まで同じくらいのテンションでいるとなると話は別だ。

恥ずかしがり屋で定評のある彼女が、穂乃果並のテンションでいることは明らかに異常。

はじめはアイドルになることにすら渋っていた彼女が、特訓にここまで精を出しているとなると、さすがに気にならざるをえなかった。

憐次は、海未に近づくとそつと耳打ちした。

「で、実のところどうやって仲直りしたんだ？」

「そうですね。強いて言うなら自然にですかね」

「自然に？」

「ああ、でも」

その時の海未は今までにないほどの怒りようだった。

だというのに自然に決着が

隣次は疑問の声を上げた。

「あなたには、一応感謝しておきますね」

「え、どういう意味だ？」

「ふふ。秘密です」

「なんだよ、秘密って」

「さあ、今日も頑張りましょうか」

「ちよつと、おい。待てつて——」

はぐらかして海未の元へ向かおうとすることりに習って一歩踏みだした隣次は、ジャージのポケットの中から振動を感じて立ち止まった。

隣次は、ポケットからスマホを取り出した。

スマホの画面を点灯させると、メッセージが一件入っていた。それは、彼がよくチェックしているサイトからの新着動画が入ったことを伝える知らせだった

「ああ、そうだ。今日はまだチェックしてなかったんだった」

彼は、インターネットから、あるサイトを開いた。

彼が開いたのは動画サイトだ。さまざまな動画が紹介されている中、彼は最近アップされたものを選んで再生し始めた。

「さて、こんどはどんな………。つて、おい。な、なんだこれは！」

彼は動画を見始めた矢先、驚きのけぞった。

「もう、レン君。動画なんて見てないで練習するよ」

「いくら直接関係ないからといって、さぼることは許しませんよ」

「おい。穂乃果、海未。お前たち、大変なことになってるぞ」

「あ、レン君。どうしたの、そんなに慌てて？」

「穂乃果こそどうしてそんなに落ち着いてるんだ。まさか、まだ見えないのか？」

「見てないってなにを？」

「スクールアイドルホットラインだよ！」

隣次は、未だ頭にはてなマークを浮かべている三人にスマホの画面を突きつけた。

『Hello! スクールアイドルを愛するeverybody!
今日もホットなニュースが飛び込んできたぜ』

始まったのは、スクールアイドルホットライン。

DJサガラが、管理しているスクールアイドル専門動画サイトだ。

いつも首にかけているヘッドホンとハイテンションがトレードマークの彼はスクールアイドルの最新情報を世界へ配信しているのだ。

が、穂乃果たちは、今回はいつもよりも彼のテンションが高いと感じていた。

なにかいつもよりもおもしろいことでもあったのかと考えながらサガラの言葉に耳を傾けた。

『千代田区のとある公園で、インベスゲームを行っていたインベスの一方が突如暴走。そのまま周りの観客を巻き込んで大暴れ。大惨事になることが予想された、しかし。そんなインベスに立ち向かう姿が二つ。あれはアーマードライダーか? No! なんとスクールアイドルだ!!』

「え、スクールアイドルがインベスに？ またまた、そんなことできる人なんているわけ無いのに。ねえ、海未ちゃん？」

穂乃果は、インベスの強さを身を持って知っただけにそんなことあり得ないと笑い飛ばす。

人が、その身でインベスに対抗するためには、ロックシードと戦極ドライバーが必要となる。

その肝心の戦極ドライバーは、ユグドラシルが管理しているため、市場には出回らない。

戦極ドライバーが手に入らない以上一般人に、ましてや女子高生であるスクールアイドルがインベスの前に立てるはずがないのだ。

が、一方で海未は、何かに気づいたのか顔をひきつらせていた。

一つ、思い当たってしまったのだ。しかも、とても身近に。いや、というよりもすぐとなりだ。

「ま、まさかこれって……」

「……海未ちゃん？」

海未は、苦笑いをしながら穂乃果を見た。

『それぞれ、ライブでも行うかのような姿の二人は、なんとクラックを自在に操り、インベスをヘルヘイムへと送り返した!!』

サガラの熱のこもった声と共に二人の少女がアップで表示される。

その少女たちは、一方は淡いオレンジのワンピースのようなドレス、そしてもう一方は紫のチャイナドレスを身に纏い、ロックシードを用いて開いたクラックヘインベスを送り返していた。

「やっぱり、私たちではありませんか!!」

「おお。そうだね、すごいね。私たちもうスクールアイドルだって」

「なにをそんな悠長なことを言っているのですか私たちの映像が、全国に流れてしまっているのですよ?」

「え? そうだね。え………。うそ!!」

「全く、やっと気づきましたか」

「それって私たち、すでにスクールアイドルとして認められちゃってるってこと? イエーイ!」

「はあ、どうしてそうなるのですか」

脳天気な笑う穂乃果に海未は肩を落とした。

穂乃果はわかっているようにだが、海未は、映像が世界に流れてしまったことによる問題をかみしめていた。

『空中を舞うインベスが現れると、二人はバイクで追跡。インベスに追いつくとチャイナな少女は流鏑馬のごとくインベスを狙撃。放た

れた龍がインバスをくわえてヘルヘイムへと連れ去った』

次は、秋葉原の道路をバイクで疾走する二人の姿に映像が移り変わった。

本来一人乗り用のサクラハリケーンに二人で乗っているため、警察に見つかっていたら確実に捕まっていただろう。

が、海未は、そんなことよりある一点が気になって気が気ではない。

「……………えて、よね」

「ん。なに、海未ちゃん？」

「見えてませんよね。見えてませんよね？」

「海未ちゃん、なにをぶつぶつ言ってるの」

「穂乃果いいですよね。スカートの下にはちゃんとアンダースコートはいているようでしたから。でも私は……………」

海未は、自分で着ていただけに、そんな気の利いたものはなかったとわかっていた。

そう、それは穂乃果には問題なくても海未には大問題だ。

映像が、全世界へ配信されてしまったということは……………。

「もうだめです。あんな動画を全世界に配信されて……………町を歩けば『あのチャイナの子だ。あんな格好してて恥ずかしくないのか

な?』って噂されてしまうんです。もう、スクールアイドルなんて恥ずかしくてできません」

「もう、大丈夫だってば。可愛かったよ。恥ずかしいところなんてなかったよ?。」

「そういう問題ではありません」

彼女は、見たくなくても確認せずにはいられないのか、両手で顔を隠しつつも指の間から画面を凝視していた。

『インベスを倒すのではなく、送り返すという慈愛に満ちた姿はまさに清純なアイドルだ!! アーマードライダーのようにインベスに立ち向かった二人のスクールアイドルを、俺はアーマードアイドルと呼ぶことにしたぜ!!』

映像は、今度は道路で大の字になって寝ている絵に変わる。

この映像は、少々ぶれていた。野次馬の誰かが撮ったものなのだろう。

少女たちは、達成感に満ちた笑顔で笑いあっていた。

映像は、そんな彼女たちへ徐々に近づいていく。

再び地面に肢体を伸ばす彼女たちだったのだが、黒髪の少女の方が、いつの間にか集まってきた野次馬に写真や動画を取られていることに気付いた。

すると、彼女は血相を変えて茶髪の少女の手を引いて、走り去ってしまった。

そこで、映像は切れてしまう。

映像が終わると、再び画面全体にサガラの姿が映し出された。

『所属高校やユニット名は、残念ながらいっさい不明。しかし、判明次第、報告していくから待っていてくれ。これを見ているみんなもこの二人の情報があつたら、どしどし送ってくれ。待ってるぜ』

動画は、なぞのスクールアイドルの情報を求める文言で締めくくられた。

画面には、黒い長方形だけが残され、四人は数秒間その画面を呆然と見つめる。

最初に動いたのは海未。顔を完全に覆い隠してしまった彼女は、その場に座り込んでしまった。

「あんな格好で、顔までアップで映されて………。私はもう生きていけません」

「大丈夫だよ、海未ちゃん。あの衣装、すごく似合ってたし」

「そうだよ。海未ちゃん、すごくかわいかったよ」

穂乃果とことりは口々に気にすることはないと説得する。それでも、海未は顔を上げない。

そんな中、

「そうそう、よかったぜ。……あの大胆な衣装。恥ずかしがること無いから、もう一回なつてくれよ」

「レンジ……」

穂乃果とことりの言葉では首を横に振るだけで顔を上げなかったにもかかわらず、憐次の言葉に海未は顔を上げたのだ。

欲望半分、ふざけ半分の彼の言葉でどうして顔を上げたのか。

穂乃果とことりは、納得いかないと言わんばかりに海未の真意をうかがった。

「ふふふ」

海未が発する不気味な笑い声と表情から、穂乃果とことりは、なぜ憐次にだけ反応したか合点がいった。そして、一步後ろに下がった。

「……ってのは、冗談だけだよ。あれで出るなら集客率すごいことになりそうだな……。って、海未？　なんでそんな目が据わってるんだ？」

「ふふふ、……レ、ン、ジ」

「どうした海未、大丈夫か。顔が怖いんだけど、笑い方がすごい怖いんだけど」

「……れ、……さい」

「え？」

「わすれなさあああああいい!!」

「ガハツ——」

神聖な神社に、気持ちのいい平手打ちの音が響いた。

それを少し離れてところ見ていた穂乃果とことり、そして、馬鹿に制裁を加えた海未は、崩れ落ちる彼を生暖かい目で見ながら思った。

今日も、平和だなあと。

第十一話 『3人そろって』

「ついに私、南ことり。怪我が完治いたしました」

いまだ少し肌寒い早朝。

いつものように朝練習のために来ていた穂乃果、海未、憐次の元に、ことりの口から朗報が伝えられた。

「ほ、本当ですか!？」

「やったー。いつの間には、足の包帯が取れてる」

ことりの報告に、穂乃果たちは歓喜の声を上げた。

最近まで包帯を巻いていた足首には今は何も巻かれておらず、代わりに動きやすいランニングシューズを履いている。また、服装もジャージ姿で、これから動く気満々といった装いだっただ。

怪我とは、以前ことりたち三人がヘルヘイムの森へ迷い込んでしまった際、インベスに追いかけて負ってしまったものだ。

怪我は軽い捻挫であったが、激しく動くことは厳禁。

早く治すには、安静が一番とされ、今まで努めて安静にしていた。

当然走ることもできず、朝練習には参加していたものの、最初の準備運動がてらの柔軟運動くらいしかできていなかった。

スクールアイドルを始めようとした矢先の怪我だったため三人そろって練習をしたことはなく、そのことも相まってことりの復帰はう

れしいものだった。

「よかったな。予定より早かったんだな」

「うん。お医者さんから、もう大丈夫って言ってもらえたから」

今日は、憐次たちが聞いていた予定より数日早かった。

病院に行つたときの診察では、軽い捻挫とはいえ完治にはもう少し長くなると言われていたが、予定より早く医者からお許しが出たのだ。

「つてことは。やつとことりちゃんも、本格的に練習に参加できるね」

「そうですね。遅れた分を取り戻すためにも、これまでよりもビシバシいきますよ」

「うん。お願いね、海未ちゃん」

ことりは、このときをどれほど待ったことか。

彼女が怪我をしてからまだ一週間くらいしか発っていないのだが、彼女は実際の時間の何倍も長く感じていた。

朝練習の時も放課後の練習の時も彼女は欠かさず参加していたが、ほとんど何もできず見ているだけだった。

3人でスクールアイドルを始めるからには、やはり3人そろつての練習が欠かせない。

今はまだ歌の歌詞ができただけで、ダンスはほとんど手がつけられ

ていない。3人であわせなければできないということとは正直あまりない。でも、3人であわせなければならないという以上に、3人がそろっているという意味は大きいものだった。

「じゃあ、ランニングに行きますか」

「そうですね」

「うん、早く行こう」

一通りの準備体操を終えると、4人は神社の鳥居より続く階段からランニングを開始した。

並び順は、穂乃果と海未が先頭で、それにことりと憐次が続くような形だ。

3人の時には3人横並びで走っていたが、4人になったということでの周りの迷惑も考え、2列に並ぶことにしていた。

憐次は、自分の前を走る2人の背中を見つめていた。

彼女たちの背中とは、いつもよりも少しだけ伸びているように見える。

もう表情など見なくてもわかった。その背中とは、ことりが帰ってきた喜びと練習への意気込みを物語っていた。

今度は、隣のことりへと視線を向けてみた。

数日とはいえ、穂乃果たちが練習をしている間、ことりは見学して

いただけだった。そのため、当然体力にもいくらかの差ができていておかしくなかった。

が、彼女は二人に追いつけ追い越せとばかりに付いて行っていた。

彼女も彼女で気合いに満ちあふれているようで、その表情は、いままで見学ばかりだった頃に比べてより輝いて見えた。

「ことり、ずいぶんと気合いは言ってるな」

「うん。いままで見てるだけだったから、早く練習したくてうずうずしてるんだもん」

「ああ、治って本当によかったよ。でも、あんま無理すんなよ。治ったって言っても、まだ日が経ってないんだからさ」

「うん、わかってるよ」

ことりの隣に並ぶ隣次には、ことりのいつにも増した気合いをひしひしと感じていた。

いつも端で見ていることしかできなかったことりを知っているだけに、隣次にもその気持ちは痛いほどわかった。

これでやっとスクールアイドルを始められると、より一層気合いが入っているのだろう。と、隣次は顔を綻ばせていた。

学校の運動部などがやっているように、掛け声をつけながら走るというのもよいものではあるが、穂乃果たちが走るのは学校のグラウンドではなく町の中だ。大きな声を出せば近所迷惑になってしまうため、走っている間は、多少話すことがあってもたいてい無言だ。

少々冷たい風が吹き抜ける音や呼吸音、4人の規則正しい足音が、静けさに相まって強調されて聞こえる。

4人は前だけ見て走り続けていた。

それでも、4人とも退屈はしていなかった。むしろ楽しんですらあった。

いままで3人で走っていた道を、今は4人で走っている。聞こえてくる足音も息づかいも、今は1人分多く聞こえる。ただそれだけの満たされる気がする。欠けていたパズルのピースがぴつたりはまったような、そんな感覚。

静かなおかげで、よりお互いに4人であることを意識することができた。

「やっぱり、3人のときより4人で走るほうが、なんかいいね」

「そうですね。一段と、気合が入る気がします」

「そう、だね……」

ランニングコースのちょうど半分くらいにさしかかった。

4人になったことで、不思議と何でもうまく行くような気がしていた。

そのせいか、ランニング中にも関わらずいつもに比べ、会話が弾んでいた。

「そういえばね、このあたりにおいしそうな洋菓子店があったんだ」

「そうなの?」

「はい。最近開店したのででしょうか。ランニングして初めて見つけたところなんです。何でも、本店はフランスで結構有名なパティシエが開いた店みたいで、今回見つけたところは、その2号店らしいんですよ」

体力をつけるために開始したランニングだったが、体力以外にも収穫があった。

いままで、自分の家付近を回る機会というものがなかった。特に高校生になってからは、外出するのは目的地を決めて行くため、目的地を決めずにただぶらつくことがめっきりなくなっていた。

今回見つけた洋菓子店は、ランニングコースのなかで神田明神とは反対方向にあったため家からも遠く、本来であるなら穂乃果たちが立ち寄るはずのない場所だった。

そんな場所に位置する店を見つけたことができたのは、ランニングで今まで行ったことのない道を選んだためだ。

「パティシエの名前って何だっけ? 確か、……ほうれん草、みたいな名前だった気がするけど」

「その間違え方は、ものすごく失礼ですよ」

「はは、ははは……あつ」

「おい」

話に気を取られていたのか。ことりが突然何かにつまずいた。

幸い倒れることはなく、ことりは自分で持ち直して穂乃果たちの後ろに付いた。

「ことりちゃん。大丈夫？」

「うん。ちよつとよそ見してた」

そうことりが答えたために、穂乃果たちは気付かなかった。

そんな彼女とは違い、隣にいた憐次は異変に気づき始めていた。少しずつことりは遅れ始めていたことに。

しかし単に躓いただけだろうと、憐次はこの段階ではそのことを口に出すことはしなかった。

昔からことりのことを知っているのだ。

彼女は、それほど無茶をする性格ではない。自分の状態が一番わかっているはずだ。

もし疲れて走れなくなっても、そのときは自分で抑えることができるだろう。

そう思っていたからだ。

が、しばらくして、

「はあ………、はあ………」

少し行くと、ことりは息も絶え絶えといった状態になってしまっていた。

隣次が気づいた時にはすでに無理をしている状態だったのだ。

「おい、ことり。大丈夫か？」

自分の体調は自分で管理できると思っていた隣次だったが、ことりの様子を見て声をかける。

徐々に荒れる呼吸音は、しばらく立つと無視できないほど不規則で危ういものになっていた。

その異変に最初に気付いた彼がその音の所在へ視線を向けると、だんだんと彼女が左右に揺れるのが確認できたのだ。

隣次も穂乃果も海未も、そしてことり自身も浮かれていたのだろうか。

徐々に大きくふらつきすことりを見て、隣次は彼女を止めた。

「2人とも、1回ペースをゆるめてくれ」

隣次の声で振り返った二人は、そこで初めてことりの状態に気づいた。

ことりの復帰に舞い上がっていたのは、穂乃果も海未も同じ。

前しか見ていなかった二人は、肝心のことりのことも見えていなかった。

「ことりちゃん、どうしたの。大丈夫？」

「う、ん。……大丈夫だよ」

ことりは、額の汗をぬぐいながら答えた。

口ではそう言うものの、すでに息は絶え絶えで辛そうに顔をゆがめていた。

見るからに大丈夫そうではない。

思えば、ことりが普段行っていた運動といえば、授業の体育くらいだ。

別に運動が趣味であった訳でもなく、特段得意というわけでもなかった。

彼女がやっていたのは、授業で合格点がもらえる程度。

今まで、体力を付けようとか早く走れるようにしようとか、特別な向上心をもって運動に取り組んだことはなかった。

そんな彼女に対し、アイドルを目指す、アイドルになると決めた穂乃果と海未は、毎日の練習のおかげで徐々に体力を上げて行っていた。元より武道の道に身を置いていた海未はともかく、穂乃果は、ことりとスタートラインは変わらなかった。

が、アイドルになり学校を廃校から救うという明確な目的が、不思議と彼女に活力を与え、ことりとの間に差を生んでいた。

それだけでも大きな差があったのだが、それに加えてことりは、特別に運動していなかったにも関わらず、さらに足の怪我によって激しい運動を禁止されていた。

日常生活では松葉杖が手放せず、歩くのがやっとの状態だった。

そんな彼女の体力は、いつもよりも明らかに落ちてしまっていたのだ。

それに引き換え穂乃果と海未は、ことりが怪我で動けない間も簡単にはいえ体を動かしていた。

体力が落ちていたことりには、毎日走っていた穂乃果と海未のスピードは速すぎたのだ。

「ことり、大丈夫そうには見えませんか？ 初日ですし、今日はもつとペースを落としましょう」

「う、ううん。みんな、ごめんね。大丈夫だから」

「謝ること無いよ。穂乃果こそ、気付かなくてごめんね。今日はこれでやめにしておこう。また倒れちゃったりしたら大変だよ」

「そうです。無理をして倒れてしまったら元も子もありません。今日のところは、ここまでにしておきましょう」

「でも……」

ことりは、大丈夫だと言うが、自分でも気付いている。

このまま、わがままを言っただけで帰っても迷惑をかけるだけだ
と。

「ごめんね。やっぱり、まだついて行くのは無理みたい。だから、穂乃
果ちゃんたちは先に行つて、神田明神で待つて」

だから、彼女は笑ってそういった。

「……ことり。一人でも大丈夫ですか？」

「うん。大丈夫だよ」

「でも、ことりちゃん」

「穂乃果」

ふらふらな状態のことり残していくことはできないと食い下が
うとする穂乃果を止めたのは、海未だった。

「無理を言つてはだめですよ。それに、私たちは廃校を阻止するた
めにも、一刻も早くライブをしなくてはならないんですよ」

「でも、……」

「代わりに、レンジに残っていただきましょう。頼めますか？」

「ああ、もちろんだ。もともと俺はおまえたちのサポートの為に
いるんだからな」

隣次は、お任せあれと胸を叩いた。

本当は付き添っていたいのだろう穂乃果は、一瞬考えるも首を縦に振った。

「……………そうだよね。じゃあ、先に行って待つてるね」

「うん。すぐ追いつけるようにがんばるね」

「レン君、頼んだよ」

「おう」

隣次の返事を聞き、穂乃果と海未は、ことりのことを心配そうに見つめながらも元のコースへと戻っていった。

隣次は、2人の後姿を見送るところことりのそばに寄り添う。

ことりは、2人の姿が見えなくなるとひざに手をついた。

穂乃果を連れて行ってくれた海未に感謝する。

ことりは、自分のせいで穂乃果たちの足を引っ張りたくなかった。

あのまま2人を引き止めてしまっていたら、2人に迷惑をかけてしまふ。

そんなことりの気持ちを汲んだ海未は、付き添いたい気持ちを抑えて穂乃果を連れていったのだ。

「ことり、やっぱりだめだな」

「いや、仕方がないだろ。最近ぜんぜん運動できなかつたんだから」

「ううん、だめだよ。ことり、迷惑かけてばかりだもん」

彼女は、目元をぬぐいながらつぶやいた。

彼女がスクールアイドルになろうと決心したのは、穂乃果を手伝いたいという気持ちもあった。しかし、そんな気持ちのほかに、スクールアイドルになれば変えられるのではないかという期待があった。

彼女には、これといって誇れるものがなかった。

穂乃果のように行動力があるわけでも、海未のように何か特技があるわけでもない。

だから、何か新しいことを始めれば自分の中で何かが変わる。スクールアイドルを始めれば何か変わるかも知れない。そんなふうに思っていた。

しかし現実には、何も変わらなかった。

それどころか、これから始めるという時に限って怪我をし、せっかくその怪我が治ったというのにまた足を引っ張っている。

ことりは、そんな自分が情けなくなる。

「迷惑って。そんなの、誰も気にしてないぞ」

憐次は、うつむく彼女にそう声をかける。

それは、本心だということりはわかっていた。

怪我のことだって、今日付いていけなかったことだって仕方のないこと。

ことりには、どうしようもないことだったとわかっていたからだ。

でも、

「……………、そうだよね」

ことりはそれでよしとはできなかった。

隣次が海未が、穂乃果が心配ないというたびに、ことりの心には申し訳なさが溜まっていった。

「とりあえず、早く追いつかなくちや」

「おい、もう少し休んだ方が……………」

「ううん。もう、大丈夫だから」

練習が始まって早々迷惑をかけてしまったのだ。これ以上心配をかけさせるわけにはいかない。

「ちよっと待てよ。ことり」

息がある程度整ったところで、再びことりは走り出した。

ことりは、いまだ疲労でおぼつかない足取りで憐次を置いて走りだしてしまった。

憐次は、いつになく無理をすることりに驚きながら、彼女を追いかけるために立ち上がった。

「待って。っ——」

立ち上がって突如、憐次は後ろを振り返った。

彼が感じたのは気配。何か見られているような気配だ。

その気配を探してあたりを見まわす。

が、振り返った時にはすでに気配は消えており、怪しい者は見つからない。

憐次は、首を傾げながらも、自分を置いて走って行ってしまったことりの後を追った。

憐次が完全に去ったところで、彼女たちが居た場所にガラガラと鳴るスーツケースを引く音が止まった。

全身黒ずくめの男は、帽子を目元深くまでかぶっているため、その表情は見えない。

「さて、今度はあの嬢ちゃんか。あまり商売にならないことはしたくないんだがなあ。まあ、仕方がないか」

帽子を目元が隠れるくらいまで深くかぶりつぶやく。そして、唯一

表情のうかがえる口をにやりとゆがませた。

右手で『S』が刻まれたロックシードをもてあそび、男はキャリアケースを引きずりながらその場を立ち去った。

第十二話 『追いていかないで』

体力の限界から穂乃果と海未を先に行かせた後、ことりはなんとか神田明神にたどり着いた。が、これ以上は無理だという海未の判断で、いつもより軽めのメニューに変更された。

いきなり二人と同じメニューをこなすのは難しいことはわかっていた。

が、最初のランニングの時点で足を引つ張ってしまったことがことりには堪えていた。

現在は、授業が終了し放課後なのだが、ことりは未だ朝の失敗を思い出していた。

穂乃果と海未は、そんなことりを励ますべく彼女の席を囲んでいた。

「大丈夫ですよ、ことり。徐々になれていけばいいんですから」

「そうだよ。ことりちゃん器用だから、すぐにできるようになるよ」

「う、うん。……そうだね。」

ことりを気遣って声をかけてくれる二人に対し、ことりは空返事しか返すことができなかった。

自分には、二人に比べてこれと言って誇れることがないと、ことりは思っていた。

二人は、そんな自分でも受け入れてくれる。友達だと言ってくれる。

それでも、そんな言葉を聞くたびにうれしいという気持ちと同時にふがない気持ちがおみ上げてくる。彼女たちの信頼に、友情に何も返すことのできない自分が情けなくなるのだ。

クラスメイトたちは、すでに各々部活や帰宅の為に動き出していた。当然、穂乃果と海未もスクールアイドルの練習のために準備を始めていた。

が、ことりは、二人を置いて教室を出ようとしていた。

「ことりちゃん、早いよう。一緒にいこう」

「そうですよ。今日は3人での初めての放課後練習なのですから」

「え、ええと……」

練習に行こうとしていたなら、二つ返事で一緒に行こうとするはずだったが、ことりは言いづらそうに口ごもった。

「ごめんね。今日は、帰ろうと思うの」

「え、なんで？」

穂乃果は、やつと3人で放課後練習ができると意気込んでいた。そのため彼女は、ことりの言葉に表情を曇らせた。

ことりは、穂乃果のがっかりしているのを見て心を痛め、申し訳なさそうにうつむいた。

「やつぱり、今朝の練習がきつくて調子が悪いんだ。だから今日は、休もうと思うの。ごめんね」

「そんな。謝ることはありません。それより本当に大丈夫なのですか？」

「う、うん。明日はちゃんと出れるようにするから」

「そうですか。では、お大事にしてくださいね」

海未は、はじめから飛ばして練習しても体に悪いだろうという考えからことりの発言を承諾した。

穂乃果も無理を言っただけはいけなさとわかっていた。それでも、残念という気持ちは消えなかった。

そんな彼女の気持ちがわかってしまったことりは、一泊置いて口を開いた。

「……………そう言えば穂乃果ちゃん。曲の件はどうなったの？」

「え……………ああ、そうだった。もう一回きちんと話を聞いてもらわなくちゃ」

「穂乃果。まだ決まっていなかったのですか？」

「う、うん。でも、最近いろいろ忙しかったんだもん」

「そんなの理由になりません。あなたがあてがあるから任せるように言ったのですよ？」

「そうだけど……………」

突然自分に矛先が向いてしまった穂乃果は、海未の追求に手一杯になっっていた。

ことりは、彼女には悪いとは思いますが、間髪入れずに告げた。「じゃあ、帰るね。また明日から練習お願いします」

「え。ああ、はい。ではゆっくり休んでください」

「ちよつと待つてよー」

「穂乃果。まだ話は終わってませんよ」

「もう。海未ちゃんの鬼！」

ことりを追おうとした穂乃果は、海未に首根っこを捕まれて止められていた。

ことりは、二人の話を背中に聞きながら、教室を後にした。

その場から立ち去りながら、ことりは、我ながらうまく話をすり替えたと思った。

要するに逃げたのだ。

練習の辛さにはない。穂乃果たちに迷惑をかけてしまうことによつて感じる罪悪感と情けなさからだ。

3人で始めようと決めたスクールアイドルだというのに、参加できず穂乃果や海未に迷惑をかけてしまっている。また、二人だけどんどん上達していくのを間近で見させられ、自分だけ取り残されてしまうのではと思い、人知れず恐れていたのだ。

だからことりは朝練の際、久しぶりに体を動かせることに心を躍らせると同時に、初めての穂乃果、海未との練習ということに緊張していた。

そして、結果は恐れていた通りの結果となった。

結局、穂乃果たちの足を引っ張ってしまったのだ。

自分が弱いばかりに。

自分の弱さを恥じ、しかしどうすることもできないことりは、とぼとぼとうつむきがちに歩いていった。

すると、どこからかガラガラと車輪のついた何かを引いているような音が聞こえてきた。その音は、徐々にことりに近づいており、ことが振り返るとそこには、黒い帽子に黒いジャケット、黒いパンツに黒いつま先の尖がった革靴。全身黒づくめの男が立っていた。

「よう、嬢ちゃん。なにかお困りのようだな？」

「え？　だ、誰ですか？」

その男は、やはり黒いスーツケースのようなものを引きながら、ことりのもとへ徐々に近づいていった。

「おいおい、そんなに警戒しないでくれよ。別に、怪しいものじゃあない」

男は、キャリーケースを引いていないほうの手を上げて無害をアピールする。

彼女の刺激しないように、笑みを浮かべながら一歩ずつ彼女に近づいていく。

しかしことりは、男が一步近づいたたびに一步後ずきだった。

見知らぬ男に突然話しかけられたのだ。警戒するなという方が無理な話だ。

一定の距離を保とうとすることりの態度を見て、男はため息をつく。

「まあいいか。それより力がほしいんじゃないか？」

「……力？」

男と一定の距離をとっていたことりは、男の『力』という言葉に足を止めた。

「それは、どういう意味ですか？」

「俺は、こういうもんでね。俺が、力になろうかと思ってる」

ことりが反応を見せると、男は少し口角を上げた。

興味を引けたとわかると、ポケットからひとつの錠前を取り出し、ことりに見せた。

いまや、ありふれたものであるロックシードだが、それを名刺代わりに見せてくる者といったら限られる。ことりは、すぐに男の正体に気がついた。

「錠前、ディーラー……」

ことりは、自分の正体に気がついたのを見て、男はにやりと口角を上げた。

「ああ、そんなとこだ。譲ちゃん、スクールアイドルやってるんだろ？」

「どうしてそれを……」

「まあ、それは企業秘密ってことだ。それより、スクールアイドルをやるってんなら、これが必要だろ？　今じゃ、ステージを使う権利を決めるのもインベスゲームだ。だから、讓ちゃんやゲームで勝てるように、ロックシードを見繕ってやろうか？」

力に反応したことりだったが、続くインベスゲームという言葉聞いて顔を背けた。

「別に、いいません。私たちは、インベスゲームなんてしませんので」それは、穂乃果と海未と決めたことだ。

今、スクールアイドルの中で野外ステージの使用権争いなどがインベスゲームによって決められていることは、ことりも当然知っている。

スクールアイドルだけを取り扱ったネット番組、スクールアイドルホットラインでも多くのインベスゲームが取り上げられているのを見てきたし、実際に生で見たことだってある。

インベスゲームができなければ、ステージを奪われる。ステージが奪われれば、お客さん呼んで自分たちの歌を披露することもできない。

今や、スクールアイドルとして活動していくなら避けては通れない事柄だ。

しかし穂乃果は、インベスを戦わせることを拒んだ。自分たちの友達である彼らを戦わせることに異論を唱えたのだ。

そして、そんな彼女と決めたのだ。スクールアイドルになったのしでも、インベスゲームはしないと。

確かに、ことりには力は魅力的だった。

しかし、インベスゲームはしないと決めている彼女にとって、インベスゲームのための力など必要ない。

だからこれ以上話を聞いていても仕方がない。彼女は、その場を立ち去ろうとした。

「まあ、待てよ」

「何ですか。私には、必要ないって言ったじゃないですか」

「インベスゲームなんてやらないって決めてんのかもかもしれないが、そううまくいくものかねえ」

「……どういうことですか?」

思わず男の思わせぶりの言葉に、ことりは聞き返してしまった。

その反応に、再び男はにやりと笑う。

「俺も、こういう仕事してるといろんなスクールアイドルと会ってるわけだ。その中には、譲ちゃんみたいに自分はインベスゲームなんてしないってやつもいた。だが、現実はそう甘くない」

男は、さらにことりとの距離をつめる。気がつけば、男はこつりのすぐ目の前にまで迫っていた。

「相手から、ゲームを吹っかけられたらどうする? もう、今の世の中インベスゲームで決めるってルールが出来上がってまってる。そのときロックシードを持ってなかったら? ゲームを断ったら? それはもう不戦敗。戦わずしてすべてを奪われちまう。インベスゲームをしないってのはそういうことだ。譲ちゃんは、それを笑って受け入れられんのか?」

「そ、それは……」

「それがいやなら、戦って守らなきゃなあ。きつと譲ちゃんは、誰かゲームをしたくないって言ってるやつに気使ってるんだろ? そいつは、何もわかつちやいない。そういうやつは、誰かきちんと理解してるやつが守ってやらなきゃな」

「でも……」

ことりは、うつむいてしまう。

確かに、男の言うことも正しいと思ってしまっていた。

穂乃果や海未は、インベスゲームなんてしないといていたが、挑まれたときにどうするかは決めていなかった。

もし実際に、挑まれてしまったらどうするか。そう考えて、穂乃果はやっぱインベスゲームはしないだろうと思った。

穂乃果はそういう性格だ。自分が間違っていると思ったことは断固としてやらない。

でも、インベスゲームをしないことたとえばステージを、たとえ

ば機材を奪われてしまおうとしたら。スクールアイドルとしての活動を行えなくなってしまうっては元も子もない。

結局彼女たちが悲しむことになる。それは許せなかった。

「というわけで、とりあえずお試ししてことで使ってみてくれ」

「え、なに!?!」

ことりが考え込んでいると、男はそのすきに彼女の手を取り、有無を言わずロックシードを握らせた。

「そんな。急にこんな……」

「代金はいい。とりあえず使ってみて、買うかどうか決めてくれ」

男は、ロックシードを渡すと、スーツケースを引きながら彼女に背を向けた。

「まあ、それはただの力だ。譲ちゃんの好きに使ってくれ。使い方によつちや誰かを守るだけじゃなく、今は届かない相手に追いつくこともできるかもな」

「え? それはいつたい……」

「まあ、ちよつと考えてみてくれ。お試し期間は一週間だ。」

男は、自分の言いたいことだけ言い残すと、一切振り返らず去って行ってしまった。

後に残されたことりは、ただ呆然とその後姿を見ていることしかできなかつた。

「こんなの、どうしよう……」

男に、無理やり握らされたロックシードを見る。

本体には、茶色い楕円に薄緑の帽子を被せたような実が刻まれている。

それは、クラスBのドングリロックシード。一般に出回っているクラスD、Cよりも性能の良い、強力なロックシードだ。

インベスゲームはやらないと決めた。でも、相手からしたらそんなことは知ったことではない。

インベスゲームを申し込まれれば、受けるかすべてを明け渡して退くかの二択だ。

その考えたとき、戦えない穂乃果は海未に代わって戦う誰かが必要

だと、ロックシード（力）がことりを誘惑する。

また、それと同時に男のもうひとつの言葉も、同時に彼女の心を揺さぶる。

「届かない相手に追いつける、力……」

そうつぶやいたとき、ことりはふと、穂乃果と海未を思い浮かべていた。

彼女が思い浮かべたのは、後姿。だんだんと自分から離れていくように小さくなるそんな姿だった。

夕暮れ時。

ことりは、公園のベンチでため息をついていた。

穂乃果と海未に帰ると言っておきながら、ことりは未だ帰らずにいた。

手には、ロックシード。どんぐりのロックシードが、夕日に照らされて輝いていた。

彼女は、結局受け取ってしまっていたのだ。

彼女の中では、ロックシードはインベスゲームで使われるものという印象が強い。

インベスを操ることができれば、子供であっても大人を圧倒することができる。

そんな危険なものを戦わせるインベスゲームに対し、彼女は穂乃果や海未と同じように嫌悪感を抱いていた。

が、誰でも簡単に手に入れられる力という点に、彼女は惹かれてしまった。

穂乃果がロックシードを使って変身し、インベスと戦った。最近知ったのだが、海未もまた変身したようだ。

それを知ったことりは、思ってしまったのだ。
力があれば、また二人に追いつけるのではないかと。

「ああ、もうどうしよう」

インベスを戦わせないという穂乃果と、スクールアイドルになるか
らには戦うしかないと示す現実に板ばさみにされる。

穂乃果を裏切るようなことはしたくない。でも、錠前ディーラーが

言っていたように、戦わなければならないときがいつかやってくる。そのときに一体どうすればいいか。

ことりは、答えのない問いに頭を抱えていた。

『あなたは、運命を選ぼうとしています』

「え？」

いつの間にか、周りで遊んでいたはずの子供たちの声が消えていた。

その声の代わりに、どこからともなく声が聞こえた。

その声、どこかで聞いたことのある声に意識を傾けたとき。それを感じかけに、ことりは異変に気付いた。

彼女の周りを取り巻く世界が動きを止め、自分一人が世界から隔絶されたような錯覚に陥る。

風がやみ、木々が揺らめきを止める。

すべてが静止した世界の中で、正体不明の声だけがこつりの鼓膜をふるわせる。

ことりは、唯一の音の発信源を探り、あたりを見渡した。

その正体は、すぐに見つけることができた。

『あなたは、……わたし？』

見つけた人物の姿を見て、ことりは尻餅を付いた。

彼女の目の前に居たのは、自分自身。

まるで鏡を見ているかのように、自分と瓜二つの少女だった。

彼女は、瞬間移動をしているかのように姿を飛ばし飛ばし現しながら、こつりとの距離を詰めていく。

そして、座り込むこつりを見下ろすような位置で、口を開いた。

『あなたが踏み入れようとしているのは、逃れられない戦いの定め。それ以上進もうというのなら、後戻りはできない』

こつりが、今戦っているであろう穂乃果たちの元へ行こうと決めた瞬間を狙ってきたかのようなタイミングでのこの発言だ。

こつりにはそれは警告のように聞こえた。

そしてその言葉は、自分には戦いは無理だと、自分の穂乃果たちの隣にいることはできないという意味に聞こえた。

「戦いの定め……」

逃れられないと聞き、ことりの頭に一抹の不安がよぎる。

戦いの定め。

それがどのようなものか想像がつかなかったが、誰かを、何かを傷つけることになることはことりにも理解できた。

ことりにだつて喧嘩した経験くらいはある。

しかし、今まで喧嘩した時ですら人を傷つけるようなことはしなかった。暴力を振るうなんてことはもつてのほかだ。

喧嘩したときですら手を上げることには躊躇するような自分に戦うことが果たしてできるのだろうか。

そんな疑問が浮かぶ。

定めという得体の知れないものへの恐怖から、ことりは引き返そうとする。

「でも……」

が、そこで思い出す。

穂乃果や海未は、すでにインベスと戦っている。市場には出回っていない未知の道具を使いインベスと戦っているのだ。

そのことから、すでに穂乃果たちは戦いの定めの中にいることは明白だった。

自分のいる世界とは外れた場所にすでに行ってしまったている。

一緒にいるためには、追いつかなければならない。

そして、追いつくために必要になるものは力。彼女たちと同等の力だ。

それを理解したとき、すぐにある思いがその不安を上回った。

「その道を行けば。……戦う力があれば、穂乃果ちゃんと海未ちゃんと同じところにいられるんでしょ？」

「……」

ことりが問うと、少女は悲しそうに目を伏せる。が、それはことりは肯定であると解釈した。

「それなら、ことりも戦う。それで穂乃果ちゃんと海未ちゃんといっしょにいられるなら。戦うことにも、迷ったりしない」

「そう。決めてしまったんだね。……なら」

ことりそつくりの少女は、屈んでことりの鞆に手をかざした。すると、鞆が発光し始めた。

いや、正確には、かばんの中にあるものが輝きだしたのだ。

まぶしさにことりは思わず顔を背けた。

その輝きは数秒で消え、ことりは瞑っていた目を開く。

すると、静止していた世界は、再び動き始めていた。そして、少女は姿を消していた。

少しの間呆然としていたが、すぐにかばんへ手を伸ばした

「先程までの光の正体を突き止めるため、ことりはかばんの中に手を入れる。」

何となく予感はしていた。

穂乃果も海未も、同じような警告を受けたのではないかと。

その警告を振り切り、力を手に入れたのではないかと。

きつとさつき現れた少女が行った何かは、穂乃果や海未が手にした力を与えてくれたのではないかと。

だからことりは、迷わずそれを取り出した。

「穂乃果ちゃんと海未ちゃんが持ってたのと同じだ……」

ことりは、取り出したそれを見てつぶやく。

それは、かつてユグドラだったもの。

ほとんど形は変わらない。唯一刀のような装飾が追加されたそれを、ことりは抱きしめた。

「やった。これで、穂乃果ちゃんたちと一緒にいられる」

彼女は、まだ戦いの意味を知らない。

これから何が起こるのか考えておらず、逃げられない本当の意味など知る由もない。

今のことりは、その力さえあれば親友2人と一緒にいられると、ただそれだけしか考えていなかった。

第十三話 『必要ないよね』

穂乃果と海未は、練習を終えて帰路に着いていた。

朝練習にことりが加わったからだろうか。そして、帰り道にこつりの姿がないからだろうか。

二人は、ことりが練習に参加できなかったときよりも物足りなさを感じていた。

「ことりちゃん。大丈夫かな？」

穂乃果は、ふとつぶやいた。

「ことりちゃん。今朝のこともあるし、その後もすごく元気なかったし」

それは、穂乃果だけではなく海未も思っていたことだった。

怪我が原因で練習ができない期間が、穂乃果たちとこつりの間に差を生んでしまった。

その差のせいでこつりを傷つけてしまったなら。

ことりが今隣にいない原因も自分のせいではないかと考えてしまっていたのだ。

穂乃果は、先に二人で練習することにするべきではなかったのかも知れないと肩を落とした。

「そうですね……」

穂乃果の不安を聞き、海未は目を伏せた。

自分達が先に練習を進めていたせいでこのような差が生まれてしまったことは、海未も重々承知だった。

ことりが先に練習を進めるよう言ったとはいえ、それを承知したのは紛れもなく自分達だ。だから、今回の事態を生んだ一端は、自分達にもあると考えていた。

それでも、廃校寸前まで追い込まれている音の木坂を救うためには、いち早く行動を起こす必要があった。それは、こつりも承知のはず。そのために、先に練習を始めることを進めたはずなのだから。

それならば、遅れた分を取り戻すために人一倍努力が必要になることもこつりなら理解していたはずだ。

だから、海未は顔を上げて穂乃果に答える。

「大丈夫ですよ」

「海未ちゃん、でも……」

「ことりならすぐにもとの調子を取り戻しますよ。それに、練習メニユーも少しことりにあわせて変更します。大丈夫ですよ、きつと。」

それに何より、海未はことりを信じている。

そしてそれは、穂乃果も同じだ。

だから、

「そうだよ。明日になればきつと元気になるよね」

穂乃果も、海未に笑って返した。

ことりなら、きつと大丈夫であると信じているから。

「ことりは、必ず元気になります。ですから私たちは、ことりが調子を取り戻したらすぐ本格的な練習ができるように準備しておきましょう」

「そうだね」

穂乃果は、海未に促され意気込みを新たにする。

ことりが早く調子を取り戻せるように。

そして、調子を取り戻したなら初めてのライブに向けてすぐ練習できるよう、できることはしておこうと。

「それで、曲の件はどうなったのですか？」

穂乃果たちは、歩きながらことりが本格的に練習に参加する前にできることを話し合っていた。

一番最初に上がるのは、少し前から決めなければと話していた曲についてだった。

穂乃果は、作曲を頼みたい人がいるということだけでひとまず一任されていたのだが、

「それは……。明日にでも」

「まだ、決まっていなかったのですか」

「だって、今日は音楽室にいなかったんだもん」

「穂乃果があてがあるって言ったんですからね」

「わかってるよ。じゃあ、今度海未ちゃん達も一緒に放課後の前に行

「ようよ」

結局まだ決まっていなかった。

今日穂乃果は、音楽室で出会った少女に会いに音楽室へ向かったが、あいにく彼女はいなかった。

探そうにも、彼女と会ったのは音楽室で出会った一回のみだったため、わかっているのは一年生ということだけで、名前はおろかクラスすらわかっていなかった。

そのため、海未、ことりと一緒にクラス一つ一つを回ろうと考えていた。

穂乃果は、まず海未の協力を取り付けようと思いつきながら曲がり角を曲がろうとした。

そんな彼女の視界の外から、近づいてくるものがあった。

「なっ、退け」

「――痛っ」

穂乃果は、前から走ってきた男の存在に気づいていなかった。

男の方は男の方で焦っていたようだ。

穂乃果は、男とぶつかり突き飛ばされてしまった。

「穂乃果、大丈夫ですか。……あなた、どこを見ているんですか」

突然突き飛ばされてしりもちをついた穂乃果は、コンクリートの地面に尻をぶつけて涙目になっていた。そんな彼女に代わり、海未が男に対して文句をぶつけた。

しかしぶつかってきた男は、明らかに悪いにもかかわらず、むしろ彼女たちの方がおかしいと言わんばかりの目つきで睨んだ。

「お前たちこそ。何のんきに歩いてるんだよ」

「それは、いったいどういう意味ですか？」

「お前たちもさっさと逃げろ。あつちでインベスが暴れてるんだ」

「なっ、インベスですか!?!」

「そうだよ。まったくユグドラシルはなにやってるんだ」

「あつ。ちよつと待って――」

海未は男に詳しいことを聞こうとしたが、男は誰かにかまっている

余裕など持ち合わせてはいなかった。

男は悪態をつきながら、インベスから逃げるために走り去ってしまった。

「そんな、またインベスが」

インベスが現れたという知らせに、海未は息を呑んだ。

海未も、穂乃果に続いて特殊なユグドラを手にいれ、一度戦ったことがある。

そのときは、暴れる初級インベスを制し、空を飛ぶ上級インベスですらヘルヘイムへ帰した。

「行こう。海未ちゃん」

「穂乃果。あなたはまた……」

「今回はほんとに違うよ」

海未は、穂乃果がまた自分を傷つけようとしているのではないかと思ひ、たしなめようとした。

が、穂乃果は、彼女がそれを口にする前にきっぱりと否定した。

「穂乃果は、戦いに行くんじゃない。インベスが暴れてるなら、襲われている人もいるかもしれない。穂乃果は、そんな人たちを助きたい。そして、インベスたちを元の場所へ帰してあげたい。今穂乃果がしたのは、アイドルと同じ。誰かを笑顔にするために、この力を使った」

皆、インベスから身を守るため、ユグドラを携帯している。それを身につけていればインベスの攻撃から身を守ることはできるが、対抗することはできない。

つまり、ユグドラシルが到着していない今、その場にいた人はインベスによって危険にさらされているということだ。

今の海未たちには力がある。それこそ、自分だけでなく他人を守るのにも足りる力が。

今、海未が躊躇するのは、今までのことがあったから。穂乃果が暴走して自分を顧みない無謀な行動をとったことがあったからだ。

いままでの戦いは、はからずも巻き込まれて戦うほかなかったため仕方なく戦っていた。

しかし、今回は違う。

自ら危険の中に飛び込もうとしているのだ。

戦える力を持つ者が助けに行くべきだと言うことはわかっている。でも、ただの高校生である穂乃果が行かなければならないことはないことはいだらう。

そんな彼女とともに行く方がいいのか、引き留めた方がいいのか。海未は、どちらかに決めることができず、口ごもった。

「ですが、穂乃果……」

「大丈夫。無茶はしないよ」

「戦いに行くこと事態無茶なんです」

「そうかも知れど……、でも」

穂乃果は、一度言葉を切り、そして笑った。

「大丈夫だよ」

「穂乃果？」

「だって、もしまた穂乃果が無理しそうになったら、海未ちゃんがとめてくれる。そうでしょ？」

その言葉に、海未は呆氣にとられた。

そして、ずいぶん手の掛かる子と友達になったものだ、ため息をついた。

が、彼女は不思議と悪い気はしていなかった。思わず笑みがこぼれた。

「まったく、あなたという人は……。わかりました。穂乃果、一緒に行きましょう」

「うん。早くヘルヘイムへ返してあげよう」

二人は結局、インベスが暴れているという事実を知った今、聞かなかったふりなどできなかつた。

人間にとつて、逃げる以外の選択肢の許されないその状況で、二人は周りとは異なった行動に出る。

それは力を手に入れた者の定めか、力を手に入れたという傲りか。

穂乃果と海未は、互いにアイコンタクトすると逃げてきた男とは反対方向へと走り出した。

逃げる人波に逆らっていた穂乃果と海未は、現場へとたどり着いた。

そこは、マンションが立ち並ぶ中に設置されたステージがあった。そこでは、たった今までライブが行われていたようで、マイクやスピーカーなどの機材が散乱していた。

本来ステージの立っているべきアイドルの姿はなく、代わりにいたのは2匹の初級インベスだった。出現した場所が開けていたこともあり、見たところ負傷者はおらず、皆無事に非難したようだった。

二人は、ひとまずその事実にも胸を撫で下ろした。

「穂乃果。今回は2匹だけのようですね。ですが、気を抜いてはいけません——」

「——もう、わかってるって。ほら、いくよ」

「だから、勝手に行かないでください。もう……」

二人は、無人の広場で植木を散らかしている2匹のインベスの前に立った。

それぞれユグドラを取り出した。取り出したユグドラは、スマホくらいの大きさの板に刀のマークが入ったものだ。それを穂乃果は腰に、海未は左腕にあてがう。すると、穂乃果のものはベルトに、海未のものは腕の巻きつき、刀のような装飾品が出現した。

「インベスさん。いま、元の世界に帰してあげるからね」

「ですから、もう暴れたりしないでください」

二人は、インベスへ語りかけながらロックシードを取り出す。

「いくよ、海未ちゃん」

「はい、穂乃果」

『オレンジ！』

『ぶどう！』

二人は同時にロックシードを開錠した。それぞれの手にするロックシードが、己の存在を宣言するとともに、二人の頭上に開いたクラックから果実をかたどった光の玉が現れた。

『ロックオン！』

穂乃果はバックルの、海未は腕のドライブベイへとロックシードを

収め、掛け金を下ろし固定する。

それと同時にヒップホップを思わせる音と中華風の音が不思議なハーモニーを奏で出す。

二人は、刀の装飾に手を掛け、固定部を軸にロックシードを切り開くように回転させた。

『ソイヤ！ オレンジドレス！ 花道、オンステージ!!』

『ハイイ！ ぶどうドレス！ 龍、砲、ハツハツハアア!!』

オレンジの果実が穂乃果を、紫の果実が海未を包み込む。その光ベールが払われると、二人の少女が先程とは異なった装いで姿を現した。

穂乃果は、オレンジ色を基調としたワンピースのようなドレス。海未は、紫色の生地に竜の装飾が織られたチャイナドレスだ。

「さあ、暴れるのはここでおしまい。ここからは、私たちのステージだよ」

「……穂乃果。それはなんですか？」

「いやー。私たちはスクールアイドルなんだからさ。なんかそれらしいこと言っておこっかなあって」

「特に意味はないのですね。なら、ここからは集中してくださいね」

「海未ちゃんは硬いなあ。でも、ここからはしっかり集中するよ」

穂乃果と海未は、それぞれの衣装を纏うとインベスたちの元へと駆け出した。

インベスたちは、人を襲ってはいなかったが花壇や建物の柱を腕で打ち壊していた。

体は160センチと人間の平均身長位だが、秘めた破壊力は絶大。一番弱いクラスDの初級インベスですら、その全力は、コンクリートをえぐるほどだ。

そんな攻撃を生身で受ければひとたまりもないが、今の彼女たちには、ロックシードとドライバーによって形成されたドレスがある。

インベスは、無作為に周りのものを打ち壊そうとしている。そんなインベスの腕を、穂乃果はつかんで止めた。

「これ以上、壊したらだめだよ」

インベスは、腕をつかむ穂乃果を振りほどこうと乱暴に腕を振るう。

腕をしがみつくようにつかんでいた穂乃果は、インベスが腕を振るのに合わせ右へ左へ翻弄されていた。

が、ドレスによつて力が強化されているため、ちよつとやそつと振り回されたくらいでは振り払われたりはしない。

それどころか、

「もう、いい加減にしなさい！」

穂乃果は、その反動を利用して、逆にインベスを引き倒した。

一方海未は、ユグドラの性能に驚いていた。

彼女は一応弓道を嗜んでいるため、穂乃果と比べれば体力には自身があつた。が、当然誰かと戦うような機会はなかつたし、ましてやコンクリを一撃で粉碎するような怪物と戦つたことなど前回の1回以外ない。

それに、1度戦つたとは言つてもほとんどが専用武器であるぶどう龍砲を使つた銃撃戦だつたため、接近戦に関してはほぼ経験したことがなかつた。

そのため、インベスを前にした海未は一瞬戸惑いを見せた。

前回はその場の勢いに任せた力任せで、どうにか事態を收拾することができた。が、今回はそううまく行くのかと。

しかし、そんな心配は不要だつた。

彼女が戸惑いを見せた隙に、インベスは海未へ腕を振り下ろした。

海未が受け止めるには強力すぎるそれを、彼女はいなし避けるとインベスの懐に入った。

「はっ!!」

そして、至近距離からインベスの腹に腕を突き当てた。

それは、はっけいという表面ではなく中にまで衝撃を伝える技だ。

当然やり方も知らない海未だが、ユグドラから送られてくる情報とドレスのアシストによつて、まるで昔から極めていたかのような洗練された動きで技を繰り出したのだ。

「海未ちゃん、カッコいい！ 拳法の達人みたい」

「ええ。自分でも驚くほどです。これが、この衣装の力なのです」
「ね。大丈夫だったでしょ？」

「また、そうやって油断して……」

そういった穂乃果に呆れていたが、海未自身も感じていた。

身に纏った衣装の力を。

「そういえば、もうその衣装も大丈夫になったんだ」

「え？」

「前よりも堂々してるし。やっぱり、気に入って——」

「——そんなわけありません」

「え、そうなの？」

「そうですよ。できればすぐにでも別のものに変えたいくらいですよ」

そうはいうものの、初変身の際には死んでしまいそうなほど恥ずかしがっていた海未だが、今は赤面してはいても堂々と立っていた。

初めての変身を終えてからの彼女はひどいものだった。

きわどいチャイナドレス姿をネット上に流出されてしまい、まるで世界が滅んだかのような絶望的な表情をしていたのだ。が、町中を歩いていても登校しても彼女が予想していたような事態にはならなかった。

誰も彼女を見て笑わない。それどころか、友達はふつうに接し、面識のない人はいつも通り興味なさげに通り過ぎていくのだ。

まだ人々が映像を見ていないだけかと思っただが、後で穂乃果が変身したときのことを思い出し、安堵した。

穂乃果が変身したとき、海未とことりは一緒にいたにもかかわらずドレスを身に纏った穂乃果を彼女だと認識できていなかった。

その経験から、ドレスが認識を阻害していたのだという考えに至ったのだ。

その恰好事態は変わらず恥ずかしいのだが、彼女だとわかるのとはからないのでは、恥ずかしさの度合いが大きく違った。

皆が自分だと気づかないとわかった海未は、多少の羞恥は残るものの、インベスを追い返すための割り切った変身することが出来るよう

になったわけだ。

二人は、早くも不思議な力に順応し始めていた

「穂乃果ちゃんと海末ちゃんは……」

そのころことりは、走っていた。

穂乃果たちと同じように、逃げる人からインベスが出現したことを聞き、現場に向かっていたのだ。

普段なら、インベスが出現したとなれば見に行こうなどとはしないことりだが、今はインベスの出現を聞き喜んですらいた。

力を手に入れた矢先に現れたのだ。

インベスが現れたとなれば、きつと穂乃果たちもいるはず。彼女たちの前で力を示せと言われているような思え、ことりは気がつけば人の波に逆らって走り出していた。

ことりが現場に近づくにつれ、コンクリートが砕ける音や金属がぶつかる音が強くなっていった。

彼女は、その音が大きくなるにつれ、現場に近づいていることを感じ、胸を高鳴らせた。

彼女は、マンシヨン群に入り、大きく開けた場所に出た。

「いた。……もう、戦ってる」

ことりが現場にたどり着くと、穂乃果たちはすでに戦闘を開始していた。

穂乃果たちが戦っていたのは、初級インベス二匹。一般人にとっては脅威だが、今の彼女たちには変身しているため、インベスたちを圧倒していた。

インベスたちは、すでに動きが鈍くなっており、後一押しで倒せるところまで追い詰めているようだった。

早くしなければ自分の力を示せない。

ことりは、急いでかばんの中に入っているものを取り出した。

それは、クラスBのロックシードのドングリロックシードだ。

錠前ディーラーに半ば無理やり持たされてしまった借り物のロックシード。クラスAには劣るものの、それでも相当強力なロックシード

ドだ。

ロックシードを使えば、インベスと呼んで自在に操ることができる。

それは、ロックシードの所有者であることりの力。

二人は、ふつうの人間とは違う力を手にしてしまった。一般人では到底かなわないインベスに立ち向かえるほどの力を手にしてしまった。

今の自分には、到底彼女たちの後を追うこともできない。

今の彼女たちに追いつくには、自分の力を手に入れなければならない。

ことりは、ロックシードを見つめる。それは、ことりがもつ唯一彼女たちを追いかけるに足りる力だった。

ことりは、ユグドラを取り出した。海未と同じ、腕につけるタイプのユグドラだ。

穂乃果や海未の持っているユグドラは、ロックシードのキャストパットを開くための刀型の装飾、カッティングブレードがついている。

彼女たちのユグドラは、普段はほぼふつうのユグドラの形をしているが、装着したとき変形して真の姿を見せる。

ことりは、期待とともに右腕に押しつけた。

「……あれ。おかしいな？」

本来であれば、そのユグドラが海未と同じものであれば、腕に取り付けたところで形状を変えるはずだった。

ところが、ことりのユグドラは、腕に取り付きはしたもののその形状に変化はない。少しデザインが違う程度のどこにでもある一般的なユグドラの形のままだった。

変形しない原因がわからないことりは、腕に巻きついたユグドラを一回はずし、再び腕へとあてがった。

しかし、

「どうして。なんで変わらないの？」

ことりは、腕に巻き付いた黒い板に問う。が、当然その黒い板は何

も言わない

自分と同じ顔の少女が現れ、何かの力をくれた。それは確かなはずだった。

そうでなければ、戦うか否かを問う彼女の言葉の意味がわからない。

すでに、自分と瓜二つの人物が目の前に現れるというふうではあり得ない不可思議現象が起こったのだ。

だというのに、それまでのことが例えば自分をおちよくるために仕組まれたことなどは考えられない。いや、考えたくなかった。

「.....もうっ」

とは言え、すでに穂乃果たちの戦いは始まっている。

自分の力を示すには、自分も戦えるというところ示す為には今この時を逃すわけにはいかない。今を逃せば、次はいつになるかわからない。

早く、二人とともにいられることを伝えなければ。

焦りは、彼女にロックシードを握らせた。

「お願い。来て、インベスさん」

置いていかれたくない。一緒にいたい。

ことりはその一心でロックシードを開錠させた。

ロックシードを開錠するを、同時に彼女の横にクラック、こちらとインベスたちの世界を結ぶ穴がひらいた。

クラックが現れると、そこからインベスが顔を出した。

彼女のドングリロックシードはクラスB。そのロックシードから呼び出されるのは初級インベス。使用者を選ばず誰でも扱うことのできるインベスだ。

「お願い、行って」

ことりは、今まさに二人がインベスと攻防を繰り返している場所を指さした。すると、ことりが呼び出したインベスは、その命令に従い戦場へと駆けだした。

その行動に、インベスの意志など介在しない。今、そのインベスは、道具彼女の力だった。

「たあー！」

「はあー！」

相手が初級インベス2匹だけだったため、穂乃果と海未はインベスたちを圧倒していた。

なるべく傷つけないと願う穂乃果だが、インベスたちはその意など介さずに突進してくる。

インベスたちを確実にヘル Heimへ帰すには、スカッシュ等の技で開いたクラックに押し込まなければならぬ。

クラックが開いている時間は一瞬であるため、インベスとクラックの位置、そしてタイミングが重要になってくる。

穂乃果は、胸を痛めながらも心を鬼にしてこぶしを突き出す。そのこぶしを受けた初級インベスは、後ろへ倒れた。

海未も回し蹴りを放ち穂乃果が倒したインベスと同じ場所にインベスを倒す。

インベスたちはすぐに立ち上がりともがいていたが、二人の攻撃によってインベスたちの動きは鈍っていた。

「いまだ。大橙丸！」

これ好機と、穂乃果はオレンジアームズの専用武器を呼び出す。柄を握ると、オレンジの切り身を模した刃をインベスへ向けた。

「今度こそ。傷つけるためじゃなくて、インベスを帰すために」

インベスを救うことを願い、穂乃果はオレンジの髪留めに触れた。

『オレンジスカッシュ!!』

電子音とともに大橙丸の切っ先にオレンジ色のエナジーが集まり始めた。

ダメージから動きが鈍くなっている今なら、確実に当てることが出る。

穂乃果は、抵抗されないうちに帰そうと、エナジーが溜まりつつある大橙丸を構えた。

「穂乃果、後ろ」

「え?」

そのとき、海未が彼女に対し警告を発した。

穂乃果は、警告を聞き振り下ろすのを中断し、振り返った。すると、海未の警告どおり彼女の背後から接近してくるものがあった。

それは、何かにせかされるようにとてとて走る3匹目の初級インベスだった。

「いつのまに——」

背後に接近する3匹目を確認し、穂乃果は大橙丸をそのインベスへ向けた。

気がそがれたことで、大橙丸へのエナジの供給は止まってしまった。

2匹を先にヘル Heimへ帰したかった穂乃果だったが、そのためには2匹に集中する必要がある。

が、迫ってきている3匹目をそのままにはできない。

彼女は、背後から攻撃されることを警戒し、3匹目に大橙丸の切っ先を向けた。

「その子は違うの」

「え？」

向かってきたインベスを迎撃しようと構えたときだった。

急に聞こえた予想外の声に、彼女は素っ頓狂な声を上げた。

それは、よく知っている声。しかし、ここにはいるはずのない人物の声だったからだ。

「ことりちゃん。なんでこんなところに」

「それはいいの。ことりも一緒に戦うよ」

「戦うって、何を言ってる……それって……」

その声の主は、穂乃果、そして海未の幼馴染であり親友であることりだった。

ことりのユグドラは、市販された普通のもののはずだった。そのため、穂乃果も海未もことりは変身できないと認識していた。そのため、変身できないはずのことりが戦うとはどういうことかすぐには理解できなかった。

しかし、ことりの手ににぎられたものを確認して気づいた。

今、自分のいる方へ向かってきている3匹目のインベスは、ことり

が操っていたのだ。

「ことりちゃん。今すぐロックシードをしまつて」

「穂乃果ちゃん？　ことりも一緒に――」

「――いいから言う通りにして」

穂乃果の怒声に、ことりは肩をびくつかせた。

ことりは、驚きのあまり動くことができず呆然と立ち尽くした。

そのため、インベスを帰すことはできなかつたが、主の異変を感じ取つてかことりのインベスは動きを止めた。

向かつてきていたインベスが動きを止めたのを確認した穂乃果は、もう一度二匹のインベスに正対した。

三匹目に気を取られていたうちに、二匹は立ち上がり、今にも襲つてきそうな勢いだつた。

「すぐに、帰してあげるから」

穂乃果は急いで再び髪留めに触れた。

中断されてしまったため、再びエナジーを溜めなおす。

完全に体勢を立て直した二匹が穂乃果へ迫る。

インベスが彼女に肉薄する寸前でエナジーのチャージが完了した。

「はあ!!」

完全に溜め終わった瞬間、大橙丸を横薙ぎに振りぬいた。

刃に集まっていたオレンジのエナジーは、斬撃となつてインベスの体を通り過ぎる。

が、その斬撃が切り裂くのは、インベスではなかつた。

斬撃が通り過ぎるも、インベスたちは無傷。代わりに切り裂かれたのは、彼らの背後の空間。

空につけた傷は、クラックとなりその口を大きく開いた。

大橙丸を振り抜いた穂乃果は、先に振りぬいた方向とは逆の方向に体を回転させた。腕の力に加え回転で得た力も重ねて一気に振り抜いた。

その斬撃は、インベスを吹き飛ばし、背後に開いたクラックへ2匹を押し込んだ。

インベスたちは倒れこむように穴の向こうへと消えると、クラック

も同時に姿を消した。

インベスを帰し終わると、海未は穂乃果の元へと駆け寄った。

「穂乃果、やりましたね」

「うん。ちゃんと、全員帰せたよ」

穂乃果と海未は、インベスをヘルヘムへ帰せたことで歓喜に沸いていた。おもわずハイタッチを交わしていた。

本当であつたら、そこに混ざっていきたかつたことり。しかし混じることはできず傍からその光景を見ていた。

ことりの耳には、まだ穂乃果の怒声が響いていた。

ただ、二人と一緒に居たかつた。戦いたかつただけなのに。

ことりは、一体自分の何がいけなかつたのかわからずにいた。

海未と、インベスを無事に帰せたことを喜んでいた穂乃果は、少し離れてうつむいていることりのそばへ足を向けた。

ことりが顔を上げると、今度は穂乃果がうつむき加減で目をそらした。

「ことりちゃん。何でインベスに戦わせたりしたの？」

「ことりはただ、穂乃果ちゃんたちの力になりたくって……」

ことりは、祈るように胸の前で手を握りながら、搾り出すように答えた。

が、穂乃果は目を伏せたまま顔を上げない。

「そんなこと。インベスを戦わせてなんて頼んでないよ」

「……」

「ことりちゃんも、インベスゲームを見たときに言つてたよね。インベスを戦わせるなんておかしいって」

「そうだけど……、でも」

見かねた海未は、

「穂乃果。ことりも私たちを助けようとしてくれたんです。そんなに責めては……」

「わかつてる、でも——」

「——穂乃果！ もう忘れたのですか？ この前のことを」

「わかつてる。覚えてるよ」

つい先日穂乃果と海未は、お互いをちゃんとわかろうとせずに自分の正しさをぶつけたがために仲たがいをした。

正しさをぶつけるだけでは分かりあうことはできない。

そのことを、その出来事で知ったのだ。

海未が心配したのは、穂乃果が一方的に自分の思いをぶつけるのではないかと思っただけだが、穂乃果もそれではだめだと理解していた。

が、だからこそ、まずは自分の思いを伝えなければと思った。

「でも、だからこそことりちゃんにはこんなこととしてほしくない。ことりちゃんは、戦わなくたっていいんだよ」

「穂乃果ちゃん」

穂乃果は、ことりの思いを聞くためにしばし口を閉じる。

ことりは、穂乃果の言葉を聞いて、ぼそりとつぶやいた。

「そうだよ。私の力なんて、必要ないよね」

「え？」

ことりの言葉を聞き漏らすまいと構えていたのだが、ことりのつぶやきを聞き取ることができなかった。

「ことりちゃん。何か言った？」

「ううん。心配かけてごめんね」

「そんな、謝ることないよ。ことりちゃんも穂乃果たちのことを思っ
ていてくれてうれしいよ」

そう言って、穂乃果はことりに笑いかける。

彼女の笑顔に、ことりはぎこちなく笑顔を返した。

が、笑顔の裏でことりは思ってしまった。

二人の練習についていくこともできない。二人のような力があるわけでもない。そんな自分では、二人には追いつけない。

もう、この二人には自分なんて必要ないのかもしれない、と。

その次の日。ことりは、朝の練習に出なかった。

第十四話 『過去の亡霊』

綾瀬絵里、東條希の生徒会活動は、運動部が朝練習を行っているような早い時間から始まる。

音の木坂学院廃校の可能性が出てから、生徒会は独自に廃校阻止の為に活動を開始していた。

まだ表立った活動は行えてはいなかったものの、放課後に廃校阻止の為に作戦会議を行うため、早めに行えることはこうして朝早くに終わらせるようにしているのだ。

絵里は、山のように積まれた書類を一枚一枚目を通し、確認の判を押していく。希は、絵里が処理し終わった書類を整理していく。

静かに黙々と続く作業の途中、希はちらつと絵里の方を確認する。

絵里は、いつも通り真剣そうな面もちで書類と向き合っていたが、希が見ていることに気付いて彼女へ顔を向けた。

そこで、希が切り出した。

「南ことりちゃん。あの子、今日は朝練習には出なかつたみたいやさね」

「南ことり……。ああ、あのスクールアイドルを始めるとか言っていた3人のうちの1人ね」

「うん。で、えりちはどう思う?」

希は、仕事に没頭する絵里にあえて意見を求める。

絵里は、一瞬希の問いに目を細めるがすぐに何事もないかのように資料へと目を戻した。

「別になにも。なにかケンカでもしたのかしら?」

まるで、今初めて聞いたと言わんばかりの態度の絵里に希は眉をひそめた。

「えりちも意地悪やな。えりちがそうなるように仕向けたんやろ?」

「何のことかしら。私にはさっぱりよ」

「うちに、わからんとでも思ってるん?」

見透かしたようなことをいう希に、絵里はため息をついた。

希は勘が鋭い。こと絵里の関しては、一緒にいる時間が長いせいか

すぐに見破られてしまう。そのため、希に隠し事をして無駄だと諦めているところがあつた。

絵里は、すぐに観念して資料を置いた。

「これもあの子達のためよ」

「そうかもしれないけど……」

「どうせ、あの力はすべて回収する。それが少し早まるだけよ」

希は、絵里の返事を聞いて黙ってしまふ。

絵里がどうしてスクールアイドルを認めないのか、彼女から力を奪おうとしているのか知っていた。

絵里の思いを知ってしまった希には、反論をすることはできなかった。

希が何も言っていないのを見て、絵里はもとの作業に戻ってしまった。希は、それからどうしようもなくなり、彼女もまた自分の作業に戻った。

絵里は、作業をしながら希に言われたことを考える。

意地悪。傍から見れば、そう思ってしまうのも仕方ないのかもしれない。そう考える。

事情を知らない人からすれば、ただ頑なにスクールアイドルを否定する、ただの意地悪な先輩だ。でも、

「……これで、諦めてくれればいいのだけれど」

それでも絵里は、自分が間違っているとは思わない。

なぜならそれは、音の木坂存続に必要なことだから。

ただそれだけであり、他意などありはしないのだから。

「よう」

「あなたは……」

ことりは、朝練習に出なかつただけでなく、学校も欠席した。

学校で二人と顔を合わせるのが怖かつたからだ。

風邪を引いているわけでもなく、ただ退屈な時間をつぶすため、彼女は散歩に出ていた。

そんなときに声をかけてきたのは、昨日にも聞いたことのある声。

帽子が印象的な黒尽くめの錠前ディーラーだ。

「この間のロックシードはうまく使ってくれてるか？」

「もうこんなもの、私には必要ありません」

「どうやら、昨日お試ししてもらったロックシードの使い道を聞きに来たようだ。」

昨日の今日で感想を聞いてくる男に対し、若干のずうずうしさを感じながら、ことりははつきりと答えた。

「ことりがロックシードをつき返すと、錠前ディーラーはあわてて理由を求めた。」

「おいおい、どうした。なにかあったのかい？」

「あなたには関係ありません」

「なんだ。つれないじゃないか」

男は、いつも引いているスーツケースを引きながらことりに近づく。

「大方、インベスゲームの嫌いな誰かになんか言われたってどこか？」

「ことりは、理由を言い当てられはつとする。」

その様子を見て男はささやいた。

「もう一回、今度はそいつらがピンチのときに助けてやんな。そうすりゃ、そいつらだつて認めざるを得ないだろう」

「もういいんです。どうせ、穂乃果ちゃんたちには、私の力なんて必要ありませんから」

「ことりはそういつてため息をついた。」

「いまさら力を示したところで同じことだ。どちらにしろ、穂乃果たちの考えは変わらないだろう。」

海未はともかく穂乃果はそういう人だ。

「ことりは、ロックシードを男に返してその場を立ち去ろうとした。」

「南ことり。貴様、何をしている」

「ことりは、その声に固まった。」

「おそろおそろ振り向くと、男が自分のほうへ歩いてきるのが見えた。ことりは、思わず彼の名前をこぼす。」

「……駆紋、先生」

「そいつはだれだ。まさかとは思うが、錠前デイ……」
デイラーと言い掛けて、戒斗は眉を細めた。

特徴的な黒い帽子に見覚えがあった。彼の後ろにあるスーツケースに見覚えがあった。

そして何より、獲物を狙っているかのような眼光と残忍さのじむ笑みを目にしたとき、その男の正体が戒斗の中で固まった。

「まさか貴様は……」

「おやおや。懐かしい顔だと思ったら、バロンの坊やじゃないか。覚えていてくれたとは感激だな」

「貴様。生きていたのか、シド」

戒斗は、黒ずくめの男をそう呼んだ。

男は、目元を隠すように深くかぶっていた帽子を少し上げた。すると、ギリリと光る瞳が戒斗を捕らえた。

戒斗は、懐から戦国ドライバーを取り出しことりとシドの間に入った。

「久しぶりの再会だったのに、ずいぶんと物騒だな」

戒斗とシドの因縁は浅くない。

戒斗がビートライダーズとして活動していたときから、シドは錠前デイラーをしていた。

ビートライダーズ間でインベスゲームが流行った頃は、戒斗もシドと錠前の取引を何度もしたことがある。

ただ、錠前をやり取りするだけの関係であるならば良かったのだがシドには、いや、シドのさらに上にいた当時のユグドラシルには別の計画があった。

戒斗たちビートライダーズの何人かに戦極ドライバーがばら撒き、インベスゲーム同様これを使うよう誘導していたユグドラシルの目的は、戦極ドライバー量産やさらに強力なドライバー開発の為にデータ収集。つまり、戒斗たちビートライダーズ出身でアーマードライダーとなった者はユグドラシルにモルモットにされていたのだ。

そしてシドは、ビートライダーズにインベスゲームを流行らせ戦極ドライバーをばらまいた張本人だ。

そんな因縁浅からぬ間柄であったが、戒斗は努めて冷静だった。

「貴様が生きていようが死んでいようがどうでもいい。俺は、違法な錠前ディラーを狩る。ただそれだけだ」

「そりゃべっ立派なことだ。前は散々弱者だの強者だの拘っていたくせに、今やお前もユグドラシルの犬かい」

「勘違いするな。今のユグドラシルは、貴様らがのさばっていたころのように弱くはない。俺がいる限り、弱者などになり得ない。それに、ユグドラシルに従っているつもりもない。俺は、陰に隠れて人の弱みにつけこみ甘い蜜を吸う、貴様等のようなやり口が気に入らないだけだ」

「そうかい。まあいいや。結局俺たちはこいつでしか語る方法を知らないってわけだ」

シドは、ポケットからロックシードを取り出した。

シドが取り出したロックシードに、戒斗は眉をひそめた。

彼の持っているロックシードは、ほかのものといくつか異なる点があった。

普通のロックシードは、掛け金や本体が黒や灰色など金属のような部品で構成されている。が、シドの取り出したロックシードは、本体のほとんどが水色のクリアパーツで構成されていた。

「ふん、エナジーロックシードか。まさかとは思うが貴様、インベスゲームでもしに来たのか？」

エナジーロックシードは、ロックシードの中で最高峰、クラスSを関する現存する中で最強のロックシードだ。

当然、このエナジーロックシードもドライバーと併用することで、アーマードライダーへと変身する力を秘めている。

とはいえ、戦極ドライバーでは、その強大なエナジー出力を制御できない。エナジーロックシードを用いて変身するためには、ゲネシスドライバーと呼ばれる専用ドライバーが必要となる。

ゲネシスドライバーを用いて変身するライダーは、戦極ドライバーで変身するライダーとはけた違いの性能を誇っている。

そんな強大な力をちらつかせているシドに対して戒斗は挑発と取

れる発言をしたのには訳がある。

それは、現存するゲネシスドライバーが存在し1つもないことだ。設計者である戦極凌馬は、5年前の戦いですでに死亡している。

ゲネシスドライバーは、彼自ら製造過程のすべてを行っていたため、製造にかかわった人間は一人もいない。

当然、彼の研究資料や設計図などは多数存在したが、肝心な部分はまったく残していなかったのだ。

彼はゲネシスドライバーに異様な執着を持っていた。そのため、自分以外にゲネシスドライバーを造ることができないよう、肝心な部分の資料を残さなかったのだらうと考えられている。

彼が自ら製造していたため、その台数はわずか6台。そのほぼすべてが凌馬によって破壊されたため、今のエナジーロックシードは、インベス呼び出すことしかできないただのロックシードでしかない。

たとえ最強のクラスSのロックシードから呼び出されたインベスでも、アーマードライダーの力を持ってすれば倒せない相手ではない。

相手がインベスで戦うつもりであるなら、戒斗に負ける要素などなかった。

「インベスゲーム？ そんな子供の遊びするわけないだろ」

戒斗の問いに、シドは口角をつり上げた。そして懐から赤い奇妙な形をした塊を取り出した。

「心配はぶ無用だ。俺にはこれがある」

シドが取り出したものには左右に中央へ押せるようななにかが1つつについており、中央下には輝くコップのようなクリアパーツがついている。そして中央には、戦極ドライバーのドライブベイのようなものが存在していた。

戦極ドライバーに似て非なるそれを、シドは腰に巻きつける。

「それは、……ゲネシスドライバーだと。やつめ、報告と違うぞ」

シドが腰に巻いているドライバー、それこそがゲネシスドライバー。今は製造不可能なはずの幻のドライバーだ。

さすがの戒斗も、驚きを隠せない。

そんな戒斗を見て、シドはにやりと笑うと左手で帽子を再び目を隠すように深くした。

「さあ、始めようか。昔みたいにな、アーマードライダー同士の戦いをよ。変身！」

シドは、帽子を押さえたまま、右手でエナジーロックシードのアンロックリサァーを押し、解錠する。

『チェリーエナジー！』

ロックシードに描かれているのは、さくらんぼ。

ロックシードの解錠とともに、頭上にクラックが開きさくらんぼを象った固まりが顔を出す。

『ロックオン！ ソーダー！』

右側についているハンドル、シーボルコンプレッサーを押し込むと、エナジーロックシードの前面が二つに割れ、さくらんぼの果実を二つに割ったかのように果実の中身が顔を出す。

それと同時に、コップを模したコンセントレイトポッドにエナジーが溜まっていく。

『チェリーエナジーアームズ!!』

エナジーが溜まりきったところで、空中に浮かんでいたさくらんぼを模した塊が、彼の頭に覆いかぶさった。

さくらんぼの二つの果実の外側半分が、果柄に引かれて左肩に重なる。そして、前後がそれぞれ倒れて胸と背を守る鎧と化した。

ライドウェアの両手足には毛皮のような防具がついており、右手には弓のような武器が握られている。その姿は獲物を狩る狩人のよう。

神話に出てくる英雄、シグルドの名を冠するアーマードライダーだ。

変身したシド、シグルドの姿を見て、戒斗はうしろのことりをかばうように構えた。

「南、貴様にもあとで話を聞く。それまで下がっている」

『バナナ！』

戒斗は、ことりに逃げるよう促すとすぐさまバナナロックシードを解錠した。一回転させた後、戦極ドライバーに固定した。

「変身！」

『ロックオン！ カモン！ バナナアームズ、ナイトオブスピア!!』
カッティングブレードの柄を引き上げ、キャストパットを切り開く。

頭上から飛来したバナナを模した塊が彼の頭にかぶさるとともに展開され、彼は、バロンバナナアームズと化した。

いつ戦いが始まってもおかしくないと感じたことりはきびすを返した。

邪魔者(ことり)がその場から離れる。それが戦いの合図となった。
「行くぜ！」

「はああああああ！」

彼女が走り出したと同時に、バロンとシグルドも動き出した。

バロンはバナスピアを突き出し、シグルドは弓のような武器『ソニックアロー』を相手に向けて振り下ろした。

両者の武器がぶつかり合い火花を散らす。

鏑迫り合いになり、お互い至近距離でにらみ合う。

「思い出すよな。あの頃の戦いをよ」

「思い出話に興味などない」

「そりゃ、苦い経験だったろうからな。思い出させてやるよ。俺とおまえの力の差をよ」

ぶつかり合った瞬間は拮抗しているように見えたが、戦極とゲネシスの性能差は大きい。

徐々に、シグルドがバロンを押し始めた。

バロンは、左手でバナスピアの先付近をつかみ、両手で押さええているにも関わらず、シグルドは片手でバナスピアを押していた。

「おいおい。力比べでかなうと思ってるのか？」

「ぐっ」

「これじゃあ昔と変らねえなあ。がっかりさせんなよ」

「なめるな」

突然、バロンはバナスピアに込めていた力をぬき、左に槍をそらし

た。

シグルドは、バロンの全力を押しよけるほどの力を加えていたため、槍の抵抗がなくなったことでソニックアローの刃がバナスピアの表面を滑り、彼は前に倒れそうになる。

「なっ」

「そこだ！」

バロンは、相手がバランスを崩したことにより生まれた隙を逃さない。

すれ違いざまに、力を流され無防備になったシグルドの腹部へバナスピアを叩き込んだ。

バナスピアはシグルドの装甲の下部にぶつかると、バロンがスピアを振り抜くと、シグルドは体を半回転させて吹き飛んだ。

シグルドに強烈な一撃を加えたバロンは、しかし油断はしない。シグルドとすれ違うとすぐさま反転して構える。

絶妙なタイミングで攻撃したため、直撃していれば相当のダメージを与えられていたはずだった。しかし、振りぬいた際の感触に違和感を覚えていた。

バロンの勘は当たっており、シグルドは大袈裟にふらついて見せているが、ほとんどダメージを受けているようには見えなかった。

シグルドは、楽しそうに笑い声を上げた。

「ほう。どうやら少しはまともなを戦い方を学んだようだな。ちょうどいい。久しぶりのゲネシスドライバーだ。慣れるまで、付き合ってもらおうぜ」

腕を伸ばすように振ると、ステップを踏む。

脱力し一見隙だらけのように見えるが、バロンは動かない。やる気のない緊張感に欠けた空気をまとっているが、そこそがシグルド、シドの自然体。不用意に近づけば返り討ちに遭う。そう感じたバロンは、すぐさまバナスピアを縦に向けて防御に回した。

「おら」

「っ——」

刹那、バナスピアに火花とともに衝撃が走る。

警戒を緩めず距離をとり様子を伺っていたにもかかわらず、シングルドは、一瞬にしてバロンとの距離を殺し一撃を加えた。

バロンは、何とか一撃を防いだが、衝撃で一歩後退する。しかし、悠長に体勢を立て直している余裕はない。

シングルドは、すでにバロンの背後で武器を構えている。

バロンは、無理やりシングルドがいるであろう方向へ正対し、バナスピアを構える。

「そらっ」

「——ぐっ」

その直後、再びバナスピアに衝撃が走る。

攻撃の徐々に上がっているのか、バロンは先より大きくのけぞってしまう。

が、シングルドはとまらない。

のけぞったせいで対応が遅れたバロンの背中へソニックアローの刃を振り下ろし、かと思えば次の瞬間には正面に立ち刃を振り上げた。

バロンは、シングルドの攻撃をもろに受け、後ろへ吹っ飛んだ。

「瞬間、移動？」

建物の影で見えていたことは、そうつぶやいていた。

アームズをまとっていない一般人には瞬間移動のようにすら見えるシングルドの動き。しかし、バロンにはそれが瞬間移動などではないことが見えていた。

エナジールックシードは、クラスAのロックシードの上位互換のような性質を持つ。

チェリールックシードの特性は、高速移動。クラスA以下のロックシードで召喚される全アームズの中で最速の移動速度を誇っている。

そんなチェリーの上位互換であるチェリーエナジーは、たとえアームズを使っていたとしてもクラスA以下では到底その動きに追いつくことはできない。現に、歴戦を勝ち抜いてきたバロンでさえも赤い残像が辛うじて見えるといった状態だった。

「ハハハ。さあ、次はどうする。バロンの坊や」

はね飛ばされたバロンは、追撃に備えてすぐに体を起こした。

追撃するなら絶好の機会だったが、シグルドは被っていた帽子を押しさえるように頭を手をおいて余裕を見せていた。

「ならば、これでどうだ」

『ロックオフ』

バロンは、敵を目の前に戦極ドライバーからバナナロックシードを取り外した。

ロックシードがはずされたことで、バナナアームズが元のバナナの形に戻り、宙に浮かび上がる。

バナナは、機能がほぼ平均的であらゆる状況にある程度対応できるオールラウンダータイプのアームズだ。

しかし、それは同時に特出するものがないともいえる。アームズ一つでは、対応できる状況にどうしても限界が出てくる。

その問題を解決する機能として備わっているのが、アームズチェーンシステムだ。

『マンゴー！』

バロンがバナナの代わりに取り出したロックシードはマンゴー。

解錠するとともに素早く戦極ドライバーに固定し、カッティングブレードをおろした。

『ロックオン！ カモン！ マンゴーアームズ、ファイトオブハンマー！！』

バロンの頭上に、バナナアームズが出てきたときと同じようにクラックが開く。そして赤み掛かった黄色い果実が顔を出した。

空中で少々展開されたマンゴーの果実がバロンの頭に被さる。

後ろへ展開された部分はマントへと変わり、そのほかの部分が胸と両肩の装甲となる。

装甲それぞれが厚く、バナナよりもより重厚感あるアームズを身にまとっていた。

手には、マンゴーを模した鎚、マンゴーパニッシャーが握られている。

相当な重さのようでも、果実の部分を引きずっている。

それを見ただけでも、相当の破壊力が窺える。

バロンは、マンゴーパニツシャーで宙に浮いているバナナアームズをバツティングをするかのように打ち飛ばした。

「おつと、危ねえなあ。だが、そんな攻撃じゃあ当たらねえぜ」

が、高速移動を得意とするチェリーエナジーアームズのシグルドは、危ないと言いつつ余裕でバナナを避けるとそのまま戒斗に肉薄した。

「おらー！」

「ぐっ」

ソニックアローの斬撃が2度振り下ろされ、マンゴーの装甲が火花を散らす。

エナジーロックシードとゲネシスドライバーの性能によって繰り出されるソニックアローによる攻撃は、クラスA以下のものから受ける攻撃とは段違いの威力を持っている。

マンゴーは、その重厚な鎧による防御とマンゴーパニツシャーによる攻撃に特化したアームズだ。クラスB以下のインベス、アーマードライダーの攻撃であればすべて受けきれただけの防御力を持っている。

そんな抜群の防御力を誇るマンゴーアームズだが、エナジーアームズの攻撃を防ぎきることはできない。

その衝撃は、装甲を抜け戒斗自身に突き刺さる。

「そらそらどうした。いいサンドバックだぜ」

「……」

ただでさえアームズで最速を誇るチェリーエナジーアームズに対し、マンゴーアームズへの換装は悪手にしか見えないものだった。

バナナアームズは、性能が平均的であり動きも遅くはない。そのため、チェリーエナジーの動きに追いつけないものの中から攻撃を防御することができていた。が、マンゴーへの換装によってさらに動きが鈍くなったバロンは、もはや武器で防御することもできず、その身で攻撃を受け続けてしまっていた。

バロンが反撃をしてこないと見て、シグルドは、今まで以上に力をこめてソニックアローを振り下ろす。

その斬撃は、バロンの左肩の装甲に突き刺さった。

シグルドは、とどめを刺そうとそのままシグルドは、さらに下へ引きおろそうとする。

そして、

「なに？」

ソニックアローを引き下ろそうとして、しかしそれ以上動かなかつた。

「捕まえたぞ」

シグルドは、ソニックアローの先を見た。

マンゴーアームズに触れている刃先。弓の弦がついている部分をバロンは左手で掴んでおり、アームズに押し付けることで完全にソニックアローを捕らえていた。

そこでようやくシグルドは気づく。バロンは、スピードでは敵わないシグルドを捕らえるため、わざと攻撃を受けていたのだということ。を。

バロンは、待ちわびた勝機を逃すまいとマンゴーパニツシャーの柄でカッティングブレードの柄を下から押す。

『マンゴースカッシュュ!!』

カッティングブレードによるスイッチ動作は1回。スカッシュュ系の技に定められた量のエネルギーがマンゴーパニツシャーへと供給される。

バロンは、エネルギーが供給し終わる前に、掬い上げるように振り上げた。

スカッシュュは、エネルギーの蓄積量が少ない。そのため、マンゴーパニツシャーがシグルドにぶつかる寸前にエネルギーの供給が終了した。

「はっ！」

「ぐはっ」

高速移動を生業のするシグルドも、バロンの無駄のない動きから繰り出されるカウンターには反応が遅れた。

エナジーロックシードを用いて形成されたアームズといえど、至近距離からの攻撃を受けてはダメージは避けられない。

直撃を受けたシグルドは、数メートル飛んで地面に転がった。

「どうした、シド。相当腕がなまったようだな」

シグルドをたたき飛ばしたバロンは、マンゴーパニツチャーを引きずりながらシグルドに近づいていく。何度もシグルドの攻撃を受けたいたが、その足取りはしつかりとしておりダメージを感じさせない。

マンゴーアームズは、重く動きが制限される。そのため、走ったりなど連続した動作は遅くなってしまう。しかし、少し体をずらす程度の小さな動きであれば、あまり影響を受けずに動くことが出きる。

バロンは、ソニックアローによるインパクトの瞬間に身を少し引き、ダメージを軽減していたのだ。

「ガキが、調子に乗るんじゃ——」

バロンの挑発的は発言に再びバロンへ向かっていこうとしたシグルドは、突然足を止め、耳あたりに手を置いた。

「ちつ。なんだこんな時に」

何やら通信が入ったのか虚空に向かって声を発する。

「おい、ふざけんな。まだ戦いの途中だ。口出しすんな。……つたく、わかりましたよ」

通信が終わり、シグルドは耳あたりから手を放す。

通信のないようが気に入らなかったのか、投げやりな様子で諸手を挙げた。

「ああもうやめだ」

「何だ貴様。投降する気になったのか？」

「んなわけねえだろ」

バロンの問いに、シグルドは睨み返す。

が、ふといつもの冷静さを取り戻すと軽い口調で返した。

「生憎、今回の依頼はお前と遊ぶことじゃなくてな。お前とは、また今度遊んでやるよ」

「逃げる気か」

「俺は、任務に忠実つてだけだ。ビジネスは、信用第一つてな」

シグルドは、そう捨て台詞を吐くと、ソニックアローノックキングドロワーを引き、弦を引き絞る。そして、バロンの真上に向かってさくらんぼの形をしたエナジーの塊を放った。

バロンはとっさにマンゴーパニッシャーを上に掲げて盾代わりにする。

それとほぼ同時。さくらんぼの実が裂けると中から大量の矢がバロン目掛けて降り注いだ。

広範囲に矢を降らせるためか、一本一本に威力はほとんどなかった。

バロンに降り注いだものもアームズで受けきれぬ威力だった。

それでも、大半は地面を焦がし、バロンの周りを煙で包み込んだ。目くらましが目的だったのだろう。

地面に降り注いだ矢が起こした煙がバロンの視界を遮った。

すぐに煙は風に流されるも、視界が開けたところにはすでにシグルドの姿はなかった。

戦いを終えた戒斗は、キャストぱつとを閉じ変身をといた。

アームズおよびライドウェアが消えると、彼は片膝を付き左肩をかばうように押さえていた。

「ぐっ。ゲネシスと戦極の性能差を埋めるには、まだ足りないか……」

シグルドの攻撃を何度も受けてもあまりダメージを受けていないように見せていたのはフェイク。

平気そうに見せておいて、その実すでにぼろぼろの状態だった。

ゲネシスドライバーを有していない戒斗にとって、今回取った戦略が最善の手であった。

それでもシグルドの攻撃に対応できなかったことに、内心、あのまま戦っていたら危なかったと唇を噛んでいた。

「だが、今は……」

反省点は多い。しかし、それよりもシドの目的の方が重要。

シドが言っていた今回の依頼についてが気になった。

彼は、戦う気はないといった。

それは理解できる。現在、ユグドラシルが違法ロックシード取引に
対し目を光らせてる。

なるべく気づかれずに取引を行うほうが彼らにとってはいいのだ
ろう。しかし、取引にしては不可解な点がある。

ことりの母親は校長であるが、廃校寸前の高校だ。

そんな決して金持ちとはいえないことりに、わざわざロックシード
を売りつけるメリットが戒斗には理解できなかった。

ことりに思考が向いたところで、彼女を一時退避させたことを思い
出す。

「おい、南。もう出てきていいぞ」

その疑問を解くヒントは、彼女が持っている。

彼女に事情を聴くべく、戒斗は振り返った。

「……南。貴様、どこへ行くこうとしている」

「その……」

そろりそろりとその場を離れようとしていることりの姿を発見し
た。

戒斗は、めんどくさそうに舌打ちをすると、ことりが固まっている
ところまで歩いていった。

「シドは取り逃してしまったからな。やつの分まで洗いざらい話して
もらうぞ」

「はい……」

戒斗は、ことりの肩を捕み、逃げ道を封じた。

逃げられたいと悟ったことりは、観念して俯いた。

第十五話 『違う自分に』

憐次は今、難しい顔をして目の前のものを見つめていた。
それは、器だ。

器の中には、なみなみと注がれたスープが広がっており、その上に
叉焼、煮卵、ねぎ、のりなどのトッピングが載せられている。
スープの中に潜むは、こしの利いた麺。

その姿を現すときを今か今かと待ち構えているようだ。

「レン兄。いつものやつ、早く頼むにやー」

「凜ちゃん。おとなしく待つてよ、ね?」

厨房へ向けて少女の声が響いた。

彼女はお客様だ。これ以上待たせるわけには行かない。

憐次は、神妙な面持ちで器を持つと、厨房から顔を出した。

「……………お待ちどう様」

「やつときたにやー」

凜は、カウンターのの上に器が乗せられるや否や、自分の元へその器
を引き寄せた。

そして、同時に出されたプラスチックの箸を持つと手を合わせる。

「いっただきまーす!」

すがすがしいほどに大きな声で宣言すると、彼女は麺を持ち上げき
もちのいい音と共にすすった。

おいしそうに食べる姿は、料理を出した憐次としてもうれしいもの
だった。最近じゃ、いただきますやごちそうさますら言えない人がわ
んさか居る。そんな中、最初のいただきますからおいしさのにじみ出
るような食べっぷりは、まさに料理人冥利に尽きるというものだろ
う。憐次は、ただのバイトではあるが。

しかし、それはそれとして、憐次には彼女に対して言うておかなけ
ればならないことがあった。

「なあ、星空。これ、裏中の裏メニューだって自覚して頼んでるのか
?」

「ん? それって、どういう事かにや?」

「ふつう出さないメニューだってことだよ。っていうかここ、フルーツパーラーだからな」

そう。隣次の目の前の少女。『にゃ』などと特徴的な語尾で話す活発そうな少女、星空凜（ほしぞらりん）は、この店に来ては平然とラーメンなどとのたまっているが、そこは本来フルーツパーラー「ドルーパーズ」の2号店。決してラーメン屋などではない。あくまでケーキやタルト、パフェなどフルーツを使ったスイーツを専門に扱う店なのだ。

だったのだが、

「でも、ちゃんとラーメンの用意もしてあるにゃ」

「お前みたいな変わり者しかこないから、こうならざるを得なかったんだ」

「そうなんだあ。今日も、このラーメン最高だにゃ」

「お前、ぜんぜん聞いてないだろ」

なぜか本来のメインであるはずのフルーツがふんだんに使われたパフェやケーキのようなスイーツより、凜のラーメンのようにほかのオーダーの方が多いという事態になっている。

いったいどこから知れ渡ったのか、いまやラーメンのほかにもカレーなど様々な料理が裏メニューの欄に名を連ねている始末だ。

もはや、いったい何屋なのかわからなくなるレベルだ。

「ええと、ごめんなさい。凜ちゃんがまたご迷惑を……」

「いやいや、なんで小泉が謝る？」

マイペースな凜に頭を痛めていると、おっとりした気弱そうな少女、小泉花陽（こいずみはなよ）が申し得分けなさそうに凜の代わりに頭を下げていた。

めがねの奥の瞳がわずかに潤んでいる。

隣次は、別に怒っていたわけではなかっただけに、突然の謝罪にうろたえてしまった。

「別に小泉が謝ることじゃないぞ。こっちも、出したくて出してるわけだしな」

「じゃあ、べつになにも問題ないにゃー」

「お前は黙って食え」

「はい」

とつきにフオローに回ると、凜が言わなくていいのに口を挟んだ。隣次が声を低くして言うと、凜はあわててラーメンをすすり始めた。

凜は、この店に来るたびにラーメンを注文する。

たまにスイーツ系のものを注文することもあるが、それも本当はたまにだ。

ほとんどの場合、ラーメンを注文し、スープまできれいに平らげていく。

その食べっぷりと頻度は、太ってしまったわな心配になるレベルだが、運動部にでも所属しているのかいつもスレンダーな体系を維持している。

太らないことについてはとても便利そうだが、ある一部分に対してもその性質が遺憾なく発揮されており、悲哀を感じざるを得ない。

「もう、凜ちゃん。せつかく凜ちゃんの為にわざわざ出してくれてるんだよ。もっと感謝して食べないと」

「かよちゃんはまじめだにや。それにちゃんと感謝してるよ？ 感謝の証に今日もスープまで全部飲むにや」

そういつて、凜はふたたび麺をすする。音を立ててすすることこそラーメンへの礼儀と考えている隣次としては、凜のその豪快な食べっぷりは見ていて気持ちのいいものがある。

「ところで小泉……」

隣次は、凜の食べっぷりに満足すると、彼女をしたためてくれている花陽に声をかけた。

凜のおかげでいくらか心は満たされていたのだが、思い出したかのようにさつきと打って変わって歯切れ悪い。

隣次は、花陽を呼ぶとカウンターにあるものをためらいがちに出した

「お待ちどう様。……白米ね」

「は、白米」

困り顔で凜を見ていた花陽だが、白米という言葉聞いたとたん、獲物を狙うハンターのような鋭い視線でカウンターに向き直った。

カウンター上には、白く輝く白米が山盛りに盛られた茶碗が一つ。それを確認すると、花陽は顔をほころばせた。

「はふう、白米。．．．．．いただきます」

箸で一口摘んで、小さな口へと運ぶ。

米が彼女の口の中へ消えると、

「んんー。白米、最、高」

天使が舞い降りたと錯覚するほどの満面の笑みを浮かべた。

憐次は、つい花陽の顔を見つめてしまう。晴天に輝く太陽がごときその笑顔を見つめてしまう。

しかし、かなしきかな。彼が見つめていたのは、その笑みに見とれていたからではない。

「．．．．．」

「どうかしましたか、レンジさん。．．．．．もしかして、おべんと付いてますか？」

「いや、そうじゃない。喜んでくれて何よりだよ、．．．．．はあ」

口では素晴らしいながら、憐次は肩を落とした。花陽が前言を覆して満面の笑みで白米を頬張っていたからだ。

どうやら彼女も、凜と同じで好物には目がないようだ。

材料を用意するのは店長だから、憐次としては困ることがあるわけではない。むしろかわいい女の子が幸せそうにそれぞれの好物を食べている姿を眺めていられるのだから役得しかない。

が、ラーメンを食べたいならラーメン屋に、白米を食べたいならどこぞの定食屋に行けばいい。

それが食べたいならどうしてここに来た、と思って苦笑いしてしまうのであった。

「はい。味わって食べますね」

「ああ。そうしてくれ。まあ、ここまで喜んでくれるなら、作ったかいがあったってmondana」

疑問は残るものの、店側としては客が入って万々歳。お客の方もど

うやら満足している様子。

両方に得なら、小さな疑問なんて些末な問題だと、憐次は腕を組んで思った。

「おい、なんだなんだ？　まるで自分で全部考えて作ったみたいなお口ぶりじゃねえか。おまえはただレシピ通り作っただけだろ」

「ちよつ。そりやないぜ、おやつさん。まあ、事実だけどさ」

人暮らしをしているからといって、憐次に料理のスキルはない。

所詮バイトであるため当然と言っては当然だが、お客に出せる料理を作るのはひとえにおやつさんの作ったレシピのおかげだ。

憐次が少しすねたように言うと、おやつさんはいたずらっぽく笑った。

「あ、坂東さんだにや。こんにちは」

「ば、坂東さん。頂いてます。今日も、とてもおいしいです」

「ああ、思う存分食べてくれ。って、またラーメンと白米か……」

少女たちが自分の店のメニューをおいしそうに食べているということで、何を食べているのか確認しに来たのだろう。

少女たちの目の前にある料理を見て、憐次と同じように肩を落としました。

そんなおやつさんこと坂東を見て、憐次はわかるわかるとうなずいた。

「そうなんすよ。こいつら、毎回これしか頼まないんすよ」

「なあ、憐次さ。俺最近、この店が何の専門店かよくわからなくなってきちゃんだけどさ」

「実際、お客に伝えていろんなメニュー出してる時点で専門店と名乗るのに抵抗あるけど、俺もそんな感じっす」

店員も不安になってくるくらいに、専門店としての専門性がぶれている。

すると、そもそもお客が正しく認識していないんじゃないかという疑問が首をもたげてくる。

もしかして、この店の売りを皆が勘違いしているから、皆本来おかしいはずの注文をして来るのかもしれない。

そう思った憐次は、手近な凜と花陽に質問してみた。

「二人とも。お前ら、ここが何屋か知ってるか？」

「え、フルーツパーラーじゃ無いのかにや？」

「そうだよね、凜ちゃん。フルーツパーラーですよね？」

「どうやら、理解していたみたいだ。」

「わかってたのかよ。わかってたならなぜフルーツを頼まない？」

「いやあ。そこにラーメンがあるから、かにや？」

「白米こそ、至高です」

「ああはい。そうですか。おやつさん、こんな感じです」

「そうか」

もはや、悪意しか感じない。

いや、彼女たちの瞳は透き通っていて純粹そのものだが、悪意があるに違いない。そう思っていないとやっていられない。

坂東と憐次は、何か自分たちの努力ではどうしようもない何かがあるのを感じた。

「はいはい。提供し終わったら厨房に戻った」

「わかりましたよ」

これ以上話していても落ち込むばかりだろうと思ったのだろう。

おやつさんにそう言われて、憐次はしぶしぶ厨房に戻る。

憐次が厨房に入ると入れ違いに、入り口扉のベルが鳴った。

戒斗につかまったことりは、ある店につれてかれていた。

中に入ると、いらつしやいという威勢のいい声とともに、天井までそびえるフルーツのタワーに出迎えられた。

入ってすぐのところのカウンター席になっており、奥にはテーブル席が用意されている。

すでにカウンターには少女が二人座っており、一人はラーメン、もう一人は白米をほおばっていた。

少女たちは、学校帰りに寄ったのか制服姿だった。その制服は、ことりも見慣れている音の木坂の制服であり、リボンの色から同じ高校の一年生であることが分かった。

ことりは、自然と顔を背けて後ろを通り過ぎた。

フレッシユで明るい店内の様子やフルーツがふんだんに使われた内装からてつきりスイーツをメインに出している店なのかと思っただが、そうではないのだろうか。

ここはいつたい何屋なんだろうと疑問に思っていると、戒斗に一番奥のテーブル席へと誘導された。

「南、そこに座れ」

「……はい」

なるべく人に聞かれないようにという配慮だろうか。

一番奥の席は、完全に密室というわけではないがほかの席との間を壁が遮っており、個室のような雰囲気がある。

そこまで大きな声で話したりしなければ、他人に話を聞かれる心配はないだろう。

その反面、中で何か大事が起きればすぐに気づくだろうし、逃げられる距離でもある。

自分の不安を和らげるための配慮だろうかと思うと、ことりは少しだけ安心できた。

とはいえ、今まで入ったことのない店に連れてこられ、不安は完全にはぬぐえない。

自然と不安が口から洩れた。

「先生。……どうして、この店に？」

「ここは、俺の知り合いが経営している店なんだ。ここはなかなかいい茶を出す」

「そう、なんですか」

戒斗は、ことりにファイルのようなものを差し出した。

「メニューだ。好きに頼め」

「は、はい……」

戒斗に注文を促され、反射的に返事をした。

しかし返事をしたものの、それなら注文できるほど彼女の肝は据わっていない。

目の前には、ユグドラシルの関係者が腕を組んでにらんできている

のだ。

立場は、麻薬取り締まり官と麻薬所持者に似ているかもしれない。実際に違法ロックシードで捕まった人がどうなるのかは知らないが、ことりにはそのくらいの不安があった。

「頼まないのか？」

「そ、その……」

「……板東」

ことりが口ごもっていると、戒斗は、ことりの注文の有無を聞かずに店員を呼んでしまった。

「ちよっと待ってくださいねっと。おお、戒斗じゃねえか」

戒斗の呼び声に答えて出てきたのは、30代くらいのおじさんだった。

内装にあわせてか、オレンジ色のアロハなシャツを着ている。

そのせいもあってか、物腰の柔らかそうな人に見えた。

果物があふれるやわらかい雰囲気で、女性人気が強そうなイメージの店あるため、戒斗の行き着けという言葉にことりは疑問を抱いていた。

が、戒斗が名前を呼んだとたんすぐに店員が現れたのを見て納得した。

「いつものを頼む。……こいつにもな」

「了解。お譲ちゃん、ちよっと待っててな」

戒斗は、ことりを指差して注文した。

いつものといわれた板東なる店員は、メモも取らずに厨房へと帰っていく。

いつもので通じるということは本当に常連なんだなと何気なしに思う。

しばらくして板東はお盆にティーカップを二つ乗せて戻ってきた。

「はい。お待ちどうぞ様」

そういって、戒斗とことりの前にひとつずつカップを置いていく。

「これは、なんですか？」

「アップルティーだ。飲めば少しは落ち着くだろう」

ことりがたずねると、戒斗はカップを手に取りながら答えた。
香ってみると、ほのかに甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「ありがとうございます……ごきます」

戒斗に促され、ことりはカップに口をつけた。

暖かな液体が舌の上をなでる。砂糖などではない果物の優しい甘さが口の中に広がった。

「あ、おいしい」

「だろ？ 俺が自ら選んだフルーツ（…）を使ったからな。なんだつたらホットケーキとかパフェとかも——」

「——仕事中だ。貴様も仕事にもどれ」

「なんだよ、冷てえな。わかりましたよ」

ことりのおいしいの一言に、板東はうれしそうに自慢を使用とすることが、戒斗にとめられてしまった。

現在フルーツパーラーであるにもかかわらずフルーツを使った料理がほとんど注文されないというおかしな状況に直面している板東としては、彼自慢のフルーツを注文されそれをおいしいなどと評価されようものならテンションが上がらないわけがない。

自慢のフルーツについてもつと説明もしたかったしそのフルーツをふんだんに使ったメニューを紹介したかった。

しかし、戒斗の言うことも確かに正論だ。

店長ともあろうものが一人の客に付きっ切りなんてことはできない。
い。

板東は、しぶしぶ厨房へと戻っていった。

「おやっさん。ずいぶんテンション上がった。どうしたんだよ？」

「ああ。久しぶりにこの店のフルーツをおいしいって言ってくれる人が来てな」

「……それって、フルーツパーラーとしてどうなんですか？ まあわかりますけど」

普段フルーツをメインに扱う店として、フルーツがおいしいと聞くのが久しぶりだというのはいかがなものか。隣次は苦笑いしていた

が、すぐに考えを改める。

彼の視界に二人の少女が入った。

一人はラーメンの器を前に満足げに腹を撫でており、もう一人はまだ箸で白米を少しずつつつまんで口に運んでは幸せそうに咀嚼している。

たった今までフルーツパーラーにあるまじき光景を見てきたばかりの憐次は、先ほどとは違った意味の苦笑いを浮かべた。

そして、今や希有になりつつあるフルーツを注文した客に興味があった。

「おやっさん。それで、その珍しい客ってどんな人？」

「珍しいってな……。あの奥の席の人だよ」

坂東は、珍しいの言葉に頭を掻いたが、その珍しい客の席を指さした。珍しいと認めることに対し、悔しそうに顔をゆがめている。

憐次は、あいまいな笑顔を浮かべながら坂東が指さした奥の方をのぞき込んだ。

奥に席に座っているのは二人。奥には男、手前には憐次と同じ年くらいの少女が座っていた。

少女は、ベージュ色の長髪とサイドテールで服装は学生服だった。

その少女の後ろ姿を見て、憐次は眉をひそめた。その後ろ姿には見ええがあつたからだ。

気づいた瞬間、憐次はカウンターを出て、店の一番奥の席へと向かった。

その目には、少女の後姿しか写っていない。つかつかと近づいていき、彼女の肩に触れると、彼女は憐次の方を向いた。

やっぱりだ。

正面から確認したことで、彼女のもうひとつのチャームポイントである、ちよこんと前髪が目に入った。

間違いない。

「なんだ。こことり、来てたのか」

来てたなら声をかけてくれればいいのにと思い、すぐにここで働いていることを伝えていなかったことに気づく。

自分が厨房に入っていた時に来てすれ違いになったのかと推測した憐次は、ことりを驚かそうと背後に忍び寄りうとした。

そこで、

「ん？ ほかに誰がいるのか……。？」

ことりのいる席の部屋の入口付近にまで近づいて、ことりの向かいの席にもう一人座っているのに気が付いた。

その場からもう少し近づいて向かいに座る人の顔を確認した憐次は、そこからさらに一歩踏み出した。

「ことり、何してるんだよ」

憐次が声をかけると、ことりは肩をびくつかせて振り返った。

目が合うと、彼女の瞳が揺らいだ。

「レンジくん。……なんで」

「俺は、ここでアルバイトしてるからな。それよりことり。練習はどうした。今の時間なら、穂乃果たちと練習しているはずだろ？」

「それは……」

憐次に問われ、ことりは口ごもる。

ある程度事情が知れているだけあって。下手な言い訳は通用しない。

「貴様には関係のないことだ。さっさと消えろ」

「そういえばあんたは……」

言葉に迷うことりに代わり言葉を発したのは、ことりの向かいに座る男だった。

憐次は、その男へ視線を移した。

どこかで見たことのある顔だなと記憶を探ると、ごく最近の記憶に思い当たる顔があった。

それは、穂乃果たちと朝練習をしている時だった。

偶然遭遇したクラック、そしてインベスに襲われていた時。そんなときに笑われた男。その男の名は。

「あんた、たしか駆紋戒斗だな。穂乃果たちから話は聞いているぞ。教師が生徒を連れ込んでいいのかよ？」

憐次がにらむと戒斗は、めんどくさいやつが来たといわんばかりに

舌打ちした。

「貴様は仕事申中だろ。さっさと戻れ。板東、従業員管理くらいしろ」
「そ、そうだとぞレンジ。お前も仕事のとちゆ——」

「——休憩入ります！」

板東の言葉を遮り、隣次はそう告げた。

休憩申ならかまわないだろうと。

板東は、瞬時の返しに面食らうが、即座にシフトを計算しそしてう
なずいた。

「いや、まあいいけどさ」

「じゃ、私も休憩入りまーす」

「え、イヨちゃんも？ まったく勝手すぎだろ……」

どうやら、この店のバイトは勝手気ままな人が多いらしい。

レンジが抜けたのに便乗するかのように、女性のアルバイトもスマ
ホをいじりながら控え室へと消えてしまった。

板東が頭を抱えている。

そんなバイト二人に振り回される店長を尻目に、隣次は戒斗をにら
んでいた。

「なんなんだ貴様は」

「ことりの友達だよ」

「ああ、そうか。インベスに襲われていたとき、園田海未と一緒になっ
て震えていた弱者か」

隣次のことを思い出した戒斗は、彼を鼻で笑った。

「貴様、なにか勘違いをしているようだな。俺は、違法錠前ディーラー
について話を聞くだけだ」

「あんた、嘘が下手だな。よりもよつてことりがそんな危ないやつ
らと関わりを持つてるわけ無いだろ。なあ、ことり……」

「……」

ことりが、違法な錠前なんかに手を出すわけがない。

自信満々の隣次であったが、ことりの沈黙により自信は動揺へと変
わった。

答えないことりへ顔を向けると、ことりは顔をそらしてしまう。

それは、隣次に大して後ろめたいことがあるということ。違法錠前の件に対しての無言の肯定だった。

「ことり、嘘だろ？」

「そういうわけだ。部外者は引っ込んでいろ」

戒斗としては、部外者に話を聞かせるのは好ましくわなかったのだろう。

しかし隣次は、戒斗を無視していすを座ると戒斗をにらんだ。

「そういうわけには行かない。俺もここで話を聞かせてもらうぜ。いいよな、ことり」

「そ、それは……」

「こんなやつと二人きりじゃ、都合のいいように誘導されかねないだろ」

「この俺が、そんな姑息な真似をすることも思っているのか？」

「少なくとも、信用できるとは思ってない」

にらみ合う二人。

自分を姑息な弱者だと罵る男ににらみを利かす戒斗だが、さすがにこの程度で冷静を欠きはしない。

「そうか。それで満足するならいいだろう。許可してやる」

戒斗は、隣次の同席を認めると、さっそくことりへの事情聴取を開始した。

「俺が聞きたいのは2点」

戒斗は、指を二本突き出した。

「あの錠前ディラー、シドと会った経緯。そして、この錠前を持つていた理由についてだ」

戒斗の目的は、シドの居場所の特定だ。

相手が高校生であるため、実際たいした情報は期待していなかった。

彼ら錠前ディラーも馬鹿ではない。いや、馬鹿なら苦労せずに狩りつくせる。

が、戒斗が追う輩はなかなか尻尾を見せない。

そのため、何か一つでも手がかりが出てきたらいくら考えて

いた。

戒斗の思った通りか、ことりは、戒斗の問いに目をそらした。

「あの人、シドさんと会ったのは、本当に偶然で……。あの人から、話し掛けて来たんです」

「やつから話しかけてきただど?」

「はい」

「錠前ディーラーが、たいして金にもならないやつにわざわざ売り込みに来たというのか?」

「それは……」

「奴らにとって商売がすべてだ。だというのに、商売にもならないことを危険を冒してまでするなど、にわかには信じられん」

「でも私、錠前ディーラーがどこにいるかなんて知りませんし」

錠前ディーラーの居場所を知るきっかけといえば、友達などの人伝いに聞か、ディーラー本人またはその関係者が売り込みにくるか、どちらかになる。

前者の場合、ディーラーともともと接点のあった生徒が他の生徒へ情報を流すことになる。

錠前ディーラーと懇意な生徒のいる学校は、たいていは金持ちが集まる学校か素行の悪い生徒が集まった学校の二つだ。

しかし音の木坂は、廃校ということもありそこまで金を持っているわけでもない。そこへ集まってくる生徒も錠前ディーラーが標的にするほどの金を持っているわけではない。また、古くから続く伝統校だけあって、素行の悪い生徒も見受けられない。

それに、ことりの人間関係を見ても、ディーラーと接点のありそうな人物はいない。人伝いに聞いたというのは除外できた。

それだけ考えれば、ことりの言う通り錠前ディーラー自らが直接売りに来たということも考えられる。

しかし、先程の后者で考えると素直に納得はできない。ディーラーのやり口は、ロックシードを高額で売りつけるというもの。当然、ディーラーが積極的に狙うのが金持ちだ。金持ちでもないことりに売りにくるといえるのはとても不可解で納得がいかない。

やはりことりに直接売りに来た意図がわからなかった。

とはいえ、戒斗から見ても小鳥が嘘をついているようには見えなかった。このまま、話を長引かせてもめぼしい情報は出てこないだろう。

そう考えた戒斗は、

「最後に、ひとつ問おう」

「……なんででしょうか」

最後という言葉に、ことりは気を引き締める。

変に突つかかられないように、慎重に言葉を選び、早く開放されようと身構える。

「貴様は、なぜ力がほしい」

「……。ですから、このロックシードは、渡されただけでほしかったわけじゃないですか」

ことりは、一瞬言葉に詰まる。

さっきの質問との違いがあまりわからなかったからだ。

それに、戒斗は補足した。

「そうではない。力を欲する理由は何かと聞いている」

「別に。力なんて、ほしくなんか……」

「うそだな」

「うそなんかじゃ——」

「——隠し事が通用すると思っっているのか?」

戒斗の威圧に、ことりは押し黙ってしまう。

「貴様の話を信じるなら、奴は無理やり貴様にロックシードを持たせたのだろう。だが、無理やり渡されたとしてそのロックシードが本当に要らないのであるなら、そこで突き返すこともそれが出来なくとも途中で捨ててしまうこともできたはずだ」

「それは……」

「自分から手放すことをしなかった。それはつまり、その力が必要だったということだろう」

「あんだ、いい加減に……」

隣次も早くことりが開放されることを望んでいたため黙っていた

が、さすがに我慢できずに割ってはいる。

ことりが力を、しかも戦うための力を欲しているなんて考えられない。

ことりが喧嘩だったしたことないくらいやさしい正確だということを知っている。

「そうですね。本当は、力がほしかったんです」

「ことり……」

しかし、ことりは白状してしまった。しかも、隣次の持っていた印象を裏切る形で。

「私の友達は、すごい子達ばかりなんです。元気でみんなを引っ張っていける子だったり、冷静に物事を見れる子だったり、みんな何かひとつでもすごい何か持つてるんです。……でも、私には何も無い。何も無いんです」

いつもそうだった。ことりは思う。

穂乃果は、いつもことりをことりの知らなかった世界へ導く。そんな彼女をことりは追いかけるだけだった。

海未は、冷静に物事を見つめ、ことりや穂乃果を正しい方向へ軌道修正してくれる。そんな彼女を、ことりはただ笑ってみているだけだった。

「その時点でも、私はかなりあの子達から離されてた。なのに、今度はインベスにだって立ち向かえるだけの力まで手にしました。わたし、怖かったんです。ただでさえ離れた存在になりつつあった二人がもつと離れちゃう。このままじゃ、本当に一緒にいられなくなっちゃうって。だから、力が必要だったんです。……あの子たちと一緒にいるために」

「下らんな」

「なっ——」

気持ちを吐露したことりの言葉を、戒斗は一言で斬った。

「自分に無いものを他人が持っているから、手っ取り早く手に入る力に飛びついたというわけか。そんなことばかり考えているから貴様のようなやつはいつまで経っても弱者なんだ」

自分を弱者だと断じる戒斗に、ついにことりは我慢の限界を迎えた。

「あなたにはわかりませんよ、強いあなたには。アーマードライダーに変身できて。インベスにも臆せず戦える。そんなあなたにはわからないですよ!! そうですよ。私は弱者です。いつも他人を気にして、自分から発言なつてできません。運動も勉強もそんなにできないし、得意なことなんて何も無い。でも、だからって、強くないと思って思っちゃいけないんですか! 力がほしいって、思っちゃいけないんですか!」

「……貴様は、そうやって自分を誰かと比べ、いったい誰になろうとしている」

「え?」

戒斗は、飲み終わったカップを置く。

二人分の代金をテーブルに置き、立ち上がった。

「貴様に教えておいてやる」

そして、ことりを見下しながら言う。

「貴様は、どう足掻いたところで誰にも成れはしない」

「何なんですか、それ……」

ことりは、戒斗の言葉を噛み締める。

自分は誰にもなれない。

それはたとえば、穂乃果のように元気で誰かを引っぱれるようにはなれないと。またたとえば、海未のように物事を冷静に判断して他を導けるようにもなれないと。

自分なんかじゃ到底彼女たちと並び立つことなど出来ない、そんな現実を改めて突きつけられているように思えた。

「……それは、私なんかじゃもうあの二人には追いつけないってことですか?」

叫ばずにはいられなかった。

しかし、戒斗は振り返らない。

「ねえ、どうなんですか。……答えてよ!!」

こつりの叫びが店内に響く。が、すでに彼の背中はその中にはなかつ

た。
店の入り口のベルが、むなしく彼女の心に響いていた。

第十六話 『目指すべき姿』

戒斗からの事情聴取を終えたことりは、その場でうつむいたまま座っていた。

戒斗に言われた言葉が、何度も心の中に響く。

『貴様は、どう足掻いたところで誰にも成れはしない』

ことりは、自分のことが嫌いだった。

いつも周りに流されるだけで自分がない。自分の意見もはつきりと言えない、そんな弱い自分が嫌いだった。彼女は、自分ではない誰かほかの人のようになりたかった。

穂乃果のように堂々と自分の思ったことを言えるような人に。

海末のように間違っているものは間違っていると、きちんと伝えられるような人に。

弱い自分など脱ぎ捨てて、他の強い誰かのようになりたかった。

だから、戒斗の放った言葉は、ことりの胸に深々と突き刺さったのだろう。

お前は、弱い自分のまま、変わることなどできないと。強くなどなれやしないのだと。

「おい、ことり。大丈夫か？」

「……」

うつむいたままのことりに、憐次は声をかける。

どうやら、違法にロックシードを所持していたというのは、無理やり渡されたとはいえ事実だったと理解した。

彼は、ことりがたびたび自分を出さずに我慢するところがあることは知っていた。

穂乃果や海末といえる時も、たびたび感じることはあった。

ことり自身完全にいやいやということとはなかっただろうが、穂乃果が何かをやるうと言いだせばそれに笑って従い、彼女と海末の意見が対立すれば間に入ってなだめていた。

しかし、それはことりの性質からなるもので、いくらか折り合いをつけているものだと思っていた。

まさかロックシードなんて力を欲するほどのコンプレックスを抱えていたとは思っていなかったのだ。

うつむいたままの彼女をどうにか慰めようと言葉をえらぶ。いや、そもそも慰めることも正しいことなのかどうか悩みながら、せめて気分を晴らせればと続けた。

「なあ、ことり。気にすることねえって、あんなの。それより、ここのフルーツすげえおいしいんだぜ。気分転換に……」

「……構わないで」

「いや、でも——」

「——お願いだから、一人にして！」

ことりは、テーブルを手で叩いた。

店内に、どよめきが走る。

ことりの腕がカップに当たり、そのカップが床を鳴らしたからだ。

「……ごめんなさい」

「こ、これくらいいいじょうぶだ」

ことりは、落ちたカップを見て、またうつむいてしまう。

戒斗に言われたことに落ち込むだけでなく、それによつてたまつた苛つきをもにぶつけてしまった事実がさらに追い打ちをかける。

落ち込んでしまった彼女を見て、憐次は、問題ないと言いながら落ちたカップを拾う。しかし、その顔は少しひきつっていた。

それをことりは、見てしまっていた。

「でも、お願いだから。こんなことりのことなんか、放っておいて」

「そんなこと、できる訳ないだろ。悩んでることがあるんなら、話してくれよ。俺じや全部を解決なんてできないかも知れなけど、話すこともできないくらい頼りないか？」

「そうじゃ、ないの。……全部ことりが悪いの」

「何だよそれ」

憐次は、ことりのはつきりしない物言いに若干イライラした様子で問う。

「ことりは、彼の様子からそれを感じ取り、観念したように話し出す。「レンジ君も幻滅したでしょ？」」

「だから何が」

「ことり、裏ではいつもあんなことばかり考えてた。他人のすごいところばかり目に入って、うらやましがって、妬んで。いつしかことり、穂乃果ちゃんや海未ちゃんのことともそう言う目で見てた。友達に対しても、愛想笑い浮かべてた。ことり、最低なんだよ」

「気にすること無いだろ。みんな、他人に対して少なからず嫉妬とかしたりするもんだ」

「でも、それだけじゃない。穂乃果ちゃんや海未ちゃんは、ことりにたくさんのものをくれる。今回だって、こんなことりをスクールアイドルに迎えてくれた。なのに、ことりは始まってすぐ怪我しちゃうし、全然練習にはついていけないし。ことりは、まだ二人に何も返せてない。こんな、何もできない私と一緒にいても何の得にもならない。ことりと一緒になんて、いない方がいいんだよ」

ことりは、いつもそのことがひっかかっていた。

友達とは、こんなものだっただろうか。

妬んで、羨んで、裏でそんな醜いことを考えているものが、果たして誰かの友達だといえるのだろうか。

ことりは、友達とはもつときれいな関係だと思っていた。

隠し事などなく、互いが互いのために素直に動ける。

そんな関係だと、ことりは思っていた。

だとすれば、ことりはいったい何なのだろう。

穂乃果や海未、隣次に対し、心の内に誰にも言えない気持ちを隠して接していたことりは、彼らにとってのなにと言えるのだろうか。

「ことりー」

隣次は、うつむいたままのことりの肩をつかんで自分に向き直らせる。

ことりの目と隣次の目が合う。隣次のにらみを利かせた瞳に、ことりは息を飲む。

ことりが自分を殺して他人に合わせていたこともあり、隣次と喧嘩をすることなど今まで一度もなかった。

それだけに、隣次が本気で怒っていることが分かった。

初めて見る憐次の怒りの表情に、ことりは体が固まってしまった。怖くて目をそらしたかったがそれは叶わない。

「ことり。お前、それ本気で言ってるのか」

「ほ、本気だよ。こんな、なんの取り柄もない、役にも立たないことりは、穂乃果ちゃんたちのそばにいないほうがいい」

「そうかよ」

憐次は、がたんと音を立てて立ち上がった。そして、机に両手をたたきつけた。

「……お前がそんなに損得勘定で物事決めるってんなら、はつきり言ってやるよ」

ことりは、その言葉に思わず目を瞑る。

嫌われた。

当然だ。裏で自分がどういふふうに見ていたか知られてしまったのだ。今までの笑顔にも偽物が紛れていると知られてしまったのだ。嫌われて当たり前なんだ。

それを面と向かって言われるのが怖い。

でも、それと同時にそれでいいのかもしれないと思っていた。

こんな何にも出来ない、何も返すことのできない人間は、一人でいるのがお似合いだ。

そう思つて、ことりは覚悟を決める。

彼女が覚悟を決めた直後、憐次は口を開いた。

「俺にとって、いや、穂乃果や海未だつてきつと同じこと思ってるはずだ」

そうだ。もし、穂乃果たちも事実を知ったなら、憐次と同じように自分のことを嫌いになるに違いない。そうことりは解釈する。

だから、その言葉に続くのは、「大嫌い」の一言だ。

が、憐次は、彼女の予想とは異なつた言葉を口にした。

「俺たちにとってはな。ことり、お前がいる事、ただそれだけで十分すぎるくらいメリツトなんだよ」

「えっ」

ことりには、うまく理解できず呆気にとられる。

いるだけでメリット？ 得？ 何を言っているのだろう。

自分に価値などないと思っっていることりにとって、それは理解のできない言葉だった。

ほかんとしていることりを見て、憐次はため息をつく。

理解できない様子のことり。いや、本当はわかっているはずだ。わかっていはずなのに追いつめられてわからなくなっているだけ。

そう感じ取った彼は、ことりへ問う。

「ことりは、穂乃果の人を引っ張っていく力をうらやましいと言っただな」

「そ、そうだけど……」

「なら、お前が穂乃果と友達になったのは、そんな力を持つてたからか？」

その問いにことりは反応して顔を上げる。

「……そんなことない」

「海未の冷静に物事を判断する力が妬ましいって言ってたな。海未と友達になったのは、そんなものを持つてたからなのか？」

続く問いに、ことりは唇をかみしめた。

「そんなわけない。そんな持つてるとかで友達を選ぶわけないじゃない！」

「……だよな」

憐次は、最初からわかっていた思いながら、少し安心したように笑った。

「俺だってお前から見ててうらやましいって思ってることたくさんあるぞ。穂乃果の底抜けの元気もそうだし、海未の自分に厳しいところもそうだ。ことりのおおらかで何でも受け止めてくれそうなところとかもすごいって思う」

「わ、わたし……、そんなこと……」

「穂乃果のやると決めたら一直線に進めるところとか羨ましい。海未の矢を射るところなんてすごいかつこよくて憧れる。それにことりも衣装のデザインしたり実際に作ろうとしてたり、俺にできないことができてすごいって思ってる」

「ことりは、そんな。．．．．．すぐくないよ」

ことりは否定する。自分にそんなすごい力などないと。

自分のすごいところをきちんとわかっている人なんてほとんどいないだろうと隣次は思う。

きつと、穂乃果や海未も、ことりが挙げたようなことをすごいことだなんて思っていないだろう。その人にとって、それが当たり前だから。

自分で自分のことをすごいなんていう人は、よほどの自信家でなければいけないだろう。その点で言えば、ことりが自分はすぐくないなんてないと否定することもある意味正常であるといえるだろう。

自分にいいところなど無いということりに、隣次は知ってもらいたいと思う。

少なくとも自分は、ことりに対してうらやましいと思っていることがたくさんあるということ。

でも、いまはそれを置いておく。

今それを言えば、少しややこしいことになる。

今彼が言いたいことはもつと別のことだった。

「でも、俺はお前たちが何をできるからとかそんなことで友達になった覚えは無いぞ。ことりだってそうだろう？」

「私は．．．．．」

ことりは考える。穂乃果、そして海未と友達になったときのことを。

が、思い出せなかった。いや、きつかけがあつたのは覚えている。

でも、それはきつかけにすぎず、どこから友達じゃなくてどこから友達なのかという境にはならなかった。

きつかけというのも、今になったからこそ言えるというだけのもの。

当時のことりたちは、それがきつかけであつたことも気づかなかつただろう。

「見つけたいところも悪いところも、ほとんどが友達になって気づいたことがほとんどだろう？ だいたい友達なんていつの間にか

なってるもので利益になるとか考えてなるもんじやないんだよ。だから、ことりがされたことに対して何かを返したいと思うのは勝手だけど、返すことができないからって友達じゃなくなるなんてありえない。少なくとも俺たちは、もっと別の何かでつながってるんだからさ」

「別の、何かって?」

「そりゃ……」

「……?」

隣次は、答えようとして目をそらす。

ことりは、そんな彼をみつめていた。

所詮さっきまでの言葉は自分を慰めるための言葉だったのかと、視線で彼に問う。

こどりの視線を感じ、隣次は焦る。

彼は、別に答えられなくて目をそらしたわけではない。が、ここで黙ってはことりをまた不安にさせてしまう。

隣次は、恥ずかしさをかなぐり捨てて口にする。

「俺がお前たちと友達になったのはもつとこう、なんていうか。自然体でいられるって言うか、一緒にいて安心するって言うか、居心地がいいって言うか……」

「……レンジ君?」

「——ああ、もうよくわからねえけどそんな感じだなれないことを言うもんじやない。」

隣次は、再び目をそらしてしまった。

隣次は、自分の顔が熱くなつていくのを感じ、照れ隠しに頬を掻く。掻きながら、隣次は横目でこどりを確認する。

隣次の身悶えするくらい恥ずかしい台詞を聞いたことりは、

「……」

黙ったまま、うつむいていた。

「ことり。ええとな、今は……」

慌てて隣次は、説明を加えようとする。

そんなとき、こどりの背中が小刻みにふるえた。

「ぷっ」

「なっ」

「ははは、ははははっ」

「笑うなよ」

「だ、だって、よくわからないって……」

そして、抑えていたものが決壊したように、笑い出した。

恥ずかしくはあったが割と真剣に言っていたつもりで憐次は、さらなる羞恥でむず痒さに襲われた。

のたうち回るほどの恥ずかしさをどうにか抑えて体をふるわせる憐次。それを見て、ことりは、再び笑ってしまう。

それは、目から涙が出てしまうほどだった。

「もう、笑うなよ。あれでも、真剣だったんだぞ」

「わ、わかつてるよ。ごめんね。でも、ぷぷぷっ」

「ことり。もういっせ殺してくれ」

そうやって笑うことりだったが、内心それが真理なのではないかと思っ

思った。
結局、友達になった始まりを考えてみても明確な理由が思いつかなかったからだ。

始まりを覚えていないなんて、いよいよ友達失格ではないかと思っ

ていたところに憐次の言葉を聞き、なにか吹っ切れた気がしたのだ。
どこかすがすがしそうな笑顔になったことりを見て、憐次はまだまだ燃えるように熱い顔で笑った。

つたない言葉ではあったが、彼女の笑顔を見て、何かを伝えられたような気がしたからだ。

「とにかく、ことりが変わりたい、強くなりたいて思うのもわかる。俺だって、変わりたいって。変身したいって思うことは何度もある。もつと強くて何でもできる自分になりたいってな。でも、ことりがたとえ自分に何の価値もないって思ってたとしても、俺たちにとっては大切な友達なんだよ。俺たちがことりから離れていくことなんて絶対に無い。……ことりは、違うか？」

「ううん、そんなことない。……私にとっても、3人とも大切な友達だ

よ」

「だったら、不安に思うことなんてない。強くなりたいたら、少しずつ強くなればいい。ことり一人じゃ無理なら、俺たちが手を貸すからさ」

「レンジ君、ありがとう。……ありがとう！」

ことりは、いままでいっただい何を恐れていたのかと思うくらいすがすがしい気分だった。

実際不安はある。本当に自分は、胸を張って彼、彼女たちの友達とすることができるとのこと。

でも、たとえ今は胸を張ってそういうことができなかつたとしても、言えるようになればいいと思うようになっていた。

だって、自分自身が彼女たちの友達でいたいと望んでいるのだから。

そう考えると、不思議と自分がこれからどうすればいいのか。どこを目指せばいいのか。ほんの少しだけではあるがわかつた気がした。

そして、今何をしなければならぬのかはつきりとわかつた。

「ことり。穂乃果ちゃんたちのところに行かなくちゃ」

「ことり、大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫だと思う。無断で練習に出なかつたこと、謝らなくちゃ」

さつきまでうつむいてばかりだったことりが、しっかりと顔を上げて隣次を見る。

そのまっすぐな瞳を見て、もう大丈夫だと確信した。

「ああ、そうだな。行ってこい。俺はこれからまだバイトがあるけど、がんばれよ」

「うん。行ってくる」

まずは、今日無断で練習をさぼつたことを謝らなくては。

ことりは、決意を胸に立ち上がった。

隣次は、そんなことりの背中を押す。

自分の言いたいことも言えずに生きてきたことりにとって、自分から自分の非を打ち明けることも、相当勇気の居ることだろう。

でも、それはことりが自分の殻を破る為に必要なことだろう。

隣次としては、見守ることはできないまでもせめて学校まではついて行きたかったが、生憎今は仕事だ。

今でさえ、無理やり休憩をもらっている状態だ。これ以上仕事を放っているわけにはいかない。

だから、ついてはいけないまでもその一歩が彼女の言う強くなるということにつながると考えエールを送ったのだ。

「おい、レンジ。まさか女の子ひとり行かせる気じゃないよな」

「いや、おやつさん？」

ことりが穂乃果と海未の元へ向かおうとしていたそのとき、板東が顔をのぞかせた。

「俺もうすぐ休憩終わりなんですけど——」

「——何言ってるんだ？ まだ、あと一時間くらい残ってるぞ」

板東は、そんなことを言い出した。

そんなわけないと言いそうになった隣次だったが、板東の顔を見てその言葉を飲み込んだ。

板東のウインクによる合図を見たからだ。

彼は、本当ならついて行きたい隣次のことを思っただけのことを言ってくれたのだ。

それならと、隣次は板東の粋な計らいに感謝する。

「そうっすか。なら、お言葉に甘えて——」

「——まあ、その分給料減るけどな」

「ちよっ、板東さん!？」

「いいから行ってこい」

「いや、いいっすけど。いいんですけど」

それは、仕事していなければ給料が減るのは当たり前で、そこには別に異論は無かった。

しかし、それを面と向かって言って、現実を突きつけなくてもいいだろうと思ってしまった。

隣次は、どこか釈然としない気持ちを抱えたまま、ことりと店を後にした。

「レンジ君。本当に無理しなくていいよ。一人で大丈夫だから」

「いや。これは俺が行きたくて行くんだから、ことりこそ気にしないでいいんだよ」

給料が引かれるという言葉聞き心配することりに、隣次はそう答えた。

実際、関わってしまった手前その後どうなるか気になってしまったため、仕事などで集中できてはいなかっただろう。

別に、これで彼女たちの仲が悪くなるのではないかと心配しているわけではない。ただ、一度口をはさんだということは、少なからず影響を与えてしまったということだ。関わった責任として結末を見届けたいと考えたのだ。

「でもまあ、あれこれ自分勝手に引っかかったけど、ことりには今のままで変わらないでほしいかな」

「な、なんで？」

さつきまで変わろうとしている自分の気持ちがかかると言っていた隣次が主張を一変させたため、ことりは足を止めた。

今のまま変わらないと言うことは、ことりにとって弱いままで居ることと同じだ。

さつきまで、変わりたいと思う気持ちをわかると、変わるための手伝いもしてくれると言ったのだ。

隣次の返答によつては、さつき店で聞いた台詞も意味を変えてしまう。

だから、彼の真意を確かめるために聞き返した。
すると、隣次は慌てた様子で問いに答えた。

「いや、ことりが強くなるうとしてることを否定するわけじゃないだ。変わりたいと思うのがわかるつて言うのも本当だし」

「だったら何で……」

「……ただ、今のままでも十二分に最高の友達だし、今のことりのいいところをなくしてほしくない、つて思ってたんさ」

「レンジ君……。そっか。なんとなく、わかった気がする」

聞いた時には、店での話と矛盾しているように思えた台詞だったが、今は納得できた。

「ありがとう、レンジ君。大切なこと、気づかせてくれて」

「いや、大したこと言っちゃいないよ。結局、答えならことりの中にあつた訳だしな」

「ううん。レンジ君がいなかったら、きつとずっと気づけなかった。このまま、間違つたままだったよ」

「……間違つたまま、か」

「ん、何か言つた?」

「いや、何にも」

憐次が遠い目をしていたため、ことりは首を傾げた。

でも、憐次がなんでもないとこのだから何でもないのでだろうと納得し、気には留めなかった。

「でも、本当にレンジくんのおかげ。何かお礼しないとね」

「礼なんていいよ。つてか俺、大したことしてないし」

「いいの。ことりがそうしたいんだから。何でも言つて?」

ことりに言われ、憐次はすこし考える。

するとすぐに、名案が浮かんだ様子で顔を上げた。

「そうだな。そんなにお礼したいって言うなら。早くことりたちの晴れ舞台、見せてくれよな」

憐次がそう言うと、ことりの表情はぱつと華やいだ。

「うん。正直まだ自分には全然自身は持てないけど。でも、ことりを信じてくれるレンジ君のためにもがんばってみる。大切な友達の頼みだもんね」

強くなりたいたいという気持ちは変わらない。みんなと比べて自信を持てることがないことも、今のままではだめだという気持ちも、なくなつたわけではない。

でも、今持つているいいところをなくしてほしくないという憐次の言葉で少しだけ考え方が変わった。

自分ではそのいいところはわからないけど、誰かがいいと言ってくれるなら、それは自分にとって大切なもの。

なら、それを失わないように、今の自分のまま、少しずつ強くなる。

「レンジ君」

「ん、どうした？」

「……もし、ライブを無事成功させられたら、ことりもすこしは強くなれるかな」

ことりは、なんとなしに聞いてみた。

もし、隣次が強くなったと少しでも認めてくれるなら、よりライブに向けて練習を頑張れると思ったからだ。

さつきまでの言葉から、だいたい答えのわかる意味のない問いだ。でも、言葉にして聞くだけでも力をもらえる。

そんな思いからの問いだった。

そのため、彼女の問いに対する隣次の行動は完全に予想外のものだった。

「——ことり！」

「——へ？」

隣次は突然ことりを抱きしめたのだ。

いきなりなことでの思考が追いつかない。にもかかわらず、心臓だけはその鼓動を早める。

頭が湯気がでるほど熱くなり、くらくらする。

ぐるぐると回る視界は、景色を映しているようで何も見えていなかった。

まるでこの世界に自分と彼の二人しかいないような錯覚に陥っていた。

「くっ……」

彼は、ことりを抱きしめた状態で、その場で半回転した。ちょうど自分とことりの位置を入れ替えるように。

その不自然な動きに、ことりは若干の違和感を抱いた。

その違和感のせいか、ことりは視界にあるものを写した。

彼女の視線は彼を越えてその背後を捉えていた。

そして、彼の背後のものを確認したことで、彼の行動の本当の意味がわかった。

彼の肩口から見えるオレンジと紺色。大きく広がった二本の角。人のような二足歩行でありながら、人とは形容しがたい造形。彼の背後にいたのは、一匹の異形の獣、インベスだったのだ。

二足歩行で立つその獣は、鋭い爪をもつ右腕を高々と振り上げていた。

「レンジく——」

早く逃げないと続けるより先に、インベスの腕が振り下ろされる。

ことりの声は、衝撃とともにかき消された。

「がはっ」

「きゃあ」

まるでバットで殴られたような衝撃を受け、ことりと憐次は為す術もなく倒れた。

憐次が覆い被さるように倒れたため、ことりは地面に背中を打ち付けた。幸い憐次が腕で頭をかばうように抱えていたため、後頭部を強打すると言うことは避けられたが、その分叩きつけられた背中への痛みは涙がこぼれた。

「……はやく、にげなきゃ」

インベスからの攻撃を受けてすぐは痛みに動けなかった。

が、数日のうちに凶暴なインベスに遭遇していた経験がすぐに冷静な判断をさせた。

「レンジ君、早く起きて！ 逃げないと」

インベスの攻撃を直に受けた憐次は、いまだ呻いていた。

憐次が庇ったおかげでワンクッション置いた衝撃しか受けていないことりに対し、直撃を受けた憐次の方がダメージが大きかったのだろう。

ことりを守るように覆い被さりながらも動くことができずにいた。

憐次が動かなければ、ことりも逃げることはできない。

インベスと対峙した時の最善手は逃げることだ。

人間の数倍の力を持つインベスに丸腰の人間がかなうわけがない。そして何より、突然襲われたためユグドラを装着できていないのだ。

ことりと憐次のユグドラはバックの中。

インベスがすでに目と鼻の先にいる状態の今、悠長にバックから取り出している暇はない。とにかくインベスと距離を取らなければ、ユグドラを装着することもその場から立ち去ることもできない。

「レンジ君、ごめんね」

そのためことりは、呻く憐次を自分の上から退かそうした。憐次が動けない今、自分が動かなければ次につながる行動がとれないと判断したので。

彼女が肩と背中に手を回して体を押すと、憐次は力なく彼女の横に転がった。

背中を打ち付けてしまわないよう回していた手を引き抜き立ち上がろうとした。

そのとき、違和感を感じた。

起き上がろうとしたとき、手にぬるっとした感触が走ったのだ。

ことりは、自身の手のひらをみる。すると自分の手がべつとりと赤くぬれていたのだ。

最初は自分の血かと考えた。強く地面に叩きつけられたのだ。そのときに怪我をしたのではないかと思ったのだ。

しかし、全身に鈍い痛みはあるものの、手のひらを赤く濡らすほどの傷の痛みではない。

「レンジくん!」

ことりは、はっと何かに気づき、憐次をうつ伏せにした。

彼女は、憐次の背中を見て、息をのんだ。

憐次の衣服は三本の太い線が入っており、露出した肌は切り裂かれ、赤い血があふれ出していた。しかしそれだけではない。

「なに、・・・これ?」

傷口付近に緑色に光る何かを見つけた。発見してすぐは緑に光る点でしかなかったが、見る見るうちに大きくなり、双葉が顔を出した。

それは、ただ体に何かの植物がくっ付いたというわけではなく、傷口から生えてきているように見えたのだ。

第十七話 『いつか、必ず——』

「なに、……これ？」

何かの植物が生え始めている傷口を見て、ことりは息をのんだ。

それは、ただ単に傷口に葉が付いただけというわけではない。緑色の小さな粒から成長し、まさに生えてきていたのだ。

ことりには、それがなんなのか、どういふことなのかわからない。

しかし、突如体から植物が生え始めるといふ異常を前に、本能でそれが隣次にとつてよくない何かだということを直感した。

「……ぐっ。無事か？」

「隣次くん!？」

自分を心配する声に、ことりは隣次を見た。

彼が目を見ましたようだ。

彼の声を聞いて、このままその声を聞けなくなるという一番最悪な状況ではないことに安堵した。

しかし、気が付いたのはよかったが、状況はよくはなっていない。いや、むしろ悪化していた。

彼の傷口は、すでに一面が緑色に発光している状態だった。

「ことりは大丈夫だけど、レンジくん。背中が」

「俺はいい。それより、……早く逃、げろ」

隣次は、ことりを払いのけた。

彼は、実際に傷口を目にしたわけではなかったが、自分の体の異変には気付いていた。

体がひどく痛んで動けない。また、痛みと共に何か別の物が傷口を起点に広がっていくのを感じていた。

自分の体を侵食し、別の何かへ変えていこうとするような、そんなものを感じていたのだ。

だから彼は、自分をおいて行けという。まるで、自分はもう手遅れだというかのように。

「いやだー」

しかし、ことりは隣次の言うことに従わなかった。

それどころか、ことりはインベスの腕に飛びついた。

「ことり、なにしてんだよ。はやくにげ——」

「——いやだよ。それ以上言わないで」

ことりからは聞いたことのない強い口調に憐次は押し黙った。

「レンジ君を置いてなんていけない。こんな私のこと、友達だつて言ってくれたんだもん。大切な友達をおいていける訳ない。それに、約束したでしょ？ いっぱい練習して、早くライブを見せるって！」

背中痛みから動けない憐次をしとめるために近づこうとするインベスに、ことりは必死でしがみついた妨害する。

インベスは女子高生に押さえられる存在ではない。インベスが腕を振り上げると、いとも簡単にことりの体は持ち上がってしまった。

しかし、ことりはしがみついた腕を放さない。

もはや、ぶら下がっているだけで妨害にすらなっていない。それでも、ことりは放さない。

自分に大切なことを気づかせてくれた。すぐに弱気になりそうな自分の背中を押してくれた。

そんな彼を見捨てて逃げるなんてことは出来はずがなかった。

「だから、ことりは、いっしょににげ、ーきゃあー！」

しかし、無情にもインベスは、ことりが掴まっている腕を振った。ことりは、耐えきれずに振り払われ、その体は地面に叩きつけられた。

邪魔者を追い払い、インベスは一番弱った獲物へ標的を戻した。

「だめー！」

一歩ずつ、うなり声を上げながら、倒れたままの憐次へと近づいていく。

「やめてええええええ!!」

「はっ」

シカインベスが腕を振り上げ、ことりが絶叫したそのとき、打撃音とともにシカインベスは後ろへとね飛ばされた。

「どうして……あなたは」

シカインベスの腕が憐次へ振り下ろされると思い、目をつぶったことりは、インベスの苦悶の声に目を開けた。

インベスは、憐次から数メートル離れたところで倒れていた。そして、憐次とインベスの間には、立ちはだかるように黒いスーツの男がいた。

まわりつくジャケットの裾を払い、インベスのいる方向を向く男。

その男をことりは知っていた。

「駆紋、先生……」

彼女の前に現れたのは、音の木坂高校の教師にして、ユグドラシルのインベス対策班のリーダー。

駆紋戒斗だ。

インベスを蹴り飛ばしてすぐ、ことりと憐次を見る。

インベスを止めるためしがみ付いたものの振り払われて地面に突っ伏すことりと背中を血に染めて倒れている憐次を見て、状況を確認した戒斗は、耳に付けたインカムに手を当てた。

「救護班、大至急急行しろ」

通信で部下へ指示をとばす。

戒斗は、憐次の背中傷を一瞥した。

彼がひどい怪我を負っているにも関わらずことりがほぼ無傷であることから、彼がとった行動を理解する。

そして、ことりのとった行動は、実際に見ていた。

戒斗は、呆れた目でことりたちを見下ろした。

「まったく貴様らは、力もないくせに無茶ばかりする」

「すみません……」

戒斗の言うとおりであり、ことりは返す言葉もない。

が、今のことりは、店で戒斗に一蹴されたときの彼女ではない。

まだ弱くてなんの力も無い自分でも、強くなることをあきらめない。誰かを見て自分との差に絶望しても、何度だって立ち上がって見せると。ことりは、戒斗から視線を逸らさずまっすぐ彼を見据えた。

「だが、なかなか骨がある」

「え？」

話したことは数えるほどしかないが、ことりは戒斗を人を気遣うことなどしない冷たい人間だと認識していた。

それだけに、全く予想外の台詞に素っ頓狂な声と共に顔を上げた。いつものごとく冷たい視線を向ける戒斗の表情は変わらない。

しかし、なぜかことりは、こちらを睨む瞳の中に暖かな何かを感じた。

「お前は圧倒的な力を前にし、しかし屈しなかった」

戒斗は、ジャケットの内ポケットから錠前を一つ取り出した。

それをことりに入れてよこす。

ことりは、突然のことに反応が遅れるが、何とか落とさずにそれを受け取った。

「それを持っておけ」

「でもこれ、……ロックシード」

「当たり前だ。それで身を守れ」

戒斗は、言い終わるとインベスの方へ視線を向ける。

彼に蹴り飛ばされたシカインベスは、すでに起きあがり彼をにらんでうなり声を上げていた。彼に攻撃されたことで相当腹が立っているようだ。

シカインベスは、頭から伸びる自慢の二本の角を戒斗へ向けて走り出した。

それに対し戒斗は、向かってくるシカインベスを注意深くうかがっていた。

彼とシカインベスが肉薄する。その瞬間、シカインベスの頭を横から押して角の攻撃を避けるとともに足を引つ掛けて体勢を崩させた。

「ことり、これは使えません」

バロンに一方的にロックシードを渡されたことりは、自分の手の中にあるロックシードを見つめる。

それは、力を得たいと望み手を出したものと同種のものだ。

でも、今のことりは、以前のことりのように何のためらいもなくそれを手にすることはできなかった。

「これは、ことりの力じゃありません。これは、借り物の力です。戒斗

さんも言ってたじやないですか。ほかのものに頼った力じやダメだつて」

ついさつきまで、ことりの強くなりたいたいという気持ちを否定するものだと想っていた言葉も、今のことりにはその本当の意味が分かった。

努力もせず、安易に力を手に入れたところで、強くなれるはずがない。努力し、自分自身を高めて得た力でこそ真に強くなれるのだと。だから、今のことりにとって、ロックシードは安易に手に入れられてしまう忌むべき力だった。

戒斗と憐次との会話の中で変化した考えが、ロックシードを拒絶していた。

「ほうっ。」

ことりがロックシードを拒絶したのを聞き、戒斗は意外そうに声を上げた。

インベスと距離を取ったバロンは、ことりの方へ顔を向けた。

「そうだ。それは借り物の力でしかない。だが……、それを言うなら俺のこれもただの借りものだ」

戒斗は、懐から取り出した戦極ドライバーを腰に当てがいながら、何のためらいもなくそう言い放った。

ことりは、耳を疑った。

戒斗は、戦極ドライバーとロックシード、アーマードライダーへと変身する力を自分の力ではないといったのだ。

倒したインベスの数は、数えることを断念するほどだろう。

そんな、多くのインベスを倒し人々を救ってきたであろう彼が。

ついさつきも、ことりに対し強さを説いた彼が、自身が振るう力が自分の力ではないというのだ。

ことりは、矛盾して聞こえる台詞に納得がいかず、続く言葉を待っていた。

「足りない力を補うことは恥ずべきことではない。人間は、もともと道具を使う生き物だ。だが弱者は、道具で得た力を己の力だと錯覚し、自身の力を磨くことを忘れる」

戒斗に蹴り飛ばされたシカインベスが、戒斗の後ろから迫る。爪を剥いて突き出された左腕を、彼は脇に挟んで受け止めた。

「簡単に手に入る力ならいくらでもある。そのロックシードもその一つだ。だが、その力の善し悪しを決めるのは、その力を御する為の強さだ」

「強さ？」

「力と強さは別物だ。そして真の強さとは、自分に足りないものを自覚したさらにその先にこそある」

シカインベスは空いている右腕を振り上げる。

戒斗は、その腕が振り下ろされる前にインベスの胸へ肘鉄を入れて怯ませると、正対するとともに顔へ拳を突き出した。

彼の拳はインベスの顎をとらえ、インベスは地に伏した。

「この俺の力も、まだ借り物でしかない。だがいつか、真に自分の力を手に入れる。全てを圧倒し、屈服させられるだけの力を」

なおも立ち上がるとするインベス。

対して戒斗は、数歩下がり、そして走り出す。

立ち上がり、目標へねらいを定めようと顔を上げるインベス。そのインベスへ、助走を付けて跳び蹴りを放った。

ちょうど胸に蹴りを受けたシカインベスは、十数メートル転がった。

「つ、つよい……」

生身ではまず太刀打ちできないはずのインベスを相手に、戒斗は生身で圧倒して見せたのだ。

生身である以上、インベスを完全に倒してしまえるほどの力があるわけではない。当然、力比で勝てるわけもない。

それでも戒斗は、インベスの攻撃をいなし、避け、相手の体勢を崩した隙に攻撃を加え、蹴り倒して見せたのだ。

それが、戒斗が磨いた力だと言うことにことりはすぐに思った。

そして、アーマードライダーの力も借り物でしかないと言った彼の言葉が彼の本心から出た言葉であったことに気付いた。

人間を圧倒するインベス。

そのインベスを御する力を持つロックシードでも人間を越えたような感覚を使用者に与える。それが、インベス殺す力をもつアーマードライダーの力であれば、その全能感は計り知れない。

しかし、そんな力に触れながら、戒斗は自分を鍛えることを怠らなかつたのだ。

「だから今は、この力で最強を目指す。変身!!」

地面に伏すインベスを見下ろしながら、戒斗は、バナナの紋様が刻まれた錠前を構える。

自らが借り物と呼んだ力。

彼は、それをことりの前で戦極ドライバーに固定する。

人間であるため、インベスを完全に倒すまでには至らない。そのため、最終的には戦極ドライバーを使わざるを得ない。

しかし、彼にはそこに止まっていようなどと言う甘い考えはない。ことりは、彼の背中が自分に語りかけているように見えた。

本当に重要な力ではないというように。

所詮道具は使う者次第であると、自身の姿でことりに示すように。

カッティングブレードに手を掛け、回転させる。

『カモン、バナナアームズ！ ナイトオブスピア!!』

頭上にクラックが開き、バナナ型の塊が落下する。

戒斗の頭に覆いかぶさったアームズが展開し、彼の姿を騎士へと変えた。

完全にアーマードライダーの姿へと変わった戒斗は、すでに立ち上がっていたインベスめがけて駆けだした

「戒斗先生……」

ことりは、膝に手をつけて立ち上がる二度もインベスの攻撃を受けてふらつく体を何とか立たせた。

視線をシカインベスと戦うバロンから、手に持つロックシードへ目を向けた。

それは力だ。

だれでも手にすれば簡単に扱える力。

先ほど自分が力を得ようと安易に手を出したもの。

が、今、ことりの目の前にあるのはことりにとってただのロックシードでしかなかった。

見え方が変わったのは、ことりの求めるものが、目指すものが変わったからだ。

「これはまだ自分の力じゃない。でも、今の力じゃ誰かを、自分すら守ることはできない」

ことりは、ロックシードを強く握りしめる。

悔しいが、ことりには、インベスと戦うことはおろか、隣次をつれて逃げるだけの力もない。

「私は強くなりたい。だからそのためにも、こんなところで死ぬわけにはいかないし、レンジ君を助きたい」

ことりは、そばに転がっていた鞆に駆け寄り、中からユグドラを取り出した。

「お願い。レンジ君を助けるために力を貸して」

ことりは、心からの叫びと共に、ユグドラを右腕にあてがった。

側面に存在するスリットが黄色く光り、彼女の二の腕に巻き付いた。

変化を経てからも、一度もその真の姿を見せなかったことりのユグドラ。しかし、黄色いバンドが腕に巻き付くと共に、ユグドラ自体も変化した。普段のユグドラには存在しない刀のようなパーツ、カッティングブレードが出現した。ことりの叫びに応え、ついにその真の姿を現したのだ。

「ありがとう。応えてくれて」

彼女の頬に一筋の涙が伝う。が、ことりはすぐにそれを拭いた。

今は泣いている場合ではない。

ことりは、覚悟と共に戒斗とシカインベスが戦っているところへ体を向けた。

「誰かを守るため、そして私が、私のまま強くなるために……。今はこの力、お借りします。変身！」

ことりは、先ほど渡されたロックシードを解錠する。

ロックシードに描かれていたのは、エメラルドに輝く宝石のような果実の房。その果実の名が、ロックシードの解錠とともに宣言される。

『マスカット！』

ことりの頭上に、円上に配置されたチャックのようなものが出現し、空間にぼつかりと穴をあける。すると、その穴からエメラルドの輝きを放つ固まりが現れる。

その形は、ロックシードに描かれた果実を象っていた。

『ロックオン！』

右腕に取り付けたユグドラに、ロックシードを固定する。

そして、ユグドラに新たに出現したカッティングブレードでキャストパットを切り開いた。

『カモン、マスカットドレス！ オネストハート!!』

頭上に浮いていたエメラルドの宝石のような玉がいくつも集まった果実を象った光の塊がことりのもとへ降り、彼女の体を包みこんだ。

「はあっ！」

彼女が自身をつつむ光のベールを払い去ると、ベールに隠された姿を披露する。

エメラルドグリーンを基調とした衣装の上に白いエプロンドレスを身に着けている。頭には、カチューシャに付いたレースが風になびいている。彼女の特徴的なサイドテールを作る髪飾りには、マスカットの果実が施されていた。

スカートは膝が出るくらいの長さになっているが、その姿はまさにメイドだった。

「なんでメイド？ ……でも、ちよつとかわいいかも」

初めて自分の姿を確認したことは、自身の恰好に首をかしげる。が、彼女が衣服のデザインや製作に興味があることもあり、自分が纏う衣装に少しだけ顔を緩ませた。

しかし、すぐに真剣な表情へと戻る。

事態は一刻を争うのだ。自分の姿に見とれているような時間はな

い。

「レンジ君、少しだけ待ってね。すぐに助けるから」

ことりは、後ろで痛みにうめいている隣次に呼びかけるとシカインベスに向き直る。

「ふん。お前も、成ったか」

「はいー」

ことりの変化を感じ取ったのか、シカインベスは様子を見るように距離を取っていた。

そのため、ことりは落ち着いてシカインベスの様子を窺いながら、「来て、マスカロットー」

手を前へかざす。するとその呼び声に呼応し、緑色の果汁がはじけると共に、彼女専用の武器が姿を現す。

彼女の手握られたのは、白い棒。その両端には、マスカロットの房があしらわれている。その時点では少し短く感じる長さだったが、両端のマスカロットがさらに外側へ飛び出し、ことりの身長を越えるくらいの長さへと変わった。

ことりはそれを長年使ってきたかのような慣れた手つきで、出てきたロッドを体の周りで振り回す。

ことりに棒術の経験などないが、ユグドラにインプットされたデータからなるサポートによって、素人に彼女に達人さながらの動きを可能にしている。

「行くよー」

ことりが気合いとともに走り出した。

隣次を助けるためには、一分一秒でも惜しい状況だ。

ことりも穂乃果たちと同様、インベスを殺すという選択肢がないため、この場を収める方法はただ一つ。インベスを元の世界へ帰すしかない。

早く決着をつけるのには、インベスに時間を与えずに一気に決めてしまおうしかない。

そう考えた彼女は、先手必勝とばかりにシカインベスへ突撃する。

ことりの行動に気づいたシカインベスは、ことりを迎え撃つために腕を振り上げた。

ことりは、シカインベスに対し、ロッドを突き出した。

「たあー」

インベスは、くぐもった声を発した。

もし人間なら疑問符が聞こえてきそうな鳴き声をシカインベスが発したのは、振るった腕が空を切ったからだ。

その原因は、インベスの胸に突き立てられた白い棒。

ことりは、突き出したマスカロットで、シカインベスの攻撃の当たらない距離を確保していたのだ。

が、ただ攻撃を受けないようにするだけでは終わらない。

その状態からさらにマスカロットを突き出して押し戻した。インベスがよろけるとすぐさま右腕と腰で棒を固定、左足を軸に一回転するとともにマスカロットを横薙ぎにふり、シカインベスを叩き飛ばした。

インベスは、広場へ向かう階段の向こうに転がっていった。

右足を踏ん張って回転を止めると、シカインベスがゴロゴロと転がるのを見据えながら深く息を吐いた。

そして、次なる動きに備えて、マスカロットを構え直した。

——本当に、自分じゃないみたい。

ことりは、心の中でつぶやく。

まるで自分の体ではないように、体が自在に動く。自分が思い描いた以上の動きを体がしてくれる。

——いや、違う。

これは、本当に自分の力ではないのだ。

その動きも、マリオネットの様にアームズによって動かされているにすぎない。

だが、ここからはただ動かされるのは終わりにする。

マスカロットを構え直したことは、深く深呼吸する。

自分の力不足はわかっている。ならせめて、道具を道具として使つて見せようと思う。

ただ道具に使われるのではなく、自分の意志を持つて、動きに自分の思いを反映させる。それが、彼女の思う強くなるための第一歩だ。

ことりと戒斗は、インベスを追って階段を駆け下りた。

二人が追いつくと、インベス広場に倒れているところ見つけた。

もう、立ち上がる力もないように見える。

「ふん、お前もなかなかやる。このまま押し切——」

「——よう、奇遇だなあ」

シカインベスは、バロンとことりの攻撃を受けて動きを大分鈍らせていた。

シカインベスを無力化するならこれ以上ないほどの好機。

ことりは、インベスをヘル Heim へ帰そうと身構え、戒斗は、止めを刺そうとカツティングブレードに手を掛けた。

しかし、そんな二人の耳に招かれざる者の声が響いた。

二人が広場を取り囲んでいる階段の上へと視線を移した。

声の主は、秋葉原に蔓延る違法錠前ディーラー。

全身黒に身を包んだ帽子の男。

戒斗の宿敵、シドだった。

シドは、商売道具を収納したスーツケースを脇に置いて、二人を見下ろしていた。

「シド。貴様、何のようだ」

「なに、戦おうってわけじゃあない」

最近戦ったばかりであったため、戒斗はいつも以上にシドに対し警戒する。その姿が滑稽に見えたのか、シドは広角をあげた。

「そうそういきり立つなよ。今日も別の仕事だ。悪いな。遊んでやれなくて」

「………ならば、目的はなんだ」

「なに。通りがかったもんで土産でもと思つて、な」

シドは、いつも引きずってスーツケースから何かを取り出す。そしてそれをちやうどインベスが倒れているところへ投げた。

彼が投げたのは、イチゴの意匠の施されたクラスAのロックシードだった。

ロックシードは、地面を転がり、ちょうどシカインベスの顔の前で止まった。すると、さつきまで疲弊して動けずにいたはずのシカインベスが、さつとロックシードをつかむと、額にそれを当てた。

「な、しまった」

バロンは、インベスの行動の意味に気付いたが遅かった。

ロックシードに反応し、インベスの額に口が開いた。縦に長いクラックを思わせるその口がロックシードを飲み込んだ。

突如インベスに変化が現れた。ロックシードを飲み込んだ口があつた頭を押さえながらインベスは、苦しむように悶え出した。中にあるものを必死にかき出そうとしているかのように体をかきむしり出す。

そのインベスを苦しめる何かは、体の奥から溢れ出した光と共に現れる。

最初は小さかった光が徐々に全身へ広がっていくと共に、インベスの体が隆起する。そして突き破る。

腕が弾けてより大きな腕が、足が破れて短いながらも太い足が。そして、頭が爆ぜ、以前よりも大きく成長した角を生やした頭が姿を現した。

身長は、変化する前の二倍以上。そしてそれ以上に全身が数倍に肥大化しており、ただの大きさだけでない威圧感を放っていた。

シカインベスは、ロックシードを食べたとたんに変化した。すなわち、その変化は、ロックシードを投げたシドのせいと言うことになる。たまらずバロンは、シドに怒声をとばす。

「貴様、ふざけたまねを！」

「ああ、礼ならいらぬぜ。じゃあな」

「なっ。貴様、待て！」

立ち去ろうとするシドを追おうとするが、バロンはその場から飛び退いた。

巨大な拳が、バロンが飛び退いてすぐ、彼のいた場所に振り下ろされた

インベスの攻撃をよけてすぐに視線を戻すが、シドはすでにそこには

いなかった。

どこに逃げたのか。目で追おうとするが、すぐにその行動は中断される。

今さっきまで、動くことすら困難な状態になっていたはずのシカインベスが、変化とともに今までのダメージなどないかのような機敏な動きでバロンへ攻撃を繰り返したのだ。

バロンは、バナスピアを振り回して牽制するが、シカインベスは、隙あらば拳を振り下ろし、かと思えば地面についた腕を軸に回し蹴りをし、さらには頭の角を振り下ろした。

「やっかいな。——ぐっ」

どれだけ戦闘経験があろうと多彩なテクニックを有していても、純粹な力比べでは体の大きさからも勝敗は明らかだ。

バナスピアで受け流したため、直撃は免れたものの、バロンはシカインベスの突き上げられた角を受け、後方へ飛び退いた。

「そんな、あんなに大きく……」

ことりは、巨大化したインベスを前に愕然としていた。

バロンがシカインベスの攻撃で飛ばされるのを見て、思わず後ずさる。

「くっ。お前は逃げろ。ここは、俺だけで対処する」

「いいえ。逃げません」

それを見て、バロンはことりへ叫ぶ。

バロンであつても苦戦する相手に、今日初めてインベスと戦うことが戦えるはずがない。後ずさった彼女を見て判断しての言葉だった。

しかし、彼女は引かなかった。

彼女は、引いた足をさつきよりも前へと一步踏み出した。

「あれは、一人では止められません。ここで食い止めないと、レンジ君を助けることはできません。でも、今の私にはそれを成し遂げるための力が足りません。だから……」

「……」

「……私に、力を貸してください」

ことりは、まっすぐな瞳をバロンへ向ける。

その瞳は、今にも泣きだしてしまいそうなほど潤んでいた。しかし、バロンはその瞳に確かな何かを感じた。

「いいだろう。なら、とどめはお前に任せる」

「はい」

いちいち示し合わせている時間はない。

バロンは、すぐにカツティングブレードを操作する。

操作回数は三回。

アーマードライダーの広範囲へ及ぶ最大威力の攻撃。スパークキング級の技を放つための動作だ。

「カモン！ バナナスパーキング!!」

その動作に答え、バナスピアへとバナナロックシードから抽出されたエナジーが蓄積される。

「はああああああ」

バロンは、バナスピアの切っ先に手を添え、エナジーの蓄積完了後にすぐ攻撃に転じられるよう構える。

「はあっ!!」

バロンは、鋭く地面へバナスピアを突き立てる。

バナスピアが蓄えていたエナジーが切っ先から地面を伝い、インベスのすぐ下まで染み渡る。そして、そのエナジーは、無数の黄色く輝く槍となってインベスへ突き刺さった。

腕に足に光の槍が突き刺さり、インベスは苦悶の声を上げる。

とはいえ相手は、ついさつきロックシードを食べて巨大化したインベスだ。異常な進化により細胞レベルから再構成されたことにより、今まで与えたダメージは一切残っていない。

そのため光の槍は、インベスの体を拘束するに止まっている。

それどころか、その光の槍をへし折ろうと暴れまわっていた。

「そんな、戒斗さんの攻撃でも……」

「ふん。この程度、想定内だ」

が、巨大化したインベスとの戦闘も経験済みの戒斗は、そんなことは重々承知だ。

「いまだ、南ことり。お前の覚悟を示せ！」

「は、はい!!」

バロンの攻撃を受けてもなお動きを止めようとしないうるインベスを見て、一瞬動きを止めてしまうことりだったが、すぐにバロンの意図に気づいた。

バロンは、彼女に止めを任せるといったのだ。

ならば、彼が放ったのは相手を仕留めるための攻撃ではない。

初めから、相手を拘束するためのものだったのだ。

彼は覚悟を見せろといった。

なら、彼女が取るべき行動は、一つしかない。

それは、自分で宣言したことを達成すること。

インベスをヘルヘイムへと帰すことだ。

バロンの合図を聞き、ことりは、髪飾りに触れる。

「カモン！ マスカットスカッシュュ!!」

髪飾りに触れてすぐ走り出すため構える。

マスカロットにマスカットのエナジーが蓄積され始めると、ことりはまっすぐインベスへ向かって走り出した。

ことりが選択したのは、単体へと絞った攻撃。

この一撃に勝負を賭けるという覚悟のスカッシュュだ。

が、インベスもそれを黙って受ける気は毛頭ない。

「ぐっ。なに!?!」

自分がやられると悟ったのか、インベスは今まで以上に暴れ出した。

もともと、バロンの技は、長時間敵を拘束しておくためのものではない。

それに、すぐにインベスの動きを止めるためにエナジーの供給を切り上げてはなったため、技は不完全な状態だった

徐々に綻びを見せていた光の槍が、ひび割れ、砕け始めた。

「南、よけろー!」

ついに右腕が光の槍を砕き、拘束から抜け出した。

シカインベスは、その自由になった腕をことりに向かって振るう。

「たあああああ!!」

ことりは、インベスの拳を前にし、しかし逃げなかった。以前のことりであればインベスがバロンの拘束を抜けた時点で逃げていた。いや、勝算があったとしても、拘束が健在であったとしても向かっていくことに躊躇しただろう。

ところが、ことりは逃げるところか前へ一步踏み出す。

それは、一見すれば無謀に見える。賢明な行動とは思えない。

しかし、ことりには確かな勝算が見えていた。そして、強くなりたという思いがあった。

今はロックシードとユグドラの力に頼りきりの状態だ。

そんな彼女が試される強さ。それは、意志の強さ。

いつも、あと一步を踏み出すことできなかったことりにとって、それは大きな意味のある一步だ。

勝利のため。インベスを元の世界に返すため。隣次を助けるため。

彼女は、今にも逃げ出していまいそうな自分を鼓舞して一步を踏み出す。

それこそが今の彼女の強さの証明。

「はっー!」

「南!」

ことりとシカインベスの拳が重なる。そして、拳が通り過ぎる。

そこにことりの姿はない。

インベスの拳を受け、その場から刈り取られてしまったのか。

否。

ことりがいるのは、今まで彼女がいた場所の上空。

巨大化したインベスの身長をも越すくらいの高さにまで移動していたのだ。

インベスの拳が重なる瞬間、ことりはマスカロットを地面に突き立てた。

さらに、地面に着いた状態からさらに押し込んだ。

すると、マスカロットはその長さを縮めた。

マスカロットが縮む限界まで縮みきったところで、彼女は棒高跳びのような体勢で宙へ身を投げ出した。

そして、彼女の体とインベスの拳が交差する瞬間、彼女の体は、さらに上空へと跳ね上げられた。

マスカロットは、もともと短い本体の両端が伸びることによって彼女の身長を超える長さを作っていた。彼女は、マスカロットの伸びていた一端を縮め、棒を支えにして体を宙へ浮かべた瞬間に伸ばすことで得た力をばねのように利用して、自身を空中へ跳ね上げさせたのだ。

空中でインベスを見下ろすことは、両手両足の反動を使って体勢を制御する。そして今度は、完全に伸びたマスカロットをやり投げのようにインベスへ投擲する。

マスカロットは、一切の狂いもなくまっすぐにインベスへ向かっていき、胸のあたりに命中した。

その瞬間、インベスをマスカロットの形をした光に包まれた。

インベスに接触したのを引き金に、マスカロットは内包していたエナジーを放出。果実の形をしていたエナジーは、緑色の渦となり、インベスの行動を妨げていた。

インベスが動きを止めた絶好の機会。ことりは、マスカロットを投擲した時の勢いでもう一回転すると、再びインベスに向かい合う。そして、

「はあああああ!!」

右足を突き出し、両手でスカートの裾を掴んで押さえるような体勢で、緑色の渦に吸い込まれるようにインベスへと向かっていった。

こどりの足がインベスに当たった瞬間、インベスを取り巻いていた渦がその回転速度をより一層増していく。

それはさながら、槍の様。しかし、その切っ先が向けられているのはインベスではない。

それが貫かんとするは、インベスをことりたちの世界へ止まらせているもの。こどりの願いを阻む壁。空間を隔てる形無き壁だ。

ことりは、その壁を貫かんと力を込めた。

誰かを守るために、大切な人を助けるために力を振るうことりに、迷いはない。そして、その思いがさらに彼女の後押しをする。

空間に綻びが生じる。

その綻びは、螺旋状に傷を広げ、やがてクラックという形で絶対的な壁に穴を開けた。

ことりは、それを見てだめ押しとばかりに足に力を込めると共に後方へとんだ。

ことりの加えていた力が無くなったが、緑の渦は止まらず突き進む。

開いた穴はさらに口を広げ、巨大化したシカインベスをも飲み込んでいく。

ことりが着地するとほぼ同時。インベスは、その巨体をすべて穴の向こうへと隠した。

ことりは、暴走状態のシカインベスをヘル Heim へ送り返すことに成功したのだ。

「レンジ君!!」

ことりは、着地してインベスが穴の向こうへ消えたのを確認するとすぐに憐次が倒れている場所へ飛び出した。

さっきまでの戦いは、すべて憐次を早く病院へ連れて行くためのものだ。

インベスをヘル Heim へ返すことができたとはいえ、それで息をつくことはできない。

もはや、一刻の猶予もない。

変身している今の状態なら自分で運んだ方が早いと思ったことりは、憐次の姿を探した。そこで、憐次とともに見慣れない一団を発見した。

その一団は、憐次を担架へ乗せ、黒いバンの様な自動車でどこかへ連れて行くこうとしていた。

「あの人たちはだれ？レンジ君をどこへ？」

正体を確かめるために駆け寄ろうとしたことりは、肩を手を押しかれて足を止めた。

振り返ると、変身を解いた戒斗だった。

「あの。あの人たちはいったい」

「奴らなら問題ない。ユグドラシルの救護班だ」

「救護班。なら、レンジくんは」

「安心しろ。インベス被害による治療に特化した奴らだ。お前がインベスを対処している間に応急処置は終えている。この後は、ユグドラシルの提携病院に運ばれるだろう」

「……よか、った」

隣次の無事を知り、ことりはその場にへたり込んだ。

隣次が助かるということを知り、張りつめていた緊張の糸が、ようやくほどけたのだ。

「……ここから一番近い病院となると、西木野総合病院か。見舞いにも行ってやるといい」

「戒斗さん、助けて頂きありがとうございます。……あ、ちよつと待ってください」

言うべきことだけ言って立ち去ろうとする戒斗を、ことりは呼び止めた。

きつと立ち止まってはくれないかと思いつたのだが、以外にも戒斗は立ち止まった。

「戒斗さん。これ、ありがとうございます」

ことりは、立ち止まった戒斗の前まで走ると、手に握ったものを彼に差し出した。

それは、戒斗から渡されたマスカットのロックシードだった。

ことりは、それを使って変身までしてしまっただが、それが戒斗から貸してもらった力であると忘れていなかった。

戒斗が貸してくれたお陰で、インベスを撃退することができたのだ。

ことりは、律儀にこの場で返しておきたかった。戒斗への感謝を込めて。

しかし戒斗は、彼女が差しだしロックシードを一瞥するが、受け取ることはせず歩き出してしまった。

「ちよつと待ってください。これ、返します」

ことりは、それでも戒斗を追いかけ、ロックシードを返そうとした。すると、戒斗は鬱陶しそうにことりの方を向いた。

「それはお前が持っている」

「そんな。だってこれ……」

「安心しろ。それは、ユグドラシル製の正規のロックシードだ。不法所持でない以上、取り締まりなどの心配はしなくていい」

「そ、そうではなくて……」

ことりが心配しているのはそんなことではない。

ただ、ロックシードを返したかっただけなのだ。

たしかに、そのロックシードを持っていること自体に不安はあった。

しかしそれは、取り調べなどを危惧したものではなかった。

ことりが恐れたのは、強力な力がすぐそばにあるという状況になることだった。

強力な力は、きつと事あるごとに誘惑してくる。

今回は、ちよつと目の前でちらつかされただけで負けてしまった。

それが、毎日手元にあるという状態になるのだ。

やっと他の力に頼らない強さを目指そうと思えたのに、すぐ手元に強力な力があっては、つい頼ってしまうのではないかという恐怖があったのだ。

頑なにロックシードを返そうとすることりが一向に引きそうになることりの様子に、戒斗はため息をついた。

「言ったはずだ。自分の足りないものを補うために道具を使うことは恥じるべきことではないと」

「えっ」

「お前は、それが自分の力ではないと理解した。そして、それに頼りきりにはならないという意志を見せた。そんなお前ならば、ロッ

クシードを持っていても、問題はないはずだ」

「でも……」

「それに、お前にはほかにすべきことがあるのだろうか？」

「すべき、こと？」

「奴らと同じ理想を目指すなら、力が必要なはずだ」

「それは」

奴らと聞いて思い浮かべたのは、穂乃果と海未の姿。

たしかに、これからもインベスを元いた場所へ帰すために戦うというのなら、ロックシードはどうしても必要になってくる。

戒斗の言う通り、穂乃果たちと理想を目指すのであれば必要な力だった。

「お前は、自分の弱さを認めた。それでも尚、強さを求めた。ならば、それだけでも以前より強くなったはずだ」

「わたしが、……つよく？」

戒斗に強くなったと言われ、ことりは、自らの胸に問いかける。

自分は、本当に強くなったのだろうか。

「……」

答えはでない。

しかし、彼女は戒斗に確かな強さを感じていた。そんな戒斗が言った言葉は、なぜか信じられる気がした。

「だが、お前がそんなに返したいというなら……、もつと強くなれ。お前が、そんな力に頼らずとも本当に強くなったと思えたと
き、改めてそれを返しに来い」

いつか強くなれたなら。

その言葉は、そのいつかを待っていてくれる。自分が強くなるまで待っていてくれると、ことりに思わせた。

「は、はい。いつか、必ずこのロックシードを返しに行きます」

その思いは、彼女に強くなる理由をまた一つ、与えてくれたような気がした。

「ことりちゃん！」

「ことり！」

戒斗が立ち去った後、入れ違いに彼女を呼ぶ声がした。ことりは、その声に振り向く。

声から自身を呼んだ人物が誰かわかっていた。

「え？ 穂乃果ちゃん、海未ちゃん？」

しかし、やはり振り向いてその姿を確認して驚いていた。

まさか、彼女たちがここに来るとは思ってもみなかったからだ。

ことりは驚いて後ずさった。

しかし穂乃果は、そんな彼女に飛びついた。

「ことりちゃん。大丈夫なの？ 風邪は？ 熱は？」

「もう、心配しましたよ。なんにも言わずに休むなんて、何かあったのではないかと思いました」

彼女たちは、ことりが休んだのを単に病気にかかったためだと解釈していたようだった。

ことりは、それに気づいて、自分が彼女たちを裏切ってしまったことを思い出した。

それを思い出して、ことりは穂乃果たちから目をそらした。

「今日はね、風邪とかで休んだ訳じゃないの。心配かけてごめんね」

「そうなの？」

「う、うん。・・・？」

ことりが強くなるためにしなくてはならないことが一つ残っていた。

それを思いだし、いったいどうやって真実を話そうか。

傷つきたくない弱い心とすべてを洗いざらい打ち明けようとしている気持ちがひしめき合う。

そんな中、ことりは彼女の視界にちらつくオレンジと紫に気が付いた。

穂乃果と海未は、それぞれユグドラを装着しており、それぞれのロックシードから生み出された衣装を身に纏っていたのだ。

その衣装を着ている理由は一つしか思いつかない。

「つて、どうしたのそんな恰好?」

「ああこれ? つてそうだった」

ことりが問うと、穂乃果は今思い出したと言わんばかりに声を上げた。
た。

「ちよつとインベスを追つてて……つて、そう言えばことりちゃん。ユグドラ付けてるけど、インベスがこつちに来たの?」

「え? う、うん」

「じゃあ、そのインベスはどこに行ったの? あつち? それともこつち?」

「ええと。インベスなら、帰ったよ?」

「帰ったつて。いったい誰が……」

インベスを容赦なく殺すユグドラシルがインベスを返してあげたなどと言うことは、考えられなかった。

それに、インベスを返してあげるなんてことを思いついたのは、おそらく穂乃果たちが初めてなのだ。

そのことを踏まえるとインベスを帰したのは、ユグドラシルの関係者以外。それこそ彼女たちと同じ様な一般人だった人だと考えられた。
た。

そこまで考えて海未は、こつりの腕に巻き付いているものがいつものものと少し異なっていることに気がついた。

「そう言えば、ことりちゃんの付けてるユグドラ。もしかして、私たちと同じものですか?」

「そう、みたい……」

ことりは、海未の問いにためらいがちに答えた。
すべてを明かすことに決めていたことりだったが、いざ対面してみると口ごもってしまう。

しかし、巨大化したインベスからも逃げることなく立ち向かった今の彼女に、逃げるといふ考えはなかった。

「で、では、インベスを帰してあげたというのは、もしかして」

「うん。ことりだよ」

「え、ことりちゃんか!」

ことりは、海未の疑問に肯定した。

それはすなわち、彼女が海未や穂乃果と同じように変身し、インベスと戦ったということの意味していた。

それを聞いた穂乃果は、今度はことりの体を調べるように触り始めた。

「もう。ひとりでそんな危険のこと。怪我とかない？ 痛いところは？」

「うん、大丈夫。大丈夫だよ」

「本当に？ ほんとの本当に？」

穂乃果たちの脳裏には、インベスを使って戦おうとした彼女の姿が思い出された。

ドレスと、インベスをヘルヘイムへ帰す力。

それを持つものが3人に増えた。しかも、その力を持つ者が友達同士だという奇跡に運命を感じた。

しかし、同時に心配にもなった。

一度あきらめそうになった穂乃果が言えた義理ではないと思ったが、ことりを止めるべきなのではないかと思った。

彼女はやさしい。

きつと穂乃果や海未よりやさしい。

でも、優しいが故に傷つきやすい。

そんな彼女に、インベスを帰すためとは言え、その戦いに耐えられるのだろうか。

それが心配でならなかった。

だから穂乃果は、彼女の瞳をのぞき込んだ。

彼女の覚悟を確かめるように。

「大丈夫だよ」

するとことりは、穂乃果の瞳から目を逸らさずに言った。

穂乃果と海未は驚いた。

彼女の瞳と声に今までにない力を感じたからだ。

どこか印象が変わったように感じた。

「ことり、ずっと強くなりたかった。そのために力がほしかった。で

も、教えてもらったの。力のあり方を。そして、強くなる本当の意味を」

「教えてもらったって、誰に？」

穂乃果の問いにことりは、一度穂乃果たちから視線をはずし、後ろを振り返った。

今はもう彼の姿は見えない。

ことりは、去ってしまった彼の背中に向けて言った。

「いつもむすつとしてるけど、きつと本当は優しいナイト様に、かな？」

穂乃果と海未が合流し、話している姿を眺める陰があった。

それは帽子と黒ずくめが印象的な男。

彼は、彼女たちの一人が巨大化した暴走インベスをヘル Heim へ送り返そうところからずっと彼女たちの様子を観察していた。

彼は、決して彼女たちに劣情を抱いている訳ではない。

子供になど興味もなく、むしろ嫌悪しているくらいに彼が彼女たちを見ていたのは、単に仕事だからと言う以外無かった。

「おやおや、これで三人目か」

少女とバナナアームズを纏う騎士が暴走インベスを倒したところで、観察を切り上げてその場を立ち去ろうとする。

そこへ、新たに二つの陰が現れる。

「シド、これはどういうことですか？」

「おやおや、嬢ちゃん。お出でなすったか。とはいえ、もう終わっちゃったつぜ」

現れたのは、少女二人。

二人ともちやうど先ほど戦っていた少女と同じくらいの年だ。一人は、鼻筋の通った端正な顔立ちと金髪が目を引く。対してもう一人の少女は、大らかそうな雰囲気と豊満な胸が印象的な、包容力を感じさせる少女だった。

彼女たちとシドは知り合いであるのか、彼が茶化すように言うと、金髪の少女はあからさまに顔をしかめた。

「ふざけないで。……それよりもこの状況の説明をしてください。やっかいな人たちが減るところが増えてしまっているこの現状に

ついて」

「なんだ。説明するまでもなくわかっているじゃないか。よけいな手間が省けて助かるぜ」

「ですから、ふざけないでと言っています。それに、最後に取った行動は何ですか？ 音の木坂の生徒を傷つけるようまねはしないようにと言ったはずです。勝手な行動を取るのであれば、あなたにはもう頼まな——」

「——調子に乗るなよ、ガキ」

「——っ」

シドのふざけた態度に、少女は怒りをぶつける。

が、その態度が気に障ったようで、シドは彼女の頬をつかむようにして言葉を遮った。

「別に、お前に直接雇われてるわけじゃないんだ。お前の使いつぱしりじゃないんだぜ。それに、ガキは大人に敬意を払うべきだ。そうだと。生徒会長さんよ？」

そして、彼女をつかんだまま、彼女をにらみつけた。

少女は、負けじとにらみ返すが、今主導権を握っているのは明らかにシド。

にらみ返すことだけが、彼女にできる唯一の抵抗だった。

「やめてください」

そんな彼女を助ける様に、横から手が伸びシドの腕をつかんだ。

「シドさん。えりちが失礼しました」

「希……」

彼を止めに入ったのは東條希だった。

彼女は、いつものやわらかい笑顔とともに、シドの視界に自分の顔を滑り込ませた。

「少おしうまく行かなくて、頭に血がのぼってもうただけなんですよ。今回は、大目に見てくれませんか？ 大人なシドさん？」

希は、絵里に変わって謝罪する。

上目遣いでねだるかのような声音で縋る彼女には、大抵の男であればそれが何であれすべてを許してしまいそうな破壊力があつた。

しかしシドは、希のお願いには微動だにせず視線だけを彼女へ向けた。

口調は確かにお願いだった。が、その言葉とは裏腹に、シドの腕をつかむ彼女の手には、彼の腕を握りつぶさんとばかりに力が加わっていた。

シドに向けられた笑顔も、その腕に加わる強さとともに見ると、「これ以上えりちに手え出しよるんやったら、ただじゃおかへん」とでも言っているように感じられた。

「確かお前は、東條希だったか？」

「ええ、せやで」

シドは、それを恐れた訳ではないが、絵里をつかんでいた手をゆるめた。

もともと、そんなに頭に来ていた訳ではない。

彼は野心の強いタイプである。そのため、その野心をかなえるためであるなら、どんな者にも付くしどんなことでもする。

そして、現在は絵里と共に行動はしているものの、それは彼の野望とは直接は関係がない。

そのためその立場をわからせるために行った行動だった。

にらみ返しては来ているが、絵里の表情からして自分たちの立場はしつかりと刻み込まれただろう。

そして、怒りと言う感情とは無縁のような印象を受ける希の予想外の一面を見ることができ、彼としては満足だった。

「そうだな。俺としたことが少しガキにムキになりすぎちまったみたいだな」

シドの手から解放された絵里は、途端に彼と距離を取ると、彼をにらみ続けながら彼に捕まっていた頬をそれれ拭いた。

「まあ、俺もガキのそう言う態度には慣れてる。まあ、次からは気をつけるこつた」

任務はすでに終わっている。だから、彼にこれ以上この場に止まっている意味はない。

シドは、絵里と希の間を割るように通ると、彼女たちの後ろに位置していた階段から下へと下りていった。

「くっ………」

「えりちー！」

シドをずっとにらみつけていた絵里は、しかしシドが姿を消すとその場にへたり込んだ。

「まったく。あんな下素にいいようにされるなんて。………情けない」

確かに、絵里の指示で彼は動く。そう言う契約だった。

しかし、彼が直接付いているのは絵里ではない他の誰かだ。

そして、その誰かに絵里は彼と同様付いている状態だ。

相手は、大人の男。しかも戦闘にはだいたいが慣れている。

そのため、契約外では、彼女は彼に逆らえない。

その事実を痛感させられた絵里は、地面に拳を叩きつけた。

「それに、まさか希に助けられるなんて。なぜあなたがここに」

「ん、なんでうちがここにいいのか？ そんなん、えりちがピンチなら

うちはジェットでマッハで駆けつけるってだけやで？」

「ごめんなさい。今私は少し苛ついているから、茶化さずに答えて」

絵里は、余裕をすっかり失っていた。

希としては、8割ほど本気だったのだが、彼女の気持ちをくみ取った。そして、ここにいる一番の理由を口にする。

「………知っているってだけの状況が、イヤになったからや」

「えりちが、うちを危険に巻き込まないためにそうしてくれていることは知ってるで。でも、えりちだけが傷ついている状況でそんな

ん、うちは耐えられない。だから、できることは少ないかも知れへんけど、協力させてほしいんよ」

絵里は考える。

もともとこの事態は、自分だけで解決するはずだったが、弱いばかりにある日希に話してしまったのだ。

それから、生徒会の仕事を彼女に任せることもあったり、実際何度も助けられてきた。

何度も折れかけた彼女が、それでもこうして折れずに戦ってこれているのは、希の存在が大きかった。

助けられるだけ助けられて、肝心なところで帰れなんて、希を守るためとはいえ、ムシのいい話だと絵里は考えた。

「ありがとう。正直、希が居てくれるっただけで心強いわ。これから危険な目には遭わせない。でも、少しだけ私を助けてほしい。いい？」

「そんなん、もちろんや」

絵里が助けを求めると、希は安心したように笑った。

そして、座り込んだままの絵里に手を差し伸べた。

絵里は、その手を取って「ありがとう」というと立ち上がった。

「それで、これからどうするん。えりち？」

絵里から直接協力を頼まれたのだ。

希は、早速話を切りだした。

「そうね……」

絵里は、視線を落とした。

彼女の中では、すでに決まっていた。

しかし、それを行うということは、彼女たちと完全に敵対するということ。そして、彼女たちを自らの手で傷つけるということだった。

いままでは、その考えに至っても、踏み出すことができずにいた。

が、今はそばに希がいる。そのことが、彼女に一步踏み出す力を与えた。

「まあ、そうね。人に任せておいて文句だけ言うというのは、よくなかったわね。やっぱり、口先だけの人間にだれも従わない」

「それって、まさか」

「私としても、なるべく穏便に手放してくれればよかったのだけれど。

これ以上私たちのじやまをするといふのであれば……」

絵里は、スカートのかなかに隠したホルスターのような物から、ロツクシードを取り出した。そしてそれを見つめながら宣言する。

「私が直接回収するわ」

彼女の覚悟を。

第十八話 『私の夢の中の怪物』

そこは、真つ暗ななにもない空間だった。

そこにウエーブのかかった赤髪がきれいな少女、西木野真姫は、ピアノを弾いていた。

何故、何もない空間でピアノを弾いているのか。自分でも疑問に思いつつ、しかし弾き続けていた。

確かに弾いているのは真姫自身なのだが、まるで自分がピアノを弾いているのを俯瞰しているような、客観的に観測しているような錯覚をおぼえていた。

そう思ったのは、ピアノを弾いている真姫とそれを観測している真姫の感覚の齟齬、反応の違いがあつたからだ。

真姫は、ピアノを引きながら視線を横へ向ける。

その視線は、何もない空間の中で、唯一、彼女のそばで聞いていた生物に当たる。

それは、堅い甲羅をもつ虫のような生き物。インベスと呼ばれるものだった。それも、いつも見ているような手に乗るくらいのサイズではなく、人間大のインベスだった。

真姫は、すぐさま逃げたい衝動に駆られる。しかし、ピアノに向かう真姫は動かない。いつ襲われてもおかしくない状況でインベスの姿を確認するが、いるなくらいにしか感知しないのだ。

すぐにでも暴れ出すのではないかと気が気ではなかったが、真姫は、そのままピアノを弾き続ける。

まるで、演奏に聞きほれているかのように体を揺らしていた。

だから私は、そのままだった一匹の観客のためにピアノを弾いていた。

その心地よい時間はしばらく続いた。

しかし、あれだけインベスが接近しても止まらなかつた演奏が、突如ぴたりと止まる。

「見つけたよ、インベス！」

聞き覚えのある声に、真姫は声のする方へ視線を向けた。

そこには、見覚えのある顔があった。彼女は一つ上の先輩。名前はたしか、ほのか。ほのか先輩だ。

「……………」

ほのか先輩は、無言で真姫とインベスへ歩を進めながら、どこからかユグドラとロックシードを取り出ししていた。

彼女はユグドラを自分の腰に取り付け、ロックシードを解錠して取り付けた。

「ソイヤ！ オレンジドレス、花道オンステージ!!」

次の瞬間、彼女は纏っていた制服を、アイドルが着ていそうな衣装に変えていた。

「はっ」

次の瞬間、真姫にはほのか先輩は、インベスを殴りつけた。

インベスは、彼女の拳を受けて、ひっくり返ってしまった。

人より力持ちで頑丈なインベスをどうして殴ることができるのとは思ったけれど、そんなことを気にしている場合じゃ無かった。

「やめて！ ひどいことしないで!!」

そのインベスは、ただ私の演奏を聴いていただけ。全然悪いことなんてしてない。

私は、ほのか先輩に必死に訴えた。

でも、ほのか先輩には届かない。いや、彼女は叫んでいるつもりが声は一切発せられてはいなかった。

真姫は、その光景をただ眺めているだけだった。

真姫が見ている中、ほのかは、殴るだけでは飽きたらず、どこからか取り出したオレンジの切り身のようなふざけた形の刀で切りつけ始めた。

刀の攻撃を受け、インベスの堅い甲羅が火花を散らす。ひびが入る。碎ける。

その光景をただ見ているしかない真姫は、ただただ叫ぶ。声にならない声で。やめると叫ぶ。

が、ほのかはとどめの一撃を放つべく力をためる。

「ソイヤ！ オレンジスカッシュュ!!」

「だめ!!」

私は、ありつたけの声で叫ぶ。

でも、ほのか先輩は止まらない。

「セイハアアアアア!!」

彼女は、刀を高く掲げると、それを勢いよく振り下ろした。

「いやあああああ!!」

真姫は、叫び声とともに飛び起きた。

頬にべたつく髪を拭い、両手で顔を覆う。

「ゆ、ゆめ?」

いやな夢を見た。

しかもそれは、単なる夢じゃない。実際に起きた過去の記憶だ。

「まったく、夢にまで見るなんて。これもすべて、あの人のせい」

夢になんて見たくなかった。

思い出したくなかった。

それでも、いやおうなしに思いだしてしまう。それは、ここ最近で一番の幸せな時間だった数日とその時間が壊された瞬間までの記憶だ。

真姫は、いつも放課後は音楽室で過ごす。

夕日が射す音楽教室でひとり。ピアノの音に体を振るわせながらその時間を過ごしていた。

いつも特に予定のない日は、ここに来て下校時刻になるまでピアノを弾く。それが私の日課だった。

クラスメイトに対し、特に冷たくしている気はないけれど、特に親しく接していたやけどもない私には、これといった友達はいなかった。

だから、ピアノの音に興味を引かれて覗いてくる人はいても、中に入ってくる人はいない。

まあ、それは一人でピアノに没頭したい私としては願ってもないことで、むしろピアノを弾いているこのときに関しては、一人で居たいとすら思っていた。

一人だけでピアノの過ごす。

それが、彼女の日課であり、心から安らげる時間だった。

いつも、同じ時間に来ては同じ時間までピアノを弾き同じ時間に帰る。

その行動は、もはやルーティーンと化していた。そのため、いつもと違う何かがあればすぐに気付く。

だから、今回もすぐにその異変に気が付いた。

ピアノの音に、別の音が混じっていることに。

「い、インベス？ どうしてここに」

その教室には、私の他にもう一人。いいえ、もう一匹がいた。

それはインベスと呼ばれる生物だった。

丸っこい甲羅を背負い、爪の長い手を幽霊の様に力なく垂らしているそれは、インベスの中でも初級インベスと呼ばれるものだった。

インベスを召還するためのアイテム、ロックシードを使って出したインベスは、手のひらに乗るくらいの大きさで出現する。

その大きさのインベスは、人に危害を加えるようなことはせず大人しいので、町に出ればたいい誰かが連れて歩いている。でも、その教室内にいるインベスは、150、60はあるだろうというくらいの大きさだった。

普段みるものより大きいインベスは、ロックシードによって呼び出される以外の方法で現れたもので人を襲ったり危ないインベスが多いとされている。

いつからそこにいたのか。早く逃げなくてはとピアノから手を離れた。

そのとき、

「ぎゃっ。なに？」

そのとき、床を踏みつけるような音が聞こえた。

犯人はすぐにインベスであることがわかった。

「何で。………暴走!？」

真姫は後ずさった。左でピアノの鍵盤を押してしまい、不協和音が響いた。

暴走しているのであれば、少しの刺激で襲い掛かってきかねない。

真姫は、凍り付いてしまった。

「……」

いつ襲われるのか恐怖に震えていた真姫だったが、インベスが動きを止めたのを見て首を傾げた。

インベスの方も様子をうかがっているのか。それとも、何か別に気になるものがあるのか。

真姫は、インベスにこれ以上刺激を与えては今度こそ襲われかねないと思い、じつとインベスの様子を伺っていた。よく見ていると、真姫はあることに気が付いた。インベスは、真姫ではないほかの何かを凝視しているように見えた。

その視線を追って、インベスが見つめる先へと視線を移す。

すると真姫は、インベスの視線が意外なもの向いていることに気が付いた。

インベスの視線の先にあったものは、さっきまで真姫が弾いていたピアノだった。

インベスは、ピアノに興味津々な様子で、動かずじつとピアノを凝視していた。

「もしかして、ピアノに興味があるの?」

真姫は、じつとピアノを見つめるインベスを見て、首を傾げた。

インベスを町で見かけることはよくあるが、そのインベスたちは、人間に呼び出されてきたものばかりだ。

物を運んでいたり、一緒に歩いていたりしている姿を見ることはよくあるが、それはすべて人間の同伴、もしくは人間のお願いを聞いているに過ぎない。インベスが自分の意志で何かを行っている姿は、実のところ見たことがない。

インベスは普段何をしているのだろうかと考える。

もしかしたらこのインベスは、ピアノを弾くのだろうか。いや、あ

の長い爪のついた手ではピアノを弾くことはできないだろう。なら、いったい何がインベスの気を引いているのだろうか。

「あなたはいったい……。——きゃ」

真姫がつぶやくと、インベスは再び床を踏みつけ始めた。

真姫は、今度こそ襲われると頭を抱える。

ところが、インベスは襲ってこない。ただ、足を踏み鳴らしているだけだった。

その姿は、彼女を襲おうとしているというより、何か気に食わないことに腹を立て、駄々をこねている子供のように見えた。

一体何が気に食わないのか。ピアノが関係することでインベスが怒ることとは何か。

「そういえば……」

ひとつ思い当たる点を見つけた真姫は、試しにピアノの鍵盤を一つ押してみた。

ポロンと、ピアノの音が鳴り響く。

すると、インベスはまた音のした方に反応して視線を向けた。

「やっぱり」

その反応から、真姫は確信を持つ。

「……もしかして、ピアノが聞きたいの」

インベスからは返事はない。

が、自分をじっと見つめる黒い眼から、真姫は何かを感じ取った。

彼女は、意を決して再びピアノに向き合った。

「――」

そして真姫は、ピアノを弾き始めた。

彼女も必死だった。

凶暴性を見せたインベスを前に恐怖を覚えなないわけがない。それでもピアノを弾き始めたのは、助かるためとは別にピアノを聞きたいのかもしれない相手に、ただ単純に聞かせてあげたいという気持ちが芽生えたからだ。

ピアノを引き出すと、インベスは足を踏みならすのを止めた。

しばらくは聞きほれているように体をゆさゆさと左右に揺らし始

めた。

それは人がリズムに乗るのと同じようだった。真姫は、それを横目に見てほっと胸をなでおろした。

これでおとなしくなってくれた。とりあえずこのまま弾き続けていれば、襲われることはないと思っただのだ。

しかし、そのままおとなしくなしてくれなかった。またすぐに地団駄を踏み始めた。

「な、何がだめなの？ さつきと何か違った？」

何か気にくわなかったのか、インベスはまた暴れ出した。

さつきまでは大人しくしてくれていたのに、なにがインベスを暴れさせるのか。真姫は、頭をフル回転させた。

——さつきまでとインベスが居ると気付く前までとでなにが違っていたの？ でも、ピアノくらいしか弾いてないし、他の楽器なんて………後は………

そこまで考えて、真姫はひらめいた。

もう一つやっていたことがあった。

「もしかして歌も？」

それは歌を歌うこと。

彼女は、ピアノを弾くと同時に歌を歌っていたのだ。

もしそれが原因だとすれば、やることは一つしかない。

真姫は、いったん弾いている曲を止め、演奏曲を変更した。そして、大きく息を吸うと共に弾き語り始めた。

「愛してる、ばんざーい。負けない勇氣——」

これで思いつくことはすべてだった。これでまだ暴れるようなら、真姫に打つ手はない。

しかし、真姫は不思議と焦っていなかった。

横目で見ると、インベスが腕を振り上げていた。しかし、彼女は慌てることなく弾き続け、歌い続けた。

——そんなに、踊るほどよかったの？

それどころか、少し笑みをこぼしていた。

理由は、インベスの行動。

腕を上げては下ろし、右にひらひら左にひらひら。まるで盆踊りのような動きを取り始めたのだ。

——なにそれ、意味わかんない。

マスコットでいたら、見た子供が泣き出してしまうだろうほどの見た目のインベスが、しかも全然曲に合っていない振りで踊っていたのだ。

でもそれは不快ではなかった。

むしろ、踊りなど全然似合わないインベスが健気に踊っている姿が、可愛く見えていたのだ。

もしかしたら、彼らのすみかでは、仲間もいっしょに同じように踊っているのではないか。そう考えて想像すると、余計に可笑しくなつて笑つてしまう。

気付くと、インベスが出現した当初抱いていた警戒心は、どこかへ消えてしまつていた。

しばらくして、曲が弾き終わる。

早く弾かないとまたインベスが暴れてしまうかも知れない。

そう思つて真姫は、さつきまでインベスがいた方向をみた。

しかし、気が付くと、インベスの姿はなくなつていた。

真姫は、ほつとして胸をなで下ろした。

「インベスにも音楽が好きなのもいるのね……」

真姫は、あのインベスのことを思い出して笑みをこぼしていた。

確かに、インベスが現れた直後は、恐怖しか感じていなかった。が、そのインベスが彼女の歌を聴きたかつただけなのだど理解してから、むしろうれしいと思う気持ちすらわいていた。

今まで、ずっと一人でピアノを弾いていた。

聞いてくれる人は一人もおらず、ただ一人だけの空間に響いていただけだった。それが、インベスとはいえ、聞いてくれる者が現れたのだ。誰かが聞いてくれている。そう思うだけで彼女の心には、一人で弾いていた頃には無かつた熱があつた。

「また、来たりしないかな。あのインベス。……つて何を言っ

てるのかしら」

真姫は、自分で自分につっこみを入れる。

大きいインベスが目の前に現れるなんてことは、そうそうあることじゃない。いや、そんなにあつたら困ることだ。

大きいインベスは、大抵凶暴なのだ。

今回は運良く襲われることはなかったが、次もそうなるとは限らない。次こそは襲われることになるかも知れない。

世間ではロックシードが流通し、ほとんどの人が所持している時代、真姫がはまだロックシードを持っていない。

その理由は、信用できないからだ。

ユグドラシルなどと言う企業が管理しているとは言うが、人を襲うかも知れない怪物を飼い慣らそうなんて、彼女には正気とは思えないことだった。

もし、さっきのと同じインベスに会えるならまたを歌を聞かせてあげたい。そんな思いはあったが、またなんてことはない方がいいと真姫はそう思うことにした。

これはきつと今日だけの特別な思い出なのだ。

なのに、

「なんで、また居るのよ？」

次の日の放課後。音楽室に入るとドアのすぐ横にインベスが待ちかまえていた。

突然四海には行ったインベスに驚いて飛び退いたため、出口から離れてしまう。さらに、インベスが真姫と出口の間に立ちはだかったことで、完全に退路を断たれてしまった。

そしてインベスは、地団駄を踏み出した。まるで、遊んでとねだる子供のように。早く弾いてと急かすように。

「な、なによ。弾けばいいいでしょ、わかったわよ」

真姫は、インベスに促されてピアノに向かった。

インベスに対しての返答はぶつきらぼうなものだったが、ピアノの

前に座った彼女は、自分でも気付かないくらい小さな笑みをこぼしていた。

いままで誰にもいない部屋で一人でピアノを弾いていた。別に寂しかったわけではない。全然苦ではなかったし、むしろ一人の方がくつろげていいとすら思っていた。

でも、誰かがみている、人ではなくても誰かが聞いているというのも新鮮なことであり、いつしか真姫は、インベスが自分の演奏を聞いているという状況を心地よく感じ始めていた。

それからそのインベスは、彼女の演奏を聴きにくるようになった。最初は、引き続けないと曲の切れ目には暴れるものだから、おそろおそろインベスを刺激しないために弾いている部分もあった。が、そのうち曲の切れ目になっても暴れることはなくなり、最近では、ピアノを弾かなくても触れ合えるほどになっていた。

そのインベスに会うまで、真姫はインベスを毛嫌いしているところがあった。

インベスといえば、虫のような無機質な外殻と、骸骨のような顔。それだけでも気持ち悪いと思っていたが、最近そのインベスを使った遊びが流行っていることに嫌悪感を抱いていた。

医者である親が、インベスによつて怪我をした人の治療にも携わっているため、真姫は今までインベスとは危険なものだと教えられてきた。真姫自身、それについては正しいと思っていた。何せ、あの見るからに危なそうな爪とまさに怪物というにふさわしい姿なのだ。

あんなものをちやほやしている人たちがおかしいのだと、今までの真姫は思っていた。

だからロックシードを与えられていないことにも不満を持ったことはなかったし、自分から手に入れたと思うこともなかった。だから、自ら率先してインベスとにふれあうということは、ありえないはずの行動だった。

しかし、人を襲わず音楽を聴くインベスの存在を知ってしまった真姫は、その考えを改め始めていた。

もしかしたら、インベスも危ないものだけではないのではないかと。

そして、インベスというのも、そんなに悪いものではないかもしれないと。

そんな風に考えていた真姫だったが、彼女にとっての平和な日常は、一人の来訪者によって壊される。

「いた、西木野さん。お願い。もう一度話を——」

入ってきたのは、以前真姫がピアノを弾いているときに突如現れ、アイドルにならないかなどと言っていた一つ上の先輩。ほのかだった。

「——って、なんで大きいインベスがいるの」

「ちよつと、勝手に入ってこないで！」

ほのかは、入ってくるなり視界に現れた普段見るものより数段大きいインベスを見て目を丸くした。

無理もない。大きいインベスを見る機会は少なく、見る機会といえば、新聞の記事やニュースくらいだ。しかも、そのニュースのほとんどが「暴れた」「ものを壊した」などとてもいい内容のものではない。

それしか知らなければ、警戒しても仕方のないことだった。現に真姫もこのインベスと会うまではそうだった。

それでも、普通は腰を抜かしてしまうか逃げるかのどちらかだ。

しかし、ほのかはその二つとは違う第三の行動を取った。

「西木野さん、危ない。たあつ」

ほのかは、逃げることなくインベスへ向かって走り、そして助走でつけた勢いを乗せてインベスを突き飛ばしたのだ。

さすがのインベスも完全に真姫に注意を向けていたこともありひっくり返ってしまった。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「あ、あなた——」

「大丈夫だよ。早く逃げよう？」

インベスを倒したほのかは、真姫の手を取り、教室の出口へ向かっ

て引こうとした。

が、真姫は動かなかった。

手を引いても動かない真姫の方へ振り向くと、真姫はほのかの手をふりほどいた。

「——ちよつと何してるのよ」

「え？」

「その子は別に危なくないわ。さっきだって、大人しく私の歌を聴いてただけなんだから！」

真姫の行動に、今度はほのかが驚きの声を上げた。

真姫は、ほのかが突き飛ばしたインベスに駆け寄ると、それをかばうようにほのかをにらんだのだ。

ほのかには分からない。

普通の人は、真姫の傍らにいろようなインベスを見たことがなかったのだからわからないだろう。

しかし、たとえ知らないとしても、悪さをしていないものに暴力をふるうことをよしとすることはできなかつた。

「そ、そうなの？」

「そうよ。だから、あなたこそどっか行って」

インベスをかばい、助けようとしたほのかに帰れという真姫。彼女の様子を見て、ほのかは困惑の色を示した。

自分は、助けようと思って割って入ったのに、それを助けた相手に責められている。普段より大きなインベスは危険だということとを痛いほど知っている彼女には、インベスの近くにいる真姫は、明らかに危険な状態に見える。

しかし、確かに真姫の言う通り、インベスは彼女を襲おうとはしない。ただ、ほのかに対してだけ威嚇しているようだった。

穂乃果も、暴れたりしていないインベスを傷つけるのは不本意だ。だから、緊張を完全に解くことはしなかったが、構えた手をおろして様子を窺った。

「あなたも、警戒しないで、ね？」

穂乃果が臨戦態勢を解いたのを見て、真姫は今度はインベスをなだ

めに入る。

「ほら、また聴きたい曲、聞かせてあげるから」

真姫は、インベスへ手を伸ばす。頭を撫でて宥めようとした。

しかし、タイミングが悪かった。それと同時にインベスが、穂乃果へ威嚇して腕を振り上げたのだ。

「いたっ」

その腕が、運悪く真姫の手を払うように当たってしまった。ただ払われただけのようで、手に傷はなかったが、ほのかに再び警戒心を蘇らせるには十分だった。

「やっぱり、危ないんだよ。西木野さん、離れて！」

「ちよつと、何しようとしてるのよ」

「その子を、ヘルヘイムへ返す」

ほのかは、真姫には見慣れないものを取り出して腰に当てた。

それは黒い板状のもの。もちろん真姫もユグドラの存在は知っているし持つてはいる。真姫が見慣れないと思ったのは、ほのかのユグドラが形状を変えたからだ。最初は、見たとのあるユグドラとそう変わらない物だったが、腰に当てた瞬間、光の帯が伸びてベルトのように巻き付くとともに小刀のような装飾品が現れたのだ。

「学校の皆には内緒だよ？ 変身！」

ほのかは、続いてロックシードを取り出して解錠した。ロックシードを解錠すればインベスが出てくると言うのが常識だ。そのため真姫は、ほのかがインベスゲームでも始めようとしているのかと思った。ところが

『オレンジ！』

「オレンジ？ 変身？」

姿を見せたのはオレンジ色をした光の球。インベスとは別のこれまた見たことのない何かだった。

見たことのない物体と聞き慣れない言葉に真姫は首を傾げる。そんな真姫の前で、ほのかはロックシードを変化したユグドラのようなものに固定し、刀の装飾品を動かした。

『オレンジドレス！ 花道、オンステージ!!』

「ここから穂乃果のステージだよ！」

ほのかは、オレンジ色の球体に包まれる。それを払って姿を現すと、ほのかは姿を変えていた。

その姿は、さながらアイドル。

しかし、彼女の行動はその反対で、彼女へ向かって吠えるインベスをつかんで真姫から引き離れた。

弾き倒されて転がるインベスは、ほのかへ再び吠えた。骸骨のような顔が割れ、口が四つになって広がった。口内には歯がぎっしりと生えており、まさに怪物というような姿を見せる。

真姫は、今まで自分が見ていたものとは全く違う、完全に凶暴性をむき出しにした姿を見て後ずさった。

ほのかは、牙を剥くインベスを見て、もしかしたらというさつきまで抱いていた迷いを捨てた。結局、大きいインベスはみんな凶暴なものなのか。真姫の話を信じないわけではないが、今はおとなしくさせられる状況ではないと構えた。

「西木野さん。ほのかの後ろにいて」

「あなた、いったい何を——」

「——危ない！」

真姫を庇うように後ろへ誘導する穂乃果へ、インベスが咆哮を上げながら走り出した。ほのかは、真姫を押しながらインベスの進行方向から逃がす。そして、そのまま突進するインベスを受け流した。

が、インベスの突進を逸らしたほのかは、インベスの進行方向にピアノがあるのを見て、インベスを止めようとする。インベスがぶつかれば、ピアノは確実に壊れてしまう。ほのかはインベスを掴もうと手を伸ばす。しかし、インベスの丸く堅い甲羅を掴むことができず、すり抜けてしまった。

勢いを流されたインベスは、そのままピアノへ突っ込むと思われた。

「あっ」

ほのかと真姫が思わず声を上げる中、しかし、突進したインベスは、ピアノを前につんのめった。

ピアノの目の前で倒れたため、ピアノは無傷。

ほのかは、ほっと胸をなでおろすとともに、立ち上がった。

「いまだ、チャンス！」

「オレンジスカッシュュ!!」

ほのかは、大橙丸を呼び出すとともに、オレンジの髪飾りを一回はじく。

それによってエナジーが、大橙丸の刃に蓄積される。大まかな三つの技のパターンの内、最もエナジーの必要量が少ない『スカッシュ』は1秒足らずでエナジーの蓄積を完了した。

「せやあああああ!!」

転倒したインベスが立ち上がりようとしているのを見て、ほのかはインベスの横に移動する。インベスの腹部にオレンジ色に輝く刃を当て、ピアノから引き離す。

そして、十分離れたところでほのかは大橙丸を振り抜いた。

ほのかの切ると言うよりは押すような動作で放たれた斬撃は、インベスを後方へ押しやると同時にインベスが押しとばされた先の空間にクラックを開いた。そして、インベスは、そのままクラックの向こうへ消えていった。

インベスがほのかの振るう刀によって消える姿を見ていた真姫は、インベスがさつきまでいた空間を見つめていた。

彼女は見ていた。

あのインベスは確かにほのかへむかって牙を剥いた。

戦う意思を示したように見えた。

でも、ピアノに突進しそうになって、壊しそうなことを悟って止まった。壊すまいと、ピアノを避けたのだ。

あのインベスは暴走なんてしてなかった。ただ、怖くて警戒していただけなのだ。

ここに来たのだから、本当にピアノを、歌を聴きに来ただけだったに違いない。

なのに……。

「ふう。これで一件落着、つかれたー」

真姫は、一仕事終えたかのように脱力するほのかを見る。

この人が来なければ、こんなことにはならなかった。

これからも誰にも邪魔されることなく、一人と一匹、心地よい時間を過ごせるはずだったのだ。

しかし、あのインベスはもういない。

そして、そのインベスを消した犯人は、罪の意識などかけらも感じている様子はない。

平和な日常をぶちこわした彼女を真姫は、怨嗟を込めて睨みつけた。

「真姫ちゃん。もう大丈夫だよ。あ、でもこのことは本当に内緒にしておいてね。バレたら承知しないーって海未ちゃんうるさくってさあ」

「………れたのよ」

「え、今何か言った?」

「何してくれたのよ!!」

真姫が声を荒らげると、ほのかはビクリと肩を振るわせた。

そんな、予想外の声に驚いたという様子が、真姫をさらに苛立たせる。

怒りを加速させる。

「え? 何って。………あの子をヘルヘイム帰してあげよう」と

「はあ、帰してあげる? あの子は、そんな必要なかった。さっきだって、あなたが驚かせたのがいけないんじゃない」

「でも、あのままここに居たら、あの子にも良くないんだよ。だから………」

「なによ、言い訳する気?」

「違う! 違うけど、………でも」

「あの子にあんなひどいことしておいて、信じられない。あなた、最低よ!!」

真姫は、穂乃果へそう言い放つと音楽室から飛び出した。

出ですぐ、偶然通りかかったひとにぶつかりそうになるが、

「——っ」

穂乃果の前にいた時には、怒りが先行していたためにからだろう。穂乃果から離れてしばらくして、頬を伝って流れるものの存在に気が付いた。

頬に触れると、それが液体で、目から流れ出ていることに気が付いた。

それが涙であることに気付くと、真姫はうずくまって腕に顔を埋めた。

「なんで、こんな……」

そこで初めて自覚した。

たった数日しか、会っていないかったのに。

自分の演奏を聴いてくれる存在が、あのインベスの存在がとても大きくなっていくことに。